
十八歳の花嫁

御堂志生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十八歳の花嫁

【Zコード】

Z9030P

【作者名】

御堂志生

【あらすじ】

美馬藤臣　彼の前に一人の少女が立っている。醜い人間の欲望や悪意に巻き込まれ、無残にも傷つくであろう十八歳の少女。誰かに手折られ、踏み躡られる花ならば、いつそ自分の手で……。今の美馬は、その想いの呼び名を知らない。　それは、西園寺愛実との運命の出逢いだった。＊注意＊本作は「十八歳の愛人」（R18／サイトで完結）のアナザーストーリーです。／番外編「甘くて切ない初めての夜」更新。

第1話 売春（前書き）

人物や団体・施設などの名称は、全て架空のものです。実在のものは一切関係ございません。

本作は「十八歳の愛人」（R18／サイトで完結）のアナザーストーリーです。家族構成や設定に違いがあります。混乱する可能性がありますのでご注意下さい。

第1話 売春

「彼女が西園寺愛実か？」

「はい。間違いありません」

美馬の問いに第一秘書の瀬崎が答えた。

瀬崎は眞面目を絵に描いたような男だ。わざわざ調査報告書を捲りながら確認をとる。

「それで、あれはどう見ても不特定の男を待っている風情だが……。旧伯爵家のご令嬢は、体まで売つてゐるのか？」

それはそれで利用価値は高そうだ。目的の為なら贅沢は言えないだろう。だが……どうにも面白くない。

美馬は大きなため息を吐いた。

「いえ……報告書にそういうことは書かれてありません。アルバイト先は宅配会社で早朝に仕分け作業を。他には、平日の夜と週末にファミリーレストランの厨房で皿洗いをしているようです。ただ

……」

何枚目かに皿を通しながら、瀬崎は言ひよどんだ。

「ただ、何だ？」

「はい。先週から闇金の取立てにあつてゐるようですが」

それはかなり執拗な取立てで、担保は遺族年金 本来担保には取れないものであった。だが実際は、十八歳の愛実の他に十三歳の妹もいる。相手が闇金であるなら、娘たちが担保代わりなのは明白だろう。

しかも、その借金をしたのは母親だと言つ。

「母親は典型的な逃避型の浪費家です。貯金と借金の区別がつかない女性ですね。今回はそこに付け込まれて、何も考えずに借りたようです」

「生活費か?」

「いえ……学生時代の旧友が主催したパーティに出席し、借りのほぼ全額を寄付しています」

美馬は目を閉じ、頭を左右に振った。

愚かな親はどこにでもいる。不幸な少女は彼女だけではない。彼自身、決して恵まれた子供時代を過ごしてはいなかつた。そして今も、面倒な問題を押し付けられている。

「社長。あの少女を巻き込むのは如何なものでしょうか? 私にはどうも」

「間違えるな、瀬崎。巻き込むのは俺じゃない。あのクソ婆だ」

「しかし……」

「ちょうどいい。あの娘の弱味を握れる」

調査書に男性経験の有無は書かれていなかつた。

しかし、あどけない口元と従順そうな目元。真っ直ぐに切り揃えられた黒髪の先が、胸の高さで揺れ……。見るからに清潔感を漂わせている。

(男の征服欲を見事に煽ってくれる容姿だな)

慎ましそうな少女が同じ場所に立ち続けてもう一時間。これまでも何人かの男が声を掛けるが、彼女は慌てて逃げるような仕草を繰り返していた。だが金が必要なら、いずれ誰かについて行くだろう。そのほうが美馬にとつては楽になる。

だが、目の前の少女が男に組み敷かれる姿を想像して……美馬は

動いた。

「社長、まさか、本当に？」

「彼女が俺から逃げられないような、既成事実を作るだけだ。計画通りに頼んだぞ」

夜の新宿、路肩に停めた黒い国産乗用車の後部座席から、独りの男が降り立つ。
（みまふじおみ）

美馬藤臣、間もなく三十歳になる彼は、国内有数の財閥・美馬グループの一員だ。自身、本社の専務と東部デパートの社長を務めている。

グループをワンマン経営でまとめて来た先代社長、美馬一志が亡くなつて一ヶ月。今、グループは後継者問題で大きく揺れている。一志亡き後、グループ最大の株を保有し、後継者を選ぶ立場にいるのが一志の正妻、弥生。

あと数年、一志が生きてさえいてくれたら……全ては美馬のものになつたのだ。彼は戸籍上、一志の孫にあたる。だが、最も後継者に近い男だつた。

(死んだ人間に文句を言つても始まらない、か)

美馬は苦々しい思いで、新たな計画に一步踏み出した。

卷之三

今日で二日目 愛実に迷う時間など残されてはいない。生活のために何もかも売り払った。最早、彼女自身の身体しか残されては

いないのだ。

西園寺家は旧華族の家柄である。

曾祖父の代から不動産も株もろくな運用は出来ず、……結果、絵画などの美術品や先祖伝来の品、はては調度品まで売つて食いつないできた。典型的な没落貴族といえよ。

しかし、それも父の代で底を尽く。父は土地家屋を抵当に入れて事業を始めたが……それも失敗。いよいよ家を追われようか、とう時に倒れて、あつといつ間に還らぬ人となつた。

それが今から一年前、愛実が高校に入つてすぐのことだ。

残されたのは認知症を患いかけた祖母と、働くことなど知らないお姫様育ちの母、三歳下の弟、五歳下の妹、十一歳下の弟だつた。

それでも何とか父の保険と遺族年金、そして愛実のバイト代で生活してきた。もちろん、生活費を切り詰め遣り繰りしてきたのは愛実である。

来春には弟、尚樹が中学を卒業する。しかし、高校の入学金すら用意できそうもない状況なのだ。男の子の尚樹には大学まで……最低でも高校には行かせてやりたい。こんなことなら、父が亡くなつてすぐ高校を辞め、就職すれば良かつた。愛実の胸は後悔で一杯だ。だが今はそれどころではない。

母が町の金融業者……いわゆる闇金に借金をしていたことが発覚したのである。しかも、父の遺族年金の証書を担保にしていた。金利は途方もない。なのに、母は父の保険金が永遠のように思つている。

「愛実さん、支払つておいてね」

丸つきり悪びれることなく言われ、愛実は返す言葉も出て来ない。母が借りたという一十万円は、利息を含めてわずか一ヶ月で四十

万円になっていた。

母の実家は、地方の田舎町で広大な敷地を所有する地主だ。両親は既になく、母の兄夫婦が跡を継いでいる。しかし、これほどの窮地でも頼るわけにはいかない。なぜなら、亡き父が一千万円以上の借金をしており、返済も滞つたままであった。

母の両親は生前、娘を甘やかし続けた。そんな母の辞書に？節約？や？貯金？などと言う言葉はない。

愛実はいつそ何もかも放り投げ、逃げ出したい衝動に駆られる。だがそれは、中三の弟に全てを背負わせることになってしまう。高校生の愛実ですから立ち尽くすほどの状況に、中学生の弟や妹を置いてはいけない。ましてや愛実がいなくなれば、小学校に上がつたばかりの弟、慎也はどうすればいいのだろう。

新宿駅の北口に立ちつくしていると、愛実は何人かの男性に声を掛けられた。二十代半ばのサラリーマン風の男性から、五十代くらいの中年男性にまで……。彼らは皆、そつと近寄ってきて、「いくら？」と訊ねた。

愛実は慌てて、

「友達を待ってるんです！」

そう答えては男性から飛び退く……その繰り返しだ。

（いい加減、覚悟を決めなきゃ。このまま帰つても借金取りが待つてるんだから）

次に声を掛けられたら付いて行こう。そう、愛実が覚悟を決めた瞬間、背後に足音が聞こえた。

「君は、いくらで買えるんだ？」

振り向いた彼女の目に映つたのは、三十代くらいのビジネスマン風の男性だった。

第1話 売春（後書き）

御堂です。

あけましておめでとうございます。

本年もよろしくお願ひ致します m(—)m

とこうじと、第1話を「ご覧いただきありがとうございました。
1～2話は、「十八歳の愛人」とほぼ一緒に（笑）
ここからR-18には突入しませんので、安心して（^ ^）「ご覧下さい
ませ。

「～愛人」より少し長くなるかも知れません。
よかつたらお付き合いで下さい（^ ^）～

第2話 欲情（前書き）

軽い性的描写があります。R15でお願いします。

第2話 欲情

「いくらかと聞いてるんだが？」

「あ、あの……五万……いえ、十万円」

「一晩にしちゃ高額だな。それとも、そんなに楽しませてくれるのか？」

愛実と同じ高校の友人が言っていた。

この辺りで立つていればすぐに声を掛けられる。相手がお金持ちならば、一ヶ月分くらいのバイト代は一日で稼げる、と。ただ、詳しい金額までは聞かなかつた。

思わず口にした金額だが、そんなに高額だったのだろうか。ならば一体、何人の男性に体を売れば借金分を稼げるのか……。愛実は気が遠くなる。

「は、初めて、なんです……だから」

「私は処女に価値が見出せない男なんだが。まあいい、本当だつたら払おう。　来い」

十分後、二人は近くのラブホテルの一室にいた。

部屋の中は薄暗く、餒^{すす}えた匂いがする。男と女が交じり合つて放つ淫靡な香りなど、この時の愛実に判るはずもなく。彼女は奇妙な居心地の悪さを感じていた。

反面、チラリと横目で自分をラブホテルに連れ込んだ男性を覗き見る。

この二日間、愛実に声を掛けてきた男性の中で一番のルックスだ

る。とても道端で女子高生を買つようには見えない。百八十センチ以上はありそうな長身で、スーツは間違いなくオーダーメイドだ。黙つても女性から近づいて来そうな、魅力的な男性だった。

(こんな素敵な人がどうして?)

胸の中で贅美し掛けて、愛実は慌てて否定する。

理由は何であれ、この男性はこれが違法と判つていて愛実に金額を尋ねたのだ。とても、褒め称えるような行為ではない。無論、愛実も同罪だ。

その時、彼女は今回のこと教えてくれた友人の言葉を思い出した。

「あの……お金をお先にもらいますか?」

「そのままシャワー中に消えるつもりか?」

「そんな……現金を持っているかどうか、判らないって。踏み倒されることもあるって聞いたんです。だから」「

そんな愛実の言葉に、男性はあからさまに頬を歪めた。

「初めての割の詳しいんだな。あまりしゃべるとボロが出るぞ」

「お金が貰えないと困るんです。そのために、こんなことを……わ

たし」

彼は愛実に財布の中身を見せる。

そこには、彼女がお目に掛かつたことのない厚さで一万円札が入っていた。

「カードは好きじゃなくてね。現金を持ち歩く主義だ。ご満足かな

?」

愛実は無言で首を縦に振る。次はどうしたらいいのだろう……何も判らず迷つていると、不意に男性の手が伸びてきた。そのまま、両手首を掴まれ壁に押さえつけられる。

「あ……の。シャワーは」

「一緒にいるか？」

「い、いえ……それは」

「入つて体を洗つてくれるなら、余分に払うと言えば？」

「それは、それは……でも、あの」

男性の顔が愛実の目の前にある。唇はほんの数センチ離れているだけ。それは初めての経験で、視線が定まらない。

彼女は軽くパニックを起こしていた。彼が何を言い、自分が何を答えているのか……判らなくなるほど。

「本当に、男と付き合つたことはないのか？」

「あ、ありません」

「好きな男もいないのか？」

「そんなこと……」

通りすがりのこの人に何の関係があるのだろう。言い返そうとした愛実の髪に彼の指が触れた。

ふと気付けば、愛実は両手を頭の上で組ませていた。男性は片手で彼女を壁に押し付けていた。ただそれだけで、彼女は身動きも取れない。

愛実はその力強さに、小さな恐怖と不思議な感動を覚えていた。父は穏やかで物静かな人だった。間違つても、今、愛実を押さえ込んでいるような、男性的魅力に溢れたタイプではない。他に身近な異性と言えば、弟たちくらいだろう。

そんな彼女が、薄いブラウス一枚隔てただけで男性に体を押し当たされている。初めて逢った人なのに、汚らしさは微塵も感じない。それどころか、水泳の授業で指導と称して腕や腰に触れる体育教師のほうが、よほどいやらしく感じるくらいだ。

愛実はそんな自分に戸惑つばかりで……。

「髪は黒だな。染めないのか？」

愛実はフルフルと首を横に振った。

男性の顔が髪に寄せられ、そのまま首筋に唇が触れ……。毛先をもて遊んでいた指が、ブラウスの上から胸の周囲をなぞった。

「胸は、そこそこのあるんだな。肌も綺麗だ……だが、あんな場所に立つなら化粧くらいしたほうがいいんじゃないのか？」

「それは……校則で、禁止されていて」

低く掠れるような声が耳の奥で響く。愛実は膝から崩れ落ちそうだ。

だが次の瞬間、浮かれた心に冷水を浴びせられた。

「売春は禁止されてないのか？」

喉の奥に氷を詰められたようだ。

一言も言い返せない愛実を嘲笑うかのように、彼はスカートの中に手を入れた。

～*～*～*～*～

思つた通り、愛実の髪は漆黒で何の手も加わつていなかつた。髪に顔を埋め、ペパー・ミントの淡い香りが彼を包み込む。

愛実の体には触れないつもりだつた。なのに……美馬は一瞬で惹き込まれ、彼女の首筋に口づけてしまつ。

(シャンプーの匂いに欲情するとは)

彼は信じられないほど気持ちが高揚するのを感じていた。処女に興味を持ったことなど一度もない。好みのタイプは男を悦ばせる術を持ち、立場を弁えることの出来る大人の女。金で全ての片が付く女だけだ。

ところが、愛実を見ているうちに、なぜか追い詰めたり……。行為は予想外にもエスカレートして、愛実の太腿に直接触れてしまつた。

そこは条件反射のように固く閉じ、美馬の侵入を阻んだ。

(どうやら……処女は本当らしいな)

美馬は愛実と体をピッタリ寄り添わせた。すると、彼の下半身は素直に反応し始める。

「コレはまた……信じられんな、こんな小娘に」

思わず声に出した瞬間……堪えがたい衝動が彼を襲つた。津波のように理性を攫い、本能の海に引き摺り込む。美馬が抗い切れず、愛実の唇を奪おうとしたその時、スーツの内ポケットから携帯の着信音が鳴り響いたのだ。

美馬は勢いをつけ、少女から男の欲情を引き剥がす。
そして大きく息を吐き、携帯を取り出すのだった。

『社長、通報しました。数分でそちらに行くと思います。準備はよろしいですか?』

当然、瀬崎である。

準備など出来ていいはずもない。ミイラ取りがミイラになる所だつた、とは口が裂けても言いたくない。

『ああ、判つた』

美馬は携帯を切ると、もう一度深呼吸して愛実を振り返った。

第3話 計画

「おーっ！」

愛実は慌てた様子で衣服を整え、そのまま玄関に向かって駆け出した。

「あ、あの……すみません。わたし、やつぱり出来ません。ごめんなさい！」

叫びながら逃げ出した愛実の腕を、美馬は飛びつくよつに掴む。

「待て」

「いやっ！ 離して……お願いします」

「そうじゃない！ 下に警察が来てるんだ」

?警察?の言葉に、愛実の動きは止まつた。

田を見開き、困惑した表情で美馬を見上げている。そのままゆっくじと彼女の拘束を解いた。

「そ、それって……どうこう」

「どうもこうもない。さっきまで一緒にいた同僚が知らせてくれた。

君に断わられた男の嫌がらせかも知れんな」

美馬はさりげなく、警察が踏み込むのは愛実のせいだ、と刷り込む。

「で、でも……何もしないのに」

「こいつたホテルに入るだけで充分だ。売春容疑で逮捕されたら、高校は間違いなく退学だな。それに、親に知れるぞ」

親のことを言われたら大概の子供は青褪めるものだ。だが、彼女は落ち着いた表情で小さく首を振った。

「高校はもう、辞めて働くつもりですか？」それに母は……

そこまで言い、愛実はハッと顔を上げる。

「あなたは？　あなたはどうなるんですか？　捕まつたら……会社をクビになつたりしませんか？」

「君が高校生なら児童買春扱いで実刑だな」

美馬は愛実を試すつもりで大袈裟な言葉を口にする。女を追い込み、本性を暴いた上で踏み躡るのは悪くない。特に高潔ぶつた女ほど、土壇場では滑稽な姿を見せてくれる。

この娘にしても同じことだ。旧伯爵家のご令嬢などと大そうな肩書きを持つてはいるが……。所詮、体を売つて金を稼いだとした今時の女子高生に違いない。

「そんなん……あ、わたしは高校生でも十八歳です。ですから

「いいのか？　そんなことを言つて」

「え？」

「君が十八歳未満なら、罪に問われるのは私だけだ。だがそうでなければ……君も同罪になる。高校生の君は、私に騙されてこのホテルに連れ込まれた 警察が来たら、そう言つてみたらどうだ？　君は単なる被害者になることが出来るかも知れない」

本当に言い出すような娘であれば、存分に利用してやろう。青臭い少女など抱く気はなかつたが、先ほどの感覚は悪くなかった。ならば処女を調教してみるのも悪くはない。

「あ……ありがとうございます」

美馬の善からぬ想像は、予想外の言葉で遮断された。

「今、何と言つた？」

「わたしのことを気遣つて下さつて……どうもありがとうございました。でも、犯罪だと承知でここまで来ました。あなた独りに押し付けるつもりはありません」

愛実の声は震えていた。両手を胸の前で組み、潤んだ瞳で美馬を見上げている。

「わたしが同じ場所で何日もウロウロしていたから……。あなたのことも断われば良かつたんです。なのに……こんなところまで付いて来てしまつて。あなたの奥さんや子供さんにまで、『迷惑をお掛けするかも……本当に申し訳ありません』

その時、ドアの外に人の気配を感じた。おそれらしく、合鍵を使って一気に踏み込むつもりだつ。

美馬は頃垂れる愛実の左手を取り、自分に引き寄せた。

「私は独身だ。だが、逮捕は避けたい。協力する気はあるか?」

「それは……もちろん」

「いいだろう。その言葉、忘れるな

美馬は彼女の手をきつく握り締め 。

～*～*～*～*～

「警察だ。そのまま動くな」

制服警官一名と、私服警官四名が部屋に飛び込んできた。内、私服の一名は女性だ。おそらくは少年課の婦警であろう。

彼らは時間を見計らい、行為の最中を想定して飛び込んで来た。

しかし予想に反して、中の一人は服を着たまま。テーブルを挟み、小さなソファに向かい合って腰掛けている。

「何だ君たちは！　例え警察といえど、許可もなしに客室に立ち入るのは不法侵入だ！」

美馬の怒声に愛実は身を竦めた。

愛実は後で知つたことだが……。

彼女が立つっていた場所は、友人らが数ヶ月密引きに使い続けてきたポイントであった。警察の動きに気付き、愛実の友人はお金に困つていそうな彼女に話をしたのだ。体の良い生け贋スケープゴートにされたのである。

そんな場所に愛実は三日も立ち続けた。警察に目をつけられて当然だろう。

しかも、「女子高生に声を掛けられた。今、他の男とホテルに入つた」……そんな通報があつては、渡りに船である。

「許可も何も……往生際の悪い奴だな。この娘は、何日もその駅前に立つて客引きをしてたんだよ。お前さんがそこで声を掛けて、ここに連れ込んだ所もちゃんと見てるんだ。服を脱いでないからセーフだと思うなよ」

「さあ、あなたは」つちに来て。高校生よね？　何年生？　歳は幾つ？」

婦人警官が愛実の両肩を抱き、立たそうとした。

「あ、あの、わたし……」

「彼女は十八だ」

「そりやあそ'うだな。年齢くらい確認してるか。だが、本当だとは限らないぞ。すぐに確認を取つて、十八歳未満の場合は児童買春容疑で現行犯逮捕させてもら'うからな」

警察側としてはここは賭けである。児童買春と売春防止法では刑罰の程度が雲泥の差だ。

その直後、美馬は小さなソファに窮屈そうに座つたまま薄く笑つた。そして彼は、警官らが驚くような台詞を口にしたのである。

「西園寺愛実、都立K高等学校三年、誕生日は平成 年四月十一日……今日で十八だ。住所は、東京都中野区……」

その場にいた全員が絶句した。

もちろん愛実も呆然としている。初めて逢つたはずの男に名前や住所、生年月日まで知られているなど、普通では考えられない。

「な、何をそんな……でたらめを言つて誤魔化せると」「誤魔化す必要はない。彼女は私の婚約者だ。知つていて当然だろう」

美馬はスッと立ち上がると、驚く警官たちの前を横切り、愛実の横に立つた。

「そうだったな、愛実。私たちの婚約の証を見せてやるといい」
その指には、十八歳の少女に不似合いな大粒のダイヤモンドが燦爛と輝いている。

美馬は愛実の肩に手をやると、じく自然な動作で抱き寄せた。

「私は東部デパートの社長、美馬藤臣だ。一日も約束をキャンセルし、今夜も随分待たせてしまった。早く一人きりになりたくて、期末のラブホテルに飛び込んでしまつたが……。それが一体何の犯罪になるんだ？ 納得のいく説明を得られぬ時は、どうなるか覚悟するんだな」

多数の人間が息を呑み……ラブホテルの一室は、普段とは違う種

類の熱い空氣に包まれた。

第4話 代金

美馬の言葉と態度、そして肩書きに、警察官たちはほつほつの体で引き上げて行く。
彼らに踏み込まれてから一十分足らず、室内は再び、微妙な静寂を取り戻した。

「どう……して？　なぜ、わたしのことを存知なんですか？　あなたは一体」

「美馬藤臣だ。連中に話した通り、君の婚約者だよ」

人を馬鹿にしたような返答に、愛実は声を荒げた。

「わたしは、あなたのことなんて全然知りません！　それを婚約なんて。第一、婚約者に金額を聞いて、それから……ラ、ラブ、ホテルに、連れ込むんですか？」

精一杯の理屈で返すが、美馬は余裕の笑みを浮かべたままだ。

そして彼が口にした理由は、愛実には全く心当たりのないものだつた。

「私の祖母と、君の祖父の間で約束していたそ�だ。遠い将来、歳の釣り合う孫が出来たら、結婚させようってね」

ほんの一ヶ月前、彼の祖母・美馬弥生は夫を亡くした。

弥生には結婚を約束しながら、相手の親に反対され、引き離された恋人がいた。それが愛実の祖父・西園寺亘さいおんじわたりだという。

泣く泣く別れた恋人との約束　夫の手前、弥生は長らく忘れて暮らしていた。だが、美馬家は弥生の生家である。婿養子の夫には商才があり、財産を増やしてはくれたが……。彼女は不実な夫を忘れ、若かりし日の願いを叶えようと思いつ立つた。

「私が知ったのもつい最近だ。こんな場所に君を連れ込んだのは……」

… IJの二日間、自分の挙動を思い出してみたらどうかな？」

その言葉に、愛実は一瞬で真っ赤になる。

美馬は彼女の素性を知ったうえで、様子を窺っていたのだ。そして全てを見られていた。三夜も逡巡し、金のために男を物色して、ついには美馬を相手に体を売ろうとしたのである。

それを考えると、八つ当たりを承知で言わずにはいられない。

「判りました。その降つて湧いたような婚約話を、破談にする理由が欲しかったんですね。だつたら、そう仰ってくれたら良かつたんです！ 何もこんな……罠に嵌めるような真似をなさらなくとも」

「君から断わる？」

「ええ、もちろんです」

愛実は胸を張つて言つ。

だが、美馬はいじわるそうに失笑すると、

「それは無理だな。君には断われない」
きつぱりと断定したのである。

IJの男が、東部デパートの社長であることは警察が確認した。

と、なれば、愛実の祖父の話は本当なのかも知れない。だが祖父は十年も前に亡くなっている。今となつては眞実など知りようもないのだ。

現代においても、恋愛を模した見合い結婚が主流の社会は存在する。おそらく美馬家もその一つなのだろう。

かつては西園寺の家もそうであった。でも今は……。愛実はどう言つて説明すれば判つて貰えるのか、懸命に考えるが答えは見つからない。

そして、先に口を開いたのは美馬のほうであった。

「どうやら、誤解があるようだ。確かに、黙つて様子を窺っていたのは申し訳ない。しかし君は人待ち顔で駅前に立つていた。てつりデートだと思ったんだ。君にそういうた男性がいるなら、祖母に報告して考え直して貰おうと思った」

その言葉が真実なら、愛実は最低の姿を見せたことになる。

思った通り美馬は、

「だが、君が待つていたのは……処女を十万で買つてくれる男だった」

愛実はスッと顔を上げる。

「それ以上仰らなくても充分です。あなたのおばあ様にも、そうお伝え下さい。わたしはこれで、帰らせて頂き……」

「お父上が事業で借金を残したまま亡くなつたそうだな。金の掛かる家族を抱えて、明日の夜も同じ場所に立つつもりか？」

「そんなこと……あなたに答える義務はないと思います」

「助けてやつた恩を忘れたのか？ 私の機転がなければ、今ごろ君は警察の取調室だ」

「あなたも同罪じゃないですか！？」

愛実の問いかに、美馬は事も無げに首を振つた。

「婚約者となるはずの女性に、売春行為をやめさせようと説得していた。と言えばどうなると思う？ それだけじゃない。十分以内に弁護士が到着して、私は釈放される。その時、君はどうするんだ？ 弁護士どころか、身元引受人で来てくれる親もいらないんじゃないのか？」

愛実には辛い質問だった。

母はおそらく来ないだろう。誰のために、娘がここまで身を堕と

したか……判るような人ではない。

「判りました。助けて頂いてありがとうございました。でも、祖父が生前どんな約束をしたにせよ、わたしには関係のないことですから」

「関係はある。君もきっと、結婚を承諾する気になる」

「そんな……愛し合つてもいいのに、結婚なんて」

「愛し合つてもいい男に、抱かれようとしたのはどこの誰だ？」

「それは……お金が、必要だつたんです。だから」

父は子供たちに保険金を残してくれた。

だがそのお金は、半分以上が祖母の介護付き有料老人ホームの入居費用に消えたのである。祖母は現在、六十七歳。入居時に委託金として五年分の費用を支払つた。三年後、月々の費用を払えなくなれば、祖母は帰されてしまう。その時、母に介護が出来るだろうか？ 愛実が介護に回れば、働き手がいなくなる。

将来のことを考えれば、愛実にはどうしたらいいのか判らない。それでも、祖母は大切な人だ。華やかに装い、出歩くことが好きな母に代わり、愛実をはじめ弟妹の面倒を見てくれた。今となつては、老いと病で孫たちの区別もつかない。だが、例えどんな思いをしても、愛実には見捨てるなど出来なかつた。

(この人に、そんな話をしても仕方ないわ)

愛実は左手の薬指から指輪を外し、コトツとテーブルの上に置く。

「これはお返しします」

押し出すような声でそう言い、愛実は出て行つとした。その時だ。

バサツといつ音と共に、指輪の横に札束が置かれた。

「とりあえず、五十万ある。小切手より現金がいいだらうへ。」

「意味が判りません」

「手付金とでも言つておひつか。金が必要なんだらう？ 但し、売るのは君の処女ではない。 短ければ数ヶ月、長くとも一～三年。君の時間を買おう。いくらだ？」

それは、道端で体の値段を聞かれた時より、屈辱的な言葉だつた。しかも、さう言つて田の前に置かれた札束にて、心が揺れそつになるのだ。

何より切ないのは……警察に踏み込まれる直前、美馬のことを運命の男性のようを感じたことだらう。

だが彼は、答えを出さない愛実に苛つき始め……。

「何を考える必要がある？ 君は一晩十万だつたな。それで買つてやる。三年も経てばざつと一億だ。普通の売春でそこまで稼げると思つた？ 女子高生にも判る簡単な計算だらう

「嫌です！ おじい様たちの愛情をお金に替えて、踏み躡るような真似は出来ません。どれだけお金を積まれても、心までは売れません！」

第5話 悲鳴

美馬は派手な看板の下をくぐり抜けた。

女と入り、セックスなしで出て来たのは初めての経験だ。

「お疲れ様でした。首尾はいかがでしたか？」

見計らうように美馬の横に車が停まった。彼は後部座席に乗り込みながら、車を運転する瀬崎の質問に答える。

「あの娘が出て行くのは見たんだろう？ それで俺に聞くのか？」

「ええ、そうですね。しかし社長、その割に随分愉快そうな表情ですか……」

瀬崎はにこやかに応じつつ、車を発進させた。

言われてみて、美馬は自分が愛実の対応に不満を感じていないことに驚く。

女子高生には勿体ないほどの金額を提示したのだ。それを一蹴されれば、頭にきて当然だろう。体を売るほど切羽詰つていながら、よくもあんな綺麗事が言えたものだ。そう思つてるのは確かだが……。

「じいさんたちの愛情を金には替えられんそうだ。一晩で十万も吹っ掛ける女が……笑わせてくれる」

可笑しそうに言つ美馬に、瀬崎は眉を顰めた。

「社長、やはりどうあっても彼女と？ 大奥様を止めることとは出来ないのでしょうか？」

「俺でなきや、他の誰かがやるだけだ」

「しかし、あの大奥様に？ 若かりし頃に叶わぬ恋の成就？ などとは……とても」

瀬崎は、信用出来ない、と声に出しては言わなかつた。

無論、美馬も弥生を信じてはいない。彼が愛実に話した言葉は嘘ではなかつた。しかし、眞実からは程遠いものである。いや、彼自身も弥生の本心など判らうはずがない。

「どちらにしても、猶予は一日一日だらう。すぐに俺が嗅ぎ付けたことは知られる。その前に、あの娘を手に入れておきたい。抱くのが早いと思ったが……」

どれだけお金を積まれても、心までは売れません！

（面白い。ならば、売る気になるまで積むだけだ）

「瀬崎、今夜中に片をつけろ。彼女のアパートに車を回せ」「…………はい」

ワインカーの音がやけに耳につく。十八歳の少女を、およそまともではない計画に巻き込もうとしている。そんな美馬に対する抗議のようだ。

静かに口を開じ、聞こえぬフリをする美馬であつた。

～*～*～*～*

最寄の駅に電車が滑り込む。愛実は重い足取りでアパートに向かつたのだった。

美馬と言つた……あの男は何を考えているのだろう？

彼のおかげで、警察に連れて行かれずに済んだことは確かだ。そのことはもちろん感謝している。だが、初めから愛実の素性を知っていたなんて。そうなると、話は別ではないか。

馬鹿な女子高生に過ぎない愛実でも、美馬グループの名前くらいは聞いたことがある。

たった今、彼女が乗つて帰つて来た東部鉄道の親会社だったはずだ。彼自身は東部デパートの社長と言つていた。最近では行くこともないが、以前はよく利用していたデパートの一つである。

彼の祖母と愛実の祖父の関係は、気にならないと言えば嘘になる。十八歳の少女らしく、胸の中では切ない恋物語を思い描いていた。愛実が小学生の頃に亡くなつた祖父は、一体どんな約束をしたのだ

うひ。

今とは違つ状況で、違つ場所で、美馬と出逢いたかつた。
もしそうなら、せめて彼の祖母に会い、事情くらいは聞いたであ
るひ。その上で、美馬と恋を始められたなら……。

金が必要なんだろう? 真の時間を買おう。いくらだ?

侮蔑に満ちた美馬の声を思い出し、愛実は軽く頭を振る。?もし
?はないのだ。

と、同時に……愛実はふと、無造作に置かれた五十万円を思い出
す。あのお金があったなら……。

「おひおひ、やつと帰つてきたな、お譲ちゃん」

金融業者とはばかりだひ。どう見てもヤクザに思える男たち
が三人、アパートの前で彼女を待ち構えていた。

途端に、ハツと我に返る。そうだ、この男たちに支払うために、

自分は体を売ろうとしたのだ、と。

「で、金は出来たんだろうな」

男の一人が凄み、愛実に顔を近づけて来た。

「それは……あの、明日は必ず……」

「馬鹿にすんじゃねえぞ、『ノアマ』！ 明日まで待つてくれって言うから待つてやつたんだろうが！」

深夜にも関わらず、男は罵声を張り上げる。

「どうか、あと一日だけ待つて下さい。お願いします」

愛実はビクビクしながらも懸命に頭を下げた。

すると、三人の中で一番若い男が肩を怒らせながら彼女の前に立ち、

「きつちり八十万、耳を揃えて返してくれるんだろうなあ。ああつ！」

「は、八十……そんな！ 一ヶ月前に母が借りたのは一十万円で「利息があるんだよ！ そんだけ払つても、あなたの母親は貸してくれつて言つたんだ！」

その言葉に愛実は眩暈を感じた。

五万、十万と作つても、翌月には倍の百六十万円になつてしまつ。それは、今の愛実に到底返せる金額ではなかつた。

「なあ、お嬢ちゃん、あんた十八になつたんだよな？」
「は……い」

それまで後ろにいた男が、にやにや笑いながら愛実の隣に立つた。酒臭い息が頬に掛かる。顔をしかめ、出来る限り体を引くが……。
「そりゃあ良かつた。フロで働いて返せば八十くらいすぐだ。
さあ来いよ！」

いきなり手首を掴んで引っ張られたのだ。愛実は恐怖のあまり悲鳴を上げる。

「いやあつ！ 離して」

男は逃げようとする彼女を強引に引き摺り、車に乗せようとしました。

「の付近は安アパートが密集している。正直、治安はあまり良くない。ましてや、愛実の家に闇金業者が来ていることは周囲の誰もが知っていた。ちょっとした親切心から、殺されないとも限らないご時世である。誰も関わり合いになりたくないのだろう。少女の悲鳴にカー・テンすら聞く気配はなかつた。

「あんたが嫌なら妹でもいいんだ。中一なら男の相手は務まるよな」「やめて！ やめて下さい。妹には手を出さないで…」

真美にだけは、体を売るような真似はさせられない。愛実は抵抗を止め、黙つて男たちの車に乗せられそうになる。

「姉さん！」

アパートのドアから飛び出し、階段を駆け下りてきたのは、すぐ下の弟・尚樹だった。

「こんな真似して、ただ済むと思つてんのか？ 警察に通報してやるー。」

姉の手を掴む男に尚樹は飛びついた。次の瞬間、中学三年の割に小柄な弟は顔を殴られ、地面に突き飛ばされていた。

「まだ子供なのよー。乱暴なことはしないで…」

「借りた金を返さない、お前らのお袋のせいだうがー。恨むならバカな親を恨めー！」

男の怒声が深夜の路上に冷たく響き渡った。

「……お姉ちゃん……」

階段の上で妹の真美が末の弟・慎也の肩を抱きながら泣いていた。

さすがに、ポツポツと周囲の窓に灯りが点る。

これほどの騒ぎになつても、母が出てくる気配はない。なぜなら、途中で起きると美容に悪いと言ひ、睡眠導入剤を飲んで寝てしまうせいだ。おそらく今夜も、上流階級に属していた頃の夢でも見ているのだろう。

しかし、父が生きていた頃から西園寺家の内情は火の車だった。愛実は何度も訴えたが……。父は認めようとせず、母の生活レベルが変わることもなかつた。

愛実の脳裏に、美馬の姿が過る。

あのお金を受け取れば良かつたのだろうか？　あの男の言いなりに金を貰い、一年でも三年でも時間と体を売り渡していたなら。今夜、このまま弟たちから引き離されずに済んだのかも知れない。

或いは、警察に逮捕されていたら、愛実は助かつたかも……。

そこまで考えた時、彼女は男たちの言葉を思い出した。彼女がいなければ、代わりに真美が連れて行かれだろう。それに、姉弟の実情が公的機関に知れたら、四人は引き離されるに違いない。会つた事もない親戚に預けられるか、バラバラに施設に入れられるか。その時、祖母はどうなるのだろう。

「尚樹……しばらくお願ひね。借金を返したら、姉さんすぐに戻つてくるから。学校にはちゃんと行くよ。お母さんに、遺族年金の証書と印鑑は絶対に渡さないで……」

「姉さん、駄目だ。母さんがしたことじやないか。母さんが行けばいいんだ！」

愛実は首を振った。そんな理屈が通用する相手ではない。

母が無闇にお金を調達してくるのを、黙つて見過ごしてしまった愛実にも責任はある。

昔の使用人に貸していたお金を、返して貰つただけ……そんな説明を鵜呑みにしていた。実際には、「相続の金額が大き過ぎて、手間取っているの。少しだけ都合してくれないかしら?」耳触りの良い言葉で、母はあちこちから無心していたのだ。

そのうちの一人が、度々訪れる母に困り果て、金融業者を紹介したという。愛実が事情を聞きに訪ねた時、闇金だとは知らなかつたと言われた。文句があるなら用立てた金を返せと迫られ、彼女は初めて母の行いを知つたのである。

それでも母は、「昔はよくしてやつたのに……少しぐらい返して貰つて当然でしょう」まるで悪びれる様子もなかつた。

まともな金融業者でないと、気付かないはずがないだろう。落ちぶれ果てた旧伯爵家の威光を笠に着た、母に対する仕返しの意味もあつたのかも知れない。

「十八といえば立派な大人だ。ちゃんと責任取つて貰うぞ。さあ、とつとと来るんだ!」

尚樹から引き離され、車に押し込まれる。

ドアが閉まつた時、愛実の中で人生が終わつた気がした。

直後 。

狭い道路の真正面から車が一台侵入してきた。対向車両は、ライトを点けたまま引き下がる気配も見せない。三人の男たちはブツブツ言いながら車から降りて行く。

そして車のドアが開いた瞬間、聞き覚えのある声が愛実の耳に届いた。

「なるほど、この連中が待ち構えていたわけか

ハツと顔を上げた時、そこに居たのは……美馬藤臣だった。

彼は横でうるさく騒ぐ闇金業者の男たちを無視して、愛実を車から引つ張り出す。

「連れて行かれたら、俺の時みたいに逃げ出すことは出来ないぞ」
美馬は耳元に唇を寄せ小声で囁いた。吐息が耳朵を掠め、愛実の全身が震える。その時、思い出したのだ。ラブホテルの壁に押し付けられ、美馬の唇が首筋に触れた甘美な瞬間を。

「美馬さん……わたしは

何を言つつもりだうつ。何か答えなければと思うが、言葉が見つからない。

美馬は決して正義の味方ではない。群がるハイエナに酙なぶり者にされるか、一頭のトラの餌食になるか。それくらいの差しかないはずである。

なのに……美馬の顔を見た瞬間、ホツとしたのだ。

愛実の頬をはらはらと涙が零れた。ずっと我慢し続けてきた。これからも堪えるはずだったのに。気付けば美馬の胸に縋り、愛実は小さく声を上げて泣いていた。

～*～*～*～*～

美馬が愛実のアパートに着いたのは、彼女とほぼ同時刻だった。

彼はやり取りの一部始終を見ていたのだ。

瀬崎の報告で、闇金業者一件は知っていた。いざれ娘に手を出すのは判り切つたことだ。だがこの様子を見る限り、田辺では最初から愛実だったに違いない。

男たちは愛実をソープランドで働かせるつもりらしい。そうなると数年……下手をすれば一生、その世界から戻つて来ることは不可能だろう。借金は借金を生み、雪だるま式に膨れ上がる。

しかし、当の愛実は弟に「すぐに戻る」と言つていた。

(世間知らずの、馬鹿な娘だ)

これほど金を必要としていたなら、ありがたく美馬の申し出を受ければ良かつたのだ。そうすれば、ほんの数年で済む。おまけに、抱かれる男はたつた独り……。

胸の奥でじりじりと何かが焦げつくようだ。裸で他の男に奉仕する、そんな愛実の姿を想像するだけで無性に腹が立つ。

更には、一人の男が口にした『恨むならバ力な親を恨め』 その言葉は、美馬の心に埋められた地雷原に踏み込んだ。

「二十万が一ヶ月で八十か……証書はあるのか？」

美馬は、腕の中で震える愛実に奇妙な感覚を抱きながら、闇金業者の男たちを見据える。

「テメー、こいつの男か？ 女の前だからってカツコつけんじゃねえぞ」

「それとも何か？ 貴様がこの娘の借金払ってくれんのか？」

こけ威しの台詞など美馬には通用しない。彼は愛実を背後に庇うと、懐から金を取り出した。そのままボンネットの上に放り投げる。「五十万ある。それを持ってさつたと帰れ。但し、証書は置いて行

け。「一度とこの親子に会わるな」

見る間に男たちの目の色が変わった。

だが、

「おいおい、兄ちゃん。借金は利息と合わせて八十万だぜ。足りないんじゃねえのか？ 何だつたら、あなたの腕時計でも……」

それは、最初に愛実に近づいた男だった。背丈は美馬と変わらない。だが、横幅が五割増しといったところか。男は美馬の時計に触れようと手首を掴み……。

次の瞬間、男は逆に腕を取られ、顔からボンネットに押し付けられた。男の肘は変な方向に曲がり、片方の手で必死に車を叩いている。

「少しでも脳ミソがあるなら、これで手を打つんだな。嫌なら仕方ない。警察と弁護士を呼ぶことになる」

美馬は軽く笑みを浮かべつつ、年配の男に話しかける。

「俺らに手を出したら、組の連中が……」

「面白い。どこの組か言ってみる。俺が直接話をつけてやる」

やれ？ 組？ だ、？ 若い衆？ だ、？ と言い出すのは、実際に暴力団との関わりが薄い証拠だ。

落ち着き払つた美馬の様子に、利口なことに男たちは勝負を捨てた。大急ぎで金をかき集めると、愛実に証書を投げつける。

「どうで、こんな野郎を誑し込んだんだ？ ウブな顔して、最近の女子高生は怖いな」

美馬とは一切視線を合わせず、捨て台詞を残して車は走り去つた

の
だ
つ
た。

第7話 現実

駅から直接東部デパートに入り、愛実は受付で名前を語つ。すると、三十代くらいの髪をきちんと纏めた楚々とした女性が姿を見せた。彼女は礼儀正しく、制服姿の愛実を社長室に案内してくれたのだった。

昨夜、男たちが引き上げた後、
「ありがとうございました」

そう言って、愛実は美馬に頭を下げた。

先のことを思えば恐ろしくて体が震える。だが、あの連中に連れて行かれた時のことを考えれば、美馬のほうが何倍もましではないだろうか。

美馬は軽くスースの埃を払いながら、

「こんな時間にこんな場所で、簡単に済ませられる話ではないだろう。明日、東部デパート本社まで来ててくれ。受付に話を通しておく」時間は開店時刻を指示される。

「明日は午前中からバイトがあつて……」

休日は丸一日ファミリーレストランの厨房で働かせて貰っているのだ。それが家族の生活費になっていた。

だが、美馬にとつてそんなことはお構いなしである。

「休め。それとも、一日で五十万も稼げるバイトなのか？」

それは暗に、自分にいくら借りがあるのか忘れるな、と言つているようだ。世間知らずの彼女でもすぐに気が付いた。

「判りました」

両手をグッと握り締め、愛実に逆らつことなど出来ず……。

「おじさん！　おじさんも金貸しですか？　姉さんが……さつきのお金を借りたんですか？　お金は僕が働いて必ず返します。だから、姉さんを連れて行かないで下さい。お願いしますっ」
姉を押しのけ、尚樹は美馬の前に飛び出した。

尚樹の年齢になれば、十八歳の姉が連れて行かれたらどうなるか……。具体的には判らなくても、想像は出来るだろう。彼はいつも言っていた。逆なら良かつた、男の自分が先に生まれていれば弟妹を守れたのに、と。十四歳の少年は自分の無力さに唇を噛み締め、美馬に頭を下げる。

愛実はそんな弟を見て、びつ声を掛けていいのか判らない。「大丈夫よ」とは言えないのだ。美馬も、愛実を連れて行こうとしているはずだった。

「おじさん、か。私は金貸しじゃない。君のお姉さんは……結婚の約束をしたんだ。近い将来、君は私の義弟になる。尚樹くんだつたね、今の金は君が大学を卒業した時、働いて返してもらおう。それでいいかな？」

愛実は目を見開いた。何か言おうと口は動くのだが声が出ない。美馬は彼女の肩を抱き、「明日だ。約束を破つたらどうなるか判つてるな」そんな言葉を残し、姿を消したのだった。

「待たせたね」

愛実が社長室に通されて十分後、落ち着いた焦げ茶色のスースを着て美馬は現れた。

年齢は三十代半ばだろうか。独身と言っていたが、そうは思えない余裕がある。美馬グループの規模は愛実には想像も出来ない。グループと同じ苗字ということは、オーナーの血縁なのだろう。そうであっても、この大きなデパートの社長とは……きっと恐ろしく優秀な人に違いない。

そんなことを考えつつ、明るい陽射しの中、改めて彼の顔を見る。

やはり、お金で女子高生を買うような男性には見えない。昨夜は前髪を垂らしていたが、今朝は整髪料で左右にセットしていた。そのせいか、黒い瞳がくっきりと見える。窓から射し込む光が、後光のように彼を包み込む。愛実は思わず見惚れてしまった。

ラブホテルでは首筋にキスされ、胸の輪郭を指先でなぞられた。あの手がスカートの裾から入り、愛実の太腿を撫でたのだ。そして、アパートの前では彼の胸に抱きつき、泣きじゃくってしまった。

「どうした？ 掛けてくれ」

美馬の言葉に愛実はハッと我に返る。

（見惚れていてどうするの？だから、女子高生なんて笑われるんじゃない）

「いえ、結構です。あの……どうして尚樹にあんなことを言つたんですか？ あんな」

ここまで案内してくれた女性が同じ部屋に居た。さすがに、昨夜の出来事を口にするのは躊躇われ……。

美馬も気付いたらしい。

「浅野くん、ここはもういい。下がってくれ」

「はい。失礼致します」

浅野と呼ばれた女性は一礼してドアを閉めた。数秒後、ハイヒールの靴音は次第に遠ざかって行く。

愛実は立つたまま深呼吸すると、

「お金は働いてお返します。ですから……弟に言つたことを取り消して下さい」

それが問題なのだ。尚樹は、美馬がどういう人間なのか、姉の体当てではないのか、とかなり気にしている。

彼はソファに腰掛けると、スーツの内ポケットから煙草を取り出し火を点けた。

「私の提案が氣に入らないなら、あの連中を呼び戻してやつてもいいんだ。私が手を引いたと言えば、喜んで飛んでくるだろうな」

長い脚を組み、背もたれに腕をかけて、片笑みを浮かべて愛実を見ている。

「あなたがそうする、と仰るなら……仕方ありません。あの人たちにも、ちゃんと働いて返すつもりでしたから」

「連中の言つてた? フロ? でか?」

「それが……お金になるなら」

「金にはなるだらうな。ただ、奴らに相当な上前行を撥ねられて、手元に残るのはどれほどかな? まあ、〇一よりは多いだらうが。しかし、それくらいなら私の妻になる方がよほど楽じゃないか?」

実のところ、愛実には? フロ? の意味が判らなかつた。売春に似た行為という」とは想像できる。ただ、一週間から十日も我慢すれば家に帰れると考えていた。

愛実は、今さら「知らない」とは言えず……。

「結婚は愛し合つてするものです。そんな、神の前で嘘はつけませ

ん！」

「君は……将来愛し合つて結婚する気なのか？」

「いつかは、そう出来たら」

俯きながら、小さな声で愛実は答えた。すると、弾かれたように美馬が笑い始めたのだ。

「何がおかしいんですか？」

「まつたく、笑わせてくれる。二十代の稼げるうちは、ソープから抜け出すことは不可能だろ？ な。膨れ上がった借金の返済に、君は毎晩何人もの男に脚を開き、あらゆる場所で咥え込む羽目になる。君が取り返しのつかない病気になるか、三十を過ぎればようやく解放されるだろう。さて……どこの物好きが、そんな穢れた女を妻にするんだ？」

美馬の卑猥な言葉を聞き、背筋が凍りつく愛実だった。

八十万円くらいすぐに返せる。愛実はその言葉を真に受けていた。だが、少し考えれば判ることだ。それほどお金になるなら、あの連中が簡単に手放すはずがない。愛実の稼ぎだと黙つて母に毎月お金を渡し、それを彼女の借金にすれば……。美馬の言つ通り、愛実が自由になる日は来ないだろう。

美馬に感謝すべきなのかも知れない。

でも、愛実はどうしようもなく悲しかった。娘がそんな酷い目に遭うと知れば、母は反省するだろうか？ それとも……知らなかつた、自分のせいではない。母なら、そんな風に言うかも知れない。どうしてこんなことになつたのだろう。尚樹を高校に行かせるお金もなく。日々の生活にも困っている。それにもし、母がまた同じよつな業者から借金でもすれば……。今度こそ、美馬の言つ通りになるだろ？

愛実は全身の力が抜けたようになる。そのまま床に膝をつき、制服のスカートを握り締めたまま、涙が頬を伝つた。

(全部、わたしのせいなの？)

四畳半一間とキッチンのアパートでは、祖母の面倒は見れないと思つた。高額のホームに預けたのは愛実の判断だ。五年も経てば生活も落ち着く。その頃には母も愛実も働いているだろう。尚樹が大学に行きたいなら、自分で働いて学費を稼いで貰おう。真美も高校生、慎也は小学生だが自分のことは自分で出来る歳になつている。父の残つた保険にはなるべく手を付けず、高校までの学費として……。

現実には、貯金は底をつき、借金だけが増えている。

スカートの上にポトポトと涙の雫が落ちた。

その時、急に辺りが暗くなつたのだ。顔を上げると、美馬が立ち上がり、愛実の頭上から覆い被さつてゐる。そのせいで、影になつただけだつた。

しかし、次の瞬間、愛実の体は宙に浮いていた。

「きや！ なに？」

そのまま、ソファの上に投げ出され……美馬が真横に座り、指で乱暴に頬を拭い始める。

「鬱陶しい。一々泣くんじゃない」

「す、すみません。全部、わたしが悪いんです。わたしが……」

言いながら、また涙が込み上げてくる。

「だから泣くなと言つてゐる。私が泣かせてるみたいじゃないか」「ごめんなさい。でも……わたしはもう、大勢の男性と……そういうことをするしかないんだつて思つたら。後は……あなたの、愛人になるかしか」

愛実は嗚咽しながら、自虐的な言葉を口にする。

すると、美馬は大袈裟にため息をついた。

「君は私の話を聞いてないのか？ 誰が愛人にすると言つた？ 妻になつて欲しいと言つてるんだ。これは祖母の希望だ。昨夜は、君の本性を知りたかつただけだ。日常的に、ああいつた真似をしてる女性を妻にするのはご免だ。一時的とはいえ……」

今度はポケットからハンカチを取り出し、美馬は愛実の頬に当てる

た。片手で髪を撫で、身を乗り出して顔を覗きこむ。愛実はそんな彼の仕草に鼓動が早まり、涙が引き込んでしまった。

「ど、どうして、い、一時的なんですか？」

「^{ども}吃りながら、どうにかそれだけ質問する。だが、美馬の答えは……。

「昨夜、話したことが全てだ。祖母の希望で、私は逆らえない立場なんだ。だが、君をそんなに拘束するつもりはない。夫婦仲に不都合があると判れば……祖母も離婚を認めるだろう」

「どうしてそこまで逆らえないのか……愛実にはさっぱり判らない。だが、美馬の祖母・弥生が愛実に拘る理由は、少しだけ彼が教えてくれた。美馬の家は歴史があり、豊かな財産もあった。だが爵位はなく、ただの商家だった。弥生が愛実の祖父・亘と出会ったのは戦時中だという。当時は身分制度が物を言い、伯爵家の後継ぎである亘と、商家の一人娘であった弥生は交際すら禁じられた。

「ただ、祖母も高齢でね。彼女が納得するまで芝居を続けても、そう長いことではないだろう。少なくとも、ソープランドに身を落とすよりは早く解放されるはずだ。さつきは済まなかつた。君があまりにも、自分の置かれた状況を判つてないことに苛ついたんだ」

「言われて見れば尤もだろ。^{モト}」

「愛実は美馬の優しさに、どうしようもなく心が揺らいだ。

「美馬さんは……本当におばあ様のことがお好きなんですね」

「祖母に逆らえないと云つたが、逆らわないよつとしているのではないか。愛実は優しく温かい祖母との想い出があり、それは美馬の優しさと重なつた。

しづめりの間、美馬はジッと愛実を見つめていた。やがて静かに立ち上がり、愛実に背中を向ける。

「婚姻中の家族全員の生活費は私が責任を持とう。それから、君の弟妹が大学を卒業するまでの学費と、祖母上の入院費を先払いする。加えて、現在西園寺家が抱えている借金は、父上が親戚から借りた事業負債も含めて、婚約が整えば完済しよう。生活費以外は、婚姻期間の長さは問わず、全額保証する」

窓ガラスに向かつて呟く美馬の言葉は、ビリカ冷ややかに聞こえ……。しかし、振り向くなり愛実に優しい笑顔を見せたのである。

「どうだい？ 条件は悪くないだろ？」「

「……良過ぎて、怖いです。そこまでしてもう一つ理由が」

「まず、君でなければならぬんだ。そして、私たちは愛し合つて結婚する。そうでなければ、祖母は喜ばないからね。だから、君には芝居に付き合つてもう一つ」

美馬の言葉に愛実は一つだけ不安があった。

「あの……#N居つて、ビリまで、でしょうか？」

「そうだな。多少は手や肩、腰に触れるだろ？ それと、結婚式では誓いのキスもある。同じ部屋で寝起きしなければ怪しまれるだろう。そんなところかな」

愛実は俯き、

「いえ……あの……同じ部屋といつことは……あの」

ベッドはどうなるのか。更には、ベッドの中での何が行われるのか。
愛実にとっては重要なことであつた。

「ああ、そういう事か。言つただろう？ 昨夜のことは君を試しただけだ、と。私には十代の少女と遊ぶ趣味はない。私が買うのは君

の戸籍と時間だ。さつきの条件とは別に、離婚時には婚姻日数に十万を掛けた金額を支払おう。それとも、私は闇金の連中並に信用出来ないかな?』

光を背に微笑む美馬の姿は、不思議な魔力を秘めていた。

愛実の心はこの時、完全にイエスに傾いていた。その直後、内線電話が鳴つたのである。

美馬は面倒臭そうに取り、『取り込み中だ。後にしろ』と返す。しかし……『判つた。すぐに行く』舌打ちして、渋々承諾したのだった。

「済まない。どうしても行かなければならなくなつた。今日の夕方五時に君を迎えて行く。一緒に食事をしよう。返事はその時に

「……はい」

そのわずか七時間で、愛実を取り巻く状況はさらに混乱を極めて行くのだった。

第8話 魔性（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

数年前に考えたものですが、戦後何年かが微妙にずれています。
どうぞ、あまりに気になさらなければ下さい（＾＾；）

引き続きよろしくお願い致します。m(_ _)m

第9話 邪心

「まさか、『デパートに呼ばれたとは思いませんでした』

愛実が帰り、午後になつて秘書の瀬崎が東部デパートまでやつて来る。瀬崎は本社専務としての第一秘書なので、美馬の代わりに本社に居ることのほうが多い。

瀬崎は、愛実をデパートの社長室に呼んだことが不満のようだ。社員の口から、祖母や伯父らに知れる、と言つたところだろう。それ以前に、瀬崎は愛実に近づくこと 자체が止めさせたいようではあるが……。

「ああいつた良家のお嬢様には、田に見える格式が必要だろ？ 案の定、私がこの『デパートの社長に間違いないと判つた途端、田の色が変わつたぞ」

美馬は愛実の表情を思い出しながら答える。

彼女は信じられないほど無防備だ。ほんのわずか、美馬が笑顔を見せ言葉を変えるだけで、コロッと信用した。例の電話がなければ、あの場でイエスが聞けただろう。

それは美馬の目には、女の打算と浅はかさに映つた。

彼は知らなかつたのだ。必死で家族を守り続け、誰にも守られたことのない愛実にとって、美馬は救世主であり、英雄であり、正義の味方に見えたことを。

「社長…… 西園寺愛実さんは誠実で善良な少女です。騙して、傷つけることだけは止めて頂けませんか？」

「おいおい、人聞きの悪いことを言つなよ。昨夜だつて、俺は彼女を助けたんだ。違うか？」

「昨夜だけならそうでしょう。しかし、五十万の見返りを考えると」「何も求めちゃいないさ。あらゆるものを探して、しかもセックスは強制じやない。親切この上ない提案だ。俺以外だと……」いつもいかないだろうな」

従兄弟の顔を思い浮かべながら、美馬はそんな言葉を口にする。正確には義理の従兄弟だ。

「大奥様はご存じなかつたのでしょうか？ 現在の西園寺家の窮状を」

「……さあ、な」

眉根を寄せる瀬崎から顔を背け、美馬は煙草に火を点ける。

あの弥生が知らぬはずがない。おそらくは、一家がどん底まで墮ちるのを見届けてから、救いの手を差し伸べるつもりだつたのだろう。

売春婦となつた愛実に恩を売り、引っ張り上げて自分の好きなよう利用する。弥生であればそれくらい平氣でするはずだ。

「確かに、社長の助けが一日遅れていれば、彼女は悲惨な経験をしたことでしょう。その点は、私も社長を見直しました」

瀬崎はホッとしたような表情で美馬に笑顔を向ける。

美馬にとつてこの瀬崎は、人生で唯一心を許せる人間だ。褒められて悪い気はしない。

だが、問題はこの後 「しかし、よろしいですか、社長」

(……思つた通りだ。つたく、説教の好きな男だな)

「先ほど聞いた限りでは、彼女のことを思いやつた素晴らしい条件です。ですが……本当に手を出さないと約束出来るんですか？ 何

と言つても彼女はまだ未成年です

「結婚すれば成人扱いだ」

「社長！？」

「勘違いするな、瀬崎。私は彼女を襲つつもりはない。ただ、男と女の間には色々ある。彼女が望めば……俺が断わる理由などないだろう？ 違うか？」

あの様子なら、一週間も紳士ぶつて付き合えば簡単に落ちる。

美馬の中に、それを楽しむ感情も芽生えていた。化粧は全くしておらず、清潔な香りのする肌理細やかな肌の持ち主。処女など面倒でこれまで触れたこともなかつたが……。結婚するなら話は別だ。どんな女とのセックスも樂しんだことなど一度もない。十代後半から二十代前半は性欲に駆られて無茶もした。だが今の美馬にてセックスは、定期的に溜まつたものを放出するだけの作業だ。ラブホテルでの愛実の香りを思い出す。女の匂いを嗅いだだけで、下半身に力が漲つたのは……何年ぶりだろう。

「ソープ嬢になるところを助けてやつたんだ。あの娘も喜んで体を開くだろう。そのためなら、愛の言葉くらい囁いてやるさ」

「彼女はこれまでの女性とは違つんです。本当に、家族のために……」

あまりに熱心な態度に、美馬はからかい半分に言つてみる。

「どうした？ いい歳をして、まさか、あんな小娘に惚れたわけじやあるまい？」

「…………え、私は……」

瀬崎は視線を落とし、口を閉ざした。

「の、瀬崎幸次郎も苦労人である。

美馬より一歳年上だが大学では同級だった。彼の実家は北海道で牧場をやっている。兄弟が多く次男坊の彼は自力で学費を稼ぎ、そ

の後大学に進学した。第一秘書の給料は、小さな会社の役員並はある。だが決して贅沢はせず、今も相当な額の仕送りを続けているはずだ。

瀬崎は美馬と違い、遊びで女と付き合つことは一切ない。調査段階で不遇な愛実に同情した可能性は高い。

美馬は常々、瀬崎になら女を譲つてもいいと思つてきた。女はみんな似たようなものだ。この男が欲しいと言つなら、自分は手を引いてやる、と。

仕方ない。愛実には手を出さず、時期がくれば瀬崎に……瀬崎に……そこまで考えた時、胸の奥で何かがストップを掛けたのだ。

「残念……だつたな。あの娘は、鬼婆に目をつけられた哀れな生け贊だ。婆さんは彼女を、俺も含めて畜生の餌にする気だぞ。欲しければ自力で攫え。お前に、守り切る自信があるなら、な」

一介の秘書に、美馬に逆らう力などあるはずがない。

瀬崎は何も答えず、眼鏡の奥の目を細める。その視線は哀れみに満ちていて……訳もなく美馬は苛立ち、押しつぶすように煙草の火を消した。

～*～*～*～*

「姉さん。姉さんは本当にあの人気が好きなわけ？」
それは何度目かの質問だつた。

東部デパートから戻り、愛実は尚樹にだけ、「昨夜の彼と、結婚することになるかも知れない」と告げた。

「姉さんが好きで結婚したいならいい。でも、もしあ金の為なら…」
「高校には行かない。僕も働くから……そしたら、母さんは離れよう。僕ら四人で」

尚樹は母に失望していた。

あからさまに反抗する時もある。最近では真美も同じように言いつて始めた。だが母は、両親や夫に甘やかされて生きてきて、現実と向き合うことの出来ない女性なのだ。

「お母さんはまだ、お父さんのことが忘れないだけよ。私たちのことだって嫌いな訳じゃない」

「でも、姉さんに苦労ばかり……」

「小学生になつたばかりの慎也には、お母さんが必要よ。お願ひ、尚樹。姉さんは結婚しても、出来る限り様子を見に戻つて来るから。だから……何も聞かずに、姉さんのことを信じて」

愛実は美馬の申し出を受けることに決めた。

他にも事情はありそつだが、祖母の為、といつ彼の言葉を信じることにしたのだ。ただ……。

『私には十代の少女と遊ぶ趣味はない』

それはありがたい言葉のはずなのに。

車から引っ張り出し助けてくれた。泣きじやぐる愛実の頬を拭ってくれた。あの強く大きな手が忘れられない。

幾重にも張られた罠に向かい、運命の歯車は廻り始めた。

第9話 邪心（後書き）

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

ここで第一章が終わり、次回から第二章に進みます。
こつしてみると、ここまで「愛を教えて」と似たような展開www
でも…美馬、超悪党ですね。rzn

後、美馬家の婆さんは鬼ですから（＾＾；）（「十八歳の愛人」
参照）

しかし、瀬崎さん…同じ秘書でもえらい違いだなあ、と感心してま
す（苦笑）（某背徳の誰かさんは）
この先出て来る美馬和威くんも入れると、なんか逆ハーピーかも？

第二章で美馬家に行きます。

小悪党も極悪人も満載です！（おいおい）
良かつたら、お付き合いくださいませw（――）m

第10話 急転

「待たせたかな？」

約束通り、十七時に美馬はやつて來た。

昨夜は違う車に乗っていた気がする。帰るとき後部座席に乗り込んだので、おそらく運転手は他にいたのだろう。だが、今日は彼自身が運転していた。

白のポルシェ911GT2。もの凄く高価な車であることは愛実にも判る。

しかし、愛実が気になつているのは別のことであった。

「あ、いえ……今、出て來たところですから。あの……一つ聞いていいですか？」

「何？ 一つでいいのか？」

最初に逢つた時は、冷たくて怖い人、という印象が強かつた。それに比べて今日は、勿体ないほど素敵な笑顔を見せてくれる。

家族のことによつと一生懸命だつた。高校三年にもなつて、愛実には男女交際どころか片想いの恋すら経験がない。そんな彼女にとって、美馬から優しい笑顔を向けられるだけで魔法にかけられた気分だ。

「あの……美馬さんつて、お幾つなんですか？」

「ああ、八月に三十になる」

「ええつ？ そんなにお若いんですかー？」

愛実は驚きのあまり、声が裏返つた。三十代半ば、ひょつとした後半かも知れないと思い込んでいた。愛実だけじゃなく、尚樹も

同じではないだろうか。

彼女の反応に、美馬が気を悪くしたのではないか、と思つたが……。逆に、彼は声を立てて笑い始める。

「私はそんなに年寄りに見えるのか？ もう言えれば、君の弟にも『おじさん』と呼ばれたな」

「す、すみません。社長さんと聞いて……てっきりもつと年上の方だとばかり」

「別に私の会社という訳じゃない。デパートの社長とはいえ、売り場には立つたこともないし……。典型的な一族経営。縁故採用というヤツだな」

愛実の横に立つとスッと腰に手を添え、助手席の側まで連れて行ってくれた。ドアを開くと「どうぞ」とエスコートしてくれる。そんな美馬の動作に、愛実は自分でも呆れるほどときめき、舞い上がってしまう。

そのまま、ふと顔を上げた彼女の目にサイドミラーに映る自分が映った。そこには、化粧もせず着古した普段着を身につけたみすぼらしい少女がいた。大人の美馬にも高級外車にも似合わない。そんな自分の姿に、愛実は恥ずかしくなる。

俯く愛実の仕草に、美馬も気付いたらしい。

「明日、学校が終わつたらうちのデパートに来るといふ

「え……あの、いえ。夕方からバイトが……」

「それに関しては、今夜中にいい返事がもらひたいと思つてゐるんだけどね」

「それは……」

もう、この場で返事をしてしまおうか。

愛実がそう思つた時だった。

短い舌打ちが頭上から聞こえた。見上げると……美馬の表情が曇っている。彼は愛実ではなく、ポルシェの真後ろに停車した車を凝視していた。

車は黒のメルセデス・ベンツ、Sクラス。ベンツから下りて来たのは初老の紳士と、美馬より少し年上だろうか……かなりソフトな印象の男性だった。

「さすがだな藤田くん。君が一番乗りかい？ 抜け駆けされたんじや信一郎くんたちが怒るだろ？」

若い方の男性がそう言った。

「何のことか判りませんね。抜け駆けなんて……人聞きの悪いことを仰らないで下さい」

美馬から先ほどまでの笑顔が消え、憮然たる面持ちでその男性に答える。

男性は美馬の返答を軽く流し、愛実に手を差し出した。

「はじめまして、お嬢さん。君がシンデレラかい？」

「は？」

「あの……」

「僕は大川暁おおかわあきと言います。美馬物流に勤めていてね、美馬家とは姻戚関係にあるんだ。藤田くんとも仲良くさせて貰ってるんだよ」
暁はまるで営業マンのようだ。屈託ない顔つきでにこやかに話しかけてくる。

だが、愛実には何がどうなっているのか全く判らない。

「美馬さん、あの」

尋ねてみようと美馬を見上げたが……。彼はスッと愛実から視線を逸らし、厳しい顔で中空を睨んだ。

「失礼致しました。西園寺愛実さんですね？」

「はい……そうですけど」

フルネームで愛実の名を口にしたのは初老の男性である。

「私は、美馬家の顧問弁護士、長倉秀二ながくらしゅうじです」

そう言つと、丁寧に名刺を渡してくれた。

「美馬弥生様から、あなた方ご家族と連絡を取り、愛実さんを自宅にお連れするよう申し付かつて参りました。……彼に、何か聞かれましたか？」

長倉弁護士は探るような眼差しで美馬と愛実を交互に見る。その視線はかなり険しく、愛実は思わず美馬の後ろに隠れた。そして彼の上着の袖をギュッと掴む。

すると、美馬は愛実を庇つように立つてくれたのだ。そのまま長倉弁護士の質問にも答えてくれた。

「数日前に偶然知り合つただけですよ。今日も今から、一人で食事に行くところです」

その返事に愛実はびっくりした。数日前どころか、逢つたのは昨夜である。そのうえ？ 今日も？ なんて……まるで何度もデートしている関係のようだ。

結婚の話は、祖母の弥生のためと言つていた。だが、弥生の計画そのものを、美馬が知つていては不味いのだろうか？ 詳しい話はこれから聞く予定だつたので、愛実には想像するしかない。

「ほつ……食事に。藤臣くんも、随分女性の趣味が変わったようだ。大奥様もさぞかし驚かることでしょうな」

銀色に縁取られた眼鏡を押し上げつつ、長倉弁護士の口調は明らかに美馬を軽んじていた。

「しかし、私が尋ねているのは愛実さんです。それとも、彼女への

質問は君を通さねばならないとか?」

息の詰まりそうな時間が流れ、愛実は美馬から手を離す。

「美馬さんのお名前は聞きました、随分親切にしていただい。あの……わたしに何か?」

暁は『ふーん』と頷きつつ、美馬に思わせぶりな視線を送る。

「申し訳ありませんが、本日の『トークは変更して頂けますか? 愛実さんを美馬の本宅へ』案内致します」

長倉弁護士は儀礼的な謝罪を口にするが、その言葉の内容は? 命令? としか聞こえない。

「え? あの、そんな急に」

「弥生さまから直接お聞きになられたほうが」理解頂けるかと。まあ、遠慮なさらず、どうぞ」

やう言つて彼らの車に乗るよう促される。

長倉弁護士の強引な態度に愛実は嫌悪を感じていた。仮に、美馬家に行くとしても、見知らぬ人の車に乗るよりは美馬の車に、そう思つたが……。

「それはちょっと不味いんだよね。藤田くんは、あくまでもトボけるつもりだらうけど……。フェアを期すために、愛実さんにはこっちに乗つてもうおつか。いいよね?」

(フェアつていつたい、何が起つてゐの?)

美馬に聞きたいことはたくさんある。だが、

「予定が変わつて済まない。彼らの身元は私が保証する。君を傷つけるようなことはならない。私も後を追うから……彼らと一緒に、美馬の本家に行つて貰えるかな?」

愛実は黙つて頷いた。

第10話 急転（後書き）

御堂です。

お待たせしました。

第一章スタートです。

ようじくお願ひ致します m(—)(—)m

第11話 条件

都内にこんな場所があつたのだろうか？ といつほど、閑静なお邸だつた。

愛実の記憶に違いがなければ、ここは田園調布の真ん中である。レンガ造りの門柱、重そうな鉄製の門、石畳の上をゆっくりとベンツが進む。車が門から滑り込んだとき、正面玄関が見えず、彼女は声もなく驚いた。

かくいう愛実も、以前はそれなりの邸宅に暮らしていたご令嬢だ。しかし、この邸の比ではない。玄関前に降り立つと、門前の道路を走る車の音も、人の話し声も聞こえない。

観音開きの大きな玄関扉を通り抜けると、そこは彼女のアパートがすっぽり入りそうな玄関ホールであった。十人程の使用人がいて、「いらっしゃいませ」と一斉に頭を下げる。

愛実も慌てて、

「あ、お邪魔致します」

頭を勢いよく下げ、小さな声で答えたのだった。

そのまま、宮殿のようなリビングに愛実は案内された。大川暁と名乗った男性も、弁護士も、そして美馬すらリビングにやって来る気配はない。

愛実の前にはメイドが出してくれた紅茶が置かれていた。マイセンの五つ花、三十六種類の花の中から様々な組み合わせで描かれるというシリーズだ。

マイセンは祖母の好きな食器であつた。

愛実が幼い頃『アラビアンナイト』のセットを見せて貰つたことがある。祖母がお嫁入りの時に実家から持つて来た物だ。アラビア

風の美女や盜賊、王宮など一つ一つ職人の手で描かれた貴重なセツトだと言っていた。父が亡くなり、家を売り払った時には何処にもなく、祖母に尋ねたが答えは返つて来なかつた。

「これから何を言われるのかと思うと、とても紅茶に手をつける気にはならない。物音一つしない空間がどうにも恐ろしく、愛実は「早く帰りたい」それだけを考えていた。

その時、音もなしに扉が開き……。

「あなたが、西園寺愛実さん、ね。愛実さんと呼んでよろしいかしら?」

紅茶が置かれたテーブルを挟み、愛実の前に独りの老婦人が腰掛けた。祖母よりもかなり年配に思える。口元には穏やかな笑み湛えるが、どこか人を踏みしているような眼差しだ。

「はい。あの、失礼ですが……」

「わたくしは美馬弥生と申します。色々な事情は藤臣さんからお聞きになつたでしょ?」

美馬は何も知らないといった様子で、暁や長倉弁護士に返していた。その思惑は判らないまでも、今の愛実にとつて頼りは彼だけである。

愛実はギュッと指を握り締めた。

「美馬さんの、お名前とお仕事は伺っています。……それだけです」「そう

弥生は、自分の前にたつた今置かれたティーカップを取り、口を付ける。愛実の冷めたカップも下され、新しい紅茶からは白い湯気が立つていた。

「冷めないうちに召し上がれ。それとも、お紅茶はお嫌い?」

「いえ、すみません、緊張してしまって。……頂きます」

角砂糖を一つとクリーマーからミルクを流し入れ、愛実も口に運んだ。ダージリンの強い芳香が鼻に抜ける。ストレートで楽しむものだが、愛実はついついミルクをたっぷり入れてしまう。

「まあ、いいでしょう。わたくしはね、十六歳のときあなたのおじい様、西園寺亘さんと出逢いました」

そこから弥生の語った内容はほぼ美馬の言葉と重なった。

祖父が海軍士官として県に行ってしまい、その間に弥生は結婚を決められたのだという。

「お孫さんが十八歳ということは……。おじい様は随分遅くに『結婚されたのね』

「祖父は、自分は家庭向きではないから結婚はしないつもりだった、と話していたことがあります。でも曾祖父が亡くなつて、曾祖母に泣きつかれたとか。西園寺家を継ぐために家に戻り、祖母と結婚しましたと聞きました。でも、とても仲の良い祖父母で……あ、すみません」

弥生の瞳が険しくなつたのに気付き、愛実は急いで謝る。

絵画を見て廻つたり、演奏会を聴きに行つたり、素晴らしい景色の場所を旅したりするのが大好きな祖父であった。子供心には楽しい祖父だったが、今になつて思えば一回り以上も歳の離れた祖母は大変だったのではないか？ 数百万円はしたはずのティーセットを処分したのも、そんな事情があつたのかも知れない。

「あの……美馬さ……いえ、東武デパートの美馬社長さんに、ともも親切にしていただきました。それと、祖父の事と何か関係があるんでしょうか？」

美馬から聞かされたことを惚けるつもりはなかつた。ただ、半分以上信じられない思いが強かつただけだ。弥生本人の口から聞きた

い。そう思つて尋ねたのである。

そして弥生の語つた内容は、美馬の言葉よりはるかに突飛で、到底信じられるものではなかつた。

「わたくしも、いつ死んでもおかしくない歳になりました。先月夫が亡くなり、色々相続の問題が持ち上がって……わたくしはこの家を、旦さんとわたくしの孫に継いで欲しいと思つたの。今はもう二十一世紀、身分がどうこういう時代ではありませんからね。ですが、わたくしの男の孫は藤臣さんを入れて四人あります。わたくしが選べば不公平も生じて、家族内で裁判沙汰なんて、恥もいいところでしちう？ それで、愛実さん、あなたに決めて頂こうと思いましたの」

なんと美馬弥生は、自分の相続人に愛実を指名したのだ。但し、弥生の四人の孫と愛実が結婚すれば、という条件つきである。

「待つて、ちょっと待つて下さい！ そんな……どんな条件でも、わたしが相続する筋合いで物じやありません！」

愛実は血相を変えて断わる。

だが、弥生は予想していたのか、落ち着いたものだつた。

「まあ、そう慌てて答えを出す必要はないでしよう？ 弁護士の長倉からも報告を受けております。今の西園寺家は相当お困りの様子。あら……」「めんなさい。旧華族のプライドを傷つけるつもりはありませんの。でも、あなたがこの年寄りの我がままに付き合つてくださるなら……わたくしも援助は惜しみませんよ」

借金のことや困窮した生活を知られて「ふ」と、愛実は唇を噛み締めた。

しかも、それを察した援助の申し出である。

「そんな、とんでもないことです。結婚の約束を叶えることが出来なかつた祖父と西園寺の家を恨むならともかく、ご親切にして頂く理由がありません。お気遣いだけありがたく……」

「ただ、一つお願いがありますのよ。藤臣さんと親しくなさつているようだけれど……出来れば、彼を選ぶことは避けて頂きたいの」「その言葉の意外さに、愛実は気持ちは？お断り？から？疑問？に移つた。

第1-2話 忠告

一度浮かし掛けた腰を再び下ろし、愛実は尋ねる。

「あの、それはどういう意味でしょうか？」

弥生は愛実から顔を背けると、

「藤臣さんは、三女夫婦の養子なのです。亡くなつた夫の薦めで、孤児の少年を養子にしたの。出来れば、わたくしと、血の繋がつた孫と結婚して頂きたいと思つています。でも、彼にも相続権がある以上、農^{ないがし}ろには出来ませんからね。ただ……わたくしの？お願い？は胸に留めておいて下さい」

伏し田がちの『お願い』は、やけに冷ややかな口調だった。

愛実は席を立つ機会を逃してしまった。顔見せに、パーティナーに誘われ、そのまま美馬家に残ることになった。

リビングに取り残され、愛実はそこで呆然としていた。

弥生の話はあまりに唐突だ。しかし、顧問弁護士まで出てきた以上、彼女は本気なのだろう。それに比べて、昨日の美馬の話はどういうことだらうか。大筋は間違つていらない氣もするが、かなり都合の良いように端折つてある。

かつての恋人の孫である愛実と、自分の孫を結婚させ財産を継いで欲しいなんて……。その点は美馬の言葉に嘘はなかつた。問題はその候補者が彼を合わせて四人もいることだらうか。

美馬は「祖母の希望」「祖母が喜ぶ」といったことを盛んに口にしていた。だが肝心の祖母は、彼との結婚は本気で望んでいないよ

うだ。

その理由が、血の繋がった孫ではないから、と。
だから、親戚という大川暁が言つていたように、美馬は『抜け駆け』をしたのだろうか？

問題は他にある。弥生の言つとおりなら、愛実は孫の結婚相手として望まれているだけではなく……。

その時、愛実の考えを中断するかのように、コンコンヒドアがノックされた。

「失礼。ディナー用のワンピースを持って来たんだが。入つてもいいかな？」

それは、美馬の声であった。

彼は三着のワンピースを手に持ち、リビングに入つてくる。

「私の趣味で選んできた。気に入つてもらえば良いが」

ピンク、イエロー、グリーンどれも淡いパステルカラーだ。デザインは上品で可愛らしいイメージ、高校生の愛実に相応しく露出も最小限に抑えている。

気になることと言えば、どれも値札は外してあるものの、一着で愛実の一週間分のバイト代が飛びだらう。

「ありがとうございます。でも、こんな高価な服は……」

「私の、といつより、弥生様の命令だ。貰つておけばいい」

その声は酷く素っ気ない。美馬の様子が変わったことに、愛実の不安は急速に膨らんで行く。

「あの、わたしはどうあってもこの家の方と結婚しなくてはならないでしょ？」

「今朝話した通りだ。結婚すれば君も君の家族も救われる。もちろん

ん、私と結婚するなら提示条件は変わらない。ただ……他の連中を選べばそつはいかないだろ?」

「それは……仰る意味がよく……」

愛実の頼りなげな返事に、美馬は苛々した表情を浮かべた。

「本当の結婚になる、ということだ。弥生様から聞いただろ? 相続するのは君だ。当然、自由になる金は多いさ。但し、夫に選んだ男とベッドを共にし、そいつの子供を産む。君はまだ十八だ。家族のために決めた結婚で、残り六十年の人生を美馬の名に縛られることになるぞ」

そうなのだ。

弥生は愛実を相続人にすると言つた。昨夜も今朝も、美馬はそんなことは一言も言わなかつた。もちろん、愛実には貰うべきでない大金を受け取るつもりは毛頭ない。だが、善意に思えた美馬の言動がその財産目当てであるなら……。

愛実は、大きく傾いた心が美馬から離れて行くのを感じていた。

「ほ、ほかの方も、あなたと同じ提案をされるかも知れません!」

懸命に言葉を返した愛実に、美馬は初めて逢つた時のように妖しく笑つた。

「覚えておくことだ。私と最初に出会つた場所を。君が私にねだつた十万の意味を」

そこまで言つと、スッと耳元に口を寄せる。

「ワンピースのサイズはピッタリだと思つよ。この手が君のサイズを覚えている」

一瞬で愛実は真っ赤になる。ラブホテルでの出来事が頭に浮かび、背筋に奇妙な感覚が走つた。

「それは……あなたの提案を人に話したら、アノことを話すつて脅してるんですか？」

慌てて一步飛び退き、震える声で、でもしつかりと美馬を睨んだ。すると、彼は否定とも肯定とも取れる皮肉っぽい笑みを作る。

「生まれたときから苦労知らずの三人が、こんな提案をするとは思えないな。仮に約束したとしても、守る気などないだろ。あの連中は勝った者が正義だと信じている。私以外の人間と一人きりで会えば、君の貞操は保障できないぞ。これは脅迫じゃない、忠告だ」

弥生は美馬を孤児だと言つた。よほど、幼い頃に苦労したのだろうか？ その苦く切ない笑い方に、離れ掛けた愛実の心は絆ほだされ、訳もなく惹かれた。

美馬は愛実に着替えるように言い、自分は廊下で待つと告げて部屋から出て行こうとした。と、同時に、別の男性がリビングに入ってきたのである。

「なんだ、また抜け駆けか？ 大川から聞いたぞ。どうやつて調べ上げたのかは知らないが、彼女とすでに密会してたらしいな。でも、お前さんのモノかい？」

一見すると美馬より若く感じる。髪は天然パーマだろうか、緩くウェーブが掛かっていた。薄いグレーのスーツを着た、細身の男性であった。

「ようこそ、美馬家へ。これは……さすがに可愛いお嬢さんだ。僕も挑戦しがいがある。まさかもう、藤臣の予約済みなんてことはないだろうね？ ああ、僕は美馬信一郎。この家の長女の長男、早く言えば正当な後継者だ。……奴は手が早いんだ、気をつけてくれよ」

信一郎は早口に捲くし立てる。どちらかと言えばのんびりした愛実には、挨拶をする隙も与えてくれない。

彼は冗談交じりに二コ一コと話した。明るく朗らかで優しそうな雰囲気は、美馬より数倍親しみやすそうに思える。……が、眼鏡の奥の瞳に気付いた時、愛実の体は凍りつく。その目には、弥生と同じ冷酷な光が宿っていた。

美馬も時折、冷たい目で愛実を見る。以前でシャッターを下ろされたような気持ちになるが、怖くはない。

でも、この信一郎には恐ろしいものを感じるのだ。もし、この男性に美馬と同じ提案をされても、愛実はイエスと言えないだろ？

「西園寺愛実です。夕食にお招き頂きありがとうございます。あの……結婚とか、相続とか急に言われて……わたし」「

「まあまあ、落ち着いて。おばあ様は叶わなかつた恋を孫たちで成就させたいんでしよう。田伯爵家のご令嬢を美馬家の嫁にしたいんだよ。言い方は悪いが、階級主義への仕返しの意味もあるんじゃないかな？ 悪いようにはしないから、先の短い年寄りの頼みだと思つて付き合つてやつてよ。ひょつとしたら、瓢箪から駒つてヤツで、恋が芽生えるかも知れない。」「だろ？」

愛実は声にならない声で「はあ……」と頷いた。

愛実に親しげに話しかける信一郎を見ていると、どうにも腹が立つ。

美馬は可能な限り表情を殺し、

「信一郎さん、私は彼女にティナー用のワンピースをお持ちしたんですね。私たちがいたら、着替えられないのです?」

とりあえず追い払おうと画策する。

そんな美馬の思惑に気付いたらしく、信一郎はわざとらしく、愛実の肩に手を掛けて言った。

「ああ、そうか……良かつたら手伝おつか? ってのはまだ早いか。

次回のお楽しみにしておひつ」

愛実が結婚を承諾した後なら、この部屋から蹴り出していただろう。射程に納めた獲物に過ぎない少女ではあるが……奇妙な想いに囚われる美馬であった。

「で、本当にもうやつたのか?」

廊下に出るなり、信一郎は美馬の肩に手を回し尋ねた。

その口調は下劣極まりない。探るような目は、どうやら愛実の様子から男性経験を推し量れなかつたようだ。

「偶然ですよ。彼女の困った時に居合わせて、知り合つただけです」「とほけるなよ。お前に偶然なんてあり得んだろう? ばあさんの思惑を事前に知つて、あのガキを探し出したに決まつてゐ。あんな小娘、お前の手に掛かつたらチョロいもんだよなあ」

無能な信一郎にしては的を射た答えた。美馬は変なところで感心

しつつも、この家における彼の立場を弁えた言葉を返した。

「不埒な真似だけはなさらないで下さい。彼女は高校生です。宏志くんにも、それをしつかり言い含めておいて下さい」

宏志は信一郎の弟である。年齢だけは愛実に一番お似合いだ。だが中身は、兄と変わらぬクズ同然だと美馬は思っていた。

「なんだ。もう亭主気取りか？」

「そういう意味ではありません。弥生様が相続人に選んだお嬢さんです。無闇に傷つけたら、それだけで排除の理由にもなりうると思つただけですよ」

「それは処女を奪えばってことか？ 未経験なら尚のこと、一度やれば言いなりだ。ばあさんに言いつけたりはさせないぞ」

「今回はライバルがいて、アンフェアな真似はすぐにバレるということをお忘れなく」

「最もアンフェアが得意な奴に言われたくないね」

信一郎は細身だが身長は美馬と変わらない。彼は指先でトンと美馬の肩を突き、リビングのある一階から階段を上がり姿を消した。

本音を語つなら、今田中に手を打たれるとは思つてもみなかつた。瀬崎の言つた通り、デパートに呼びつけたのが不味かつたのかも知れない。だが、コソコソと呼び出したりしては、愛実は美馬を信用しないだろう。デパート内部にまだ、弥生か信一郎の父・信一の犬がいるらしい。

愛実には今夜中に返事を貰い、弥生が相続に関する取り決めを発表すると同時に引き合わせるつもりだった。信一郎の言う通りアンフェアかも知れない。だが、最も確実な方法だ。

第一、今回のこととは弥生の悪あがきに過ぎない。

「そのまま指をくわえて見ていれば、間違いなく全てが美馬の手に墮ちる。それを阻止しようとした弥生の企みなのだ。

アパートの近くで会った時、愛実は美馬の提案を受け入れようとしていた。

（あと半日あれば、あの少女は俺のものだつたのに……）

だが、どのみち愛実は美馬のものになる運命だ。

弥生は最初から長女の息子たち、信一郎と宏志の兄弟に継がせるつもりなどない。兄はロクでもない手段で女を手に入れることしか知らず、弟は風俗嬢としか関係出来ない腰抜けだ。どちらに任せても、弥生の愛するこの邸は三ヶ月と持たず競売に掛けられるだろう。問題は、兄弟揃つてともな神経をしていない点か。金が絡めばレイプすら厭わない奴らだ。今時珍しいほど無垢な愛実である。万に一つも妊娠でもすれば、言いなりに結婚を了承しかねない。それくらいならいつそ自分が……。

（何を考えてるんだ、俺は）

美馬は軽く頭を振つた。いつなつた以上、焦らず慎重にことを運ぶしかないだろう。

どのみち、弥生の本命は次女の息子・みまかずい美馬和威に決まつている。二十五歳の和威からは、浮いた噂も悪行も聞こえては来ない。入社一年目の平社員だが、仕事も真面目で周囲の評判も上々だ。

弥生は必ず、愛実に和威を選ぶようプレッシャーをかけてくるだろう。だが、肝心の和威自身は美馬を実の兄のように慕つてゐる。その和威に愛実を近づけないことくらい、美馬には造作ないことだ。

美馬はゆっくりと振り返り、愛実のいるリビングの扉を見つめたのだった。

～*～*～*～*～

食堂は天井が高く、大広間といった雰囲気だ。テーブルは窓に近い、中庭がよく見える位置にセッティングされていた。中庭は和風庭園の造りで、幻想的にライトアップされている。ほんの一メートル程度の高さではあるが、飛沫を上げて落ちる滝に愛実は見惚れてしまつた。

長い食卓テーブルの上座に弥生が座る。右手に信一郎、宏志、和威、そして美馬が着席した。左手には長倉弁護士、真ん中に愛実、末席に大川暁が座つた。

「この屋敷にはわたくしを除いて、三家族八人が住んでおります。まずは孫たちの四人に揃つてもらいました。一人ずつ……長倉、紹介してあげて下さいな」

弥生が口火を切り、長倉弁護士が「はい」と頷いた。

「まずは手前から、弥生さまの『長女・加奈子さまの『長男、美馬信一郎さまです。今年で三十三歳になられます」

「やあ、さつきはひとつも。サーモンピンクのドレスが可愛いね、藤臣の趣味だとしたら、ちょっと妬けるなあ。僕は美馬エレクトロニックの社長なんだ。派手さ加減じや東部デパートには負けるけど、企業実績じやそろは劣らないよ。コンピュータのことなら何でも相談に乗るからね。ああ、そうだ、愛実ちゃんつて呼んでいいかな?」「はあ……あの、ありがとうございます。呼び方は別にお任せします」

リビングでも思つたが、機関銃のように話す人である。

愛実は戸惑いながら、どうにか返事をしたのだった。

「お隣が、加奈子さまの次男、美馬宏志さまです。愛実さんに最も年齢が近い二十三歳で、まだ大学生でいらっしゃいます」

顔を合わせた時から、この宏志だけは愛実に辛辣な眼差しを向けていた。やたら調子のいい信一郎にまるで似ていない。兄弟だと言わなければ、きっと判らないだろ。姿も一七〇前後で小太り、何にも不自由したことのない金持ちの息子といった雰囲気だけは兄と同じであった。

宏志は少し顎を上げ、愛実を見下ろしながら口を開く。

「ふーん、伯爵家の令嬢なんて、どんな女が来るのかと思つたら……。とんだ赤ずきんちゃんにビックリだ。君みたいな子が見知らぬ男の妻に、なんてや……伯爵家つてよっぽど金に困つてんだね」

とことん蔑んだ視線と言葉遣いだ。ひょとしたら、この場にいる全員に西園寺家の経済状況は知られているのかも知れない。それでも席を立てない悔しさに、俯く愛実だった。

第14話 和威

「ど、詰つゝとは見合いの男女は全部金田町でかい？ 僕も見合い当口に女房とは初めて会つたし……」

おじけた調子で場を和ましてくれたのは、愛実を迎えて来た暁であつた。

だが、この暁の位置が今ひとつ判らない。？ 姻戚？ と言つていたので？ 血縁？ ではないのだろう。弥生の孫娘の婿だろうか？ 愛実はそんなことを考える。

直後、長倉弁護士は小さく咳払いして続けた。

「そのお隣が、弥生さまの次女・千穂子ちほさまの」長男、美馬和威さまです。今年二十五歳になられました」

「はじめまして、美馬和威です。東部鉄道に去年入ったばかりで……信一郎さんや藤臣さんは社長だけど、僕は平社員です。東部新宿駅を利用されることはありますか？」

「たまに……新宿のような賑やかな場所に出掛けることは滅多にないでの」

つい最近新宿に行つたのは？ 売春目的？ だつた。美馬と逢つた時のことと思い出し、愛実の声は少しづつ小さくなる。

「（）利用ありがとうございます。では、東部新宿駅に降りられた時は駅事務室におりますので、お気軽にお立ち寄り下さい」

屈託なく微笑む和威に、愛実もホッとして「はい」と答えた。

四人の中でも、この和威は裏表がなく、一番普通の男性に思える。美馬ほど高身長ではないし、一瞬で人目を惹くような華やかさはない。だが、一重の目元が誠実そうで好印象の男性だった。

「最後が、すでに存知のことだと思いますが、弥生さまの三女・佐和子さまの養子、美馬藤臣さまです。今年三十歳になられます」

美馬はこの食堂に入つてから一度も愛実と田を会わさない。何か事情があるのであらうと、彼女も出来るだけ美馬を見なによくにしていた。

「……すまなかつたね。こんなことになつてしまつて。君とはゆつくり始めようと思つていたんだが」「

さつきは忠告と諭いつつ、脅すような口調だつた。そうかと思えば、また優しい言葉をくれる。彼女の田に映る美馬は、まるでカメレオンのようだ。

ふと気付けば美馬に視線が固定し、彼から田が離せなくなる。

しかし、そんな愛実の様子に宏志から声が上がつた。

「へえ、そつなんだ！ 兄さんはバージンを嫁に出来るつて張り切つてたけど、どうやら、もう藤臣のお古になつかけつたらしいよ。僕は、こいつとキョーダイは『免だなあ』

唐突にぶつけられた卑猥な言葉に、愛実は吐き氣すら覚える。最後の部分はよく判らないが、おそらくはセックスに関係した言葉だらう。

言い返すかどうか愛実は迷つた。出来れば美馬に何か言って欲しいが……彼はスッと顔を背けたのだ。

その時、美馬の隣の椅子が音を立て後ろに倒れた！

「いい加減にしてくれ、宏志！ そういう言葉遣いは改めると、

何度も言えれば判るんだ？ 僕には不愉快で我慢ならない！」

おとなしく思えた和威が席を立ち、隣の宏志に向かつて怒鳴りつけた。

「ええーっ、何が悪いわけ？ 僕はホントのことを言つただけだよ
丸つきり悪びれた様子もなく、宏志はのほほんと答える。

「女性の前で……失礼だと思わないのかつ！？」 信一郎さんも注意
して下さい

和威の視線は宏志を通り越し、信一郎に向かつ。信一郎は少し肩
を竦めただけで、特に注意する気もないらしい。

「相変わらずいい子ちゃんだねえ、和威は。まあそつか、誰の種か
判らない上に、母親にも捨てられたんだもんねえ）。おばあちゃん
に尻尾振つて可愛がつてもらわないと、住むトコもなくなるか」

笑いながら口こした宏志の言葉に、和威はいつそつ色めき立つた。

「だからなんだ！ 貴様だつて似たようなものだらつ」

「僕は戸籍のことを言つてるんだ！ 私生児のお前らと一緒にすん
なつ！」

「お黙りなさい！」

そこまで黙つていた弥生が声を荒げ一人を制した。

「愛実さんの前で、身内の恥を晒さないでちょうどだい。和威さん、
何を向きになつてゐる。……宏志さんも、和威さんの仰る通りです
よ。愛実さんに謝りなさい。それが出来ないなら、出てお行きなさ
い」

愛実は、弥生が宏志を快く思つていなることに気が付いた。しか
も信一郎も同じのようだ。実の弟であるのに庇う気配も見せず、知

らん顔をしている。

一方、和威は自分で椅子を元に戻し、座り直した。

「失礼しました。お騒がせして申し訳ありません。愛実さんも、驚かせてすみませんでした」

和威の謝罪に、続けて宏志の言葉も待つたが……。
逆に彼は勢いよく立ち上がった。

「ハツ！ 馬鹿馬鹿しい。こんな茶番に付き合ってらんないね。金目当ての赤ずきんちゃんに群がる、三十過ぎのおっさんや、口だけ立派なインポ野郎なんて……笑えるよなあ。僕はいち抜一けた！」

わざとらしく大声を上げ、宏志は食堂から出て行く。

和威は宏志の揶揄に激怒し、再び席を立とうとした。しかし今度は、「よせ、和威」隣の美馬が、グツと腕を押さえ込む。

「宏志くんは相変わらずだね。この分だと、もう二、三年は学生を続ける気かな？」

美馬の向かいに座つた暁が苦笑まじりに囁く。

その言葉を受けて、ようやく信一郎も口を開いた。

「「めんね、愛実ちゃん。悪い奴じゃないんだが、まだまだ学生だから……合コン気分が抜けないんだろうな。花婿候補には肩書きも重要だからね。それに血統も、ね」

弟を庇うというより、ただ自分の正当性をアピールしたいだけらしい。要約すると、和威は社長ではないし、美馬は養子だ、と。

ディナーの時間は終始この調子であった。

和威が愛実に対してもう一度話しかける。信一郎が軽口でチャチャを入れる。そして、さりげなく両方をフォローするのが暁という役

回りだ。

美馬はといふと、相槌程度で自分から話しかけることはない。だが、時折ジッと愛実を見ている。それは直踏みするような視線ではなく、何か言いたげな眼差しだ。

何を食べ、何を飲んだのかよく判らない時間が過ぎ、ようやく愛実は自宅に戻れることになった。

最後に弥生が口にしたのは、

「では、誰かに送らせましょう。愛実さん、あなたが決めて上げてくださいな。もちろん、結婚相手ではなく、安全なボディガードで構いませんよ」

「」の中で普通に選ぶとしたら和威だ。弥生もそれを望んでいる気がする。だが、美馬と一人になりもつと話したい気持ちもあった。その場合、間違いなく弥生の機嫌を損ねるだろう。愛実はしばらく悩み、口を開いた。

「あの……わたしは……」

「僕を気に入ってくれても、相続人にはなれないよ」
暁は面白そうに愛実に話し掛ける。

二人は、行きと同じくベンツの後部座席に並んで座っていた。
「いえ。奥様がいらっしゃると仰つたので、つい……」

愛実は大川暁を指名し、その場にいた全員を驚かせたのだった。

当の暁は、愛実の返事を聞き申し訳なさそうだ。

「ああ、そうか……ごめん。見合い結婚は嘘じやないんだ。でも、先週離婚が成立してね。だから今は独身なんだよね。送り狼が心配？」

「そんなことは……すみません」

失礼なことを言った気がして、愛実は謝った。しかし離婚と言つことは、暁は弥生の孫娘の婿ではなかつたといふことだ。

「いやいや、君が謝ることじゃないよ。でも、ビックリしただらう？ 大丈夫？」

「はい。まだ、何のことか良く判つてないです。大奥様……でしたつけ。どうしてわたしを相続人にしようと思われたのか……。しかも結婚なんて、四人のお孫さんがお氣の毒で」

財産など要らないと言つてしまえばいいのかも知れない。
だが現実に、そんな綺麗事だけでは生きていけないので。お金の苦労は愛実も嫌と言つほど知つてゐる。彼らが財産目的だとしても、彼女に責めることなど出来ない。彼女自身がお金のために、美馬の提案に応じようとしたのだから。

「それは君が気にすることじゃなこと。彼らには断わる自由があるんだ。まあ、もし僕だったら……こんな可愛い女子高生と結婚出来るんなら、財産なしでも飛びつくけどね」

「そ、そんな……」

「ああ、『ゴメン』、『ゴメン』。逆に脅かしちゃったかな。三十代半ばのおじさんの『冗談だと思つて聞き流してくれよ』

笑顔の暁につられ、愛実は思い切つて尋ねてみる。

「あの……大川さんと美馬……藤臣さんはどうこういふ関係なんですか？」

「えーっと、弥生様の三女佐和子さんの再婚相手が、僕の親父なんだ。親父は美馬姓を名乗つてあの家に住んでる。僕が大学生の時に再婚してね、卒業までは僕もあの家に住んでたんだよ。藤臣くんとは義理の兄弟になるのかな」

美馬と暁が再婚相手の連れ子同士とは考えもしなかつた。

「そうですか。それで……藤臣さんが大川さんと話すときは少し雰囲気が違うんですね」

「違う？ そうかな？」

「はい。アパートの前では怒つたような感じで……お邸にいらっしゃる時の藤臣さんは、能面みたいでした」

愛実の感想に暁は声を立てて笑つた。

「能面か、それは良かつた。他には？ 何か気が付いた？」

「他に、ですか？ 信一郎さんと宏志さんの『兄弟』とは仲が悪いように見えました。でも、和威さんのことは好きみたい。大奥様から養子だと聞きましたけど……本当にそれだけでしょうか？ 何か、皆さん微妙に気を遣われてこるような気がして……」

頭に浮かんだことを素直に口にした。そんな愛実の言葉に、なぜか暁はずっと笑っている。

「あの……わたし、何かおかしいことを言いましたか？」

「ああ、いや。全部、藤臣くんのことばかりだと思ってね」

暁に言われて初めて気が付き、愛実は赤面した。確かに、美馬の感想を聞かれた訳ではない。なのに、愛実の心に焼き付いているのは、美馬の姿ばかりだ。

昨日ほどではないが、かなり遅くなってしまった。弟たちはもう眠っている時間だろう。愛実は元の服に着替えている。そのまで、と言われたがそんな訳にもいかない。代わって美馬が持たせてくれたのは、弟たちへの土産であった。

ディナーを頂きながら、愛実は自分だけ美味しいものを食べることに罪悪感を覚えていたのだ。ため息を吐きつつ口に運ぶ彼女の様子に、気付いてくれたのは美馬だった。同じものを兄弟分用意して、持たせてくれたのである。

冷たい素振りや厳しい言葉をぶつけながら、思いもかけぬ優しさを見せてくれる。

どうして、候補者が美馬ひとりでないのだろう。
愛実は胸の中で呟き……。

「和威くんはどうだい？ 食事中はいいムードだつたんじやない？」

「暁の質問に、愛実は現実に引き戻された。

「そう、ですね、和威さんはとても誠実な方に見えました」

「だと思つよ。ただ彼は、女の子と付き合つたことがないって話だから、スマートじゃないかもしれないな。逆に藤臣くんはあの通りの男だから……女性秘書にはほとんど手を付けてるし、邸のメイドも何人か……週刊誌には、東部デパートのイメージモデルが本命とか書かれてるけど、どうかな？ まあ、君次第だよ。苦労すると判つても、惚れたらどうしようもないからね」

暁の言葉は、恋に落ちそうな愛実の心に冷水を浴びせ掛けたのである。

＼＊＼＊＼＊＼＊＼

アパートの前に愛実を降ろし、暁は彼女が部屋に入るのを見届けた。

ベンツの車内、後部座席で一人になつた彼は内ポケットから煙草を取り出し、火を点ける。と、同時に、携帯電話が鳴り始めた。

『　　はい』

電話の相手は暁から愛実の様子を探り出そつと必死だ。それもそのはず、美馬の名に一番相応しくない男に、美馬家の財産を持つて行かれそつなのだから。必死にもなろうと言つものだ。

『判つてますよ。協力すると言つてるじゃないですか。　こっちの件もよろしく頼みますよ』

暁は愛実と話すときに比べて五割ほど声のトーンが落ちている。そのまま電話を切り、ポケットに仕舞つた。

落ちぶれ果てた旧伯爵家の『ご令嬢と聞き、どれだけ世間知らずのお姫様が来るのかと思ひきや……。予想外にもしつかりした、観察力のある娘だつた。

たつたあれだけの時間で、藤臣を取り巻く空気に気付いたのだから大したものだ。

(いや、恋の成せる技つてヤツか)

藤臣に関するところで嘘は言つていない。しつかりしてはいるが、男関係は不慣れと見える。ほんのわずか暁の体が触れただけで、愛実の全身に緊張が走った。ああいう反応をされると、構いたくなるのが男と言つものだ。

暁は煙を吐き出しながら軽く首を振った。思わず、苦笑いが浮かぶ。

今回ばかりは簡単に手を出す訳にはいかない。出来る限り慎重に、愛実にとつて味方でいなければ意味がないのだ。相続人が愛実である以上、上手くやれば暁にもチャンスはある。

(全部奪い取つて、追い出してやれたら爽快だろうな)

苦労したとはいえ藤臣も和威も、所詮は亡くなつた美馬一志の血縁だ。唐突に人生に入り込み、振り回され続けた暁とは訳が違う。

現時点では、藤臣が一步リードだろう。手慣れた分だけさすがに上手くやつたな、というのが正直な感想だ。だが、勝負はまだまだこれから……。

暁の胸にほんのわずか愛実に対する同情が芽生えた。だが、獲物に同情するくらいなら、狩りそのものを断念したほうがいい。

彼は思い直し、再び携帯電話を取り出した。

『……ああ、和威くんか？ 大川です。そう、ちゃんと送り届けましたよ。それで、彼女のことなんだけど……』

愛実が美馬家を訪れた翌日。

学校から戻った愛実を待ち構えていたのは、美馬信一郎であつた。

「やあ、愛実ちゃん。昨日はどうも。お母さんにデーターのお許しを頂きたくて、ご挨拶に来たんだ。驚いたよ、お母さんには何にも話してなかつたんだね。数口中に、おばあ様から話が来ると思つけど……。一応、僕からも説明させていただいたから」

そんな信一郎の言葉に愛実は焦つた。母が金の亡者だとは思いたくない。だが、貧しさは人間を変えるのだ。

一度は藤臣の提案を受け入れようとした愛実だが、美馬家を訪れて状況が変わつた。藤臣は候補の一人に過ぎず、弥生は彼との結婚を望んではいなかつた。それ以上に、結婚を受け入れたら愛実自身が弥生の相続人に指名されるのだ。それは幾らかの謝礼を受け取り、仮初めの花嫁になることとは訳が違う。まるで財産目当ての詐欺を働くようで、簡単に藤臣の提案を承諾することが出来なくなつた。

だが、一家の経済状態が困窮しているのは事実だ。

他の三人を選べば詐欺ではなくなる。だが、愛実は本物の結婚をしなくてはならない。売春よりましだと言い聞かせてみても、一度、藤臣に傾きかけた心を修正するのは容易ではなかつた。

「まあ、愛実さん。こんな素晴らしい縁を頂いて、どうして黙つてらしたの？ お母さんは反対しませんからね。こちらの信一郎さんは社長さんだと気づじやないの。お若いのに立派な方だわ」
楽しげに笑う母の姿に、愛実は不安を覚える。

横から尚樹が姉の手を引き、

「どうなってるんだ？　あの夜の人と結婚するんじゃなかつたのか？」

弟の質問は当然だつた。だが、とても一口で説明出来る事情ではない。黙り込む愛実の本心も知らず、尚樹は信一郎を示し、とんでもないことを口にしたのである。

「あの男……母さんに現金を渡してた。姉さんの支度金とか言つてたけど……」

「嘘でしょ？　そんなつ。母さんはそれを受け取つたの…？」

「体いくらなの？」

「金額なんて判らないよ。でも、相当分厚かつたから、百万とかそれ以上かも。そんなの、母さんが断わるわけないじやないか！」

母にお金を渡さないよつに頼むため、愛実は信一郎に頭を下げた。結果、彼とのデートを約束する羽田になつたのである。

その夜、愛実はお金を返すよつに母に迫つた。正式に結婚を承諾したわけではないこと。それに、信一郎との結婚は考えられないことを伝える。

だが、

「何を言つてゐるの？　あなたは美馬家の花嫁に、と望まれてゐるんでしょう？　四人のお孫さんの誰かと結婚すればいいなんて、こんな素晴らしい縁はないわ。お金は美馬家からの支度金なのよ。あなたは旧伯爵家の娘なの。庶民のするような下働きは辞めて、お嫁に行きなさい。あの信一郎さんが嫌なら、他の方でも構わないわ。今度から、デートに誘われたらちやんと応じるんですよ」

母はまるで話を聞こいともしない。そんな母の元に、更なる誘惑が舞い込んだのだった。

数日後、いきなりやつて来た業者により、一家の荷物は運び出された。引越し先は、なんと父が亡くなると同時に担保で奪われた旧西園寺邸。

その昔、西園寺邸は九段坂と呼ばれる場所にあつたそうだ。曾祖父の代で成城の広い土地に移つたといつ。その時洋館を新築し、現在は築八十年ほど経つている。広かつた土地は切り売りされ、今は百坪足らずだ。

しかし、そうは言つても、荒れ果てた広い庭と古びた洋館……ほぼ収入のない状態で、屋敷の維持が出来るはずがない。引っ越ししてしまえば、弟たちは転校を余儀なくされる。そんなことなど考えもせず、母は喜んで引越しを受け入れてしまったのだ。

元の生活に戻れる　ただそれだけのために。

／＊＼＊／＊＼＊＼

「お願いします。どうしても美馬さんに会いたいんです。先日もこちらに来させて頂きました、西園寺と申します。お取次ぎ下さい」「そうは申されましても……」

引越しのことを聞き、愛実が駆けつけたのは東部テパートであった。

美馬家を訪ねるのはどうも敷居が高い。とくに、信一郎と会うのは怖い。あれからまだ連絡はないが、母が大金を受け取つた以上、二人きりで会わないわけにはいかないだろう。弥生と顔を合わせるのも、気が重かった。

東部新宿駅に行くことも考えたが、やはり、愛実は藤臣を頼つて

しまつたのである。

「申し訳ございませんが、美馬社長は出張中でござります。今日、明日といひには出社しない予定と聞いております」

「……連絡は取れませんか？ 携帯番号が教えて頂けないなら、そちらで掛けて下さいませんか？ どうしても連絡が取りたいんです！」

「お願いします」

先日はすんなり通して貰えた受付が、今田は出張中で居ないの一点張りだ。どうとう警備員が近づいて来て、愛実は仕方なく受付を離れた。

連絡先はもちろん、出張先も帰る予定すら教えては貰えず、愛実は途方に暮れていた。やはり、美馬の邸に行くしかないのだろうか。一体、この引越しは誰の指示なのか……愛実にはそれすらも判らないのだ。

「愛実さん？ 西園寺愛実さんですね？」

肩を落としてパートを出ようとした愛実は、名前を呼ばれ振り返った。そこには眼鏡を掛けた三十代の男性が立っていた。

「私は美馬藤臣の秘書を務めます、瀬崎と申します。愛実さんのことは、美馬家の一件を含めて社長より伺っております。失礼ですが、何かお困りでしょうか？ 私でよければお力になりますが」

瀬崎の言葉に愛実は縋りついたのである。

彼女が連れて行かれたのは、八階のレストランだった。コーヒーとカフェオレを頼み、しばらくすると支配人と書かれた名札の男性がやつて來た。

「瀬崎さん、お疲れ様です。今日はお仕事ではなくプライベートですか？ 珍しいですね、女性連れなんて」

「いや、社長のお知り合いのお嬢さんでね。少し使わせてもらいつ

「ええ、『じゅつくりどうぞ』」

レストランの支配人は丁寧に頭を下げ、テーブルから離れた。

その時、愛実は気付いたのだ。瀬崎がデパート内のレストランに連れて来た理由を。

瀬崎は？美馬家の一件？を知っていると言っていた。それは当然、縁談のことを探るのだろう。微妙な立場にある愛実のために、藤臣の秘書であることをさりげなく証明しつつ、誤解を招かないように知人の目がある所を選んだのだ、と。

候補者以外で、大川暁はとても親切そうに見える。美馬とも険悪そうには見えず、相談してもいいのかも知れない。だが、何かが愛実に一の足を踏ませるのだ。

でもこの瀬崎は、不思議な安堵感をもたらしてくれる。

「あの、瀬崎さん、でしたよね。実は……」

愛実は引越しの件を彼に話し始めた。

第17話 味方

「それは、うちの社長ではありませんね」

愛実の話を聞いた瀬崎の第一声がそれだった。

「先日、信一郎様があ宅に伺つたと思うのですが。あれが大奥様の耳に入りまして、あなたへのアプローチは環境が整つてから、とご指示が出たんです」

「環境、ですか？」

「おそらく、引越しは大奥様のご命令でしょう。あなたが条件を承諾されて、ご納得いただけた後、美馬の本邸に招いて席を設けるそうです。それまで、個人的な接近は慎むように、と」

道理で、信一郎があれきり連絡をして来ないはずである。美馬に会えなかつたのもそれが理由なのだろうか。愛実がそのことを尋ねると、

「いえ、この先時間を空ける為に、片付けられる仕事を急いで済ませておられます。本日も香港に出張中なんですよ」

出張には秘書も同行するが、今回はデパート関係での仕事なので瀬崎は残つたという。彼は本社専務としての藤臣の秘書で、仕事は別になるらしい。

「弟さんたちの転校手続きは私がしておきましょ」

「待つて下さい！ 困るんです。もし、今回の話がなかつたことになつて、すぐにまた引っ越せと言わいたら……わたしたちは路頭に迷うことになります。今度は、小さなアパートを借りる費用も出せません。ですから」

「判りました。顧問弁護士に連絡をして、どんな形であれこの話がなくなつた時は、愛実さん一家を元の状態に戻すよう、契約書を作

らせましょ。契約前にお渡しした現金や贈り物などは、慰謝料や示談金の形にして返還は不要との一文も入れます。それでしたら、あなたのお母さんご賄賂を贈る者はいなくなりますよ」

そう言つて瀬崎はこくりと笑つた。

愛実の目に見る見るうちに涙が浮かぶ。瀬崎の優しさは社長である藤臣のためなのかも知れない。それでも、愛実は温かな言葉が嬉しかつた。

翌日、尚樹らは近くの公立小中学校に転校が決まり、瀬崎は約束を守つてくれたのである。

～*～*～*～*～

『じゃあ、彼女の望みを叶えてやつたわけか……それがしが前に感謝しただろうな』

『私は社長の代わりに応対しただけです。愛実さんは社長に会いに来られたわけですか』

香港のビクトリア湾を一望するホテルペニンシュラ。二十一階のハーバービュースイートから湾を見下ろしつつ、藤臣は瀬崎の報告を受ける。

『明日には戻る。わざわざ俺を香港に追つ払つたんだ。何か企んでると思つてたんだが……今のところ、動きはなし、か』

『はい。ただ、計画はあつたようです。どうやら和威様が迷つておられるらしく。愛実さんの気持ちが社長に向いているのであれば、自分に出る幕はないとおっしゃつて』

それは藤臣の予想通りであつた。

藤臣が美馬佐和子の養子になつたのは彼が十五歳の時だ。当時、和威は十歳だつた。

和威の母・千穂子は結婚してすぐに妊娠が判明。あまりに早い妊娠だつたため、見合い結婚の夫は疑問を持つた。調査の結果、結婚前の妊娠が発覚し、千穂子は即座に離婚させられたのである。二人の関係は結婚後だつたらしく。

和威は出生直後に、戸籍上の父親から嫡出否認の訴えを起こされ、私生児となつた。

その一年後、千穂子は再婚。母親は和威を実家に残し、嫁いで行つた。現在では、再婚相手との間に一人の子供を儲け、家族四人で幸せに暮らしている。和威がこの二十三年間で母に会つたのは、わずか一桁に過ぎない。

弥生はそんな和威の母親代わりとなつて育てた。彼女は男の子を欲しがる夫のために、様々な努力をしたが恵まれなかつた。そんな彼女にとって和威は息子も同然である。

しかし、和威は次女の息子で父親もいない。しかも、信一郎より八つ、藤臣より五つも年下だ。おまけに一志が残した遺言のせいで、和威は益々後継者から遠のいてしまい……。

十歳の少年は従兄弟たちにいつも苛められていた。そこに登場したのが藤臣である。長女の子供である彼らは、標的を養子の藤臣に変えたのだ。

ところが、藤臣は和威とは違つた。幼い頃から大人の都合で、数々の辛酸を嘗めて来ている。一筋縄でいく少年ではなかつた。

結果、美馬家では……？信一郎・宏志？対？藤臣・和威？といった構図が出来上がる。

以来十五年、和威は藤臣を頼りにしてきた。弥生が藤臣に冷たく当たる分、和威は？血の繋がらない従兄？を思いやつて来たのである。

和威は、藤臣が自分と同じ私生児で孤児だと想い続ける限り、味方でいるだろ？。

あの弥生が藤臣に関する真相を話すはずがない。他の連中にしても同じこと。いずれ、和威が重役に名を連ねた時には、他の重役から知れるだろ？が……その頃には会社は藤臣の物となつてい。

『社長、愛実さんには携帯電話をお渡ししておきました。他に何かございましたら……』

『ばあさんが信一郎を止めてくれたのは幸いだ。ただ、母親を抱き込むことが出来ないとなると、奴がいちばん質たちが悪い。充分に気をつける』

『はい。了解しました』

別の意味で質が悪いのは瀬崎かも知れない。そんな思いを彼は呑み込んだ。

『では、お帰りの時刻に空港までお迎えに上がります』

『いやそれは……』

「ねえ～藤臣さん、まだあ～」

隣のベッドルームから催促の声が上がる。

説教好きな瀬崎の耳に入つたに違ひない。それを思つと藤臣は舌打ちした。

『社長……しばらくは女性関係を慎むところお話では?』

『仕方ないだろ? 本店と香港支店のイメージモデルを共演させるのがコンセプトなんだ』

『それと、モデルが社長の寝室にいらっしゃると、どうこういふ関係が?』

『瀬崎、俺の私生活の管理は頼んでない。言われたことだけやればいい』

電話の向こうから、深いため息と五秒ほどの沈黙が流れてきた。

『判りました。では、素晴らしい夜をお過ごし下さい。失礼します』
『言つなり電話はブツンと切れた。

(つたく! なんなんだ! 社長より先に電話を切る奴があるかつ!
!?)

苛々としながら、美馬は携帯電話をソファに叩き付けた。

ながせくみ
長瀬久美子 現在二十六歳、そろそろ下り坂のモデルだ。一七

〇センチの身長とスレンダーなボディライン。売り物の体を惜しげもなく晒して、女がベッドに横たわっている。

学歴はないが損得勘定には長けており、与えた物の金銭的価値によつて、腰の振り具合が変わつてくる判り易い性格の持ち主だ。イメージモデルとしての専属契約を結んで一年目、同じ時に愛人契約を結んだ関係であった。

「ねえつたら、藤臣さん」

「つるさいぞ。電話中に邪魔をするなど何度言えば判るんだ」

「だつてえ。ね、今夜が香港最後の夜でしょ? 一度くらい楽しみ

ましょ「あみゅ

ベッドから下りて、久美子は藤臣の腕に手を回し、甘ったるい声で擦り寄つた。

その直後、彼は久美子を力任せに振り払う。
「俺に命令するな！ そんなにやりたければ、勝手に男を漁つて来い。但し、東部デパートの仕事はこれで終わりだ。代わりのモデルはいくらでもいる。それを忘れるな」

藤臣の剣幕に久美子はすゞと引き下がつた。

彼の手には愛実の肌の感触が残つていて、それを打ち消すことが出来ない藤臣だった。

第18話 来訪

瀬崎はもちろん弥生や長倉弁護士にも話してくれたようだ。口頭で約束した通りの契約書が愛実の元に届けられた。

しかし、それを持って来たのは美馬和威であった。

「長倉先生がどうしても行けないと言われて……。でも、愛実さんが気にされてるだろうから、祖母に早く届けるよつこと言われたんだ」

そう言つとバツが悪そうに和威は頭を搔いた。

藤臣と信一郎は出張中で東京都内にはいないという。宏志は和威と一緒にには行きたがらず、代わりに、弥生は中立の暁に同行を命じた。

ところが、西園寺邸に着いた直後、暁の携帯に緊急連絡が入った。急遽会社に戻ることになり、暁は愛実に挨拶だけすると帰つてしまつたのである。

「えっと……僕も帰つたほうがいいですね？」

「はあ、どうでしようか……。でも、遠くまで来て頂いて」

「愛実にはどうすればいいのか判らない。

普通であるなら、引越しで片付いていないとは言え、お茶くらい出すだらう。このまま追い返していいものかどうか、和威と同じく愛実も玄関に立つたまま悩んでいた。

「まあ、美馬和威さんかしら？　あなたのおばあ様から連絡があり

ましたのよ。大切な孫に契約書を持つて行かせました、と。ほら、愛実さん、ほんやりしてないで中にじご案内して。契約書ならすぐこサインなさいな」

奥から出て来た母がそんなことを言い始める。
いつの間にそんな連絡があつたのだろう。愛実には初めて耳にする話だ。

「あ、どうもはじめまして、美馬和威です。あの、差し出がましいかも知れませんが、契約書はよく内容をじ覽になつた上でサインなさつて下さい。納得がいかない点は僕では説明出来ませんので、長倉先生に確認されてからが良いと思います」

「和威さんは真面目で誠実な方ですねえ。愛実も真面目な子ですよ。お一人は気が合つんじゃないかしら」

ホホホホホ……愛実の母は甲高い声で笑った。

確かに和威はとても好感の持てる男性だ。愛実はエプロンを外しながら、「どうぞ」とスリッパを出したのだった。

「藤臣さんの秘書の瀬崎さんから話があつたと聞きました」
契約書をテーブルに置きながら、和威は藤臣のことを口にした。

「昨日の不景氣で、邸は誰の手にも渡らなかつたらしい。アンティークとまでは言えない古い家具や調度品は売却出来ず、以前のままであった。

愛実はその中の少し傷んだ赤いピロードのソファに和威を案内した。

彼の言葉に、お茶を差し出す手が一瞬止まる。

「困った時に頼るのは、やつぱり好きな人ですよね。実は、あなたに贈る予定だというエンジニアリングを、藤臣さんから見せられたんです」

「いえ、あの、抜け駆けとか、そういうのじゃないんです。何と言ふか……偶然出会つてしまつて……色々助けて頂いて、それで」

咄嗟に、愛実は藤臣のことを庇つていた。

しどろもどろになる愛実を和威はどう思つたのか、

「判つてます。彼は僕にとって兄のような存在なんです。その……暁さんは色々心配してましたが、彼が真剣なら僕に争う意思はありませんから、安心して下さい」

和威は、『ご存知かも知れませんが、と前置きして藤臣の過去を口にした。

「藤臣は水商売の母親の元で私生児として育つた。その母親が亡くなり、小学生の頃から施設で育つたといふ。

「佐和子叔母さんは子供の産めない人らしくて、祖父が藤臣さんを養子に、と決めたんです。でも、祖母は大反対で」

藤臣の養母・佐和子は当時三十一歳。確かに、十五歳の少年を養子に迎えるくらいなら、姉の子供である十歳の和威と養子縁組するだろう。弥生もそれを薦めたらしい。

だが、弥生の亡き夫・一志が強硬に言い張り、藤臣を引き取つた。「祖父は藤臣さんのことを誰より期待してました。彼は優秀だから、そこを見込んだんだと思います。でも、祖母や加奈子伯母さんたちはそれが気に入らなかつたらしく……。子供の目にも理不尽にしか見えなかつた。でも、僕には何の力もなくて……。逆に、僕は藤臣さんには助けてもらつてばかりでした。だから、彼には幸せになつて欲しいんです」

和威は申し訳なさそうに話す、「藤田さんをよみじくお願ひします」と頭を下げた。

優しい和威の言葉は、愛実の胸にチクチク刺さった。

お金目当てで花嫁役を引き受けたかどうか悩んでいた。そんな彼女の本心を知れば、和威は軽蔑するだろう。藤田に惹かれる気持ちに嘘はない。

だが、

私には十代の少女と遊ぶ趣味はない。

藤田はキッパリと言っていた。「よみじく」の言葉にとても「はい」とは言えず、愛実は俯き黙り込む。そんな彼女を和威は都合よく解釈してくれた。

「ああっと、『めんつ！ よく考えたら、婚約指輪を用意してるなんて、僕が言つちやマズかつたよね？ 聞かなかつたことにして下さい！』

「あ……は！」

「それから、今田来たのはもう一つ、どうしても訂正しておきたいことがあります……」

そう言つと見る間に和威は真つ赤になつた。愛実には何のことか判らず、じつと見つめていると次第に耳まで赤くなる。

「あの、何か？」

「いや……この間、宏志くんが言つたことなんだけど

おそらく、美馬邸でディナーを頂いた時だろう。それは判つたが、何を言つたかまでは思い出せない。

「彼は僕のことを誤解してて、でも、決してそういう理由で候補者を降りると書いてるわけじゃないから……。だから、その点だけは誤解して欲しくなくて」

和威は藤臣に比べるとかなり幼く見える。大学生と言つても通るのではないか。とはいへ、愛実にすればかなり年上の男性だ。その大人の男性が、額に玉のような汗を搔く姿に驚いていた。

「あの、申し訳ありませんが、わたし……」

「いえ、ですから、決して自信はありませんが……結婚出来ない体と言つわけじゃありませんからっ！ それだけは、ちゃんとお伝えしておきたかったんです！」

「は、はい！ 判りました」

何かよく判らないまま、とりあえず返事をした愛実だった。

／＊＼＊＼＊＼＊＼

暁が引き上げたのは予定通りである。

こうでもしなければ、和威は重い腰を上げようとしている。どうやら、出張前に藤臣が和威に釘を刺して行つたようだ。これだけでは不十分だが、他の連中を焼き付ける理由にはなる。

暁は会社に戻り、デスクの上に置かれた封筒の中身を確認した。薄い笑みを浮かべると、彼は携帯電話を取り出す。

『ああ、いいモノが手に入りましたよ。それと、大奥様の指示で和威くんが彼女の元に出向きました。さあ、そこまでは……。藤臣く

んが戻るのは今夜の最終便じゃなかつたか、と。彼が戻るとすぐに動くと思います。早めに手を打たれたほうが』

封筒から取り出した数枚の写真を、曉は手の中で弄んだ。
そこに『写っていたのは 。

第19話 拉致

頭がガンガンする。

愛実の耳にJ・POPの流行曲だらうか、やかましい音楽が聞こえて来た。切れ切れに、水音も聞こえるようだ。

しばらくして、愛実はゆっくりと瞼を開いた。最初は重くて中々開かず戸惑つた。混濁した意識も、少しずつだがハッキリしつつある。

しかし大きな疑問が一つ、愛実には自分の置かれた状況が全く判らなかつた。

／＊＼＊＼＊＼

和威が西園寺邸を引き上げた少し後、瀬崎から渡された携帯電話が鳴つた。

番号を知っているのは瀬崎くらいだろう。おそらく、転校や契約に関することに違いないと思い、愛実は急いで電話に出たのだった。

『やあ、愛実ちゃん。聞いたよ、引っ越したんだってね。もう少し早く帰つてきたら、僕も和威と一緒に行けたのになあ』

そう言つて掛けて来たのは、信一郎であつた。

携帯番号は公平を期する為に、長倉弁護士から全員に教えられたという。愛実は、この信一郎から母が受け取つた現金のことを考えていた。

『契約書の写しを見たよ。いやあ、先手を打たれちゃつたなあ。でも、個人的なプレゼントのやり取りは構わないよね?』

『あの……わたしはまだ、お話をお受けすると決めた訳じゃありませんから。贈り物を頂いても……それに、母には絶対に渡さないで頂きたいんです。先日、母に用立てて頂いたお金は、将来ちゃんとお返しするつもりです』

契約書を盾に踏み倒すつもりなど全くない。それは藤臣に借りたお金も同様だった。ただ、母にこれ以上借金を増やして欲しくないだけだ。

愛実の言いたいことが伝わったのかどうかはともかく、
『もちろん僕も、愛実ちゃんに約束を守つて欲しいだけさ。デートしてくれるって約束だったよね？』

信一郎はこれから会いたいと言に出したのだ。

だが、弥生の命令で個人的な接触は控えることになつたと瀬崎が言つていた。

愛実はそのことを告げるが、

『僕たちの約束のほうが先だつたらう~、君にお土産があるんだよ。それを渡したいだけなんだ』

信一郎に譲る気配はない。

そして愛実にとつて駄目押しなつた言葉は、

『藤臣が香港に出張中なのは知ってるよね？ 彼が誰と一緒に知りたくないかい？ おばあ様より先に、君に伝えたくて……。少しだけでいいんだ。会ってくれるよね？』

出張と言えば仕事のはずだ。瀬崎は『デパートの仕事と言つていた。一体誰を連れて行くと言つのだろ？』

愛実は藤臣のことを知りたいと思つた。その感情に？好奇心？と呼び名を付け、彼女は信一郎と会う約束をしてしまう。それが？嫉妬心？だと気付くのは、愛実にとつてまだ先のことだつた。

／＼＼＊＼＊＼

（そうだわ……銀座のレストランに呼び出されて……）

レストランは個室に通された。少し躊躇つたが、そんなレストランで何が出来ると言うのだろう。見せたい物があるから、人目のあるところでは、と言われ愛実は同意した。

食事の後、信一郎に見せられたのは、藤臣が背の高い女性を連れ立つて歩く写真だった。二十代の素晴らしい綺麗な女性だ。彼女は東部デパートのイメージモデルで、長瀬久美子だと信一郎が教えてくれた。

写真は何枚もあり、そのほとんどに「一人は腕を組み寄り添い写っている。男性との交際経験がない愛実の目にも、特別な関係だと判る親密さだ。

「香港の九龍半島にあるホテルペニンシュラって知ってるかな？そここのスイートに仲良く泊まつてたらしいね。二人はもう何年も付き合つてゐみたいだから、マスクミも嗅ぎつけて明日のスポーツ紙に載るつてさ。おばあ様も酷なことをするよ。藤臣には結婚を約束した恋人がいるのに」

数十枚の写真と信一郎の言葉は、愛実に衝撃を与えた。

その後、信一郎に何と答え、何を口にしたのか思い出せないくらいに……。

ボンヤリとした頭で、見上げた天井にはなぜか鏡が張られていた。その鏡に、自分の姿が映つている。大きなベッドに横たわり、虚ろ

な田で鏡の中の愛実はこりからを見ていた。

(どうして、こんなところに寝てゐるのかしら?)

愛実は身体を起そうとするが、微かに指が動く程度で、四肢にはまるで力が入らない。

(わたし、どうなつてしまつたの? なぜ、体が動かないの?)

比較的鷹揚な愛実も、この尋常でない事態に焦り始めた。だが、慌てれば慌てるほど、考えが纏まらない。体が思い通りに動かないことが、これほど恐ろしいものだとは知らなかつた。次第に恐怖心が高まり……その時、音楽の合間に聞こえていた水音が止んだ。ドアの開閉音がして誰かが近づいて来る。

(誰? 誰がいるの?)

姿を見たくても首が回らず、尋ねたくても声が出ない。

「あれ? もう気がついたのかい。随分早いんだなあ。もつと量を増やすべきだつたかな」

そう言って覗き込んだ顔は、美馬信一郎だった。

／＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

弥生の本命が和威であることくらい、信一郎も察していた。
信一郎にとつて藤臣は邪魔者に他ならない。彼が邸に来た十五年

前から、祖父・一志に散々比べられては出来が悪いと罵られていた。だが、所詮『キレース』なのだ。勝者の決まつたレースに引き摺り出されるほど苦痛なことはない。

その一志が亡くなり、ホツとした矢先に今度は弥生だ。弥生は手塩に掛けて育てた和威が可愛くて仕方がないのだ。その和威に美馬家を継がせるため、わざわざ『結婚を誓つた男性の孫娘に財産を譲る』、などという茶番を仕組んだに違いない。

(ま、おかげでこっちにもチャンスが回ってきたけどな)

「志亡」き今、長女の長男である自分が後継者となるのに最も相応しい。

そのために、この娘を利用する。それは信一郎にとって、当然の権利だと思っていた。

藤臣の写真を見つめ、呆然とする愛実にソフトドリンクを勧めた。オレンジジュースにシロップとワインを混ぜ、炭酸で割ったワイン・クーラーだ。ワインの量を極力抑え、即効性の睡眠導入剤を混ぜた。

それは信一郎が普段からよく使う手段だ。

お目当ての女性をじく普通のレストランに誘つ。アルコールに慣れた女性相手の場合、非法の催淫剤を使うこともある。効き目は個人差があるが、大概是乱れに乱れて信一郎を楽しませてくれる」と請け合いだ。後日、記念のDVDを進呈すると、その先は信一郎が飽きるまで言いなりに出来る。

(この娘もさつさと犯つて孕ましてしまおつ。そうなれば、四の五の言わずに結婚するわ)

ふらつゝ愛実を車に乗せながら、信一郎の凶悪な本性が爪を研ぎ始めた。

弥生がどれほど長生きしても後五年。愛実が財産さえ相続すれば、すぐに自分の名義に書き換える。その後、子供は信一郎の子じゃない、と偽の証明書を医者に書かせればいい。金を積めば何でもする医者は大勢いる。そうなれば離婚も簡単だ。子供に相続権は無くなり、養育費も払わずに済む。

（こんな血縁でもない小娘に、一円だってくれてやるもんか！）

信一郎の車はどんどん都心から離れて行く。夜の街を三十分以上走り、車は郊外のモーテルに滑り込んだ。

部屋が一棟ずつ離れて建っている。フロントを通らずに済み、車を建物に横付け出来るのだ。ぐつたりした娘を連れ込むのに大した距離を歩く必要もない。叫び声が届く心配もなく 女を犯すには最適な場所であった。

第20話 毒心（前書き）

陵辱的なものを思わせる表現があります。苦手な方は「」で注意下さい。

『見失つた、だと…?』

夜の九時、飛行機は東京国際空港に到着した。連れはおらず、藤臣は最後の税関検査を抜け外に出る。

久美子は彼女の希望で九龍半島に残してきた。愛人が消えれば彼女のことだ、現地の男とよろしくやるだろう。ターミナル前に立つた直後、電源を入れたばかりの携帯に着信が入った。

『申し訳ありません。深夜工事の為、道路が規制中です……』

瀬崎は、彼らじくない慌てた様子で電話口で叫んでいる。

藤臣の不在中、信一郎と和威の動向には充分に気を配るよつ命じて日本を出発した。

和威はともかく、信一郎には特に注意するよつ言ったのだ。あの男は前科こそないものの、それに匹敵する無法を繰り返している。

それが、信一郎の車を追跡していたとき、交通規制に掛かって眼前でストップを喰らつたという。しかし、場所は成城の西園寺邸に向かう道。瀬崎は、そのまま自宅に送り届けるもの、と思つたらしい。逸る気持ちを抑え、瀬崎が西園寺邸に到着した時、信一郎の車は影も形もなく、当然、愛実の姿もなかつた。

『馬鹿野郎！ 何のための尾行だ！』

『……お詫びの言葉もありません。信一郎様の携帯に掛けるんですが、電源を切つておられるようです。私はこのまま警察に』

『警察が何の役に立つ？ 被害者がいなければ動かんし、愛実がや

られてからじや遅いんだつー!』

『では、どうすれば……』

藤臣がターミナルを出たタイミングを見計らい、目の前にポルシェが横付けされた。

運転手付きの車両^{リムジン}が苦手な彼は、大体において自分で運転する。空港にも自分の運転で来て、高級車専用の空港駐車場に預けるというサービスを利用していた。ターミナル前で受け取るのは、上客だけの特別サービスだ。

いつものスタッフが愛想笑いを浮かべ、揉み手せんばかりに藤臣を出迎えたが……。

『成城より西にある奴がいつも利用するモーテルを探せ! 五軒もないはずだ。グズグズするなっ!』

藤臣の怒声に駐車場スタッフは顔を引き攣らせ固まつた。
書類にサインをし、特別料金^{チップ}を押し付けるようにして運転席に乗り込んだ。そのまま、怒りに任せてアクセルを踏み込む。白のポルシェは残像を残し、あつという間に走り去ったのだった。

(なんて馬鹿な娘だ! あれほど忠告してやつたのに、よりにもよつて信一郎と二人きりで会うなど……最悪だ!)

和威には「財産はお前にやるから、愛実には手を出さないでくれ」と告げた。素直な和威は、藤臣の言葉に感動し、愛実には近づかない約束したのだ。

宏志は論外だろう。仮に何かを企んでも、奴に実行できる性根はない。遠くから吼えるくらいが精々である。

しかし、信一郎は違う。一志の腐った根性と、弥生の冷酷さを受

け継いだ、まさしく美馬家の人間だ。

その時、ふと頭を掠めた。？腐った根性？なら藤臣も引けは取らない。信一郎に愛実を犯させればいいじゃないか、と。

居場所を見つけてもすぐには踏み込みます、口戻が済むまで静観する。時間が経てば、愛実は奴に説得されるかも知れないが、レイプされた直後なら別だろ？ 現場で犯罪の証拠を押さえれば、信一郎とて逆らえまい。

間に合わなかつたとはいえ、事後のフォローに回れば、愛実も藤臣の言いなりに……。そこまで考えた時、彼の脳裏に浮かんだのは、愛実の笑顔だった。

ありがとうございます。

マッチポンプさながら、愛実をラブホテルに連れ込み、警察に通報したのは藤臣だ。後日調査されても、二人の関係が以前からだと、あの場にいた警官たちが証言してくれるだろ？ 愛実を追いかめるだけじゃなく、彼にはそんな思惑もあつた。

なのに、愛実は礼を言い、逆に藤臣を気遣つた。

女はすべて強欲な詐欺師だ。利用される前に、利用しなければならない。少しでも気を許せば、死ぬまで金を搾り取られることになる。それは、三十年弱の人生で藤臣が学んだ教訓である。

彼は心に浮かんだ愛実の顔を懸命に振り払つ。

「黙れ！ 僕に礼なんか言つくな！」

藤臣の叫びを打ち消すように、携帯が鳴つた。

瀬崎が場所を特定したに違いない。急いで車を路肩に停め、通話

ボタンを押す。

『頬奇、易所ばジニジツ』

『随分焦つてるじゃないか。眞面目な秘書くんじゃなくて悪いね』電話の相手は暁だつた。藤臣は深呼吸をすると、

『すみません。今、取り込んでまして……急用でなければ明日掛け直しますので』

めぐらして切るひとした。

「おいおい、いいのかい？」僕は、ある男がモーテルの部屋を予約

その言葉に、藤丘の呼吸が止まる。

『今からなら……終わる頃には間に合うさ。信一郎くんも馬鹿な真似をしたもんだ。君もそのつもりで計画してたんだろう？』でなきや、簡単に奪われる訳がない。ま、初なお嬢さんには気の毒だが、これもいい勉強に』

暁を遮り、藤臣は強い口調で尋ねた。

『どうしたんだ？ お前をんりしくないじやないか。 餌は有効に利

『俺が見つけたんだ！あの娘は俺のものだ。さりとて言え！』

暁は『これは？貸し？だ』と前置きし、藤臣が予測したうちの一軒の名前を口にした。

《大雅》

(どうして信一郎さんが？　ここは何処？　どうして動けないの？)

聞きたいことは山のようにある。

それなのに、愛実は思つように声も出ないので。

「……う、うう……」

喉の奥から必死で空気を押し出しても、小さな唸り声にしかならない。

愛実は流行の音楽は何も知らない。友達と遊ぶ時間も、お金もないのだから仕方のないことだ。今はその音楽が耳障りでどうしようもなかった。これでは、どんな大声で叫んでも搔き消されてしまうだろう。

唯一自由になる目で、愛実は可能な範囲を見回した。

そして判つたのだ。ここはラブホテルか、それに類する場所に違いない、と。藤臣と一緒に一度だけ入った場所である。そこは独特の空気が漂い、性的欲情を煽る生々しい気配に満ちていた。

同じ匂いを感じ、愛実は身震いする。

その時、信一郎の手が愛実に伸びた。羽織っていた薄手のジャケットはすでに脱がされ、白いブラウスと淡いブラウンのロングスカート、靴は履いておらず白いソックス姿の彼女が天井の鏡に映つている。

ブラウスの前で結ばれたリボンが、信一郎の手によつてスルスルと解かれた。

愛実は懸命に首を振り、抗議の声を上げようとする。

「暴れると怪我するよ。おとなしくしてたら、すぐに気持ちよくなる。タップリ子種を流しこんで、すぐに孕ませてやるからね。いい

子にしてなよ、愛実ちゃん

信一郎は理解しがたい台詞を口ひりひり、田を血走らせ、涎を垂らさんばかりに愛実に跨つた。

最初は行儀良くボタンを外そつと試みるが、次第に苛つき始める。遂には両手でブラウスの胸元を掴み、左右に引き裂いた。布が破け糸の切れる音がして、横を向いた愛実の目に弾け飛んだボタンが映り……。

「…………う、あ…………や、や、めで……」

掠れた悲鳴は音の洪水に飲み込まれ、彼女自身の耳にすら聞こえなかつた。

第21話 暴力（前書き）

陵辱的な表現があります。苦手な方はご注意下さい。

キヤミソールの上から信一郎は愛実の胸を揉みしだいた。それは徐々に力を増し、愛実は痛々と顔を顰める。

「へえ、さすが現役の女子高生だ。肌触りや弾力が違う。こいつは楽しめそうだ」

信一郎は舌なめずりしつつ、薄いキヤミソールを力一杯引き裂いた。

「い、や……や、めて」

愛実の口から、よつやく声らしきものがこぼれる。

それは信一郎の耳にも届いたらしく、彼女の顎を掴むと上を向かせた。

「どうせ誰かに犯られるんだ。落ちぶれ果てた伯爵家の肩書きなんざ、何の役にも立ちやしない。そんなお前を、正当な後継者の妻にしてやると言つてるんだ。感謝してくれよ。言つ通りにしてりゃ、母親に渡した金ぐらいくれてやるよ」

信一郎はそう言つと、ニヤニヤ笑いつつ愛実から離れた。ベッドのすぐ横に三脚が立ててあり、その上にはビデオカメラがセッティングされている。

「待つてろよ。俺から離れられないように、ちゃんと記念撮影してやるからな。お前、藤臣には抱かれてないよな？ 奴のお古なんて、それだけは勘弁してくれよ」

愛実は冷たいレンズがこちらを向いてることを知り、背筋がゾッとした。

信一郎は羽織っていたバスローブを脱ぎ、全裸で愛実に覆い被さる。そのまま、ふつくらと盛り上がった胸元に顔を埋めたのだ。

生温かい舌が胸の谷間を這う。まるで、なめくじを体の上に置かれたような氣色悪さだ。愛実の鼻先に信一郎の頭が来て、髪からは男性用整髪料の匂いがした。その強烈な匂いに思わず顔を背ける。

(こんな……こんな男の妻になるなんて……)

愛実は悔しくて堪らなかつた。信一郎と結婚なんて、ソープランジに売られるのと大差ない。それくらいなら、例え詐欺に協力したことになつても藤臣を選ぶ。

(美馬さんに触れて欲しい。他の人じゃイヤッ!)

藤臣のことが好きだ……愛実は初めて恋を自覚した。

心の中で強く願つた直後、彼女の全身に少しずつだが力が蘇る。手足に神経が戻つて来て、信一郎の拘束から逃れる為、メチャクチヤに動かした。

「うっ！　く、く、う……」

愛実の膝が、偶然にも信一郎の大事な場所にヒットした。

信一郎が怯んだ隙に、彼女は必死でベッドから体を起こした。なんとか立ち上がると、ドアに向かつて走ろうとする……が、酔つ払いのように足が縛れて前に進めない。どれだけ力を入れても、膝が笑つたようになつてしまつ。

「この、ガキい！」

「きやっ！」

いきなり、後ろから髪を掴まれた。そのまま引き摺り倒される。頭も背中も痛くて、愛実は泣きながら叫んでいた。

「やめて……お願い。もう、やめてっ！」

「うるさい！ この俺に逆らいやがって……ただで済むと思つくな！」

「このクソガキがっ！」

愛実は床の上に仰向けに転がされた。信一郎は馬乗りになると、彼女の顔を数回平手で叩いた。脣が切れ、口の中に血の匂いが広がる。

人に殴られたのは初めてで、愛実は目がくらくらした。抵抗する気力が急速に萎んで行く。

「ホラ、どうした？ 俺から逃げられると思つてんのか？ 殴られたくなきゃ言う通りにしろ！ 今度逆らつたら骨をへし折るぞ。判つたな！」

すでにボロ布のようになつたブラウスとキャミソールを、強引に愛実の腕から剥ぎ取つた。上半身が真っ白のブラジャー一枚になる。直後、信一郎は真ん中のリボンが付いた辺りを鷲づかみにし、ブラジャーを力任せに引き剥がそうとした。

「痛い、痛いからやめて……引っ張らないで！」

背中のホックが曲がり、壊れたことに気が付いた。壊れたホックが肌を傷つけ、背中や脇がひりひりして痛い。

とうとう上半身を裸にされてしまった。わずかに硬さの残る乳房は、桜色に息づいた先端を際立たせている。そして、信一郎の手がスカートのファスナーを下ろし始め……。痛みと悔しさ、そして怒り、今の愛実には泣くことしか出来ない。

警察に訴えてやる。絶対に泣き寝入りはしない。どれだけ貪りくとも、この男の妻にだけはならない！ そう、決意した時だった。

激しい勢いでドアが殴られた。叩くと言つよつた生易しい音ではない。室内に流れる音楽を凌ぐ勢いで、誰かがドアを壊そとじでいる。

「信一郎！ わっわと！」を開けろ！ 開けなきやぶち壊すぞ！」

凄まじい音と罵声に、一人の動きはピタリと止まった。

「美馬さん……助けて……助けて！」

藤田の声を聞いた瞬間、頬を殴られて萎縮していた愛実の心が一気に浮上した。

「無駄だ。ドアには鍵が掛かってる、チーンもだ。無理に押し入つたら不法侵入で、警察に突き出してもやる」

信一郎が勇ましいのは言葉だけだ。彼はビクビクした顔でドアを凝視している。

そんな信一郎を睨みつけ、愛実は言い放った。

「その時は、あなたにレイプされそうになつたって、訴えてやるからっ！」

「なんだとお……全部、お前のせいだ。この身の程知らずが！」

邪魔が入つた憤りも合わせて、信一郎は再び愛実に手を振り上げた。

／＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

「しゃ、社長……いつたいどの道を通つてこじまで」
藤臣の連絡を受け、瀬崎は彼より余程近い場所から駆けつけたはずなのだ。ところが、到着は五分の差もなかつた。

瀬崎がモーテルの責任者と話をつけている最中に、藤臣のポルシェが飛び込んで来た。

「そんなことはいい。鍵は？ 部屋はどうだ、早くしりつー。」

苛々して搔き鳴ったのか、藤臣は髪を振り乱し、田は血走つてい。全身から殺気がオーラのように立ち昇り、身長一六〇センチもなさそうなモーテルの責任者は、ガクガク震えていた。

おそらく、藤臣を堅気の商売とは思っていないだろう。

責任者は建物の前まで案内し、「穩便に話をつけて下さー」と瀬崎に懇願する。だが、今の藤臣の辞書に「稳便」の一文字は見つかりそうもない。

まずは声を掛けてから、とつづき責任者を突き飛ばし、藤臣はドアの横に置かれた傘立てを掴んだ。鉄製の傘立て一気に振り上げ、なんと、ドアをガンガン殴り始めたのだ。

その半狂乱ぶりに瀬崎は声も出ない。

「おい、何をしてる、さつたと鍵を開けるー。」

「で、で、ですが……」

「中で犯罪が行われてるんだぞ！ 僕の婚約者がレイプされたら、貴様も共犯で刑務所に いや、地獄に叩き込んでやるー。」

管理人は鍵を瀬崎に押し付け逃げ出した。瀬崎は慌てて鍵を開け

るが、ドアにはチェーンが掛かっている。

「社長、チヨーンカッターを借りてきます」

瀬崎は大急ぎで先ほどの責任者を追おうとした。

だが、

「そんな時間はない。退けつ！」

藤臣はそう言つとドアのノブを掴んだ。

少しチエーンを緩め、一気にドアを引く

すると、チヨーンの

留め金が見事に壊れ飛んだのだった。

第21話 暴力（後書き）

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

アルファポリスさんの恋愛大賞にエントリー致しました！
よろしければ、応援してやって下さるませ m(_ _)m

次回で2章が終わります。

引き続き、よろしくお願ひいたします（^ ^）／

第22話 救出（前書き）

暴力的な描写があります。苦手な方はご注意下さい。

第22話 救出

部屋に飛び込んだ瞬間、手を振り上げる信一郎が目に入った。全裸で愛実に跨る姿に、藤臣の中で何かが切れた。

「貴様一つ！」

藤臣は靴のまま駆け上がり、信一郎に飛びついた。力任せに彼女から引き剥がし、ベッドの反対側まで投げ飛ばす。

そして、恐る恐る愛実に視線を移した。

ほんのわずか、セックスに関する言葉を口にするだけで、頬をピンクに染めるのだ。その反応が可愛らしく、からかい半分でつい口にしてしまう。そんな彼女の初々しい桜色に頬が、今は真っ赤な薔薇の花びらを押し潰したようになっている。ふつくらとした唇には血が滲み、フルフルと震えていた。

それだけではない。

男の力で思い切り驚づかみにされたのだろう。瑞々しく張り詰めた二つの乳房に、爪痕がクッキリと残っていた。

そんな藤臣の視線に愛実は気付き、懸命に体を起こして胸元を隠そうとする。

だが、信一郎は違法な薬を使つたに違いない。完全に抜け切れておらず、彼女の体は今にも倒れそうなほどふらついていた。

「やあ、藤臣。いや、違うんだ……俺と結婚したいって、自分からここまで来たんだよ。でも、お前の声を聞いた途端、急に暴れ出して……つい

信一郎はへらへらと笑いながら、ベッドの向こうに身を起こした。口から出るのは、金田町への女子高生に嵌められた、という責任転嫁、後は言い訳だ。

その言葉は藤臣の中に残つた最後のブレークを粉碎した。彼は無言で上着を脱ぎ、愛実の肩に掛け……コラリと立ち上がる。

「そんな怖い顔するなよ。お前だつて抜け駆けしたんだ。お互い様じゃないか……」

全裸の信一郎は周囲を見回し、床に落ちたバスローブを手繰り寄せようとした。直後、男の絶叫がモーテルの個室に響く。床に伸ばした信一郎の手を、藤臣の革靴が踏みつけたのだ。藤臣は体重を乗せ、煙草の火を消すように踏み躡る。

信一郎がもう一方の手で藤臣の足を掴もうとした瞬間 叫び声を上げる男の顎を、今度は蹴り上げた。信一郎はもんぞりうつて床に倒れ込む。

「社長！ 落ち着いて下さいっ！ 社長！」

背後で瀬崎が制止する声と、愛実の悲鳴が聞こえた。

刹那 記憶の底から、母の悲鳴が藤臣の耳にこだまする。

ほんの短い間、父と呼んだ男が母を殴り、母を庇おうとした藤臣も殴つた。そんな母も藤臣を見るたび「お前を産んだせいだ」そう罵つた。

信一郎の姿がその男と重なる。

母に集たかり、母を殴りつけ、言いなりにさせたあの男に。八つの少

年に、母を救うことは出来なかつた。だが、今は違う。

ベッドの傍らにセツトされたビデオカメラが目に映り、藤臣は三脚^{かぎ}と掴み、信一郎の上に振り翳した。

直後、ふいに音楽が止んだ。静寂が訪れた室内に、信一郎の呻き声が広がる。そして、藤臣の背中に愛実が抱きつき……。

「死んじやうから、やめてーっ！」

三脚を信一郎の頭上に振り下ろした瞬間、藤臣はハッとして我に返つた。

躊躇に手が止まる。先端に取り付けられたビデオカメラは、信一郎のこめかみを掠め、床に叩き付けられた。^{ヨリ}廃棄物と化したカメラを横目に、信一郎は声もなく床に転がっている。

「美馬さん……お願い、もうやめて」

藤臣は愛実の言葉に自分を取り戻した。

短い時間目を閉じ、額を押さえ、落ち着かせる。

(愛実は駄目だ。誰にもやらない。この娘だけは……俺の物なんだ

ー)

滾るよつな想いが溶岩によつて噴き上げて来て、藤臣を苛^{さうな}んだ。

「……た、たすけてくれ……悪かった、もうしない。その子には二度と手を出さない。だから……たすけてくれ」

藤臣は一^ト二度深呼吸すると、

「貴様の犯罪の証拠はすでに掴んでる。俺がバックアップすると言つたら、告訴するという女が何人もいる。弁護士には金を掴ませているようだが、公になると知つたら奴も飼い主に報告するだろ。」

貴様は終わりだ

冷静さを取り戻し、従兄に向かつて言い捨てた。

信一郎も嫌味の一いつくらい言い返してくるかと思つたが、ビリヤ
ら、それどころではないらしい。

「わ、わかった……もう、しないから……頼むから、救急車を呼ん
でくれ。手の骨が砕けたみたいだ」

泣きながら縋る様は見苦しく、藤臣は信一郎から顔を背けた。

「瀬崎、呼んでやれ。ここ」の始末を頼む。病院に弁護士の長倉を呼
んで、念書を書かせる

「む、むりだ！ 骨が……」

「右手が駄目なら左手で書け。それとも、その粗末な息子を潰され
たほうが良かつたか？ 信一郎、示談の慰謝料と口止め料は安くな
いで。美馬の家を追われたくなれば、黙つて払うんだな」

それだけ言つと、藤臣は背中にしがみ付いていた愛実を揃うよう
に抱き上げた。

「あ、あの……あの……」
「何も言つな……言わないでくれ」

美馬は大股で部屋を横切り、覗き込むモーテルの従業員をひと睨
みで散らせる。彼はポルシェの助手席に愛実を乗せ、あつという間
に走り去った。

／＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

約一時間後、藤臣は美馬家に内緒でキープしているホテルの一室にいた。隣には巨大遊園地があり、間違つても藤臣が出入りするとは思えない場所だ。

そのホテルの一般客には貸し出さない部屋、プレジデントスイートに愛実を連れて入る。

医者を呼び、寝室で愛実の手当を頼んだ。その間に女性用の着替えを用意して貰い、彼はそれを手に、寝室に足を踏み入れた。

「キャッ！」

「ああ、済まない」

愛実は胸元を毛布で隠し、医者に背中を見せていた。室内には女性の看護師もあり、藤臣は彼女に着替えを渡して、そそくさと立ち去ろうとする。

その時、目にてしまつたのだ。愛実の体の至る所に残つた青紫の痣を。

藤臣は弱者に対する暴力には、過剰に反応する。

彼自身、小さな頃から様々な暴力に耐えてきた。加害者は義父だけでなく、被害者は母と藤臣だけではない。藤臣には腹違いの妹がいた。その妹を必死で守ろうとした幼い自分が、愛実の姿と重なる。

愛実は愚かな母を庇い、祖母や弟妹を守るために体すら売ろうとした。藤臣の提案に応じようとしたのも、家族のためだった。それ

は、瀬崎に相談した話の内容からも判る。

藤臣は彼女を、贅沢な生活が捨て切れず、売春に走った愚かな娘だと割り切るつもりだった。だが、そうでないなら。^{もてあそ}瀬崎が言ったように？誠実で善良な少女？であるなら……愛実を^{もてあそ}弄び捨てる」とは、自分自身を否定するに等しい。

（彼女の家族に対する想いが眞実なら……俺が抱く訳にはいかない）

その考えに、彼の体は悲鳴を上げた。

愛実のどんな姿にも、体が反応する。今もそうだ。痛々しい姿を目にしながら、あの傷跡に口づけ、彼女の恐怖を取り除きながら、体を一つに重ねたいと望んでしまう。

二十代に入った頃から、自制心と性欲のコントロールには鉄壁の自信を誇ってきた。どんな女もダッヂワイフ以上でも以下でもない。それが愛実にだけは、出逢いからブレークが甘くなっている。

愛実を手に入れたい。

だが、愛実を手に入れる訳にはいかない。

自分の中に芽生えた矛盾する感情の答えが見つからないまま……。

藤臣は結婚に向かつて駒を進める決意をした。

第22話 救出（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

次から第三章となります。

引き続きよろしくお願い致します。

「藤臣さん、聞きましたか？」

事件から四日後、藤臣も四日ぶりに美馬邸に戻った。彼が私室に入り、デスクに座るなり飛び込んできたのが和威だ。そして興奮した様子で話しかけてくる。

「どうしたんだ。落ち着いて話せ」

「ここ数日、信一郎さんを見なかつたんですが……実は入院してゐるらしいんです。何でも、暴漢に襲われたとか」

和威は声を潜める。

「暴漢？ それは気の毒だな、どこで襲われたんだ？」

しらつとした顔で、藤臣は言い返した。

「いえ、それが……よく判らないんです。警察にも届けてないရしくて。噂だと、ヤクザの情婦に手を出して、色々やつてるところに乗り込まれて酷い目に遭わされた、とか。入院も極秘扱いみたいですよ」

(なるほど、俺はヤクザなわけか……)

真剣な和威に合わせて、藤臣も深刻そうに頷く。その一方、手で口元を覆い、苦笑を隠した。

和威はそれを、藤臣も本氣で考え込んでいると誤解したらしい。

「まあ、いい薬ですよ。気に入った女性は恋人や婚約者がいても、かなり強引にモノにする、という噂ですから。いつか、痛い目を見ると思ってたんです」

「奴のことはいいさ。自分が痛い目を見ないように気をつけろよ

「僕はそんな、藤臣さんほどモテませんから。第一、覚えなきやならない仕事がたくさんあって、女性と付き合つてゐる暇なんかないです」

藤臣の忠告に和威はソファに腰掛けつつ答えた。

和威は宏志から言われたことを気にしている。下半身についての揶揄だが、藤臣はそれに気付き、遠回しに切り出した。

「愛実に聞いたよ。熱心に否定していたが、何のことか判らなかつたと言つていた」

藤臣の言葉に、和威はホッとしたような、残念そうな、微妙な表情をした。

「そうですか……でも、会いに行つたのは祖母と母の命令ですから。藤臣さんは、本当に愛実さんと結婚されるつもりなんですね？」

念を押すような和威の言葉に、藤臣は怪訝そうに顔を顰めた。

「不満か？ だったら、降りる必要はない。ただ、目的は財産か愛実か、はつきりさせておいてくれ」

「暁さんから聞いたんです。この間の出張、いつものモデルが同伴だつた、と

和威の口調は藤臣の不貞を責めるかのようだ。

スイートルームに久美子と一緒に泊まつたことが、写真週刊誌に掲載されるところであつた。印刷前に掲載を止めさせ、写真は全て回収済みだ。持ち込んだのはフリーのカメラマンだという。

その写真の存在を教えてくれたのは愛実だった。

信一郎は彼女を呼び出し、藤臣は女性同伴で香港に出張した、と匂わせた。愛実に久美子の写真を見せ、「藤臣が結婚を約束した女性」と説明したのだ。

それが間違いだと、必死で言い訳をしたのは初めてのことだらう。

しかも、十八歳の少女相手に。

「てっきり、そういうた女性関係は清算されたとばかり思っていたので……。愛実さんは、遊びでどうこうされる方じゃないと思うんです。だから藤臣さんも」

「お前には関係のない話だ」

デスクでキー ボードを打ちながら話していたのを止め、藤臣は立ち上がった。

和威とテーブルを挟んで正面のソファに座る。藤臣はテーブルの上に置いてあるタバコケースから、無造作に一本抜き火を点けた。藤臣の突き放した言い方に、和威はムッとしたようだ。

「そういう言い方はないだろ？ 僕だつて候補者なんだよ」

愛実と会い、話をしたことが原因らしい。和威の中で、彼女の存在が大きくなりつつあつた。

「だつたら何だ？ 愛実が選ぶのは私だ。第一、お前に結婚は不可能なんだろう？」

一瞬で和威の頬は紅潮し、数秒後には氣色ばんだ。

「違いますよ！ ただ信一郎さんや藤臣さんみたいに、女性をセックスの対象だけとは思いたくない。それに、どんな人間の血が流れているか判らない僕に、子供を作ることなんて……。だから、女性との付き合いも、結婚も考えないようにしているだけです！」

私生児であること。

和威のコンプレックスの源はそこだつた。彼は藤臣にも同じものを感じていたが、それは和威の思い込みに過ぎない。

藤臣も私生児であつた。だが、三月初めに亡くなつた美馬一志は、遺言で藤臣を実子として認知したのだ。藤臣は和威の義理の従兄で

はなく、血の繋がった叔父にあたる。和威と宏志を除く美馬家人間と、長倉弁護士、本社重役が知っている事実だ。

美馬一志は藤臣にかなり有利な相続権を与えた。それは遺留分を差し引いても、半分以上を彼が受け取る計算だ。さらには次期社長の椅子も、ほぼ藤臣に決まっていたのである。

だが、彼が欲しいのは？ 美馬家の全て？ だった。

「だったら、愛実との話も考えないようにするといい」

一言答えて、藤臣は煙草の火を灰皿で押し消した。眉根に皺を寄せ、煙を吐き出す。ソファからデスクに戻ろうとした時、その背中に和威は言葉をぶつけた。

「藤臣さん。信一郎さんことで、妙な噂もあるんです。彼を襲つたのはあなたで、愛実さんを連れ去つた、と。彼女は、本當はあなたとの結婚を望んでいない。承諾させるために、あなたは彼女を監禁している……」

和威の言葉に藤臣も驚いた。

どうやら表立つて手の打てない信一郎側が流した噂らしい。

それは一部事実だ。愛実はあの日以降、家には戻っていない。弟妹に心配を掛けぬため、と藤臣が持ちかけ、顔の怪我が完全に治るまでホテルで療養中である。

愛実の母親にはそれなりの金を握らせた。弟の尚樹には、美馬の家は金持ちで藤臣との結婚に反対する人間がいる。どうか内緒にしていて欲しい……そんな電話を愛実に掛けさせてある。

尚樹は愛実の不在中に訪れ、母親に金を渡した信一郎のことを毛嫌いしていた。そして、姉が好きな人と結婚出来るなら、と協力を約束したのだ。

「実際、愛実さんは今週になつて一度も高校に通つてない。家に連絡しても、旅行に出た、と言われるだけで」

「家族がそう言うなら問題はあるまい」

「そんなつ！ いくらなんでも不自然でしょ！」？」

食い下がる和威に、藤臣は見下ろしながら言つた。

「和威、真相が知りたいなら自分で調べる。知つたといふで、といふなら、無駄な詮索はするな。誠意と正義だけでは人も会社も動かないぞ。愛実を欲しければ、俺から奪つてみろ。お前に出来るなら、な」

いつもと違つ藤臣の様子に、和威は席を立ち一礼してどのノブに手を掛けた。

「和威

」

名前を呼ばれた瞬間、彼の肩がピクリと動く。

「暴漢には気をつけろ」

あとに続く言葉に、和威は食い入るような眼差しで藤臣を見たのだった。

第23話 流言（後書き）

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

アルファポリスさんの恋愛大賞、始まつたばかりにも関わらず、たくさんのご投票ありがとうございます（感涙）
信じられない好順位に、ただただ感謝の言葉だけです。

の割りに、もの凄い不規則な更新ですみませんっ！orz

本日から第三章となります。

よろしくお願い致します m(—)m

第24話 疑惑

藤臣の様子がおかしい。

和威は従兄の部屋を出て、階段に足を向けた。三階から一階に下りる途中で足を止め、考え込む。これまで和威に対して、藤臣がみんな好戦的な態度を取つたことはなかつた。

藤臣が愛実を監禁、という馬鹿げた噂は、暁が笑いながら教えてくれたことだ。

「ありえないよな。藤臣くんの場合、そんな手段を取らなくとも簡単にベッドに連れ込むさ」

和威もそう思う。

第一、西園寺家を訪ねた時、愛実は藤臣に結婚の意志があることを知つてゐる様子だつた。弥生の話は関係なく二人は惹かれ合つたのだ、と藤臣を庇つていた。

仮に何かの事情で愛実と信一郎が会つていたとしても、藤臣は冷静で礼儀正しい男だ。病院送りにするような暴力を振るうとは思えない。

（信一郎さんが愛実さんに何かしたのか？　藤臣さんを怒らせるような何かを）

ため息と共に和威はゆっくり首を振つた。足元を確かめるように一段一段下りて行く。

藤臣はここ数日美馬邸に戻つて来なかつた。

「いつものホテルに泊まつた様子はない。仕事には行つてゐらし

が。たあて、何処に泊まつてゐる」とやが、「

愉快そつと曉は言つてゐた。

信一郎は美馬邸とは別に都内にマンションを所有している。他にも至るところに別荘があり、ハワイにはコンドミニアムもあるらしい。学生の宏志ですら勉強用と称して他に部屋を持つていた。

一方、藤臣は「管理が面倒だ」と言い、別荘はおろか賃貸マンションすら借りていない。

例のモデルにはマンションを買い『えたと、数ヶ月前の週刊誌に載つてたが……。そのことを藤臣に尋ねた時、「ホテル以外では抱かない。女は信用出来ないからな」それは、肯定とも否定とも取れる返事だった。

一階の廊下に立ち、和威は自分の部屋に向かつ。位置的には、藤臣の真下だ。スイートタイプで入つてすぐのリビングと奥に寝室があつた。寝室にバスルームとトイレがついている。

藤臣のリビングは書斎代わりで、いつも山のように仕事を持ち帰つていた。女性を家に連れて来ることもなく、仕事以外では外泊も旅行もしない。和威が「たまには女性とのんびりして来たら?」と言つと、「必要ない。セックスは一時間もあれば終わる」と、べもない言葉を返された。

愛実の西園寺家はお金に困つてゐるところ。

弥生は和威に、

「確かに形で援助してあげたいのよ。わたくしにひとつて、初恋の方のお孫さんですもの。それにね、愛実さんにお会いして、楚々とした良いお嬢さんだと思いました。年の頃も和威さんとお似合いでし

よ。この家はわたくしが生まれ育った家です。実の孫である、あなたに受け継いで頂きたいの。それに……」

祖父の遺言状の内容を知られていなかった和威には、そこまで祖母が必死になる理由が判らない。祖父の遺産は祖母と三人の娘で分け合つはずだ。様々な事情で祖父の名義になつてゐるとはいえ、娘の誰かに相続させれば済むことではなかろうか。

思い惱む和威の耳に窓の外からエンジン音が聞こえた。

3600cc水平対向6気筒 タイトでスタイリッシュなポルシヨ911GT2のエンジン音だ。藤臣は一時間も家におらず、出て行くつもりらしい。この様子だと、どうしても必要な書類があり戻つて来ただけのようだ。

和威の耳に弥生の言葉が続いた。

「それに、藤臣さんが愛実さん何をするか……。藤臣さんの女性関係はわたくしも知っています。ねえ、和威さん。せめて愛実さんに、お金のことは心配しないようにお伝えなさいな。早また決断はしないよう あなたもね」

財産ではなく愛実が欲しい、藤臣の言葉は本心からだらうか？
暴漢には氣をつけろ あれが脅迫だとしたら……。

和威は部屋着を脱ぐとスースに着替えた。

／＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

今日でもう丸四日になる。愛実はテレビの電源を切り、三人掛けのソファに「口ロンと転がつた。西園寺邸と同じベルベットの布張りソファだが、色は優しいオフホワイト。しかも手入れが行き届いており、傷一つない。

リビングの窓からは巨大遊園地のロマンティックなお城が見え、愛実が寝泊りしているセカンドベッドルームの窓からは海が見えた。

（こんなところで、のんびりしていいのかしら？）

藤臣に言われるまま電話を掛けたが……弟たちはちゃんとご飯を食べているだろうか。掃除は、洗濯は、そして新しい学校に移る手続きは誰がやっているのだろう。

信一郎に襲われたショックで、何も考えられずにいる彼女に、藤臣は言ったのだ。

「そんな顔で自宅に戻つたら、弟たちが心配するんじゃないかな？」

愛実が洗面所の鏡で自分の顔を見た時、その言葉に納得せざるを得なかつた。

事件の翌日、都内の大学病院に連れて行かれた。顔を殴られたので、頭部を中心に検査を受けるよう言われた為だ。結果は異常なしだつた。

頬の腫れは昨日あたりから引き始めたようだ。しかし、口元にはまだ青い痣が残つてゐる。上半身を中心に無数の内出血や擦過傷があつたが、傷あとは残らないと言わたのだった。

あれからずつと、藤臣と一緒にこの部屋に泊まつてゐる。もちろん寝室は別々だ。バスルームは一つしかない為、愛実が使

用する時は藤臣は寝室から出て来ない約束である。

朝はリビングで朝食は取り、藤臣は出社する。定時には仕事を終え、ここに戻つて来て一緒に夕食を食べるのだ。一昨夜は館内を案内してくれ、併設のショッピング施設まで連れて行ってくれた。昨夜はホテルの周囲を一緒に散歩して……。

愛実は壁に掛かったアンティーク調の振り子時計を見上げた。真鍮製の掛時計は、ベージュに統一された壁のアクセントになつている。時刻は間もなく夜の七時。

美馬邸に寄つてから戻るので少し遅くなる、夕食は先に食べていなさい、と言われたが……独りでは食べる気にならない。

今日の愛実は、ネイビーのAラインロングTシャツ、下は黒いスパッツというかなりラフなスタイルだ。

(まだかな……美馬さん、早く帰つて来て)

一人のスイートはもの凄く広い。

信一郎は入院したと聞いたが、藤臣の話では弟の宏志にも注意が必要だと言う。それに、あの和威とて判らない。藤臣と争う意思はないと言つていたが、愛実を油断させる手ではないかと疑つてしまふ。色々なことが頭をよぎり、彼女は全てが恐ろしかった。今まで、一人ではこの部屋から出来ることも出来ない。

（藤臣が傍に居てくれなければ……。）

愛実の心は少しずつ、搦め捕られて行くのだった。
から

バタン。

扉の閉まる音を愛実は夢の中で聞いていた。扉が閉まつたということは、少なくとも一度は開いたということだ。それは、部屋の中に自分以外の存在を示している。

その瞬間、愛実の脳裏に激しい音楽が流れ始めた。自分に覆い被さる黒い影、声も出せず、指の一本すらまともに動かない。そして、大きな男の手が彼女の頬に向かつて何度も振り下ろされ……。

「いやあっ！ やめて、やめて、叩かないでっ！」

愛実は懶^{おぼつか}げに映つた黒い影を懸命に振り払つた。

「私だ！ 愛実、私だ。目を覚ませっ！」

それは藤臣の声だつた。

「こんなところで、うたた寝する奴があるか。ひょっとして、飯も食わずに待つっていたのか？ 遅くなると言つただろう」

「美馬……ひ、ん。美馬さんっ！」

愛実は思わず、藤臣の胸に縋り付いてしまう。直後、彼女の鼻腔を甘つたるい匂いが撲^{くすぐ}つた。

漂つてくるのは母親が使つていた香水と同じ ジバンシーの？ オルガンザ？ 母は「官能的な香りなのよ。あなたにはまだ早いわね」と笑つていた。

「信一郎のことを思い出したか？ 心配しなくていい。この部屋に入つて来れるのは私だけだ。瀬崎は私たちがここに居ることを知つ

てるが、入るなと言つてある。他は、誰も知らない

藤臣の笑顔は変わらない。

あの事件以降、少しでも愛実の気分が晴れるよう、と心を碎いてくれる。だが、こうして抱きついて、彼女の体には決して触れない。それどころか、彼の全身に緊張が走るのだ。彼女の方から離れて行くのをジッと待つてこる。

愛実は悲しくなり、体を引いてソファの上に座り直した。

「「めんなさい」。つい……怖くて……わたし」

「気にしなくていい」

藤臣はそう言いながら、愛実と三十センチほど空けて座った。何気ない仕草でワイシャツの第一ボタンを外し、ネクタイを緩める。シャツの隙間から鎖骨が見えて、藤臣に男性を感じ、愛実は慌てて目を伏せるのだった。

～*～*～*～*

ポートネットのAラインワンピースは、愛実が俯くと藤臣にどうして拷問であった。高い位置から見下ろす為、どうしても真っ白い頬^{うき}が目に入ってしまう。

彼はわざとらしく視線を逸らし、腕時計に目をやつた。九時を少し回っている。美馬邸からホテルまで車で約三十分、帰宅ラッシュに巻き込まれたら一時間か。それが、家を出て一時間余りが過ぎていた。寄り道の理由は、言わずもがなであつ。

藤臣は愛実と一定の距離を取つたまま声を掛けた。

「じゃあ、改めて……ただいま。夕食はまだかい？」

愛実は恥ずかしそうに彼を見上げ、

「あ、お帰りなさいませ。……はい。もう、九時を回つてたんですね。美馬さんは夕食はお済みですよね？」

「いや、まだだ。ルームサービスで何か取ろうつか」

藤臣は立ち上がり、電話の前に行く。電話機の横には館内ガイドが置かれ、その下にルームサービスのメニューがあつた。それを手に取り、愛実に見せようとしたが、

「あ、わたしはハヤシライスで」

その言葉に藤臣は小さくため息をつく。

「……ルームサービスと言えばカレーライスかハヤシライスだが。君の好物か？ それとも料金を気にしているのか？」

メニューのトップにあるその一品のみ、千円台の金額が書かれてあつた。

「い、いえ、後は豪華なお食事ばかりで……量が多くて」

藤臣が軽く「残せばいい」と答えると、愛実は向きになつて反論した。

「そんな勿体ない！ 学校も仕事にも行かず、家事も放り出していく所でのんびりしてゐるのに」

「その原因を作つたのは私の従兄だ。君は遠慮せず、傷が良くなるまでここに居ていいいんだ」

愛実は申し訳なさそうに身を縮め、「はあ」と答えた。

「それから、言い忘れていたが。君の実家には、子供たちの面倒を見るべく家政婦を雇つた。引越しに伴つ各種手続きは瀬崎が全て完了した。三日ほど学校に行けなかつたようだが、昨日からちゃんと近くの公立学校に通つている」

藤臣が家族の様子を話した途端、愛実の目が輝いた。

つづく、この少女は家族が大事なのだと知らされる。藤臣

が仕事でいない昼間、隣の遊園地で遊べばいい、と用意したパスポートも使おうとしない。

「慎也は一度も来た事がないんです。傷が良くなつてから、一緒に連れて来てやつてもいいですか?」

それはそれとしてまた用意する、今は君が楽しめばいいと伝えても、「わたし一人では楽しめない」と言つのだ。

美味しそうにハヤシライスを食べる彼女の口元を見つめつつ……。唇についたソースを舌先でペロリと舐め取ったとき、彼の背筋が痺れた。微量な電流に体を貫かれた気分だ。途端に息が上がり、スラックスの前が窮屈に感じ始める。

藤臣は目を閉じ、口元を押さえ、何度も息を吐く。

「あの……わたしが一緒だと寛げませんよね? 部屋に戻つて一人で食べても」

「違うんだ! あ、いや、とにかくそういうじゃない。仕事で色々考えることがあって、だから君のせいじゃないんだ」

(クソッ! わざわざ久美子をホテルに呼び出し、抱いて来たのに。どうしてこうなるんだ!)

これまで週に一度、多くて二度……仕事が忙しい時期は数ヶ月セックスなしでも平気だった。それが、この愛実にだけは出逢った夜から下半身が顕著に反応する。

愛実は確実に藤臣のほうを見ている。最初の計画通り、「君と本当の夫婦になりたい」そう言って? 愛? という言葉を使えば、今夜にも彼女は藤臣のものになるだろう。だが……。

彼は自分の興味が三ヶ月も持たないと判っていた。財産を相続するまで、義務的に抱き続けるくらいは出来るだろう。別れる時、藤

臣の愛が偽りと聞いても、愛実は傷つかず去つて行くだらうか。彼の脳裏に、泣きじやぐる愛実の姿が浮かび、胸が締め付けられた。

「お仕事、そんなに大変なんですか？」

愛実は心配そうに尋ねる。

純粹な気遣いである。判つても、彼の口から出た言葉は、「そんな顔をしなくても、君がイエスと言つてくれたら、約束しただけの金を支払う用意はある」

「そうこうつもりじゃ……」

「ああ……そうだな。済まない。色々あつてね……。気分転換に、今から泳いで来ようと思つんだが。君も行かないか？」

言つた後で、藤臣は墓穴を掘つたことに気付き青くなる。

だが、愛実の返事は「まだ、背中の傷が酷いので」彼女は小さな声で、せつかく誘つて下さったのに「めんなさい」と付け足した。

その傷は藤臣の田にも焼き付いている。完全に消えるには数ヶ月の時間が必要だ、と医者は言った。

「悪い……まだ、痛むか？」

「シャワーの時くらいです。手首の痣は薄くなつたんで、やつと包帯が取れました。手首に包帯を巻いてると、自殺未遂だと思われてしまつて」

愛実は小首を傾げて可愛らしく微笑む。だが、藤臣には笑うどころではない。信一郎は全治三ヶ月と聞いたが、やはり別の場所を踏み潰してやればよかつたと思つ。

「君が行かないならプールは止めた。こんな時間だから遠出は出来ないが。どこに行きたい所があるなら、私でよければお供しよう」

藤田の言葉に愛実が口にした場所は……。

毎夜、二人はただ遊んでいたわけではない。藤臣は最初の頃のような脅迫めいた言葉は使わず、根気強く愛実を説得し続けていた。

今回のことだ、しばらくは信一郎も表立っては動けない。だが君の決断が長引けば、ほとぼりが冷めた頃にまた何か企むだろう。卑怯なだけなら宏志も何をするか判らない。和威はそんな愚か者ではないが、父がない、判らないことを恥じていて、肝心なときに前に出ようとしないんだ。

私なら君を守れる。相応の金を動かせるポジションにいる。

祖父は遺言で私を後継者に指名し、ほとんどの遺産を残してくれた。一点に集中させることで美馬の牙城を守ろうとしたんだ。昨今の経済危機は、高校生の君の耳にも入っているだろう？ そうしなければ守れない。だが、祖母は血の繋がりに拘り、金も力も分散させることつもりなんだ。

本丸が傾けば、いつたい何千人の社員とその家族が路頭に迷うことになるか……。

考えてみてくれ。子供が生まれたばかりの社員もいる、家のローンや教育費に金の掛かる社員も、親の介護にどれほどの金と人手が掛かるか、君もよく知っているはずだ。

祖母が君を巻き込んでしまったことは、本当に申し訳ないと思っている。だが、冷静に考えて欲しい。君が高校を辞めて働くだけで、今の状況が打開出来るか？ 君は弟たちに、中学を卒業してすぐ、働かせるつもりなのか？

四日間、藤臣は愛実に対して必要以上に近づいては来ない。

逆に、愛実のほうが藤臣の傍に行きたくなってしまう。優しさを示されるたびに、彼の笑顔を見るたびに、愛実は想像してしまうのだ。

『本当に君のことが好きになつた。期限なしで私の妻になつてくれないか?』

そんな風に言われたら、イエス以外に返事が見つからない。でも藤臣は、愛実が結婚を承諾するのはお金の為だと思うだろう。そう思われたくない、藤臣のお金を自分の為に使うのは嫌だった。

「イエスは……チャペルか?」

愛実は行きたい所を聞かれ、ホテル内のチャペルに藤臣を連れて来た。

天井部分には澄み渡る青空が描かれ、バージンロードは下からマリンブルーにライトアップされている。左右に木製のベンチが並び、正面の祭壇には十字架があつた。

「今日の昼間、結婚式があつたんです。少し見せていただいくつても素敵でした」

純白のドレスを着て、床に引く長いレースのベールを纏つた美しい花嫁。愛実の年齢で憧れないと言えば嘘だろう。

「隣の遊園地でも結婚式が出来るそなんですよ。ご存知でした?」「いや……だが、私たちが結婚するならT国ホテルだろうな。個人的には……君の望むところで挙げさせてやりたいんだが」

藤臣は申し訳なさそうに口を開いた。まだ、ちゃんとした返事はしていない。だからこそ、愛実の様子が気になるようだ。

バージンロードは歩かず、彼女は一番後ろのベンチに腰を下ろし

た。

「もしわたしが、遊園地で式を挙げてくれたら結婚します、って言つたらどうしますか？」

愛実が見上げた時、彼は面食らつたような顔をしていた。だが、わずか三秒後、藤臣の顔が綻んだ。

「OKだ！ どこでも君の望む場所で結婚式を挙げる」

言つなり、彼は愛実の隣に座つた。

「立場上T国ホテルは外せないが、どうせ形だけだ。遊園地に君の弟妹を招いて挙げればいい。もちろん、友人でも親戚でも」「どうして？ どうして、そんなに優しくして下さるんですか？ そんな……わたしなんかに」

愛実は驚き過ぎて言葉が上手く出て来ない。ただ、食い入るように彼を見つめた。

「それは君が……」

藤臣も同様に愛実を見つめていた。

チャペルの中は静謐^{せいひつ}な気配に包まれている。ここは、偽りではなく真実を、そして真摯に愛を請う姿が最も相応しい場所。愛実は言葉に出来ない想いを、懸命に瞳で伝えた。

「君が……必死で家族を守つていてるからだ。私は母と共に父から捨てられた。その母も死に、父親違いの妹も死んだ。助けてくれる人間は、私には一人もいなかつたからね。だから、君を助けたい」「愛実はありがたいと思いつながらも、落胆を禁じ得ない。

「それ、だけですか？」

彼女のこの質問を、藤臣は別の意味に受け取つたようだ。

「そんなに私が心配かい？ ここ数日、私たちは同じ部屋で寝起き

しているが、君に身の危険を感じさせたことがあったかな?」「いえ……それは……」

愛実は心を決めると顔を上げた。

「わたし、あなたと結婚します」

十代の女子高生である自分は、彼にとつて子供に過ぎない。でも、あの写真の女性のように美しくなれば、藤臣も振り向いてくれるかも知れない。結婚を本物にしたいと思ってくれるかも……。この人の家族になれるように、藤臣に恩くそう。もし、愛してもらえなくて別れる日が来たら、必要以上のお金は全て返して出て行こう。愛実は複雑な想いを胸に、藤臣の全てを受け入れる覚悟をしたのだった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

愛実の?イエス?に、藤臣は得体の知れない緊張感を覚えた。

結婚が現実のものとなる。一生、結婚はしないと思っていた彼にとって、それは恐怖であるはずだった。なのに、愛実を妻にするとと思うだけで、彼の心は浮き立つようだ。

「ありがとう。君のお気に召さないかも知れないが……この指輪をはめて貰えるかな?」

それはティファニーのオーバルダイヤリングだ。三カラットは下らない。ラブホテルで一度は愛実の指にはめられた指輪だった。

「美馬さん、あの、これは……」

「内側を見てくれ」

藤臣は楽しそうな声で愛実に告げる。彼女は恐々指輪を掴むと、
プラチナ部分の内側を覗き込んだ。

そこには『Fujiomi to Itumi』の文字が刻まれ
ている。

「これは、いつの間に彫られたんですか？」

「最初に渡した時にはもう刻んであつたんだ。君は気付かなかつた
が」

その瞬間、愛実は大好きなガトーショコラをお土産にもらつた時
と同じ顔をした。

何でも買ってやると言い、ショッピング施設を連れ歩いても、愛
実は何一つ欲しがらない。これが久美子であつたら、両手に持ち切
れないほど買い物をするはずだ。いや、藤臣の知つている女は全
てがそうだった。

金を与えれば女は言いなりになる。高額になればなるほど、彼女
らは藤臣の奴隸同然だ。だが愛実の笑顔は金では買えない。

？大好き？という言葉を覚えておいて、買って帰つたわずか数千
円のケーキで手に入る至宝。

「何だか、本物の婚約みたい。でも、わたしの名前なんて彫つてしまつたら、他の人に渡せないんじや」

屈託ない笑顔で、藤臣の心を射抜いた。そして……次の瞬間には、
奈落の底に突き落とす。

愛実の言葉には裏も表もないのだ。ひたすら家族を思う、無垢で
純粹な魂の持ち主。自分のような穢れた男が、欲望を満たす為に触
れることなど赦されない。

彼女の心も身体も、必ず守り抜いてみせる！

祭壇に飾られた十字架に、誓いを立てる藤田であった。

第27話 情事

赤いビロードの指輪ケースを取り出し、豪華なエンゲージリングを左手の薬指にはめてみる。愛実は小さくため息をつき、すぐにケースに戻した。

愛実が結婚を承諾して、昨夜の藤臣は本当に嬉しそうだった。今朝も上機嫌で仕事に向かったくらいだ。

だが時折、苦しそうな表情をしている。きっと、愛実のような子供と結婚する羽田になつたことが辛いのだろう。

それを考え、今度は深くため息をつく愛実だった。

まさか藤臣の苦悩が、愛実に対する性的欲求など彼女に判るはずもなく……。

午前中に自習を終えた愛実は、昼食の後、することもなく暇を持て余していた。館内をブラブラしてもいいが、一人は退屈である。やはり部屋で藤臣の帰りを待とう、愛実がそう思つた時だった。

いきなり鳴り始めた電話に、彼女はピクッとした。

藤臣ではない。彼なら携帯に掛けてくるだろう。そこまで考えて、愛実はフロントかも知れない、と思った。ホテル内で何かあり、その連絡事項なら……。愛実は少し迷つて、受話器を上げた。

『はい』

『……』

愛実の返事が聞こえなかつたのだろうか？ 相手は無言だ。

『あの……フロントですか？』

そう付け足した愛実の耳に、信じられない声が響いた。

『……驚いた。まさか、本当に君がそこにいたなんて』

それは、美馬和威の声であった。

和威は、すぐ下の個室から掛けている。一階のカフェレストランまで下りて来て欲しい。……そう言つと、愛実の返事を聞かず電話は切つたのだつた。

瀬崎以外は知らないと言つていた。どうして和威がこのホテルまで来たのか、愛実には訳が判らない。それに、和威の声はどこか怒つたような様子で、彼女の胸をざわめかせる。

愛実は迷いながらも藤臣に連絡を取ろうとするが……。
彼の携帯電話に出たのは、女性だつた。

『あの……美馬、藤臣さんをお願いできますか?』

携帯電話の場合、普通は本人が出るものだ。女が出たら訝つて当然だつう。だが、こういつた経験のない愛実には、何が普通なのかよく判らない。

『……どちら様でしよう?』

電話の向こうの女性は明らかに不機嫌そうな声を出す。

『あ、すみません。えつと、西園寺愛実と申します。美馬さんに用があつて……』

愛実は誰も居ない空間に頭を下げながら、低姿勢で話しかけた。

『彼は……今は出られないわ。忙しいの 判るでしょう?』

『はい。そうですね。どうもすみませんでした。あの、電話があつたことだけ』

それだけでも伝えておいて貰おうと付け足すが、その前にブツリと切れた。携帯電話を抱え、途方に暮れる愛実だった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

満を持して復讐劇はスタートした。

愛実の了解で、弥生は墓穴を掘つたも同然だ。

美馬一志は息子欲しさに、一回りも年下の祇園の芸妓を愛人にした。だが藤臣が産まれた直後、婿養子の一志は弥生に逆らい切れず、認知もせずに愛人と息子を捨てたのだ。しかも弥生は、夫の子供を産んだ藤臣の母を執拗に攻撃した。母は祇園にもいられなくなり、水商売を転々とした挙げ句……。

日陰の身を承知で愛人となつた母にも責任はあるだらう。だが、半分の年齢の女に子供を産ませ、父親の責任を果たすどころか、住む場所も仕事すら奪つた連中である。どんな正当な理由があつたとしても、子供は間違なく犠牲者だ。

母親が死んだ時にも引き取ろうとはせず……。施設で過ごした六年間は、傷ついた少年をさらに追い詰め、彼の心を見事なまでに打ち砕いた。

藤臣はシャワーのコックを捻る。お湯は途切れ、ポタポタとタイルに零が落ちた。

もう少しで、全部奴から奪つてやれたんだ。それをさつさと死にやがつて。目の前で奪い取り、会社も美馬の邸も、跡形もなくぶち壊してやるつもりだったものを。

まあいい。全てが手に入れば、予定通り、バラバラにして売り払つてやる。美馬の名前すら残らないほど……。奴が死ぬまで否定した息子の手腕を、じっくり見るがいいさ。文句があるなら、いざ

れ地獄で顔を合わせた時に聞いてやる。

頭を振り、髪から水滴を払うと、藤臣はシャワールームから出た。

「どうした？」

目に入ったのは本社の秘書、奥村由佳おくむらゆかである。クローゼットの前に立ち、藤臣のスーツを掛けるところだった。この間に相応しくなく、ホテルの白いバスローブ姿だ。

「あ、いえ、シワになるといけないと思いまして」

由佳は従順そうな目で彼を見上げ、静かに微笑むとそんな言葉を返した。

中流家庭で育ち、世間一般で有名私立と言われる大学を卒業し、美馬の本社に入社した女性だ。年齢は藤臣より一つほど若い。美馬本社の秘書は総合職採用で、秘書室の男女比は半々。他社に比べれば、男性秘書の比率が高いと言えよう。そこに配属される女性はトップクラスの成績で入社したと言われている。

事実、由佳はある意味で優秀な秘書だった。パートナーが必要な席では隣に座り、申し分ない受け答えをしてくれる。藤臣が望む時に体を差し出し、自分からは求めず、結婚も迫らない。

この時、藤臣は千代田区内のホテルにいた。彼が年間を通じて契約し、公私ともに利用しているホテルNのスイートルームだ。昨夜は久美子を呼び出し、慌しく抱いたベッドが目の前にある。

「それほど長くいるつもりはない」

シャワーを浴びるのは、いつも女を抱いた後だ。

だが今日は、微かに残る愛実の清潔な香りが、邪な欲望に溺れる藤臣の良心を咎めた。彼は無言で上着の内ポケットから携帯を取り出し、素早く着信履歴を確認した。

シャワー中に電話が掛かった形跡はない。

そのまま戻すと、

「由佳……来い」

藤臣は彼女の腕を掴み、ベッドに押し倒した。

『……はい。はい、やつぱりそうですか。判りました。どうもありがとうござります』

礼を言い、和威は携帯電話を切った。

これまで、身内の調査などしたこともなかった。だが、昨夜の藤臣の様子がどうしても気になり、彼は懇意にしている大川暁を頼つたのである。

暁は、午前中には藤臣の宿泊先をメールで報告してくれた。しかも女性と一緒に滞在中と書かれ、メールには画像が添付されていたのだ。

その画像に和威は愕然とした。写っていたのは、間違いなく西園寺愛実本人だったのである。

二人は堂々とホテルの内外を歩き、食事やショッピングを楽しんでいる様子だ。それはどう見ても監禁されている少女の表情には思えない。仲の良い恋人同士の姿に、和威は眩暈を覚えた。

(まさか、藤臣さんが未成年の少女を騙すなんて……)

彼はある意味、藤臣以上にセックスに嫌悪感を抱いている。

母親に捨てられたことを、ずっと自分のせいだと思つてきたからだ。せめて祖母にだけは捨てられまいと、懸命に自分を律してきた。そんな彼が性に目覚めた頃、出生の秘密ともみを知らされたのである。

教えたのは、信一郎や彼の妹・朋美ともみであつた。

落ち込む和威に祖母の弥生は、

「千穂子はわたくしにとつて恥です。ふしだらな母親のようになら

ぬよう、そして、どこの馬の骨か判らぬ男の血が目覚めぬよう。和威さん、あなたは自分自身に厳しく生きなればなりません」もし和威が墮落した時は、美馬家から出て行つてもう。弥生はキッパリと言い捨てた。

彼は祖母の言いつけを守り続けた。女性との付き合いも経験しないまま、この年齢まで来てしまつたのだ。宏志が揶揄したような理由ではないが、セックスの経験がないのも事実である。藤臣に言った「女性をセックスの対象だけとは思いたくない」という言葉も、自分の血を分けた子供を持つことが怖いのも本当だった。

愛実は和威が出会ったこともない少女だ。

可憐な一輪の花のような少女を、得体の知れない自分のような男が穢すくらいなら……。同じ私生児とはいえ、藤臣とは能力も自信も違う。信一郎や宏志には任せたくないが、藤臣になり、そう思つていた。

だが、今の電話ではつきりしたのだ。

藤臣はこんな真つ昼間から、本社の秘書をホテルに連れ込んでい
るといふ。

(許せない！ 結婚を餌に愛実さんを弄ぶなんて。これじゃ、信一郎さんと変わらないじゃないかー。)

藤臣は信頼に値する男ではなかつた。

それならいつ自分が和威の胸に芽生えた初恋は、彼の自尊心に火をつける。そして炎は、従兄への対抗心に燃え移った。

六六六六六六

細長い回廊のようなレストランであった。

大きな窓に沿ってテーブル席がずらりと並ぶ。窓には白いレースのカーテンが掛かっている。全席から噴水のある庭園が見え、フロア全体に春の陽射しが燦々と降り注いでいた。

レストランの入り口に立つた瞬間、愛実は藤臣のことを思い出す。一日前の夜、藤臣に連れて来て貰った。その時はディナーだったのでは真っ暗だ。店内の照明は食事に差し障りない程度に落とされ、テーブルの中央に置かれたキャンドルがロマンティックに揺らめいていた。

(大事な仕事中だったのかしら？　電話なんかして……子供はこれだからって思われた？)

数分待つたが折り返しの電話もなかつた。愛実は藤臣を怒らせたのではないか、と不安になる。まさか、昨夜プロポーズを了承した男性が、他の女性と親密に過ごしているとは思いもしない。

だが、和威にはどう言えばいいのだろう。

結婚を承諾したことすら、伝えて良いか判らないのだ。藤臣を選ぶと決めた以上、彼のマイナスになることはしたくない。愛実は何も言わないことを決めて、和威に会うことになった。

今日の愛実は薄つすらと化粧をしている。

傷を隠すため、ファンデーションと淡い色の口紅を塗る程度だ。しかし、ほんの何日か前に比べたら、愛実の印象はガラリと変わっていた。しかも普段着とは違う、藤臣の買ってくれた上品なワンピースに着替えている。

和威は彼女の顔を見るなり、目を見開き 直後、怒りに見える感情を露わにした。

「あの……お待たせ致しました」

穏やかな印象を持つ和威から、険悪な波動が伝わる。愛実は少し怖くなり、なるべく彼から遠くの椅子に手を掛けた。

「やあ。驚いたよ、藤臣さんが女性とスイートに泊まっているとうから……まさか、君なんて」

和威は席を立ち、「どうぞ」と着席を薦めた。

「信一郎さんが入院していることは、藤臣さんから聞いたかな?」

愛実は椅子に腰掛け、口クリクリと頷く。

「重傷らしいんだが、信一郎さんの怪我と君は何か関係してるの?」
彼女が黙つていると、和威は大きく息を吐いた。

「そうか……藤臣さんから口止めされているわけか」

何も答えられず、愛実は俯きテーブルに置かれた水のグラスをジツと見つめる。

「君はまだ高校生だろ? 今、自分が何をしているのか、判つて
るのかい?」

和威の口調は俄に愛実を責め立てた。だが、彼女には言葉の意味
が判らず、

「何をつて……わたしが何か?」

「彼と一つの部屋で寝泊りしているだろ? ……君らがどういう関
係か、誰だつて判る。高校生でありながら、学校を休んでまでこん
な……。しかも、君に化粧なんて似合わない!」

和威は苛立たしげにコーヒーカップに手をやり、空になつている
ことに気付いた。音を立ててカップを置くと、代わりに水を飲み干
す。

(どうじよつ……誤解して怒つてらっしゃるんだわ。でも、信一郎

さんのことと言つてもいいの？）

愛実は和威の言葉に頬を染め、顔を背けた。その仕草が一層誤解を招くとは思いもせず……。和威は目を細めて、食い入るように愛実を見つめている。

「愛実さん、君は藤臣さんのことを使っているのかも知れない。でも彼はそんな愛情に値する男じゃないんだ」

「いいえ！ そんなことはありません。美馬さんは……いえ、藤臣さんは」

「愛実の否定を遮るように、和威はテーブルを叩き立ち上がった。
「君は彼に騙されてるんだ！ 藤臣さんは、君が生涯を託せるような人間じやない。確かに、企業人・経営者としては立派だろう。でも男としては、誠実から真逆の位置にいる人だつたんだ！」

和威の激昂ぶりに愛実は目を見張った。

周囲のテーブルから好奇の視線が注がれ、和威は咳払いして慌てて座る。

「誠実から真逆なんて……この間は、幸せになつて欲しいって」

一人のやり取りを知らない愛実は、和威の変化に付いて行けない。藤臣に多くの女性がいることは、曉からも聞かされた。だが、それが事実かどうかは判らない。香港には間違いなく仕事で行つただけだ、と彼は言った。愛実はその言葉を信じている。

何よりもこの五日間、藤臣は彼女に指一本触れようとほしない。和威や周囲の人間がどう思おうと、それが真実なのだ。

「和威さんにどう言われても、藤臣さんはこれまで何度もわたしを助けて下さいました。わたしには誠実な方です」

おどおどした様子は消え、愛実は凜として言い返した。

そんな十八歳の少女に押されつつも、和威とてこのまま引っ込む訳にはいかない。

「いいだろう！ じゃあ、僕と一緒に来てくれ
え？ あの、どこにですか？」

「藤臣さんの所に、だ。今どこにいるか、誰と何をしているのか、
僕は知ってる。さあ、来るんだ！ 君に真実を見せてやるー！」

和威は声を上げ、再び立ち上がった。

第29話 愛人（前書き）

性的描写があります。R15でお願いします。

「ねえ……お願い、キスして……」

由佳はいつもセックスの最中にキスをねだる。

彼女の癖なのだろう。だが、藤臣は一度も応じたことはなかった。強引に奪われた十代半ばの頃はともかく、自ら唇を重ねたことなど一度もない。彼には由佳を……女を喜ばせるつもりなど全くないのだ。挿入に必要な潤いがあればそれでいい。後は自分の為に動いて、溜まつたものを吐き出せばお終いだ。

(一回連続で女を抱くなんて、いつたい何年ぶりだ?)

愛実の傍にいるだけで、どうしようもなく身体が高ぶる。藤臣は、深夜に彼女の寝室をノックしそうな自分が怖かった。

欲望は手近な女でさっさと解消するに限る。

声を上げ、顔を歪ませる女を冷ややかに見下ろしつつ……。ぐだらない征服感が彼の空虚さを満たしてくれた。これまで。

由佳の顔がふとした拍子で愛実に変わる。

その瞬間、冷水を浴びせられたように、女の中に押し込んだものが萎えそうになるのだ。藤臣は由佳をうつ伏せにして、背後から抽送を繰り返すが……。

「あ……せ、専務? あの……」

唐突に由佳から体を引き離した。

彼女は不思議そうな声を出す。それもそのはず、これまで一度も藤臣が満足する前に、女を解放したことなどないのだ。

「どうなさったんですか？ 私、何でも仰る通りに致しますから」
愛情と約束さえ求めなければ、標準以上に気前のいい男である。
由佳にすれば、機嫌を損ねて秘書室での立場に響くことが心配なの
だろう。

「いや……今日はもういい。一休みして、本社の仕事に戻つてくれ」
目的を達することなく、使用済みの避妊具をゴミ箱に投げ捨てる。
由佳の背後に回つたのが失敗だった。彼女の茶色に染めたセミロ
ングのボブが、愛実の黒髪に顔を埋める妄想を打ち碎いたのだ。
実を言えば、昨夜も今日と大差ない。

無駄に時間を掛けただけで、結局最後までは……。

（何なんだ！ 僕の身体はどうなったんだ！）

藤臣は欲求不満を解消することなく、バスルームに戻る羽目にな
つたのである。

／＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

そこは皇居にほど近い一流ホテルであった。

和威はフロントに「美馬です」と声を掛け、当然のように奥に進
んで行く。本館の十五階までエレベーターで上がり、高級感漂うフ
ロアで一人は降りた。十代の少女にはいさか不似合いで、愛実は
落ち着きなく周囲を見回す。

「大丈夫だから。こっちだよ、おいで」

少し時間が経つたことで、和威も愛実に対する気遣いを取り戻したらしい。苛立つ仕草も、腕を引くような真似もせず、紳士的にエスコートしてくれた。

そして重厚な扉の前に立ち、呼び出し用のインター ホンを押したのだ。

一分も待つただろうか、インター ホンから『はい。どちら様でしょうか?』と女性の声が聞こえた。

「美馬和威です。藤田さんに緊急の用があつてきました。入れて下さい」

それから十秒ほどでノブの辺りからカチリと音がした。扉が開き、姿を見せたのは二十代の女性。

肩までの髪を片方だけ耳に掛け、青磁色のスーツを着ていた。彼女の少し吊り上がった目尻と薄い唇が、グレーに近い青のスーツと相まって愛実は冷たい印象を受ける。

「まあ、お久しぶりですわね、和威さん。緊急なんて、大奥様の御用でしょ?」

眼鏡を押し上げながら笑顔を見せるが……。

彼女の声を直接聞いた途端、愛実はドキッとした。

(ひょっとして、美馬さんの携帯電話に出た人?)

「どいてくれよ、奥村さん。話は藤田さんにする。……ああ、入つて」

愛実は戸惑いながらも和威に急かされ室内に足を踏み入れた。

「お待ちになつて下さい、和威さん! 美馬専務に叱られます。私がご案内致しますから」

背後で先ほどの女性　由佳が叫ぶ。だが、和威は気にも留めていない。

「藤臣さん！　居るんだろう、早く出て来てくれ！」

和威は大声で藤臣の名を呼びつつ、一つ目のドアを開ける。そこは広めのリビングだった。愛実たちが泊まっているホテルのアンティーク調の内装とは違い、シンプルなインテリアで纏めている。実用的な大きなソファとテーブルが置かれ、隅のデスクにはノートパソコンが開いてあった。

「和威さん。こんなことなさって、失礼じゃありませんかっ！？」
「つるさいな！　君は引っ込んでいてくれ！」

引き止めようとする由佳を怒鳴りつけ、和威がリビングの奥にあるドアを開けよじとした時。

「和威！？　一体何を騒いでいるんだ！」

一寸早くドアのノブが回り、姿を見せたのは藤臣だった。彼の姿は……たつた今、シャワーから出たばかりといった風情だ。上半身は裸で、腰にはバスタオルを巻いている。髪は濡れて……明らかに情事の後を思わせた。

愛実は藤臣の姿に、驚きと羞恥心で目を逸らす。

「何の真似だ、和威。なぜ、愛実をこんな場所に連れて来た」

それは怒りと動搖が絹い交ぜになつた、彼らしくない声だった。よほど見られなくなかったのだろう。来なければ良かつた、と愛

実は思つた。何も知らなければ、未来に夢だけ見ていられたのだ。
でも知つてしまえば……。

「これで判つただろう、愛実さん。彼女は藤臣さんの秘書で愛人なんだ。君とホテルで過ごしながら、こいつやつて秘書とも……。彼は君が愛するのに相応しい男じやない。目を覚ますんだ！」

「そう、言われても、わたしには」

混乱した頭で必死に言葉を探すが、何をどう判断していいのかも判らない。愛実はこの場所から走つて逃げ出したい気分だ。

「和威さん。こちらは美馬専務のお部屋です。こんな不法侵入のようなことをなさつて。いくら、お身内でも度が過ぎますわ」
由佳は警備員を呼びかねない口調で和威を責める。

だが、それに受け答える和威も辛辣だ。

「君は黙つてくれ。上司と、それも勤務中に関係を持つような女性と、対等に話す氣にはなれない」

和威が愛実に向ける目と、由佳に向ける視線はまるで温度が違つた。

一方、由佳も肩書きのない和威を頭から見下した態度である。

「何を仰いますの？ 私は専務秘書です。オフィス代わりのこちらに、同行していても不自然ではないと思ひますけど。愛人だなんて、セクハラで訴えてもよろしいのよ」

「ここをオフィスや接待に使うときは、第一秘書の瀬崎さんを同行すると聞いている。女性を連れ込むのは……奥の寝室を使う時だけだって、藤臣さん本人から聞いたことだ！ そうでしたよね？」

和威は藤臣に話を振るが、彼は一言も返さない。腕を組み、目を閉じたままだ。

「そ、そういうことにお使いになるのかも知れませんわねっ！ で

も、それが私だとお聞きになつたの？ 何か証拠でもあるのかしら
つ

由佳の反論に和威も口を引き結ぶ。

藤臣が答えなければ、和威としてもこれ以上責めようがないのだ。
由佳もそれが判つてゐるのだろう。

「ところで、そちらのお嬢さんは何方かしら？ 部外者をこちらに
お通しするわけには行きませんのよ。お一人とも、すぐに出て行つ
て下さいな！」

由佳の刺す様な眼差しが愛実に向けられた。その激しさに「すみ
ません。すぐに失礼しますので」 愛実は慌てて頭を下げるが
。

「その必要はない。彼女は私の婚約者だ」

冷静さを取り戻した藤臣の声がリビングに響き渡つた。

五分も掛からなかつたように思つ。

藤臣は三人にリビングで待つよう言い、奥の部屋に引っ込み、すぐに戻つて來た。白いシャツを着て朝と同じスラックスを穿いている。ベルトはちゃんと締めていたが、ネクタイは結ばず首に掛けただけだ。白蝶貝のカフスボタンを留めながら、藤臣は愛実の隣に腰掛けた。

「婚約なんて嘘だろ？」「第一、おばあ様が認めなければ正式なものとは言えない」

藤臣が戻るまでの間、和威は愛実に言い続けたが……。彼女は沈黙を貫いた。由佳もしばらくは微動だにせず、やがて藤臣とは反対側のドア 玄関に向かう方に消えた。由佳がお茶を手に現れたのは、藤臣がソファに座つた後だった。

藤臣は軽く咳払いすると、

「昨夜、正式にプロポーズを承諾してくれた。彼女は婚約者の西園寺愛実さんだ。愛実 本社秘書室の奥村なんだ。君の知ってる瀬崎の下だと考えていい」

最初の言葉を和威に向かつて、続けて由佳に愛実を紹介した。最後に愛実は彼女の名前を聞き、

「はじめまして、西園寺愛実です。あの……携帯に出られたのは奥村さんですよね？ どうもすみませんでした。お仕事の邪魔をしてしまつて」

愛実の言葉に、由佳より先に反応したのが藤臣だ。

「携帯？ 愛実、私に電話を掛けたのか？」

「はい。お話があつて……でも、お忙しい時に掛けてしまったみたいで」

彼は少し考えるような仕草をした後、チラツと由佳を見る。

「いや、じつらじや悪かったね。で、用件は……じつじつとかい？」

何事もなかつた態度で、藤臣は愛実に語りかける。愛実自身も何と言つていいか判らず、ごく自然に笑みを浮かべ頷いた。

そんな二人の様子に怒りのやり場を失つたのが和威だ。

彼は信じられない、といつた顔で愛実に噛み付く。

「愛実さん！ 君はさつきの格好を見て平気なのか！？ それだけじゃない。彼が女性と一緒に知りながら、なぜ怒らないんだっ！」

和威の言つことも判らないではない。

多分、普通の婚約者であればさつきの半裸を見ただけで泣き出しているかも知れない。でも、愛実にはそんな資格はないのだ。藤臣に助けられ、家族の生活すら彼の心一つに掛かっている。

信一郎や宏志とは結婚したくない。和威なら、愛実が望めば家族のことも助けてくれるかも知れない。だが……。

藤臣のどんな姿を見ても、ただ切ないだけで嫌いになどなれない。その都度、愛実は対象外なのだ、と思い知らされるだけだった。

「和威、そう興奮するな。秘書と一緒に何が問題なんだ？」

黙り込む愛実に代わって、軽い口調で藤臣が言い訳を始める。しかしそんな態度すら、潔癖な和威の瘤に障つたようだ。

「これまでの生き方を改め、愛実さんに結婚を申し込む。そう言つたはずだ。それを……まだ、こんな女と。少しは恥を知つたらどうだ！」

「お前は道徳の講義に来たのか？ どうあっても、真昼の情事と決

めつけてるが

「その通りだろ？隣の寝室には、乱れたシーツと使用済みのコンドームがあるんじゃないのかー？」

怒りに任せて和威は叫んだ。

愛実は啞然としたが、その内容に頬が熱くなる。

「言葉遣いに気をつけなさい。彼女の前だ」

あくまで冷静な藤臣の注意に、今度は和威のほうが赤面して愛実に頭を下げた。

「すみません。変な言い方をしてしまって」

愛実は即座に「いえ。気にしないで下さい」と言葉を返す。

その様子を立つたまま冷ややかに見つめていたのが由佳だった。由佳は唐突に口を挟み、

「では、そちらのお嬢様を寝室に」案内してはどうでしょうか？ ベッドが未使用で、「ミニ箱の中に使用済みの物が無ければ、ご納得いただけるのでは？」

彼女は極めて挑戦的で、強張った笑みを愛実に向けた。それは見られて平氣だからではなく、まるで見せ付けて愛実を打ちのめしたいかのような艶笑だ。

愛実だけでなく、きつかけを作った和威も息を呑む。

「それは未婚女性が人前で口にするすべきことじゃない。奥村くん、君は秘書としての慎みを忘れたようだな」

この中で、一番窮地にあるはずの藤臣が、最も攻撃的に由佳を睨んでいた。

そして、

「愛実、君が決めればいい。誰の言葉を信じるか……その上で、寝室を確認したいと言うなら、喜んで案内しよう」

藤臣は、何も後ろ暗いことはない、とばかりに言って切る。

彼らは想像がつく。だが藤臣は、子供には判らないと思っているのか、或いは、知られても大したことではないのだろう。

万が一、愛実が不満を口にすれば、最初に出逢った時の彼女の行為を突きつければいいのだから。

「美馬さんは、こちらでお仕事をされてたんですね？」

「ああ、そうだ。シャワーを浴びたのでさつきはあんな格好だったが……それだけだ」

和威は口の中で「白々しい」と吐き捨てるよつて言つてゐる。だが、愛実は違つた。

「判りました。私は美馬さんを信じます」

愛実には、彼の自由を縛るロープはない。

愛されて結婚を望まれた訳ではないのだから。愛実は心の片隅で芽生えた嫉妬に気付かないふりをして、静かに微笑み返したのだった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

藤臣が女性との関係に冷酷なのは、実の父である一志の影響だけではない。

彼が七歳の頃、母は横浜のスナックでバーテンをしていた年下の男と結婚した。借金をしては藤臣の母に押し付け、酷い暮らしを余儀なくされた。子供心にも「なぜあんな男と」と思ったものだ。今となれば、入籍から半年後に妹の忍しのぶが誕生したので理由は明白だろ

う。

義理の父は藤臣の前でも構わず、母にセックスを強要していた。無論、当時の彼には判るはずもない。だが、辛そうな母を見るたび、自分が生まれて来たせいだと思い続けていた。

それから一年も経たず、立て続けに母と妹が亡くなり……。

藤臣が初めて女を知ったのは中学に上がった十一歳の時だ。

相手は彼より二十も年上の施設の女性職員だった。標準より体格が良く、早熟だった彼に女性職員は性的虐待を繰り返した。逆らえば食事を抜かれ、風呂にさえ入れて貰えない。義務教育を終了し、施設から出られる日を彼は待ち侘びた。

その直前、藤臣に美馬家との養子縁組が舞い込んだ。

彼は母親から美馬に対する恨み言を聞いて育つた。だが、早く逃げ出したい一心で、藤臣は一志の申し出を受け入れたのだった。

そんな彼を女性職員は罠に嵌めたのである。

養子縁組が成立した直後、彼女は「藤臣にレイプされ妊娠した」と言い、美馬家に慰謝料を要求したのだった。

一志から、関係は事実かと問われたら……否定出来るはずがない。三年近くに及ぶ自堕落なセックスは、十五歳の少年を貶めるに充分だった。自制心など培う土壤もなく、求められるまま快楽に耽る日々を過ごした。

だが、レイプは事実じゃない。

善良で品行方正な三十代の女性職員と、生意気な孤児の言い分だ。藤臣の言葉は取り上げてすら貰えず。美馬家の人は一斉に彼の不行状を罵り、世界中に味方は独りもいなかつた。

信じます、と愛実は言った。

もし十五年前、たった一人でも信じてくれる人間がいたら。
レイプなどしてない、中学生の自分を襲ったのは彼女だ、と……
その言葉を信じてくれる誰かがいたら、人生は違つたものになつて
いただろう。

同時に、平然と嘘を吐く自分の姿が、あの女性職員と重なり
藤臣は唾棄すべき自らを知る。

第30話 真理（後書き）

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

設定はあくまでフィクションです。

施設の職員を貶める意図はありませんのでご了解下さい。

「～愛人」のほうは愛実とのセックスが彼を変えましたが、「～花嫁」は無償の愛が彼を変えます。

自制心にいさか欠陥のある美馬藤臣ですが…（＾＾；）

どうか見捨てずにお付き合い下さいませ。

「そうか……判つた。……ありがとう」

これまでと何かが違う藤臣の笑顔だった。

優しく、暖かな、それでいて何処か寂しそうな眼差しに、愛実は目が離せなくなる。

彼は和威に向き直ると、

「これで判つただろう。和威、これからは私の婚約者と一入りで会うのはやめてくれ」

「まだ……正式に婚約したわけじゃない。おばあ様が……」

「弥生様は関係ない。言つたはずだ。お前の目的が愛実でなく財産なら、相当額を私が支払おう」

「そうじやない！ 僕は」

「ここに愛実がいて、全て承知の上で彼女自身が選んだことであつた。これ以上和威が口を挟めば、それこそ金田當てに見えるだらう。

口を噤む従弟を尻目に、藤臣はシャツの第一ボタンを留める。すると、彼の傍にスッと由佳が歩み寄り、床に膝をつくと、あるいはとかネクタイに手を掛けたのだ。

藤臣の首に掛かったネクタイは、今朝、愛実が結んだものであつた。「結婚後は毎朝頼む」そんな風に言われ、震える指で一生懸命整えたのを覚えている。それは由佳の手によつて外され、彼女はきっと、愛実より上手に結ぶのだろう。

結婚してもずっと、綺麗に結び直されたネクタイを見なきゃならない。それは恋する愛実の胸に、拷問のように感じた。

(やつぱり、来なければ良かつた。わたし、こんな所で何をしているのかしら……)

手慣れた様子でネクタイに触れる由佳の手首を、藤臣が押された。

「君はいい。愛実、結んでくれないか？」

そう言つと、藤臣は体を愛実に向ける。

由佳は無理やり笑顔を作りながら、「専務、今は勤務中ですので、私がお世話をさせて頂き」

「いいと言つてるんだ。これからは勤務中でも、君の世話になることはないだろう。ここでの君の仕事は終つた。本社に戻りたまえ」これ以上はない拒絕に、由佳は言葉を失つた。

「愛実、今朝教えただろう？」

「あの……でも、時間が掛かるし。まだ、綺麗には結べないし」「私が手を貸そつ」

藤臣は愛実の手を取り、強引にネクタイを掴ませた。仕方なく顔を上げると、由佳がもの凄い目でこちらを睨んでいる。一瞬だけ視線が絡み、直後、彼女はフイツと背を向けた。

愛実の高校はブレザーにネクタイ着用の制服、結び方はもちろん覚えている。だが他人の……それも男性の首に結ぶのは、恥ずかしさもあつてもたついてしまう。しかも時折、藤臣の指が愛実の指と重なり、それを由佳や和威が見ているのだ。

愛実は手の平にびっしりと汗を搔いていた。

その時、フツと頭の中によぎつた。朝、婚約者の結んだネクタイを、昼間、愛人に解かせ、それをまた婚約者に結ばせようとしている。

(わたしが本当の婚約者なら、このまま首を締めちゃうかも……)

そう思つと可笑しくて、愛実は張り詰めた糸がぱつりと切れたようにな、クスクス笑い始めてしまつた。

「何が楽しいんだい？」

よく判らないまま、藤臣も緊張が解けたような笑顔になる。愛実が笑うので、といった感じだ。

「だつて……このまま締めちゃつたりして」

「浮氣の罰に？」

「浮氣したんですか？」

「……いや……しないよ。もちろん」

慌てて否定する藤臣の表情がひどく幼く見え、愛実はもう一度二ツコリと微笑んだ。

「浮氣したんですか？」

「出しひの電話が掛かる。

「すまないが、やはり和威に送つて貰つてくれ」

彼は申し訳なさそうに口にした。

「あの、タクシーなら一人でも平氣ですけど……」

「駄目だ。何処に危険があるか判らない。この和威は、女性には誠

実な男だ。君の嫌がることはしない、と信用している。和威、

彼女を送り届けたら本社に来てくれ。話がある」

ここまで言われては和威の返事は一つであつ。

「……判りました」

愛実は来た時と同様、和威に連れられ都心のホテル後にしてしまつた。

／＊＼＊／＊＼＊＼

「『』婚約、おめでとうございます。予め教えて頂ければ、もっと適確な対応が出来たのですが……」

本社に戻る車中で、由佳は皮肉めいた言葉を口にした。
さすがの藤臣も勤務中の移動にはハイヤーを使う。二人並んで後部座席に座るが、密談には適さない。運転手には丸聞こえなので迂闊なことは言えないのだ。

「今日、彼女が訪ねて来る予定はなかつた。この次はもう少し、礼儀正しく応対してくれ」

取引先の希望で、急遽会議に同席することになった。藤臣はその資料に目を通しながら、どうでも良さそうな口調で返す。

そんな男の態度に、女の嫉妬が秘書の領分を超えたようだ。

「随分お若いお嬢様に見えましたが」

「都立高校の三年生で十八歳だ」

驚きの余り、由佳は目を剥いた。

「そんな、若い方どこ婚約なんて。専務の趣味からは考えられませんわ。それに、和威さんも随分ご執心のようでしたけれど……大奥様がどうとか仰られて……」

由佳は弥生の企みなど知らない。元々、会社のことには口を出さない弥生とは接点がないのだ。美馬家主催のパーティーに弥生が出席した時だけ、本社の重役秘書として挨拶をするくらいである。

「彼女は弥生様と……それなりに縁がある。和威の嫁に、と考えていたらしい。今は格式だけになっているが、旧伯爵家の『ご令嬢だからな』

藤臣の説明に由佳もやつと理解出来たとばかり、大きく頷いた。

「そういうことでしたか。でも、あんなにお若いお嬢様なら、ご結婚は数年先かしら？ それまでは秘書の私が充分にサポートさせて

頂きます。もちろん、お嬢様のご機嫌を損ねるような真似は

バサツと音を立て、藤臣は資料を閉じた。

そのまま小さく息を吐き、由佳に視線を向ける。

「プライベート用の携帯には出るな、と言つておいたはずだ」

「申し訳ありません。西園寺様のお名前を聞いておりませんでしたもので……」

「着信履歴を消したこと？」

由佳は口元を引き結ぶと、「単純な操作ミスです。申し訳ございません」しゃあしゃあと言い訳をする。

だが、三文芝居なら藤臣も引けは取らない。

「なるほど……。では、秘書室から新しい人間を廻して貰うことにしよう。携帯の使い方も知らない秘書は不要だ」

「私の……仕事ぶりには、充分ご満足頂けていたと思つておりましたのに……」

由佳の声が震えている。？満足？がベッドの上で仕事ぶりを指すのは明らかだ。

「満足？」

仮面のような藤臣の顔に表情が浮かんだ。

それは愛実に見せる笑顔とは違い、愛人を見下す男の冷笑。

「私は君に与えられた以上の対価を払つてきたつもりだ。不満なら新しいボスを見つけてくれ」

取り付く島がない、とはこのことだろ？。

自身の藤臣にとつて秘書やモデルとの関係は別に秘密でも何でもない。ギブアンドテイク、由佳との間にあるのもそれだけだ。この

男に人並の感情はあるのだろうか、と由佳は考えたことがある。

彼女自身、ボスに恋している訳ではない。女の中にはありがちな感情の一つ 独占欲とプライドで、愛実に対抗したに過ぎない。

由佳の中で、最大の敵はモデルの久美子だった。

マスコミの取材を受けるような華やかな席で、藤臣は決まってパートナーに久美子を選ぶ。宣伝のためと判つても、容姿が劣ると言われているようだ……。由佳を嘲笑する久美子の目に、何度も悔し涙を流したか知れない。

あの久美子が藤臣の妻になれば、最悪だと思っていた。だが、彼が選んだのは十八歳の高校生。それを知った時の久美子の顔を想像し、ほくそ笑む由佳だった。

「言つておくけど、奥村さんだけじゃないよ。手を切つてないなら、藤臣さんは軽く五人以上の女性がいたと思つ。信一郎さんと比べても、それほど品行方正つて訳じやない。君が本気なら、今日のようなことは簡単に許すべきじゃない！ お金のことが心配なら、結婚とは別に僕が用意する。だから、もつ一度ちゃんと考えてみてくれ」

ホテルのロビーに立ち、和威は愛実の両肩を掴むと必死の形相で言つた。その勢いに押されて、愛実は一度二度と頷いた。

愛実は一人で部屋に戻り、奥村由佳のことを考えた。

藤臣のネクタイを結ぼうとした時、彼女は凄い目で愛実を睨んだ。おそらく嫉妬であろう。女性からあれほどまでの惡意をぶつけられたのは初めての経験で、愛実はどんな態度を取つていいのか判らなかつた。

（……わたしつて、意地悪なのかも知れない）

藤臣が愛実の手を取つた瞬間、彼女の心の中に優越感が生まれた。これまでのことはともかく、彼は由佳より自分を選んだ。きちんと「婚約者」と紹介してくれたのが何よりの証拠だろう。そんな嬉しさもあって、楽しそうな声を上げはしゃいでしまつた。さて、嫌われたに違いない。

和威は、許すべきじやない、と言つが、愛実に何を怒れと言つつのだろう。

容姿も肩書きも非の打ち所のない藤臣に、お付き合いしていた女性がいないはずがない。複数いることは問題だが、それを責めるのは実際に交際中の女性たちだらう。彼女らにとつて、いきなり現れて恋人を奪つたのは愛実だ。恨まれこそすれ、恨む筋合いのものではない。

和威は二人の関係を誤解しているだけなのだ。藤臣が愛実に対しで真摯で誠実な態度を取つてることを知れば、きっと判つてくれるに違いないが……。

藤臣が愛実を愛していないことを言つ訳にはいかない。

それに、今はもうお金の問題だけではなくなつた。片想いとはいえ、恋する男性と結婚できるのだ。もし、万に一つ、両想いになれたなら……。そうなつてはじめて、愛実は藤臣に「浮気はしないで」と言えるだらう。

ただ、藤臣と話しあう必要はあるかも知れない。

結婚後も女性たちとの関係を続けるのかどうか。それだけは確認しておかなければ、愛実にも心構えがいる。

(きつと、わたしじゃ駄目なのよね)

重い足で寝室に戻り、ベッドに倒れ込む愛実だった。

／＊＼＊＼＊＼＊＼

和威に続いて、瀬崎の小言まで聞いていたら遅くなつた。藤臣はプレジデンツスイート直行のエレベーターに乗り、今度は愛実に、今日のことをざぶやつて切り出すか考える。

ただの秘書で押し通すか、それとも……。

「ただいま……遅くなつて済まない」

「お帰りなさい！」

藤臣がスイートの玄関に足を踏み入れるなり、愛実が飛び出して來た。出迎えの言葉と共に、変わらない笑顔を見せる。

昼間は和威の日もあつたので見逃してくれたのだ、と思っていた。一人きりになると、手ぐすね引いて待ち構えているだろう。或いは、ホテルから出て行こうとするかも知れない。藤臣は不安に駆られ、思わず支配人に連絡したくらいだ。

「ど、どうした？ 何か良い事でもあつたのかい？」

そう言って藤臣はネクタイに手を掛けた。

「あ……いえ、私が結んだままだから。あの後は解かなかつたんだなつて」

愛実の視線は彼の喉元を見て、嬉しそうに笑う。

藤臣も気が緩んでしまい、

「一日に一度も密会はしないさ」

「そうじゃなくて……結び直すんじゃないかつて」

「……すまん」

どうも、失言が続いている。

本来、藤臣はこれほどつかり口を滑らせる男ではない。他人の中で育ち、ギリギリまで神経を張り詰め生きて來た。それが愛実の前では、何もかも調子が狂いつ放しであった。

玄関からリビングに移動し、ベルベットのソファに愛実を座らせ

ながら藤臣は口を開いた。

「黙つておくのもアレだから、言つてしまつが。奥村とはそれなりの付き合いがあつた。君も本当は気付いているんだろう?」

「それは、まあ。そんなに子ども扱いしないで下さい」

藤臣は軽く頭を下げ、「申し訳ない」と愛実に謝罪する。

愛実から曉や信一郎、和威の忠告を聞かされた。どれも、藤臣に複数の恋人がいるという話であった。

「その……そういう方がいるのに、わたしと結婚してもいいんですか? 形だけとはいえ、わたしだったら、絶対に嫌です」

藤臣は深いため息をつき、愛実の隣に腰を下ろす。

「恋人はいない。私には人を愛することが出来ないんだ。女性に幻想が抱けない。ただ男だから……厄介なことに欲望だけはあって、愛情がなくても女性の身体には反応してしまつ。君は軽蔑するかも知れないが、彼女らとはそういう関係なんだ」

色々考えていた言い訳はいつの間にか消え去り、有りの儘を告白^{ままだま}していた。

「あ、あの……」

愛実は頬を薄つすらとピンクに染め、真っ直ぐ藤臣の顔を見た。

一人きりでそんな顔は止めてくれ、と叫んでしまいそうだ。

「男の人はそういうものだ、と聞いてことがあります。だから、仕方がないのかも知れませんけど……結婚しても、の方たちとお付き合いは続くんですか?」

別れてもいい、君が代わりに相手をしてくれるなら……。

藤臣はその言葉を飲み込みながら、「君はどうして欲しい?」と尋ねる。

「わたしは……わたしは……わたしには、そんなことを言つ資格が

ありません

「資格は関係ない。君はどうして欲しいのか？と聞いてるんだ。

答えてくれないか？」

「わたしは……嫌です。でも」

「判つた。関係のある女性とは結婚までに全て手を切る。ああ、そんな顔はしないでくれ。君に代わりを求めるつもりはない。婚姻中は結婚の誓いを守つて、誠実な夫であることを約束する。だから、君も一つだけ約束して欲しいんだ」

愛実の表情が変わつたことに、藤臣は機先を制したつもりだった。まさか「君を求めるつもりはない」という言葉が、愛実を傷つけたとは思いもせず……。

「私に誠実であつて欲しい。和威はもちろん、婚姻中に他の男とだけは」

「あ、あたり前です！そんなこと、わたしはしません！」

「いや、済まない。誠実でない女性しか知らないんだ。だから……」

「美馬さんは、誠実でない女性が好きなんですか？」

唐突な愛実の質問に、藤臣は声を失つた。

「あ、ごめんなさい。そういう方と付き合つては、ということは、好きなタイプなんだと思って。でも、わたしなら嫌です。お付き合いしている男性が他の女性とも、なんて。色々親切にして頂いて、美馬さんには感謝しています。美馬さんは素晴らしい男性だと思うけど、そういう所だけは尊敬出来ません。生意気なことを言つて、ごめんなさい」

愛実の言葉は衝撃だった。

誠実でない、金田当ての女を選び、愛を求めなかつたのは彼自身

である、と。

藤臣は自分を臆病な野良猫だと思った。爪を立て、牙を剥き、毛を逆立てて威嚇する。どんなに優しそうな人間でも、近づくなり彼を殴るか利用した。もう一度、愛情を求めて裏切られたら、今度こそ息の根を止められるだろう。

彼は戸惑っていた。

愛実の差し出す手は、彼が深層で追い求めた甘美な誘惑だ。欲しくて堪らないものを、彼女は藤臣の前にひらつかせている。

（腮ではない、と……誰か証明してくれ！）

無意識で伸ばした指が、愛実の頬に触れ……柔らかく瑞々しい肌に囚われた瞬間、藤臣は我に返る。

愛実の大きな瞳がさらに大きく見開かれ、食い入るように彼を見つめていた。心臓の鼓動が徐々に大きくなる。まるで新幹線が猛スピードで近づき、彼の全身を駆け抜けたような感覚だ。そのまま顔を寄せて、唇を重ねれば……。

直後、藤臣は弾かれたように立ち上がった。

「頬の傷も田立たなくなつたようだ。週末には弥生様に報告して、君のお母さんの了解を取りに行こう。正式な婚約者となれば、誰も手出しあはれない。今から用意すれば……六月辺りには『衝動を』まかす為に、思いつくままを口にした。

「ジューングライドなんて、素敵ですね」

次の瞬間、愛実の周囲に色鮮やかな花が咲き乱れ
藤臣の『誓い』は、試練の場に引きずり出されることとなる。

第32話 接触（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

ここで第三章が終わりです。

第四章は正式な婚約に…

黙つていない人が当然います（苦笑）

無謀な約束をした彼に未来はあるのか…
引き続き、よろしくお願ひ致します m(—)m

第33話 婚約

「そう……聞いてはいましたけど。やはり、そつまつりになつたのね」

日曜日、愛実は藤臣と一緒に美馬邸を訪れた。

弥生は思つていたよりあつさりと二人の結婚を承諾する。あれほど言つたのに、と怒られることを覚悟していた愛実には、些か拍子抜けだ。

藤臣の表情も硬く、彼にとつても弥生の態度は予想外だつたらしい。

「そんな顔なさらなくとも、前言を撤回したりはしませんよ。その約束で、愛実さんを相続人にしたのですから。長倉から、信一郎さんのことを見きました」

弥生は苦々しげに口にする。

長倉弁護士も、さすがに信一郎の行動に危険を感じたらしい。弥生が和威にこの邸を譲りたいのは明らかだ。しかし、このままでは信一郎が全てを台無しにする恐れがある。

「この美馬家をわたくしの代で潰すなど許されません。その為には……藤臣さん、あなたなら信一郎さんや宏志さんに後れを取ることはないでしょ」「う

愛実は弥生の言葉に驚いた。

自分と話した時のような「初恋の思い出」云々は影を潜めている。弥生にとって重要なのは美馬の家だけで、後を継がせたいと望んだ和威すら、どうでもいい様に見えるのだ。

「もちろんです。ただ、簡単には行かないでしょうね。何と言つて

も旦那様は生前、『自分と同じ婿養子の信一さんを重用された。今は彼が本社社長です。信一郎さんは社長令息で本社の副社長だ』

藤臣は弥生の言葉に嫌味っぽく答える。

旦那様とは先代の社長、一志のことであらう。藤臣の話では、随分可愛がられ、後継者に指名されたと言つていたが……。

愛実の疑問は弥生が口にしてくれた。

「何を仰るの？ 夫の遺産はほとんど持つて行つたではありませんか。六月の総会で、あなたが新社長に就任するのは間違いないでしょう」

「これでも三十にもならない若輩者ですから……大奥様の後押しを頂ければありがたいのですが」

言葉の内容とは逆で、藤臣は自信たっぷりの言い方だった。

弥生もそれが癪に障つたようだ。口をへの字に結び、杖を手に席を立ち上がった。

「結婚を機に、わたくしも後継者に支持する、と発表すればよいしいのでしよう。関連会社や取引先も胸を撫で下ろすことでしょう。やはり独身主義は、会社のトップにはそぐわない主義ですからね」

背中を向けたまま言い捨て、弥生はリビングを後にしたのだった。

シンとした空気がリビングの中を漂う。

結婚の報告とは思えないほど殺伐とした雰囲気だった。後継者問題に終始していたように思うのは氣のせいだろうか？

弥生を見送る時、愛実は立ち上がり頭を下げた。だが、女主人は自分が引きずり込んだ花嫁に対する気遣いも、祝いの言葉すらなかったのである。愛実は言葉もなく、弥生の消えた方向をジッと見つめていた。

「驚いただろ？」「悪かったね。君には聞かせたくなかつたんだが」

振り返れば、美馬も立ち上がり窓際に近寄っている。

た。

「おばあ様は……やつぱり、祖父のことを恨んでいらっしゃるんですね。結婚を許してもらえたかった」と、心残りというか……蟠わだかまりがあるんだと思います」

考えたくないが、愛実に対する思いは親切心ではなく、仕返しのつもりが大きいのかも知れない。信一郎が最初に言つた言葉が眞實に近いのだ。そう思うと、少し切なく、そしてホツとした。

と不安でした」

和威を選んで欲しかつたが、信一郎に継かせるくらいなら藤田のほうが……。弥生の気持ちがその程度で済んで良かつたと、愛実は安堵していた。

「君は、優し過ぎる。人間はもつと汚いもんだ。そんなんじや、い
ずれ悪党の餌食にされるぞ」

最初は藤田の「冗談かと思ったが、彼の瞳があまりに真剣で、愛実は一瞬戸惑つた。

あの……でも、その時は、美馬ちゃんが下さるのか？」
笑いながら愛実は本当の気持ちを言葉にする。

たか 一ああ 嬢姫中はその「もじたよ」藤臣は心底困ったよ
な顔をして答え、愛実はそれ以上は笑うことができなかつた。

卷之三

一週間後、愛実は美馬邸のパーティに招かれた。

母も一緒に来たがったが、弥生の「正式な婚約披露パーティではないので、保護者は不要です」という一言に却下されたのである。母は愛実に「母親の許しがないと結婚出来ないと判つてらつしやるのかしら!？」そんな不満をぶつけた。

愛実自身、美馬家の親族が集う席にたつた一人は不安で堪らない。多少問題のある母でも、一緒に居てくれたほうが心強いのは確かだ。

るべ。

しかも直前になり、藤臣から迎えに行けないのでハイヤーを回したと告げられ……。愛実は彼に贈られたパーティドレスを着て、これ以上ないほど緊張に包まれたのだった。

「あなたが西園寺愛実さんかしら?」

立食形式のパーティフロアに足を踏み入れるなり、神経質そうな中年女性が愛実のもとに近寄った。年齢の割りに背が高く、きつい視線で愛実を見下ろす。その旦元が信一郎とそっくりで、愛実はすぐにつの女性が弥生の長女、加奈子だと判つた。

愛実が気を取り直し、「はじめまして……」と挨拶しようとした時だ。

「最近の女子高生は恐ろしいこと。お金のためなら、見ず知らずの男と結婚しようだなんて。あなたもこの家にお住みになるのね。間違つても、うちの息子たちを誘惑しないでね。お母様がどんな気紛れを起こされようと、正当な跡継ぎは信一郎さんなんですから!」

お判り!?

加奈子の大きめの声に周囲の人間が一斉に振り返る。

今回は親戚のみで招待客は五十人もいないという。だが、およそ加奈子と歳の変わらぬ人たちばかりだ。愛実は到着するなり、メイド姿の若い女性にパーティ会場である大広間に通された。藤臣を呼んで欲しいと頼んだが、フロアにおられるのでお探し下さいと、にべもなく突き放される。

仕方なく自分で探そうとした途端、加奈子に頭ごなしに怒鳴られ……。周りの視線はある者は冷ややかで、またある者は嘲笑に満ちていた。

愛実は、立派な鯉の泳ぐ池に放り込まれた、小さな金魚の気分だ。頭から食べられてしまいそうで、初めて履いたヒールの足元が震える。

「加奈子さん、それ以上私の婚約者に暴言を吐くよつなら、こちらにも考えがありますよ」

いきなり肩を掴まれ、藤臣の声が頭上から響いた。

第33話 婚約（後書き）

御堂です。

第四章のスタートです。

色々波乱含みのスタートですねえ…

四章丸々掛けて、この一日を描く、という（^_^;）
まだ出てきてない美馬家の人々とか、藤田の女（　おいおい　）とか、
この章は和威に代わって暁の出番が増えますね。

ではでは、引き続きよろしくお願い致します m(_ _)m

愛実を迎える予定だつた。

ところが、入院中の信一郎の仕事が回つて来てしまい、専務の藤臣が本社に行く羽目になつてしまつたのだ。苛立ちを覚えたが、仕事では仕方がない。彼は会社で契約しているハイヤーを愛実の家に回し、美馬邸まで送らせることにしたのだつた。

だが、もし邪魔が入つたら、愛実に何かあつたら、と思うと気が気でない。

無事送り届けました、の一報を運転手から受けたのは、藤臣自身が美馬邸に戻る途中のこと。何事もなく良かつた、と彼は大袈裟なほど胸を撫で下ろした。そして、すぐに美馬邸に連絡をして、愛実には玄関フロアで待つよう言付けを頼む。

ところが、藤臣が帰着した時、愛実はすでにパーティフロアに向かつた後で……。

「あら、藤臣さん。まったく、あなたつて人はお金の為なら何でもやるのね。こんな女子高生とまで結託して……。母親の血かしらね」

加奈子は表向き叔母にあたるが、実際は腹違いの姉だ。藤臣にはそういつた姉が三人いることになる。そんな中で弥生と手を組み、彼を追い出す為の急先鋒となつていたのが、この加奈子……正確には加奈子一家であつた。

藤臣は愛実の肩を抱き、彼女を後ろに下がらせた。加奈子との間に割り込むように、自分の体を滑り込ませる。

「父親も似たようなものですからね。この美馬家に引き取られて感

謝していますよ。加奈子さん

加奈子は当然、藤臣が異母弟であることを知っている。一志のことを指した嫌味に、加奈子の頬は小さく痙攣した。

彼女は父親の財産分与を当てにしていたが、そのほとんどを藤臣に奪われ腹に据えかねているはずだ。だが、それを公にしたり、遺留分を求める裁判を起こせば、一家揃つてこの邸と会社から追われる羽目になる。

今回、弥生が巻き起こした騒動で、最も信一郎の尻を叩いていたのはこの加奈子であった。それも、ある男を協力者として……。

「父親と言えば、あの刑務所に入った男かしら？　ああ、あれは義理の父親だったわね。身持ちの悪い母親を持つて、あなたも大変ねえ」

「ええ、実の父は幸運にも刑務所に入る前に亡くなりました。そう言えば　信一郎さんが酷い怪我をされたとか。妙なことに巻き込まれて警察沙汰にならないように気をつけて下さい。会社のイメージを損ねますので」

一瞬で加奈子の顔色が変わった。

信一郎も一步間違えば刑務所行きだと、藤臣の言葉の真意を悟つたらしい。加奈子は「余計なお世話だわ！」ヒステリックに叫ぶと藤臣の前から立ち去つた。

藤臣はあらためて愛実に手をやる。

「遅くなつて悪かつた。玄関で待つてるように言つたんだが、使用人に上手く伝わらなかつたようだ」

「いいえ……びっくりしましたけど。でも、美馬さんが来て下さるつて思つてました」

愛実の笑顔はどうしてこゝも暖かいのだろう。肩を抱いたまま、その眼差しに吸い込まれそうになる。

「あ、あの、美馬さん、肩が……その」

「ああ、すまない。でも？ 美馬さん？ は止めてくれ。ここでは、ほぼ全員がそうなる」

「では？ 藤臣さん？ でいいですか？」

ただ名前を呼ばれただけだ。たつたそれだけで反応しそうになる自分が信じられない。

今日の愛実は薔薇色のドレスを着ていた。

胸元をしつかりと覆った、フロント部分のシャーリングがエレガントなデザインだ。膝丈のスカートはシフォンでボリュームを持たせている。上から真っ白のボレロを羽織り、露出した肩を見せないようになっていた。同色の靴とバッグ、一粒ダイヤのイヤリングとネックレス 全て藤臣が選んだものであつた。

髪は少しアップにして、垂らした毛先をカールさせている。いつもの自然なスタイルより、幾分大人びて見える。藤臣は、薔薇の花を象った髪飾りも用意すればよかつた、と考えていた。

彼はわざと愛実の肩を抱いたまま、ドリンクの置かれたテーブル付近まで移動した。

「彼女は、我が子が一番、といつタイプなんだ。信一郎は学生時代から色々問題を起こしていた。でも、信一郎に責任はない、と言つて聞かなくてね。その結果、宏志も同じようになってしまった」

加奈子について説明しながら、愛実にオレンジジュースを取つて手渡す。

「じゃ、あんな風に言われたのは……わたしが信一郎さんを選ばなかつたから?」

藤臣の手が肩から外され、愛実はホッとしたように口を開いた。

「そんなところかな。だが、夫の信一といい、子供たち三人もともな性格じゃない。足を引っ掛けた後、そっちが当たつて来たから怪我をした、と難癖つけてくるタイプだな」

吐き捨てるよつに言つた後、藤臣はジンジャーホールを手に取り、口に含んだ。

すると、予想外にも愛実は楽しそうに笑い始めた。

「私は何か面白いことを言つたかな？」

「だつて、美馬さ……藤臣さんがやられつ放しになつてるのは思えなくて。どうせ怪我をさせたつて言われるんなら、最初から足を踏んづけてやれつて感じだもの」

あまりの図星に藤臣も可笑しくなり、声を立てて笑つた。
和威はじつと耐えるかストレーントに殴り返すタイプだが、藤臣は違う。盗みの犯人にされそつた時は事前の察知し、逆に信一郎を罠に嵌めてやつたくらいだ。

「君くらいだよ。私にそんなはつきりと言つ人間は」「どうして？」

「私が怖いらしい」

一志から認められる為、可能な限り感情を殺して生きてきた。それなりに卑怯な手段で他人の足を引っ張つてきただろう。ここ数年、真つ向から藤臣に意見する人間は、瀬崎独りだつた。

「最初は……わたしも怖かつたけど。でも、今は……」

「今は？」

もう一度、愛実の肩を抱き寄せ、耳元で「今はどう思つてるんだい」と尋ねたら……。

「藤臣さん、いい加減私たちにも紹介してくれないかしら？」

二人の背後から声を掛けたのは、弥生の三女で養母・佐和子であった。

長女の加奈子とは十歳も歳が離れており、まだ四十七歳。藤臣の母親と呼ぶには気の毒なほど若い。一志は藤臣を引き取る時、将来に備えて美馬姓を名乗らせようとした。だが、認知だけは弥生が認めようとせず……。結果、不妊が発覚し離婚された佐和子に婿養子を取り、藤臣を養子とさせたのだ。

「はじめまして、藤臣さんの義理の母です。若いお嫁さんで嬉しいわ。年上のお嫁さんを連れてきたらいつしかどうかと思っていたのよ」
佐和子はおっとりした性格で、美馬家の中で唯一強欲から外れた人間かも知れない。積極的に藤臣を可愛がることはしなかつたが、特別に苛めることもせず。何でも父親である一志の命令に従う、藤臣の目には主体性のない女性だった。

「こんなにちは。あなたのことは曉から聞いてます。藤臣くんは義理だが出来の良過ぎる息子でね。難点と言えば、独身主義だけだった。だが、あなたに会つてあっさり返上したようだ」

見るからに仲の良い夫婦と言つた感じで、佐和子に寄り添つているのが美馬弘明である。藤臣にとつて二人目の義理の父だ。

好人物に見えるが、藤臣はその裏にあるものを知つていた。
弘明は金と地位を得る為、佐和子との結婚を承諾。その証拠に結婚当初から愛人を囲つて居る。相手に子供を一人も産ませ、週の半分はそちらに帰るという二重生活を送つて居た。

「西園寺愛実です。何も判りませんが、どうかよろしくお願ひいたします」

おそらくは一人の笑顔を額面通りに受け取つて居るのだろう。丁寧にお辞儀をする愛実を、このまま攫つて隠してしまいたくなる藤

臣
だつ
た。

弘明は立場的に言つても、藤臣の社長就任を支持しているグループに属する。

「これで他の重役連中もホツと一息だな。いやあ、本当に良かった良かった」

「ええ、これで督促状のように届く釣書きから、よつやく解放されますよ」

養父の言葉に藤臣も合わせて笑つた。

「まあ、驚いた。藤臣さんにもそんな笑顔が出来るのね。十五年も一緒に暮らしていくのに、初めて見たような気がするわ」

ビックリした顔で佐和子が声を上げる。隣では弘明も「本當だ」と頷いていた。

「やあ、ホントに藤臣くんをゲットしたんだな。やるじゃないか。どうだい？ 暴れ馬を乗りこなした感想は？」

そう言つて現れたのは大川暁だ。

藤臣は心中で警報を鳴らした。信一郎の母・加奈子に入れ知恵しているのはこの男に違いない。使い方しだいで、毒にも薬にもなる男だろう。

だが、愛実は見知つた顔に出会えて嬉しいらしい。

「あの……大川さんのことは何とお呼びしたらいいんですか？」

「そりやあ、お兄様つて呼んでくれたら最高だけどね。つと、冗談。藤臣くんに病院送りにされそうだ」

彼は当然、信一郎に全治三ヶ月の重傷を負わせたのが藤臣だと知っている。しかも、『初なお嬢さんには気の毒だが、これもいい勉強』そんな台詞を平然と言ってのけた男だ。

愛実は何も知らず、鬼のよつな男に向かつて笑顔を大盤振る舞いしている。

(俺だけに向ける笑顔じゃなかつたのか！？)

見ているだけで、藤臣は胃の辺りが焼け付くよつに痛くなつた。

「なあに？ 旧華族の出身で、世が世ならお姫様つてあなた？ でも、今は落ちぶれてアパート暮らしなんじょ？ お氣の毒ね。その歳でお金のために結婚しなきやならないなんて。しかも相手が売春婦の息子なんて、ホーントお氣の毒」

「暁の後ろからやつて来て、いきなり愛実に噛み付いたのは加奈子の長女、あなせごとむな安西朋美であつた。

彼女は藤臣と同じ年齢で、七年前に大病院の後継ぎと結婚。五歳の息子と三歳の娘がいる。朋美は母親には似ておらず、男を誘う厚い唇と退廃的なボディラインの持ち主だつた。兄弟同様、父親が信二かどうかは疑問だといつ噂だ。

「朋美さん、もう酔つてるのかい？ しうがないなあ

シャンパングラスを片手に、朋美は暁にしな垂れかかる。佐和子は顔を背け、弘明は一瞬だけ顔を顰めた。

「あら、あたしは本当のことを持つただよ。ま、我が家の中はみんな似たり寄つたりだから、誰を選んでも同じでしうけど」

そう言つと朋美は甲高い声で笑つた。

「愛実、加奈子さんのお嬢さんで安西朋美さんだ。」結婚されてこの家を出られたので

「おじい様が死んだから、別れて戻つて来るかもね。その時は仲良くしてちょうだいね、お・ひ・め・さ・ま」

愛実は礼儀正しく挨拶をしようとしたが、その前に、朋美が藤臣の紹介を遮った。そのまま曉に支えられ、ふらつきながらフロアを歩いて行く。

「『めんなさいね、愛実さん。お嫁に行つた先で苦労しているんだと思って、大目に見てやつて下さいな』

呆気に取られて朋美の背中を見送る愛実に、佐和子が声を掛けた。
「いえ……。うちが貧乏なのは皆さんが知っていることですから。今回、藤臣さんや大奥様に助けていただいて、本当に感謝しております」

何でもない」とのように、愛実はサラッと言へ。

逆に、藤臣のほうが息苦しくなり、

「子供を食えさせないのは親の責任だ。家が貧しいからといって、君が恥じる」ことはない。それに……俺が欲しいのは感謝じゃない」

ふつくりとした頬がドレスと同じ鮮やかな薔薇色に染まった。藤臣を見上げる瞳が、見る間に色彩を帯び……ジッと見つめていると、まるで万華鏡を覗き込んだ気分になる。
オレンジジユースに濡れた唇がゆっくりと開き、甘い声音を響かせた。

「藤臣……わん。あの、腰に……その。こんなところで」

ハツと顔を上げた時、あんぐりと口を開けた佐和子や弘明が田の前に立っていた。

藤臣は自分でも気付かぬうちに、愛実の腰に手を回して、なんと腕の中に引き寄せていたのだ。

「ここの分なら、孫の顔もすぐに見れそうね」

佐和子夫婦は引き攣った笑顔を作りながら、藤臣たちから離れて行つたのだった。

～*～*～*～*～

藤臣の手が腰に触れた瞬間、愛実の頭は真っ白になつた。手の熱さも、力強さも……さつき肩を抱かれた時とは比べ物にならない。愛実は、そのままキスされるのかと思つたほどだ。

「……済まない」

藤臣はフロアの隅に置かれたソファまで愛実を連れて来て座らせた。そして、水のグラスを差し出しながら謝罪を口にする。

「あの、さつき暁さんが仰つてた『病院送り』つて、信一郎さんのことですか？ 暁さんは何か知つてらっしゃるんですか？」

愛実の心に不安が押し寄せ、藤臣に質問したが、彼はスッと目を伏せた。

「さあ、どうかな。だが心配は要らない。君には私がいる。それに暁さんは……邸の中で流れている噂を聞いたのかも知れないな」

「どんな噂ですか？」

愛実の質問に顔を上げる。そこには悪戯めいた笑みが浮かんでいた。

「君を口説こうとした信一郎を、私が襲つて病院送りにしたそつだ。

その上で、君をホテルに監禁して自分のものにした」

「そ、そんなつ！ あんまりです。否定されたんでしょう？」

「なぜだ？ 美馬藤臣という男は、欲しいものを得るために手段は厭わない。横から奪おうとしたらい、信一郎と同じ目に遭う。

となれば、全治三ヶ月の重傷を負つてまで、女性を手に入れようとする男は少ないだろうな。君は安全だ」

あつやつと言ひ切る藤臣に、愛実は言葉もなく見惚れていた。

肩を抱き寄せられた時も、腰に手を添えられた時も、心臓が跳ね回っていたが本当は嬉しかった。愛実は懸命に藤臣の好む女性にならうとしたが……。気の利いた台詞の一つも思い浮かばない。考えなしに子供じみた返答をしてしまい、ふと気付けば彼は離れていた。

(どうすれば、藤臣さんの気持ちを惹き付けられるの？)

愛実はただ恋する男性の姿を田で追い続け　それは突然だった。

「そんな田は止めるんだ！」

厳しい口調で藤臣は愛実を諫め……。

第35話 独占（後書き）

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

この朋美の設定が「～愛人」とは変わっております。
あちらでは次女千穂子の娘（和威の姉）になつてますが、こちらでは長女加奈子の娘としてマトメ（？）ました。

引き続きよろしくお願い致します。

「あ、いや、悪い。意味もなく男をジッと見るもんじやないよ。子供の君には判らないのかも知れないが……」

「『めん、なさい』

藤臣を見つめることが礼儀に外れたことだとは思わず、しかも？子供？と言われたことで愛実の心は瞬時に萎縮する。

すると、藤臣は焦った様子で言い訳を口にし始めた。

「暁さんなんかもそうだ。彼は頭が切れるし、冷酷な男だよ。この家人間は全て額面通りじゃない。私以外は決して信用するな。とにかく男は年齢問わず、絶対に気を許さないでくれ」

その鬼気迫る様子に、愛実は一層青褪めた。

「ああ、その、だから……怖がらせるつもりはないんだ。ただ、私以外には無闇に微笑みかけないほうが多い」

「じゃあ、藤臣さんになら気を許してもいいんですね。よかつた」

愛実がそう言つて笑うと、藤臣も呆れたように、それでいて嬉しそうに微笑んだ。

「あの……お義母様は藤臣さんの笑顔を見て驚いていらっしゃいましたけど？」

佐和子の言葉は意外だった。

愛実の知る藤臣は意地悪な笑い方もするが、信一郎の件以降、朗らかな時が多い。愛実にも細やかな心遣いをしてくれ、彼に愛されたらどれほど幸せだろう、と思つてしまつ。

だが、藤臣の答えはとんでもないものであった。

「Jの邸に来て十五年、一度も声を上げて笑ったことはなかつた。いや、施設にいたときもそつだ。まだ母や妹が生きていた頃は笑い方を覚えていた気がするが……。さつき朋美が言つていただろう。私の母は亡くなる直前、風俗で働き身体を売つていたんだ。母の笑顔も覚えてないな。覚えているのは、『あなたを産まなければよかつた』そう言つて、泣きながら殴られたことくらいかな」

愛実は胸が熱くなり、彼の顔が涙に滲む。

だが、それを振り切つて強引に笑顔を作つた。

「じゃあ、これからはドンドン笑つて下さいね。悲しいことがあっても、楽しかつたことを思い出して笑うんです。そうしたら、心が軽くなるから……。大丈夫、何とかなる、さあ頑張ろう！ って思えるの」

「……成せば成る、か。だが、どれだけ頑張つても出来ないこともあります。あるだろ？ 君も絶望を知つてるはずだ」

それは、初めて会つた時の愛実の状況を指して言つているのだろう。

藤臣の言つ通り、絶望を抱えることもある。旧伯爵家の肩書きなど要らないから、普通の家庭と父を返して欲しいと神様に願つたこともある。

それでも……。

「もう本当に駄目だと思った時に、藤臣さんに出逢えたの。だから、きつと何となるわ。諦めずに、笑つて自分を励ましていたら、父もおじい様も見守つて下さると思つから……。藤臣さんの亡くなつたお父様やお母様、妹さんもきつと」

藤臣は背中を向け……。「だといいな」掠れた声で呟くのだった。愛実はまだ、美馬の実父が一志だとは知られていなかつたのである。

「社長、遅くなりました」

たった今、到着した様子で藤臣の秘書、瀬崎がやつて來た。

ブラックスーツでシルバーグレーのベストを着た藤臣とは違い、

瀬崎は通常のスーツ姿だ。いかにも仕事帰りといった風情である。

「契約書の件で、長倉先生が大奥様のお部屋でお待ちだそうです

「判つた」

藤臣は頷くと、

「愛実、申し訳ないが、しばらくここで待つていて貰えるかな?

二十分も掛からないと思う。ああ、絶対にパーティ会場からは出ないようだ。この瀬崎を残していくから

愛実が「はい」と短く返事をすると、彼はそのままパーティフロアから出て行つた。

「一〇の度ははじ婚約おめでとうござります」

瀬崎は愛実を見るとゆっくりと頭を下げた。

「ありがとうございます。あの、弟たちがお世話になつて……本当にありがとうございました」

愛実は立ち上がると、両手を前で揃えて深くお辞儀をした。弟妹の転校手続きなど、全てこの瀬崎がしてくれたのだ。藤臣の指示とはいえ、どれほど感謝しても足りないくらいである。

「いいえ、社長の命令ですから。先日は……大事に至らず何よりでした。私の不注意でとんでもないことになつてしまい、非常に反省しております」

そう言つと、瀬崎は申し訳無さそうに俯くのだった。

ホテル滞在中に藤臣から聞かされた。

信一郎には充分に注意を払うよう、藤臣の出張中は瀬崎が信一郎の動向を見張っていたという。それが、肝心な時にうっかり見失つ

たというのだ。モーテルの特定が少しでも遅れていたら、取り返しのつかないことになつていった。愛実はそんな風に聞いている。

「いえ、瀬崎さんのせいじゃありませんから。それに……藤臣さんが助けに来て下さつたので」

□にしながら愛実は恥ずかしくなる。

あの時、藤臣のすぐ後に瀬崎も飛び込んで来たはずなのだ。そうなると、当然、胸を見られてしまつたかも知れない。だが、「見ましたか?」と聞くのも躊躇われて、愛実は何となく居心地が悪くなつてしまつ。

「あの……ちょっと、失礼します」

「ああ、いえ、私もお供致します。社長命令ですから」

「それは困ります!」

愛実が声を上げると、瀬崎はきょとんとした顔をした。

「あの、化粧室なので……外で待たれるのもちょっと。ドアのすぐ外ですよね? 大丈夫です。すぐに戻ってきますから」

愛実は瀬崎を押し止めると、慣れないヒールで転ばないよう、気持ちだけは小走りに化粧室に向かつた。

～*～*～*～*～

大きなお邸らしく、化粧室は紳士用と婦人用に分かれていた。

愛実が婦人用の扉を押そうとした時、

「申し訳ありません。愛実様は一階の家族用をご使用いただけますか?」

背後からメイド姿の女性に声を掛けられる。その女性には見覚えがあった。藤臣を呼んで欲しいという頼みを断わったメイドだ。

「一ひらはお客様用 愛実様はご家族同様に、と藤臣様から申し付かっておりますので」

それが美馬家のルールだと言われたら、愛実には断われない。

「あの、一階の家族用というのは何処にあるんでしょうか？」

愛実の問いかメイドはニッコリと微笑み、「ご案内致します」そう言つたのだった。

「私は、藤臣様のお部屋を担当しております、富前千里と申します。みやまきおせと

藤臣様のことでしたら、何なりとお訊ね下さい」

「はい……どうもありがとうございます」

普段であれば、愛実はそれほど警戒はしない。藤臣に言われた言葉も、「男に気を許すな」だった。だが、どうもこの千里は、彼女のほうが愛実に敵対心を持つていてる気がしてならないのだ。

そして愛実が思つた通り、一階への階段を昇り切つた時、彼女は振り向きフフッと笑つた。

「藤臣様の、お好みの体位もお教えしますわ」

第37話 契約

愛実は一瞬、何を言われたのか判らなかつた。真つ赤になるまで五秒ほど掛かつたように思つ。だが、負けずに言い返した。

「そ、それは結構です！　ふ、藤臣さんから、ちょ、ちょく、直接教わりますからっ！」

そんな愛実の反応を見て、千里は余裕の笑みをこぼす。

「まあ、それじゃ？　まだ？　なんですか？　藤臣様もお氣の毒に。こんなお子様のお守だなんて」

藤臣の愛人は邸のメイドの中にもいる。それは曉に言われたことだ。和威も、藤臣は何人の女性と付き合つてゐると言つていた。きつと、田の前の女性がその一人なのに違ひない。

だが、彼は結婚までに全ての女性と手を切ると言つてくれた。たとえ本物の結婚じゃなくても、愛実が嫌だと答えたら、そう約束してくれたのだ。

「あら、申し訳ありません。愛実様こそ、お可哀想に。一回りも年上の男性なんて、お若い愛実様から見ればオジサンになりますからっ？」

千里の言葉に、

「案内はもういいです！　後は一人で行けますから」

愛実はキッパリ言つと千里を追い越し、さつと一階の廊下を歩き始めた。

「藤臣様がベッドを買い換えたのよ。これまでのベッドは私の部屋に運ぶんですって。コレがどうこう意味か、お嬢ちゃんに判る？」

これまでの慇懃無礼な言葉遣いを止め、千里は本性を出したように話し掛ける。

愛実は振り返るとキッと睨みつけ、「全然判りません!」と答えた。

「藤臣様のお世話は口^レまで通り私がするわ。お嬢ちゃんは良い子で若奥様を演じてちょうだい。ああ、心配しないで、妻の座は狙つてしませんから。子供は産みたくないし、面倒は嫌いなの」

千里は好き放題言つて階段をとんとん下りて行つた。

愛実は決して低いほうではない。一六〇に少し足りないくらいだ。そんな彼女より十センチは高く、バストのカップはツーいや、スリーサイズ上だらう。そして、勤務中だというのにキツイ香水の匂いをさせていた。ジバンシーの? オルガンザ? でないのが、せめても救いか。

(藤臣さんたら、絶対に趣味が悪いっ! 秘書の奥村さんのほうが……もうっ! いつたい何人居るの!?)

モデルの女性が? オルガンザ? の女だらうか?

ひょっとしたら、もつとたくさん居るのかも知れない。だが、それも仕方ないことだつた。藤臣ほどの素敵な男性である。たまに意地悪になるけれど、とても優しくて親切だ。時折見せる寂しそうな瞳が、愛実のような若い女性ですら、母性本能を揺らされる。

千里の言つたようにベッドの上でのことを知つたら、もつと離れられなくなるのだろう。

肩を落として歩いていたら廊下の突き当たりに化粧室のマークを見つけた。そこが家族用なのだ、と見当をつけ、愛実は中に入った。

～*～*～*～*～

「なるほど、愛実の分はすでに母親からサインを貰っているわけですね」

細かい契約書に署名をしながら、藤臣は呆れた声を出した。

娘を人身御供に差し出し、彼女の母親は成城の家屋敷と数年は遊んで暮らせる金を手に入れたのだ。それも、当の愛実には不利な条件ばかりで。彼女から離婚は言い出せず、事情はどうあれ離婚の際には一円の慰謝料も手に入らない。子供の親権も放棄するなど、愛実であれば承諾するとは思えない条件だ。

おまけに、弥生は自分の面目を保つため、『旧伯爵家令嬢』という肩書きを最大限利用するつもりだ。マスコミにはカビの生えた初恋話を提供し、三流メロドラマよろしく、彼女に白羽の矢を立てたことになっている。

だが、気になるのは愛実に向けられたこの一文だ。

万一一、婚約者に変更があつても、西園寺愛実は契約書通りの義務を負うものとする。

これでは、仮に藤臣との婚約が流れても、愛実は美馬家の誰かと結婚しなければならなくなる。不履行となると、家屋敷を返還するだけでは済まず、莫大な慰謝料という借金を背負うことになるのだ。家族思いの愛実のことだ。そうなれば、たとえ信一郎であつても我慢して嫁ぐかも知れない。

もし、藤臣に何かあれば……。

(クソッ！ 死んでも死に切れんな)

「莫大な資産が絡むのだから、当然のことでしょう？　あなたのことは、夫の罪の子として広く知れ渡っています。わたくしが終生心に残していた男性の孫娘を妻にすることで、あなたを認めようと言うのは、対外的にも妥当なところでしょう」

一志の生前でも、藤臣が強制認知を求めればそれは可能だつた。だが引き替えに、無一文で放り出されたのでは意味がない。弥生は、一志の死後認知が法的に有効で取り消せないと知ったとき、藤臣に交換条件を出したのだ。

周知の事実であったとしても、藤臣が一志の息子であることは公言しない、と。

弥生にとつて大事なものは、美馬の名前と彼女自身の体面を保つこと、それだけだった。

「判つています。ですが、暁さんを使って和威を喰けしがけるのは止めて下さい。あなたも旦那様も、暁さんを駒のように考えておいでだが、今の和威に御しきれる男ではありません」

藤臣の言葉に弥生は片笑みを浮かべた。

「あらまあ、相変わらず和威さんの味方なのね。でも、和威さんはどうかしら……。愛実さんは母親に良く似ていると言うではないの。中々の女性のようですし、あなたも手玉に取られないように気をつけなさい」

藤臣は黙つて席を立ち、一礼して弥生の私室を後にした。

洋館の母屋と渡り廊下で繋がつた弥生専用の別館がある。母屋と同じように洋風の建築だが少し古い。弥生が生まれた時に建てられたという。後に妹と二人で暮らし、戦火も免れた。母屋のほうは、結婚後に一志がかなり手を入れたらしい。

渡り廊下の途中で立ち止まり、藤臣は煙草に火を点けた。庭の緑が多いせいか、都内の割りに空気が清々しい。そこに白い煙を吐き捨てることに、なぜか罪悪感を覚えた。

パーティ会場は禁煙だ。最近では都内の至る場所が禁煙になってる。いい加減止めようと思いつつ、ついつい吸ってしまう。

（女を抱いてないせいか？　まさか！　これまでも一ヶ月や一ヶ月、平氣でセックスを^た断つていたはずだ）

一見するとライターのような携帯用灰皿に煙草を押し付け、放り込んだ。ベストと同じシルバーグレイのネクタイを整え、藤臣が会場に足を向けた時のこと。

廊下を一日散に走つて来る人間がいる。

「　社長！」

それが瀬崎であることに、藤臣は驚いた。これほど慌てるようなことは……最近で言えば、信一郎の車を見失った時くらいだ。

「瀬崎、愛実はどうした！？」

「それが、化粧室に行かれたままお戻りにならないんです。女性用を確認させてもらつたんですが、何処にもいらっしゃなくて」

藤臣の全身から血の気が引いた。

第38話 猥褻（前書き）

陵辱とまではいきませんが、サブタイトル通り猥褻な描写があります。苦手な方はご注意下さい。R15でお願いします。

大きなお屋敷らしく、そこは通常より広めの化粧室であった。家族用なので明確に男女が分かれとはいえない。しかし、天井と床に固定された不透明なパーテーションでしっかりと仕切られていた。

愛実は千里のことを考えながら、用を済ませ、個室の扉を開いた瞬間のこと。

「キヤツ！」

なんと田の前に宏志が立っていた。

見れば見るほど彼は兄の信一郎とは似ていらない。先ほど会つたばかりの姉、朋美ともまるで違つた。彼らの父で美馬本社の社長である信一は未見なので何とも言えないが……。

「あの、すみません。退いて頂けますか？」

宏志は少しだけ口角を上げ、ジッと愛実を見ている。背筋に気味の悪いものを感じつつ、それでも丁寧に声を掛ける。

「ああ、いいよお。おかげで、いい映像が撮れたしね」

嘲笑めいた軽い返答に、愛実は嫌悪感を深めた。最初は何のか判らず、だが、彼が手にしたモニターに映る個室内の映像に、全身がカツと熱くなる。

「なつ……なんですか？ そんなの、犯罪じゃない！」

「いいの？ そんなこと言つて。インターネットでバラ撒いちやおうかなー」

宏志の脅迫は、藤臣に売春の件で脅された時とは訳が違う。あれ

には愛実の過失もあるが、今回は何の責任もない。愛実はギュッと手を握り締め。

「やりたければやつたらどうですか？でも、藤臣さんが黙つてないと思いませんけど！」

その反論に、宏志は明らかにたじろいだ。

だが、自らの愚かさから窮地に陥ると、暴力に訴えようとする行動は兄と同じであった。

「何、エラそうなこと言つてるんだ！？ 兄さんとラブホテルに行つて、藤臣ともヤリまくつてるくせにつ！ お前、最低の女だな。……」一度とそんな口きけなくしてやる

宏志は逆切れしたかのように愛実を罵り始めた。そのまま、彼女を個室に押し込もうとして一人は揉み合つ。

愛実は信一郎とのことを言われ驚いていた。

彼女にとつて不名誉な噂になりかねないので、藤臣が事情を知る関係者に箒口令を敷いたと聞いている。それが宏志の耳に入つたといふことは、信一郎自身が弟に告げたのだろうか。

「触らないで！ 大声出しますよ！」

「出してみなよ。この家は無駄に広いんだ。この辺りは僕と和威の私室があるくらいでわ……今日は和威、いないんだよねえ。こんなトコまでだあれも来ないよ」

舌なめずりでもするように、卑猥な顔で宏志はじりじりと近づいてくる。こんな所は兄弟そつくりじゃない、と愛実の心に浮かんだ。その時、ドクンと大きく心臓が跳ね上がったのだ。愛実の脳裏に信一郎に襲われた時のことが次々と流れてくる。殴られた頬の痛みを思い出し、宏志を突き飛ばして逃げなきや、と思うのに近づくのが怖くなつた。そして、最悪なことに個室の方に後退してしまつ。

当然、すぐに背中が壁に当たり……。

(どうして? 今日は婚約発表なのに。ビックリこんな田にばかり遭うの?)

「藤臣には黙つておいてやるよ。その代わり、結婚したら時々僕の部屋に来て楽しませてよ。財産争いや会社経営には興味ないんだよねえ~」

宏志の足が個室に踏み込んだ。

「富前も悪い女だよなあ。ま、愛人が正妻を腹に嵌めるなんて、よくあることか」

「ふいに、宏志が悲鳴を上げた。千里にわざと一階の化粧室に連れて来られたのだ、と。だが、その時には眼前に宏志の顔が迫り、腐臭のする吐息に愛実は顔を背け。

「痛いっ! いた、いた、た……」

ふいに、宏志が悲鳴を上げた。開いた扉の隙間から腕が伸び、その手は宏志の髪を鷲づかみにしている。

「邸内で襲おうなんて、お前にそんな度胸があつたとは知らなかつたな」

藤臣の声だ。と思つた直後、宏志は髪を引き摺られ個室の外に連れ出された。

「み、富前だよ。ア、アイツが、チャンスを作つてやるからって……痛いよ、放してくれよつ。本気じやなかつたんだ。……カンベンしてよお」

宏志はすでに半泣きだ。

ホツとして脱力しそうになる愛実だったが、これだけは言つておかなければならぬ。

「個室の中をカメラに撮るなんて、ひどいわ。全部消して下さーい！」

愛実の言葉に藤臣は状況を察したらしい。宏志がコソッとポケットに仕舞おうとしたモニターを取り上げ、床に叩きつけた後、革靴で粉々に踏み潰した。

藤臣は宏志の髪から手を放すと、彼の襟首を掴み、むりに首を腕で押さえ込む。わずかに首が絞まり、宏志は怯えた目で藤臣を見上げていた。

「信一郎は手の骨が砕けて全治二ヶ月だ。お前は何処を碎かれたい？」

宏志は声もなく、痙攣したように顔をブルブルと左右に動かす。
「女が欲しけりや風俗に行つて來い。間違つても、愛実を想像しておつ勃^たてようものなら……踏み潰すぞ。判つたな」

藤臣の言葉に震え上がり、宏志は転がるように化粧室から出て行くのだった。

～*～*～*～*～

念のため、と古参のメイドに金を掴ませ、宏志を見張らせていたのが正解だった。何か携帯ゲーム機らしきものを抱え、化粧室に行つたと聞き駆けつけたのだ。まさか盗撮用の小型カメラまで用意していたとは思わなかつたが……。

「どうして……どうして、皆こんなに酷いんですか？ 宏志さんだけじゃなくて、パーティフロアでもそつだし、それに、富前つてメイドさんも」

愛実の声が震え、それはすぐに泣き声に変わった。

藤臣は千里の名前を言われたことに、ドキッとする。誘惑に乗つて数回関係しただけで、愛人の頭数にすら入らない女だ。無論、千里本人がどう思つているかは判らない。

藤臣はソッと手を伸ばし、愛実の肩を抱いて慰めようとした。ところが、彼女のほうから藤臣の懷に飛び込んで来たのだ。

「愛実……悪かった。まさか、富前まで絡むとは思わなかつたんだ。だが、会場から出るなと言つたはずだぞ」

「富前さんが、一階の家族用を使うように、つけて」

経緯とベッド云々の話を聞いた時、藤臣は思わず頭を抱えた。愛実のほうは、言葉にするつちに嘆きが怒りに替わつた様だ。

「別に全然構わないんですけど……でも、だつたら結婚の誓いを守るとか、そんな格好の良いことを言わないで欲しかつたです」

愛実の声音に嫉妬の色が滲んでゐる。やはり、愛実の気持ちは自分に向いているのだ、と思い、彼は嬉しさがこみ上げて來た。

しかし当の愛実は、そんな藤臣の様子に不満を覚えたらしい。

「わたし、何がおかしいことを言いましたか？」

「あ、いや……失礼。ベッドは新しくする予定だ。その時は使用中の物は業者に引き取つてもらひつ。それと、過去のことは勘弁して欲しい。約束はちゃんと守るよ。私は……結婚はしないつもりだったが、結婚に対する理想はある。不実な真似は絶対にしない。だから、君には信じて欲しいんだ。頼む、愛実」

彼は愛実の目を真っ直ぐに見つめて言った。

その時、自分がどれほど彼女の信頼を欲しているか判つたのだ。

それは、子供が親に縋るような目だったと思つ。

愛実も食い入るように見つめ返して、「もちろん……信じてます」と一言口にした。

心が吸い取られて行くを感じる。少しだけ涙の残つた瞳が、余計に藤臣を惹きつけた。それは心だけではなく、次第に身体も……そして唇も近づき……。

第39話 密会（前書き）

軽い性的描写があります。R15でお願いします。

直後、化粧室の扉が開く音がした。

藤臣は咄嗟に、愛実を抱きしめたまま個室に入り込む。個室のドアはかなりしつかりした作りで、ノブを回して開ける外開きだ。力チリとドアを閉めると、鍵を掛けず一人は息を詰めて様子を見守つた。

「あ、あの……どうして、隠れるんですか？」

愛実は空気を震わすよつた声で藤臣に尋ねた。

「いや、済まない。つい」

確かに、二人は隠れる必要などない。誰に見られたとしても、「二人口りになりたいのは判るが、今日の主役だろう？」とからかわれるものが関の山だ。

だが、藤臣はもつじばらくこのままで居たかった。

愛実を取り巻く環境は厳しいものがある。誰かが彼女を守らなければならぬ。ならば、美馬家の騒動に巻き込んでしまった責任は、藤臣が取るべきだ。彼はそんな風に思い始めていた。

問題はその責任の取り方であった。

愛実が望むなら、あえて結婚に期限はいらないのではないか、と。自分はどうせ、まともな恋愛感情など持てない人間だ。セックスさえ出来れば、女なら誰でも同じである。だったら、それが愛実であつても問題はないだろう。最初の予定通り、？偽りの？愛の言葉をささやき、いく普通の結婚にしてしまえばいい。

愚かな藤臣は、その考えがさも正論のように思えてきて、彼はゴクリと唾を飲んだ。

「もし……人が入つて来たら」

愛実は潤んだ瞳で不安そうに彼を見上げる。

「あれは男の靴音だ。こっちには来ないさ」

声に出来ない言葉で伝え合うため、ギリギリまで顔を寄せ合う。愛実の吐息を感じた瞬間、柔らかい唇が耳元を掠めた。

(一)の結婚が本物になれば、愛実の全てを俺のものに出来る…)

邪な思いが藤臣の中を駆け巡った。

「コツコツと重みのある音がタイルに響く。男性用に向かって、しばらくして戻つて来た。洗面台のほうは絨毯が敷かれているため足音は聞こえないが、後は手を洗つて出て行くだらう。……と思つた時だつた。

再び化粧室の扉が開き、同時に、「あ、やつぱり、こんな所にいたのね。探したんだから、暁」それは、朋美の声であった。

～*～*～*～

「オイオイ、酔つてるんだろう? 休んでたほうがいい」

暁は口に咥えたハンカチで手を拭きながら、鏡に映る朋美に向かつて言った。

朋美の姿はお世辞にも、次期病院長夫人というものには程遠く見える。セクシーな黒のドレスはだらしなく着崩れしており、アップにした髪もあちこちが解れていた。

だが、パーティ会場で酔つて騒いでいた時に比べれば、かなりし

つかりした足取りだ。

「ここなら誰も来ないでしょ」

言つなり、暁の背後から首に腕を回す。

暁は少し頬を歪めるが、「……しようのないヤツだな」振り返り、朋美の腰に手を添え、口づけた。

化粧室の中に暁の重なる音と、布地越しに互いの体を弄^{まさぐ}るが響き渡る。

「おじい様が死んでから一度も会つてないのよ。どうして誘つてくれないのよお」

唇が離ると朋美の口から愚痴がこぼれた。

「どうせ、あなたには遊ぶ相手がたくさんいるんでしょうけど……。まさか、金田^{かなだ}にあんな女子高生にまで手を出していくでしょうねつ」

「俺が出してもうるよ。金にはならんだろうが」

暁の声は普段よりトーンが落ちている。それが彼本来の姿であった。

「だつて若い子が好きなんでしょ？　あなたが初めてあたしに手を出した時、まだ十六だったのよ」

「あんときや、俺も大学生だつただろうが」

深い関係の男女の間でのみ通じる、クスクス笑いが広がった。

その間も、朋美は暁のネクタイを緩めボタンを外し始める。

「おいおい、脱がすなよ。こんなどこでこれ以上出来るかよ」

「入り口の鍵は掛けたわ。じゃあ、下の方に聞いてみましょうか？」

朋美はフフッと笑いながら、洗面台の前に敷かれた赤い絨毯の上に跪く。暁のスラックスのジッパーを下ろし、その奥を手で探し始めた。

剥がれかけた口紅が、暁の下半身を赤く塗る。

しばらくして暁は降参したかのようこ、

「ああ、判つた、判つた。でも、ゴム持つてんのか?」

朋美は口を離し、「ないわ。平気よ……そのまま来て」 自ら下着を下ろして片足から外しながら答えた。

暁は立ち上がった朋美の腰を掴むと、洗面台の上に座らせ
人は忙しなく体を重ねた。

／＊＼＊＼＊＼

二人の関係は知っていた。

藤臣が養子になつて間がない頃のこと。暁も邸内に住んでおり、この二人は夜な夜な密会を重ねていたのだ。当時の暁は藤臣の隣の部屋で、嫌でも目に……いや、耳に入つて來た。

暁の父・弘明もやがて気付き、すぐに息子を邸から追い出したようだ。だが一人はその後も関係を続け、朋美の家出と同時に妊娠が発覚し、とうとう祖父・一志の耳にも入つてしまい……。

キスまではまだ許せる。藤臣も苛立ちながら、さつさと出て行ってくれることを願つた。

だがまさか、こんな場所で朋美が口で始めるとは……。さすがの藤臣も面食らつていた。こんなことなら、暁ひとりの時に出て行けばよかつた。だが、こうなつてしまつてからでは甚だ顔を合わせ辛い。

ドア越しに聞こえるジッパーを下ろす音や衣擦れの音、そして暁の小さな呻き声に藤臣の頭は切れそうになる。

しかも、

「藤臣さん……急に静かになりましたけど」

愛実には行われていることが判らないのだろう。話し声が聞こえなくなると、背伸びをして藤臣の耳に口を寄せた。

(……ま、まさこ)

愛実は今日のドレスに合わせ、薄つすらと化粧をしている。つけなくても充分なほど桜色にふっくらとしている唇だ。そこが今日はルージュで艶めいていた。愛実の前では懸命に抑えている欲望が、背後の音で後押しされ微妙にエレクトする。

だが、今さら愛実を突き放すわけにもいかない。

彼が苦悩のあまり返事を出来ずになると、愛実はさらに体を寄せた。

「あの……聞こえませんでした？ もう、出ても平気でしょうか？」

こんな場所で欲情していることだけは、死んでも知られる訳にはいかない。

彼は限界まで腰を引きつつ、「今は、まだ……まだだ」とびつとか答える。

その直後だった。

暁の声が聞こえ 激しく肌のぶつかる音が、個室にまで届いたのである。

第40話 キス（前書き）

軽い性的描写があります。R15でお願いします。

第40話 キス

その音は、個室の中で必死に耐える藤臣を地獄に引き摺り込む誘惑であった。

ただでさえ、下半身は熱く高ぶっている。火に油を注がれ、まさに思考が停止しちゃうだ。出来る限り、下を向くまこと固く皿を開じた。

背中から襲い掛かるような荒い息。朋美は遠慮もそこそこに、「もつとお、奥まで突いてえー」など廊下まで聞こえそうな声を上げている。

どんな体勢で絡んでいるのか見ることは出来ない。何がガタガタと揺れ、家具の軋む音が一定のリズムを刻み始める。その状況に男の妄想はマックスまで焼き立てられた。

どれほどきつく皿を瞑つても、鮮明に思い浮かぶのは愛実の白い肌だ。ラブホテルで嗅いだ、清潔なペパーミントの香りまでもが甦る。あの漆黒の髪に口づけ、愛実の中に屹立したモノを埋めて突き上げられたら……。

想像するだけで微妙に腰が動き始め、彼は慌てて意識を散らした。その時だ。なるべく離れようとする藤臣とは逆に、愛実はさらに距離を縮めてきたのである。

「藤臣さん……」

小さな声で彼の名を呼び、ギュッとスースの襟を掴みもたれ掛けってきた。

「藤臣さん……好きです」

瞬間、彼は目を開け愛実を見た。

濁りのない黒い瞳に囚われ 藤臣の中から？理性？の文字が消失した。吸い込まれるように、艶めく唇を奪う。

そこは固く閉ざされ、簡単に男の侵入を許さないとはしない。だが、それすらも彼には新鮮で衝撃だった。やがて、愛実は苦しそうに身を捩り……開いた口元から、藤臣は舌を差し込んだ。

愛実は驚いたように硬直し、痛いほど藤臣の腕を握った。

（よせ……もう、止める……早く離れるんだ）

頭の中では警報が鳴り響いている。

それとは逆に、左手を愛実の背中に回し、右手で腰を支えた。思わず、力一杯抱き寄せてしまう。そして、愛実の手が彼の背中に回つた瞬間 それだけで達してしまった。

（理性も分別も知ったことか！ 愛実を俺のものにして、それから考えればいい！）

藤臣はドアに背を付け、寄り掛かるように愛実を抱きしめキスを続けた。

刹那 彼の背中から圧迫感が消え、体がふわっと宙に浮く。唐突にドアが開き、彼は地球に重力があることを再認識したのだつた。

～*～*～*～*～

ドアを開けたのは暁であった。

一人の情事はすぐに終わつたらしく、そこに居たのは彼だけである。身支度を整え、化粧室から出ようとした時、奥の個室から妙な気配を感じたという。何気なくノブを回した途端、まるで自動ドアのような勢いで扉が開き　彼は慌てて後ろに飛び退いた。

「キヤツ！」

「うわっ！」

それはまさに不意打ちだつた。

丸つきり支えるものがなくなり、無防備に後ろに転がる。藤臣にすれば、愛実を庇あうと抱きしめるのが精一杯だつた。

「……痛つつ」

思い切り尻餅を付いた上、強かに背中を打つ。まだ頭を打たなかつただけ立派と言つべきかも知れない。

一方、開けたほうの暁も啞然呆然だ。

「これはこれは……先客がいたわけか……参つたな」

確かに、他に言い様はないだろう。

とはいへ、不倫の現場をまともに聞かれたのだ。それを苦笑いで済ませる辺り、藤臣の予想通り、肝の据わつた男だつた。

「……やあ、暁さん。出来ればノックくらいして欲しかつたな」

人工大理石のタイルの上に座りこんだまま、藤臣も必死に余裕を見せる。

だが、これほど慌てた藤臣を見たのは初めてだつたらしく、暁は笑いを堪えた様子で言葉を返した。

「化粧室の前に大きな使用中の札を用意すべきだな。すまなかつたね、愛実さん」

「い……いえ」

あまりの出来事にショックを受けたのか、愛実は藤臣の上で固まつていた。

「抱き合つていたいのは判るが……立てないなら手を貸そつか？」
二人がいつまでも立ち上がらないので、暁がそんなことを口にした。

「あ！　すみません。わたしが上に乗つてしまつて……重かつたで
しょう？　本当にごめんなさい」

「いや……」

もつと抱いていたかった。

さすがに、暁の前でそれを口にすることは躊躇われた。愛実を立たせながら、藤臣もゆっくり立ち上がる。

「謝ることはないさ。可愛いファインセに上に乗られて、喜ばない
男はないよ。だろ？」　藤臣くん

(余計なことは言わずにさつさと出て行つてくれ)

その言葉を飲み込むと、

「それは、ともかく。暁さん、不倫は不味いですよ」

藤臣は矛先を暁の方に向けた。

少しはバツの悪そうな顔をするかと思ひきや、「ああ、そうなんだ。朋美とは離れがたくてね」と、実にアツサリ悪びれる様子もな

い。言い逃れは出来ないまでも言い訳ぐらうするだらう、と藤臣は思つが。

「じゃあ、ずっとですか？　だつたらさつさと朋美にも離婚させて、一緒になればいいでしょ？　もう、田那様はいないんですから」

朋美と暁の仲を裂いたのは一志だ。

一志は突然、暁をNYにやつた。表向きは栄転だが、理由は朋美の婚約が成立したので、結婚式が終わるまで彼を国外に出したのである。

だが、そんな暁を追おうと朋美が家を出でしまう。彼女は暁の子供を妊娠していたのだ。そこを水際で連れ戻し、子供を処分させ安西家に嫁がせた。当時、一志は安西家が所有する土地を欲しがつていて、そのための布石というが……。

暁が日本に戻つて来た時、彼には重役の娘との挙式が決められていた。

これは藤臣の予想だが、暁が渡米する際、一志は美味しい言葉で彼を騙したのではなかろうか？　帰国後の暁の荒れ様は尋常ではなかつた。一志が死ぬなり、離婚したと言つことは……やはり、重苦しい事情があつたとしか思えない。

藤臣が一志のこと口にすると、一瞬、暁の顔が曇つた。

「ま、追々ね。だが、こいつセックスもスリルがあつて楽しいんだ。君らもそつだつたろ？」

暁は都合が悪くなると、再び話をこちらに振る。

それを言われると……藤臣の中にたつた今聞かされた生々しい声が浮かび上がり、落ち着き始めた情熱の熾火が燃り始める。

だが、それは藤臣だけではなかつた。

「おつと、愛実さんもおとなしく見えて、スリルを好むタイプかな？」

暁の言葉に彼女を見ると、頬を染めて俯いている。

「愛実で妙な妄想はしないでくれ！」

彼女に向ける暁の視線が気になり、藤臣は叫んでいた。

「夢の中で彼女を脱がしてセックスしたら……君まで出でてきてボコボコにされそうだな」

暁は笑いながら言つ。

「ええ、そうですね。夢ではなく現実で」

「信一郎くんのよつに？」

「返事が必要ですか？」

「いや　　」これ以上は止めておひづ。可愛い彼女の前だ

笑顔の消えた藤臣から、暁は顔を逸らせた。

「先に行きます。　　愛実」

「ぐ自然に愛実の手を握り、暁を残して二階の化粧室を出て行くのだった。

第41話 期待

「あの……あの、藤臣さん。手を……」

掴まれた手が火傷しそうなほど熱い。

何もかもがこれまでの経験とはかけ離れており、愛実の心は混乱を極めていた。藤臣にもどんな顔で話しかけていいのか判らず、彼の顔を見るのも恥ずかしい。

「あ、ああ、済まない」

「いえ……」

二人は階段の下で立ち止まり、互いに沈黙したまま時間だけが過ぎて行く。

こういったことに慣れているはずの藤臣から、何か言ってくれると言実は期待した。だが、彼も棒立ちで、息をするのも忘れているのかのようだ。

「あ、の……化粧室に行って來てもいいですか？」

愛実は千里に止められた一階の化粧室を指さし、藤臣に告げた。

鏡に映る自分の顔を見た時……なかなか胸の鼓動が静まらず、何度も深呼吸を繰り返した。

?キス?してしまったのだ。それも?・藤臣?・と。

常識的に考えれば、婚約者なのだから当然のことかも知れない。だが、愛実の身は安全だと言っていた、あの約束はどうなるのだろう?

キスを求めたのは愛実からだつた気がする。

実を言えば、あの前後のことによく覚えていないのだ。宏志の行動があまりにショックで……個室を撮影されていたということに動搖して、助けてくれた藤臣に当たつてしまつた。

それには千里の言葉も影響していただろう。彼女は藤臣との深い関係を示唆して、結婚後もそれを続けると宣言した。宣戦布告されたようで、愛実も珍しくカツとなる。

結婚するのは、藤臣の花嫁は愛実なのに……。

しかし彼にとって、十八歳の花嫁は『対象外』なのだ。少しづつ、チクチクと胸を刺してきた痛みがふいに大きくなり、愛実は我慢出来なくなつた。

君には信じて欲しいんだ。頼む、愛実。

藤臣の切ない声が今も耳の奥で響いている。

彼になら、何をされてもいいと思えた。藤臣に信じて欲しいと言わいたら、それこそ、何があつても信じるつもりだ。ジツと目を見ていたら吸い込まれるようになつて……あの時、キスされるのだ、と思った。

愛実が目を閉じかけた時、誰かが化粧室に入つて來たのである。

その先に繰り広げられた暁と朋美の行為は……思い出すだけで、愛実は酷くイケナイことをしてしまつた気持ちになる。この場合、過ちを犯しているのはあの二人なのだ。何といっても朋美は人妻、彼女は夫を裏切り、暁と浮氣をしていたのだから。

音だけでは未経験の愛実には想像出来ない部分もある。だが、未熟な官能を目覚めさせるには？朋美の声？だけでも充分だった。

『藤臣さん……好きです』

(ああ、もう、わたしは何でことを言つてしまつたの!?)

愛実は間近で行われている大人の行為に触発され、藤臣に抱きついていた。胸がざわめき、全身の細胞が彼を求めて……気付いたときには、想いを告白していたのだ。

藤臣は驚いたように目を見開き、その一秒後　一人の唇は重なつていた。

初めてのキスなのに、背中に電気が走ったような不思議な感覚だつた。舌を……押し込まれた時はさすがに怖くなつたが、それでも藤臣を突き飛ばすことなど出来るはずがない。

愛実は鏡の中の自分をまじまじと見つめた。頬がピンク色に上氣していて、瞳も潤んだままである。そつと両手を頬に添え……左右の小指で唇に触れた。

いつの間に曉たちの行為が終わり、朋美が化粧室を出て行つたのかも判らない。それほどまで夢中になつて、彼の唇を受け止めていた。もし、暁が扉を開けなければ、藤臣はどこまで愛実を求めてくれただろう。

そこまで考え、愛実の心臓はトクンと高鳴つた。

(告白してキスされたつてことは……藤臣さんもわたしのことを?..)

俄に浮上した可能性に、鏡の中の愛実は相好が崩れた。彼女は左手のエンゲージリングをそつと包み込むように撫でる。

(これつて……本物の結婚になるの?　ずっと藤臣さんの傍に居られるかも知れない)

愛実は心から、結婚式が待ち遠しいと思つたのだった。

～*～*～*～*～

(俺は頭がおかしくなったのか?)

階段の下で立ち止まり、恥ずかしそうに俯く愛実を見た瞬間。藤臣は彼女を抱き上げ三階の私室に駆け上がり、ベッドに押し倒そつかと真剣に考えていた。

化粧室前の壁にもたれ掛かり、腕を組んでなるべく冷静になろうと努力する。

幸いと言つべきか、暁の不意打ちで下半身は落ち着を取り戻していた。だが、この調子ではどうまで持つか判つたものではない。

愛実の口から藤臣への想いを聞き、予想が当たっていたことに彼の中のストッパーが外れた。堰を切つたように感情の波が押し寄せ、気づいた時には奪つよう口づけていた。

(なんといつ様だ。約束も誓いもあつたもんじやない!)

藤臣は髪の中に手を入れ、搔き龜るよつこする。

その時、空いた皿を抱えパティフロアから出て来た年配のメイドが彼の前で立ち止まつた。メイドは藤臣の顔を物珍しそうに見てゐる。直後、ハツとした顔をして「失礼しました」と厨房の方に足早に消えて行く。

今度は逆だ。厨房から戻つて来た別のメイドが、またまた藤臣の顔を凝視する。

「どうしたんだ? 私の顔に何か付いているのか?」

きつめの口調で問い合わせると、そのメイドも「いえつ! 申し訳

あつません」叫ぶよつて言い、立ち去る。

(何なんだ!? 僕が何をしたって言つんだ!..)

その時、義父の弘明と執事の糸井が何事か話しながら藤臣の前を通り掛つた。執事は彼の顔を見るなり気まずそうに視線を逸らす。しかし弘明のほうは、苦笑しつつ藤臣の前までやつて來た。

弘明は胸ポケットから白いハンカチを取り出し、藤臣に向かつて差し出した。

「珍しいな、君がそんなところを見せるなんて。まあ、愛実さんの口紅と同じ色だから、問題はないんだがね」

藤臣はハツとして口元を押さえた。

「なるほど、皆が顔を背けて笑うはずだ。……ちよつと失礼します」

藤臣は出て来た愛実を弘明に任せ、入れ替わるように紳士用に駆け込んだ。

鏡に映る自分の間抜けさに、彼は笑うしかない。セックスは排泄と変わりないがキスは違つ。そのせいか唇を重ねることに抵抗を感じ、何年もして来なかつた。当然、口紅のことなど考えたこともない。

あれは素晴らしい甘い、身も心も蕩けそうな?キス?だつた。

愛実も決して嫌がつてはいなかつたように思つ。それも当たり前かも知れない。なぜなら、愛実は『藤臣が好き』なのだから……。

抱き締めた彼女の身体も、熱く高ぶつていた。もっと、もっと味わつてみたい。もっと強く深く、何度も、何度も、愛実と唇を……いや、体を重ねてみたかつた。

だがそれは、『好色』という気持ちにつけ込むことになる。

藤臣が狂おしいほど渴望しているのは、ただの色欲だ。愛実をセックスの対象に見ているに過ぎない。どうやら藤臣の中には、制服姿の少女に対する歪んだ欲望があったようだ。新雪を踏み荒らし、我が物にしたいという汚い欲望が。

(「のままじや、遠からず愛実に本性を知られる……もし、そういうたら」)

藤臣が頭を冷やしパーティフロアに戻った時、そこには異様なムードに包まれ……。

第41話 期待（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

エントリーしておりましたアルファポリスの恋愛大賞が終了致しました。

ありがたいことに終始一桁の順位にいたように思います。

（追記・最初の頃に一桁もあつたとか…ごめんなさい、本人なのに覚えてません。） ずっと見てくれてた方かな？教えてくれました！ どうもありがとうございました（^_^）

ご覧下さった皆様、さらにはご投票下さった皆様、本当にありがとうございました。

応援メッセージもたくさん頂き、嬉しい限りです（感涙）

あと2回（多分）で4章が終わります。

今後ともよろしくお願ひ致します（平伏）

「君はどんな魔法を使つたんだい？」

弘明と一緒にパーティフロアに戻るよつに言われ、愛実は藤臣の言葉に従つた。本当を言えば外で彼を待つていたかったのだが、ほんの数分離れるだけだと自分を言い聞かせる。

すると、弘明が愉快そうに藤臣の変化を愛実に尋ねたのだった。「別に、魔法なんて……。わたしのほうこそ、いつも藤臣さんに助けて貰つてます」

藤臣はいつも愛実の窮地に現れる。魔法を使つているのは、彼女ではなく藤臣のほうだらう。さつきのキスも……恋の魔法にかけられた氣分だ。思い出すたび頬が熱くなり、愛実はふわふわした気持ちでつい笑みを浮かべてしまう。

その時、愛実の背後から険のある声が聞こえた。

「愛実様、お聞きしたいことがあります」

それは藤臣の愛人を名乗る千里であった。

白いブラウスに紺色のロングスカート、白い前掛けを付けた彼女は意地悪そうな笑みを浮かべている。

藤臣は、「約束は守る」「不実な真似は絶対にしない」そう言つていた。でも過去は……彼は千里にも、あんなキスをしたのだろうか？ 愛実の中に芽生えた女の感情が、千里に対する笑顔を引き攣らせる。

「なんでしょうか？」

「ハンカチを落とされておりませんか？ これを拾つたのですが」

それは確かに愛実のハンカチだつた。

化粧室で見つからず、備え付けのエアタオルを使用したのだ。

「はい、わたしの物です。わざわざおどりも、ありがとハハハ」といました

気に入らない女性とはいえ、礼はちゃんと言ひべきだ。愛実はそう思い頭を下げた。

ところが、受け取らうとした愛実の前で、ハンカチをふつと上に持ち上げ、ひらひらさせる。

「いつ何処で落とされたか、覚えておられます？」

「え？ いいえ……落としたことに気付いたのがついさっきなので」

すると、千里は片側の口角を吊り上げ、笑いながら言つたのだ。

「そうでしょうねえ。暁様との逢引現場ですもの。やる」と夢中で、お氣づきじやなかつたんでしょうねえ」

彼女はいきなり大声で、それも、とんでもない内容を口にした。周囲の人間は驚き、一齊に愛実を見る。

「なんつ！？ 仰る意味が判りません！」

「いやですわ、とぼけて……。私、見たんですよ。一階の化粧室でコソコソと会われてたでしょ」

横から、「君、めつたなことを言つもんじやない。使用人の分を弁えなさい！」弘明が千里を叱り付けるが……。

「僕も聞いたよおー」

「へラへラと笑いながら、口を挟んできたのは宏志だ。

「僕の部屋は近いからね。すつごい女のヨガリ声が廊下まで丸聞こえだつたなあ。確か……愛実さんの少し後に、暁さんが入つて行

つたのは見たけどね

千里と宏志はグルなのだ。

そもそも愛実を二階に連れて上がったのも、この一人の企みである。仮に暁が化粧室に入る所を見たのだとしても、宏志は藤臣が中に居たことを知っているはずだった。

(まさか……暁さんと朋美さんも?)

朋美はともかく、暁までもが彼らと組んでいるとは思いたくない。だが、藤臣は暁を『冷酷な男』と言っていた。それを考えれば、愛実はいつたい誰を信じ、誰に警戒すればいいのだろう?

困惑する彼女に追い討ちを掛けるように、

「あら、暁さんはホント、面倒な相手に手を出すのがお好きだから……ねえ、弘明さん」

嫌味たっぷりに、加奈子は離し立てた。

弘明は加奈子が苦手らしい。彼女の参戦に、愛実を庇う言葉が出て来なくなつた。

この加奈子の台詞に、愛実は加奈子だけでなく弘明も、暁と朋美の関係を知っているのだ、と気がついた。思えば、初対面の朋美的態度は普通では考え難いものだ。暁にしなだれ掛け甘える姿は、まるで夫婦か恋人同士に見えた。

この加奈子の言つ? 面倒な相手? とは間違いないく朋美のことなのだ。

宏志や加奈子の加勢に気をよくしたのか、千里は更に声を上げる。
「それだけじゃありません。ゴミ箱にティッシュが捨ててあります。詳しく言わなくてもお判りでしょうけど、持つて来てお見せし

てもいいんですよ。愛実さんのハンカチは、その『ミニ箱の横に落ちてたんですから。私……藤臣様がお氣の毒で』千里はわざとらしく頬を押さえた。

当の晩に否定して貰おうとフロアを見回すが、彼の姿はどこにもない。

だが、朋美は加奈子のすぐ後ろに立っていた。彼女の表情は凍りつき、愛実と視線が合った途端、顔を逸らせたのだ。彼女にとつては不倫の関係である。余計な口を出して、喘ぎ声の張本人が自分でみると暴露されるのが怖いのかも知れない。

「愛実様、答えて頂けませんか？ 大奥様はとても厳しい方ですのに、このことはご存知なんでしょうか？ 私どもにすれば、とても若奥様なんて呼べませんわ」

愛実は迷っていた。

真実を言えばいい。だが果たして、晩と朋美の情事をバラしても良いものだろうか？ 加えて、宏志の悪事を明らかにすれば、母親の加奈子はムキになつて否定してくるだろう。それに、藤臣と千里の関係は絶対に口にしたくない。

上手くかわす言葉が見つからず、愛実は無言で唇を噛み締める。

「答えられないという事は、お認めになるんですね？」

千里は勝ち誇ったような顔になる。

「まあそうなの？ あなた、親族を集めた顔見せの席なのよ。それを、なんてふしだらな……」

加奈子が大仰な仕草で愛実を糾弾しようとした時。

「私が強引に引っ張り込んだんです。婚約したんですから、少しは

大目に見て貰えませんか？ 伯母上

やう言つて姿を見せたのは藤臣だった。

「それは……どういう意味なの？ 藤臣さん」
険を含んだ加奈子とは対照的に、答える藤臣は至つて柔らかな口調だ。

「彼女に上の階を案内していたんです。ついでに一階の化粧室に寄つて……詳細はご容赦下さい。暁さんは主役が引き籠もるなど、探しに来てくれただけですよ。まあ、彼には少々、恥ずかしい所を見せてしまいましたが」

藤臣は照れ笑いを浮かべつつ、愛実の横に立ち、当たり前のよう
に腰を引き寄せた。

二人の間に親密な空気が流れる。それは男女の関係を匂わせるの
に充分なもので……千里の勘違いで話は落ち着いたのであった。

「あの、藤臣さん、ありがと」やれこます

(やつぱり、来てくれた！)

愛実の心は浮き立つていた。

他の誰が信じられなくても、藤臣だけ信じて待つていればいい。
彼は愛実のヒーローなのだ。白馬に乗った王子様のように、飛んで
きて愛実を助けてくれる。

恋に浮かれる彼女は嬉しさのあまり、自分から藤臣に寄り添つた。
直後、さり気ない動作で藤臣は愛実から離れたのだ。

「宏志の阿呆はもう逃げやがったな……。面前の件はひやんとしておく。一度とこんなことはない」

藤田は舌打ちして辺りを見回しながら言つ。

ズキンとした胸の痛みを感じつつ、愛実も周りに目をやつた。場違いな普段着姿の宏志はどこにもいない。藤田の登場に大慌てで逃げ出したようだ。千里すらその辺にはいなかつた。

そして……次に愛実が美馬邸を訪れた時、藤田の逆鱗に触れた千里の姿は消えていたのであつた。

第43話 迷走

藤臣が運転する車に乗るのはこれで二度目だ。

一度目は信一郎に襲われた時で、愛実はほとんど覚えていない。あの夜もポルシェだったはずだが、愛実の中ではハンドルを握る彼を見るのは初めての気分だった。

ギアをチェンジする指先がカッコよく見えるのはなぜだろう。ちらりと視線を上げると、前髪が少し乱れて額にパラパラと落ちていた。プライベートではいつも前髪を下ろしたままだ。そして、仕事を行く時だけ綺麗にセットする。

ほんの短い期間だったがホテルの一室で藤臣と一緒に過ごし、愛実は彼のいろんな面を知った。

愛実の場合、どんなことでも記念や思い出に、と色々残してしまった。ホテルに置かれた冊子や、彼と一緒に入ったお店のコースターまで。よろしければどうぞ、とお店の人一枚貰い、愛実は笑顔で礼を言つた。小さな頃から集めた思い出の品は、ダンボール箱に入つた宝物だ。

だが、藤臣は違つた。

必要なものを最小限、というのが基本らしい。写真の類が嫌いで、携帯カメラで撮ろうとしても嫌がられる。過去はさっさと忘れ、未来に過大な期待もない。それはひどく刹那的で、愛実には殺伐とした生き方に映つた。

(わたしが藤臣さんを変えられたら……今よりもっと好きになつたら、一人で一緒に未来を語れるかも知れない)

そんな愛実の胸に、わずかだが影を落としていたのは藤臣の些細な仕草だ。

傍に寄ろうとする彼女とは逆に、藤臣は離れようとした。最初は気のせいかと思ったが、何度も続くと愛実は不安になる。

だが今の彼女は、感情の大部分が？初めてのキス？で占められていた。小さな不安など、見えなくなるくらい。

ポルシェが西園寺邸の門の前に停まった。

数年間誰も住んでいなかつたせいで、邸内だけじゃなく庭も荒れ放題だ。庭師に頼む余裕がないため、愛実が弟妹に手伝わせてせつせと手を入れている。特に門扉の辺りはお客様を迎える為に、真っ先に綺麗にしたばかりだ。

愛実が車から降りると、藤臣も降りて來た。

車内ではずっと難しい顔をしたまま、彼は無言で……。愛実から話しかけるタイミングが掴めず、結局、会話のないまま家に着いてしまった。

門の前で愛実は立ち止まる。

別れ際のキスというのは映画やドラマでもよく見かけるものだ。ひょっとしたら、と愛実は密かに期待していた。

愛実がそつと藤臣を見上げると、彼は呼応するように視線を逸らせたのである。

「さつきは済まなかつた。暁さんたちに当たられたらしい。……男つて奴はこれだから始末に負えないな。もう、一度とあんなことはしないつもりだ。君が結婚を取りやめる気になつてないといいんだが」

それは愛実が一番聞きたくない言葉だつた。

心底申し訳なさそうな……藤臣の謝罪。積み上げた期待は脆くも

崩れ、独りで浮かれていた自分がとんでもなく恥ずかしい気持ちになる。

「い……え、特に気にしてませんから。あれから……何でもあります」

胸の奥から押し出すように答えた。

喉が詰まつて苦しい。息をするだけで、涙が零れそうになる。

「ああ、それは良かった。だが、誰とでもしないでくれよ。朋美のような真似をされたら、私の恥になるから困る」

「……判つてます。お話がそれだけなら……おやすみなさい」

愛実はサッと頭を下げ、藤臣に背中を向けた。

背後で運転席のドアが閉まり、続けてエンジン音が聞こえた。あつという間に車は見えなくなる。辺りは水を打つように静まり返った。

温かかった心が氷水に浸されたように冷たくなつて行く。立っているのも辛くなり、愛実は門のすぐ内側に座り込み、声を殺して泣くのだった。

愛してる。本当の結婚にしないか？

そんな風に言われるとばかり思い込んでいた。だが、この結婚は取り引きなのだ。愛実の一家が救われて、藤臣にとつても都合が良かっただけのことなのに。

あのキスには、特別な意味は何もなかつた。

弘明の言葉にも気を良くして、愛実が勝手に浮かれていただけで

ある。

(もつ絶対、勘違いしない。藤臣さんが好きって態度は取らない。
もつ……これ以上、好きにならない)

初めてのキスと失恋は、愛実の心を頑ななまでに藤臣から引き離した。

今度は正式な婚約パーティーがある。そして、準備が整いしだい結婚式が待ち構えているのだ。それは愛実が初めて好きになった彼と……でも、決して振り向いてはくれない男性と。

薄いボレロ越しに、春の夜風が肌に染み込んで行く。心も体も、愛実は凍えそうに寒かった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

しばらく走つて藤臣は路肩に車を停めた。抱き付くよつて、ハンドルに顔を伏せる。

(愛実を泣かせたかも知れない……)

迂闊にも近づき過ぎた。あんな風にキスしたことで、愛実に期待を持たせてしまったのだ。衝動に突き動かされ、彼女を欲しいと思う時はいい。だが、その熱が引くと後味の悪さだけが彼の中に残つた。

愛実を妻にして、じく普通の家庭を築くことが出来たらどれほど幸せだろう。だが。

藤臣が愛実に告げた『祖母の財産を相続したい理由』のほとんどが嘘なのだ。会社を継ぎ、美馬邸を彼の名義にした時は……会社も家もバラバラにして叩き売る。家族の将来も、社員の生活も知つたことではない。

ただ？ 美馬？ の名が付いた全てを踏み躡り、粉々にしてやりたい。その一念で、彼は生きてきたのだ。

（この結婚が、人を不幸に陥れる為だと知れば……愛実はどうするだろう）

憎かつた。？ 美馬？ の全てが、自分の中に流れる血さえも、藤臣には憎くて堪らない。愛など、生まれた時から一度も与えられた記憶がない。愛実は、藤臣の両親も彼を見守っている、と言つたが……それはあり得ないことだつた。

一志が藤臣に遺産を残したのは、息子が彼ひとりだつたからに過ぎない。

貧しい家の出身だつた一志は、その商才だけで身を立てた男だ。美馬の婿養子になり企業家としては出世したが、弥生の両親が存命中は何一つ自由にならなかつたという。

彼が暴君に変わつたのは、弥生の両親が立て続けに亡くなつた後だつた。そうでなければ、藤臣を引き取ることなど不可能だつただろう。自分が駒にされた腹いせに、一志は他の人間を駒にした。そして今度は、藤臣が彼らを駒にする番だ。

愛実は決して、恵まれた人生を送つているとは思えない。なのに、誰も恨まず人間を信じる強さを持つている。藤臣とは生きる世界が違う。

（だが、後から付け足した言葉は……あれは……）

心にもない悪態をついたのは「何でもない」という愛実の言葉に
擡^{もた}げた男の嫉妬^{もねらひ}。捨て切れぬ恨みが藤臣の口を曇らせて、愛実を
求める心に田隠しをする。

彼は出口を失った愛情を抱え、闇の中にアクセルを踏み込んだ。

第43話 迷走（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

今回で第四章が終わり、次回から第五章へと進みます。

ちょっと切ない引きですが…

次章開始まで、少しお時間をトドセ。

来週中には始めますので、よろしくお願い致します m(—)m

深夜一時、藤臣は祐天寺駅に程近いマンションを訪ねていた。入り口の見える場所に車を停め、彼は携帯電話を掛ける。

五回コールして相手が取るなり藤臣は言った。

『私だ。今から行く』

『えつ……ここに来るの？ 本気で？』

電話の相手は仰天して、それ以上は言葉も出ない。

『何か、不味いことでもあるのか？』

『そ、そんなはずないじゃない。ここに来てくれるなんて、初めてだから……うれしいわ』

その取つてつけたような台詞に藤臣は苦笑して電話を切った。女性優業にも色気を見せているようだが、この大根ぶりでは話にならない。彼は煙草に火を点け、「三十、いや、二十分もあれば充分か？」

… そう呟いた。

目立つ車だが、ちょうどマンションの玄関口からは死角だ。もともと、マンション自体が引っ込んだ場所にある。最寄の駅まで徒歩三分、都心にも近く隠れ家的マンションと言うのが？ 売り文句？ だつたように思う。そのため、外見はかなりシンプルで入り口も狭く、四階建て、総戸数十四戸という小さめのマンションだった。

そこは、藤臣が愛人の長瀬久美子に買つてやつたマンションだ。だが、来たのは今日が初めてで、彼はオートロックの番号すら聞いてなかつた。

二十分経つたが人が出でてくる気配はない。諦めて藤臣はマンションの専用パーキングに停め、エントランスに向かつた。ドアホンを鳴らすが中々出ない。その時、ちょうどエレベーターの扉が開いた。

降りて来たのは水商売風の若い男だ。酒の匂いをブンブンさせていた。その中に男性用コロンの香りも混じっていた。男はすれ違い様、チラリとこっちを見た。

その思わずぶりな視線に気付かない振りをする藤臣だった。

／＊＼＊＼＊＼＊＼

「随分、酒臭いな」

ドアが開くなり、藤臣は我が物顔で部屋に入つて行く。

久美子は慌ててスリッパを差し出した。

「眠れなくて……少し飲んでたの」

濡れた髪をかき上げながら、久美子は答えた。

特に変わった間取りでもない、一LDKのマンションである。案内の必要もなく、藤臣はつかつかと奥の部屋に入つて行つた。彼は上着のボタンだけ外して、カウチソファに座り込む。

その瞬間、室内の空気がふわっと広がり、さつき嗅いだばかりのコロンの匂いが彼の鼻腔をくすぐつた。

（まあ、こんなもんだな……）

片笑みを浮かべ、藤臣は尋ねる。

「オートロックを開けるのに、あんなに時間が掛かるものなのか？」

「シャワーを浴びてたのよ。あなたが来るって言うから」

甘い声で言いながら、久美子はナイトガウンを脱ぎ捨てた。彼女は黒いシースルーのベビードールを着ている。ショーツも黒のTバツクで、生地は必要最小限といったものだ。

「ねーえ、藤臣さん、どうしたの？ 部屋には来ないって言つてたくせにい。そんなにあたしが欲しかつた？」

久美子は藤臣の隣ではなく、膝の上に乗り掛かつた。^{しな}品を作りながら、彼女は両腕を藤臣の首に巻きつかせる。

「…」 こういう女の仕草に満足していたはずだった…… これまで。

愛実を見るだけで欲情し、頭の中はセックスで一杯になる。まるでやりたい盛りの中学生だ。おまけに下半身の反応も中学生男子と大差ない。それが、久美子の誘惑には沈黙したままだ。

彼女の顔を見る前は、

（別れ話をする前に、性欲の処理だけさせてもらおつ…… 少し余分に払つてやればいい）

嫉妬を含む愛実に対するやり場のない感情を、久美子にぶつけるつもりだったのだ。

「下りてくれないか？ これじゃ真面目な話が出来ない」

藤臣の冷ややかな声に久美子も何か感じ取つたらしい。

「いやだわ、そんな怖い顔して……」

無造作に彼女の腕を払いのけ、藤臣はソファの隅に座り直す。

もしこれが愛実であれば、間違ひなく泣き出しだろう。愛実は藤臣の実像とは掛け離れた位置に、理想の男性像を重ねている気がしてならない。女を道具のように扱う彼の本性を知れば…… 「好きです」という言葉も取り消すだろう。

一方、久美子はそんな藤臣しか知らない女だ。彼のつれない態度は慣れているらしく、まるで気にしていない様子で、「飲む？」と新しい缶ビールを差し出した。藤臣が断わると、久美子は自分で飲み始める。

「そうだわ、思い出した！ ねえ、来月は東部デパートの開業記念パーティなんですか？ T国ホテルであるそつじやない。もうつ、どうして早く言つてくれないのでよ。今からじや、新しいドレスが用意できないわ」

唐突に声を上げ、久美子は缶ビールをテーブルに置いた。心底困った表情で、ソファの背に肘を掛けて額を押さえている。

「必要があるのか？」

「何言つてゐの!? あたしが着飾らないと、あなたがパーティで恥を搔く事になるのよ。そうでしょ? 美馬社長さん」

どうやら久美子は完全に、今度のパーティにも藤臣のパートナーとして出席すると決めているらしい。確かに、これまで大きなパーティには久美子を伴うことが多かつた。マスコミの目を引き、記事にするための手段だ。お手軽に宣伝効果が得られる、といったところか。

だが今回は、愛実のお披露目がメインのパーティだ。久美子に出番はない。

「いや」

藤臣は煙草を取り出すと火を点け、短く希望を伝える。

だが、久美子は納得出来なかつたようだ。

「それつてどういうこと? まさか、年増の秘書と出る氣じゃないでしょうね。あんなガチガチで色気のない女をエスコートするつもり? そんなの笑い者になつちゃうわ。秘書には秘書の仕事だけさせてりやいいのよ。あたしと一緒にほうがマスコミも集まるに決まつてるんだからつ」

大仰な手振りで、久美子は一歳しか変わらない由佳を年増呼ばわりした。

藤臣にはよく判らないが、この久美子は由佳に妙な対抗心を持っているらしい。由佳のほうもそのようだが、利口な彼女はそれを表には出さない。

そんな久美子のクレームを無視すると、藤臣はテーブルに置かれた陶器の灰皿に煙草の火を押し付け、ソファから立ち上がった。

「ねえ、何とか言つてよ、藤臣さん。仕事関係で呼ばれたパーティ以外は、トクに東部デパート主催の時は全部パートナーはあたしじやない! 第一、デパートのイメージモデルなのよつ! ねえつたら!」

面倒な話は早く済ませるに限る。藤臣は久美子が外しかけたネク

タイを両手で締め直した。ブラックスーツにタイはシルバーのまま
だが、さすがにベストは脱いでいる。

「パーティの席で、婚約を発表する」

一瞬、何のことか判らなかつたらしい。久美子はポカンと口を開けたまま、呆然と藤臣を見上げていた。しかし、見る見るうちに彼女の顔は上気して、両手で頬を押さえたのだった。

第44話 整理（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

第五章スタートです。

少し長くなるかも…

よろしくお願い致します。――――――

久美子は驚き、声を失った。

「この間も急に呼び出されたのよ。なんだかセックスの雰囲気も変わってきたし、いよいよあの男もあたしから離れられなくなつたつてことかしら？」

ほんの数十分前、この部屋のソファで男と戯れながら口にした言葉だ。

藤臣が来る直前に慌てて追い出した。若い男との浮気がバレて怒鳴り込んで来たのか、とビクビクしていたが、どうやら違うらしい。そして藤臣が口にした言葉　それは彼女の脳内で、『パーティの席で、私たちの婚約を発表する』に都合よく変換されていた。

「ねえ、待つて、ちょっと待つて。いきなり、そんなこと言われても……あたしにも心の準備が」

藤臣は久美子の体に夢中なのだ。だからこそ、周囲から『公私混同・女の言いなり』と噂されても、久美子をイメージモデルに抜擢してくれた。

このマンションもそうだ。名義は藤臣のままだが、久美子の好きに使っている。海外出張にも彼女を同伴し、少しねだればブランド品も買いたい放題だ。そんな様子が写真週刊誌に掲載され、久美子は『御曹子の意中の恋人』『未来の社長夫人』と書かれたが、彼は一切否定しなかった。

(とうとうあたしのモノになつたんだわ!)

この時の久美子には、怪訝そうに見下ろす藤臣の視線など気付くはずもなく……。

「準備？」

「ええ、そうよ。だって、あなた結婚はしないって……だから、あたしもずっとそう思つてきたんだもの」

少し間を空けて藤臣は、「こっちにも都合があつてね。事情が変わつたんだ。不満なのか？」と尋ねて来た。

「まさか！？ イエスよ。もちろん、イエスだわ。ああ、夢見たい！ 大丈夫よ、ちゃんと判つてるから。全てあなたの都合に合わせるわ」

婚約発表なら記者会見もあるかも知れない。

日本で一、二を争う財閥の御曹司に見初められて、億万長者の花嫁になる……久美子は夢のような出来事に酔つっていた。

「それで、一つだけ確認しておきたいんだけど……。あの秘書はどうするの？ エエ、もちろん、あなたの好きにしていいのよ。あたしは何人愛人がいても平氣だわ。でも……」

次の瞬間、藤臣の相好が崩れた。

彼女は微妙な笑みを気にも留めず、彼の返事を待つ。

「ああ、なるほど。いや、私は結婚の誓いは守るつもりだ。全ての愛人と手を切る」

久美子は顔を輝かせた。

（やつたわ！ あたしの勝ちよー）

心の中でガツツポーズをする。

藤臣の愛人兼秘書である奥村由佳は、有名私立大学を卒業していた。一方、久美子は高卒だ。そのため、ニューヨーク・パリ・ロンドンなど会議を伴う海外出張には一度も連れて行って貰つたことがない。久美子を連れ回すのは、主に視察やレセプションに招待され

た時だけである。

初めてデパートの仕事で顔を合わせた時、「英語も話せないなんて……」そう言って鼻で笑われたことは、今でもしつかり覚えている。

でも、これからは違つ。

由佳は久美子に対して、「奥様」と頭を下げる立場なのだ。久美子は今夜ほど彼女に会いたいと思つたことはなかつた。

／＊＼＊＼＊＼＊＼

最初は、久美子が何を言つてゐるのか判らなかつた。

てつきり自分との関係はどうするのか、契約を解消するなら違約金を払え、そんな言葉を待つていた。ところが、妙に二二二二とし始め、藤臣に抱きつかんばかりである。果ては、なぜか秘書のことまで口にして……。

ようやく、久美子がとんでもない勘違いをしていることに気付いた。

(何をどうすれば、そんなことを思いつくんだ?)

呆れ返つたが、これに乗らない手はない。先に言質げんちを取つてしまえばいい。

「じゃあ、それでいいんだな、久美子。 久美子! 聞いてるのか?」

藤臣の苛立つた声に、久美子は頬を弛めつつ答えた。

「ええ、そう言つてるじゃない。嬉しいわ

「このマンションだが、君の名義に変える用意がある
「そんな……マンションなんて」

ついこの間まで、契約が終わつたら名義を自分にして欲しいと擦り寄つっていたのが嘘のようだ。確かに社長夫人となれば、こんな数千万円程度のマンションなど、今更、に違いない。

「それから、東部デパートのイメージモデルの件だが」

「判つてゐるわ。モデルはすぐに辞めます」

「辞める？ 契約は来年の三月まであるんだが」

藤臣の言葉に久美子は氣取つた笑みを返した。

「いやあだ、もう……これから覚えなきやならないことがたくさんあるじゃない。それに、社長夫人がモデルなんておかしいわ。あなただつてそう思うでしょ？」「

久美子が「社長夫人」と口にした以上、はつきり言わねばならぬい。

（それにしても……いい加減、気付きそうなものだが）

藤臣はため息を吐き、改めて久美子に告げた。

「久美子、君は人の話を聞いてるのか？ 私は今度のパーティで婚約を発表し、来月にはT国ホテルで挙式披露宴が決まつた、と言つてるんだが」

「そんな、来月なんて早過ぎるわ！ ウエディングドレスだつてすぐには……レンタルなんてあたしはイヤよ！ 第一、恥を搔くのはあなたよ」

「済まないが、私の挙式披露宴に君を招く予定はない。六月の挙式は花嫁も納得していることだ。ドレスの心配まで君がする必要はないよ。そういうことだ。私の都合に合わせてくれて感謝する」

藤臣は心にも無い感謝を口にすると、上着のボタンをはめながら玄関に向かつた。

その後を、久美子は小走りに追いかけて來た。

「待つてよ！ あなたは今、あたしにプロポーズしたんでしょう！？」

「彼女は藤臣の左腕に縋りつく。

「プロポーズ？ ……何のことだ」

「パーティで婚約を発表をするつて、私たちのじょう？」

「私の、だ」

「……他の、愛人とは手を切るつて……」

久美子の声が途切れ、指先はワナワナと震え出す。

「全ての、と言つただろう？ 君も了承してくれたじゃないか」

「ふざけないでつ！ こんな……こんな、人をバカにしたやり方…

…訴えてやるつ！」

予想通り、久美子は金切り声で叫び始めた。

「わざか一年半の愛人関係で、どれほどの慰謝料が取れると思つて
るんだ？」

「婚約者も同然よ！ 週刊誌に『結婚秒読み』とか書かれても、あ

なたは否定しなかつたじやない」

「肯定もしない。君との付き合いはマスコミを利用した宣伝効果
の意味もあった。このマンションは私の誠意だ。法的手段に訴える
と言つなら、好きにすればいい。だが、君はすでに不相応なものを
手にしている。弁護士にでも相談するんだな」

藤臣は抑揚もつけず、一気に言い放つた。そのまま久美子の手を
振り払い、靴を履く。

「許さないわ……」こんな急に、ついこの間だつて、あたしを呼び出
して抱いたくせに……」

「宣伝費以上の金を、君にはつき込んでやつたんだ。言われるま
に脚を開くくらい、当然だらう？」

小馬鹿にした藤臣の言葉に、久美子は真っ赤になつて手を振り上
げた。だが、その手は彼の頬に触れる前に押さえられる。

「離しなさいよ！ 引つ叩いてやるわ！」

「女に叩かれる趣味はない。それと、女には手を上げない主義なんだ。ありがたく思え」

久美子は手を放された瞬間、玄関に座り込んだ。そんな元愛人に一瞥もくれず、藤臣はマンションを後にしたのだった。

第45話 悪党（後書き）

御堂です。

「ご覧いただきありがとうございます。」

ヒーローにあるまじき悪党ぶりですが…（＾＾・）

「こんな時だからこそ、一息できるものが…」 そうこいつたお声を頂
や、ありがたい限りです。
おそらく、避難されてる方が田にむれる余裕はないでしょうが…
微妙な辺りで不自由に耐えておられる方の気休めにでもなれば、と
思つております。

更新がんばります。

引き続きよろしくお願い致します。（――）三

第46話 停滞

五月吉日、T国ホテルで東部デパート創業七十周年の記念パーティが開催される。

日本最大級の宴会場？孔雀の間？が使われ、招待客は軽く一千人とも。ここ数年、これほどまで盛大に行われたことはない。東部デパートの場合、バブル経済の最盛期で迎えた五十周年以来の規模であろう。

T国ホテル、インペリアルフロアの一室。本皮のリクライニングチェアに座り、オットマンに足を投げ出しながら、藤臣はため息を吐いた。

テーブルの上には週刊誌が無造作に置かれている。美馬グループの記事が掲載されたものばかりだ。

「本当に手を切られるとは思いませんでした」

瀬崎は感心したように声を上げた。

久美子との関係を清算する為、手切れ金としてマンションを渡すという書類一式を目にしたせいだ。女性問題に関して、藤臣はよほど信頼されていなかつたとみえる。

「だが、サインせずに逃げ回つてゐる。馬鹿な女だ。これ以上粘つても条件が悪くなるだけなんだがな」

ルーズに見えて、久美子は金には細かい女だ。藤臣との関係を一切他言しないといつ条件で、イメージモデルは契約満了まで続けら

れるように配慮した。加えて、それまでの月極め手当でも一括で支払うよにしてやつたのだ。これ以上の条件はないはずだった。

「裏で入れ知恵する人間がいるのでは？」

瀬崎は書類を見ながら言つ。

「そんなはずはない。ばあさんも、現社長の信一も、久美子との繫がりは皆無だ」

「暁さんはどうでしよう？　信一郎様の件でも、色々暗躍されたようですし……」

香港の一件だろう。暁がいち早く写真を手に入れたのは調査済みだ。情報を得ただけか、または、その情報元が久美子である場合も考えられる。

「まったく神出鬼没の奴だな。女なら誰でも、か……豚のように雑食な男だ」

悪態をつく藤臣に向かつて、「そうですね。雑食など、ろくなことにはありません」しみじみと瀬崎が言つ。

（俺にも反省しきつてことか……つたく）

藤臣は咳払いをして、話を変えた。

「愛実の様子はどうだ？」

「社長とお一人の時間がまるで取れないことを、非常に悲しんでおられました。結婚に向けてのスケジュール調整でお忙しいのです、と説明しましたが」

婚約披露パーティーから、ひたすら愛実を避けてきた。

理由は簡単だ。一人きりになれば、欲望を抑える自信がないからである。少しでも時間が出来れば、思い出すのは愛実とのキスだ。出来ればもう一度、さらにはもつと先まで、そんなことに意識が集中している。

つい先日も、会議中にボンヤリして「ご婚約が決まって、気もそぞろですな」そんな言葉で重役連中に笑われたばかりだ。

こんな調子で新婚旅行に行き、同じ部屋で寝起きして、平静でいられるのだろうか？ 藤臣にはどうも心許なく、余計に愛実の顔を見るのが怖かつた。

藤臣が無言でいると、

「愛実様は社長のことを好きでいらっしゃるようですね

瀬崎がポツリと言つた。

「それはっ！ いや、それは、別に俺が仕向けた訳じゃ……」

（……いや、あのキスは、仕向けたことになるのか？）

次第に声が小さくなり、藤臣は再び黙り込む。

「よろしいと思いますよ。このまま愛実様を妻に迎えられて、普通の家庭を築かれてはどうでしょ？ 復讐の形は一つとは限りません。社長が幸せにならることも、充分な復讐では？」

瀬崎は藤臣の積み重なった憎しみを知っていた。全て承知の上で、彼は補佐してくれたのだ。そして生真面目さゆえに、藤臣の気持ちを復讐以外に向けようと努力している。

「そうだな……あの外道が生きていれば、俺もそう出来たかも知れん。だが、さつさと死んだ挙げ句、感謝しようとばかりに認知して財産を残しやがった。叩き壊してやる以外に、どんな仕返しがあるんだ？」

「では約束通り、愛実様を形ばかりの妻にして、いざれ自由にして差し上げる、と」

「……ああ……そのつもりだ」

瀬崎は息を止め、「クリと睡を飲み込んだ。

「その時は社長、私が愛実様に交際を申し込んでも構いませんか？」

正式な婚約者お披露目当日、瀬崎から正面切つて言われるとは思わず……言葉を失う藤臣だった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

二人の婚約が発表されたのはパーティー前日のこと、スポーツ紙朝刊がそれを報じた。

『財界のプリンス・美馬藤臣氏（二十九歳）ついに結婚！　婚約者はなんと十八歳の女子高生・西園寺愛実さん』

『美馬グループの次期総帥・美馬藤臣氏に十八歳の花嫁！　旧華族の『令嬢・西園寺愛実さんは現役女子高生』

愛実の学校名からフルネーム、ショットの写真入りで載せられたのだ。もちろん、藤臣側から提供したものだと聞いている。

美馬の祖母・弥生と愛実の祖父・西園寺亘は旧知の仲で、縁組は弥生が熱望するものだつた。しかし弥生は政略結婚を望まず、孫息子たちと愛実を引き合わせただけに留める。

その中で藤臣と愛実が惹かれ合い、親交を深めることに。結果、愛実の十八歳の誕生日を機にプロポーズして結婚が決まった。愛実はまだ若く、高校在学中だ。だが一人は弥生の年齢や体調を考慮した上で、今年の六月、T国ホテルにて挙式披露宴を行うことに決定した。

それに先がけて、藤臣が社長を務める東部パーティ七十周年記念パーティの席上にて婚約発表を行う。

以上が記事の内容であった。

パーティ当日の朝、母は華やいだ衣装に身を包み嬉しそうだ。愛実は自分よりはしゃいでいる母を、思いのほか落ち着いた気持ちで見ていた。

藤臣と婚約する、そんな書類に愛実がサインをしてから、母がお金のことで煩く言わなくなつた。瀬崎に確認したところ、藤臣が現金を渡したはずはない、という。そうなれば、金の出所は弥生で間違いないだろう。

あの親族に向けた婚約披露パーティ以降、藤臣と二人きりで会うことになかつた。藤臣に避けられている気がしてならない。それも瀬崎に伝えたが、「気のせいですよ」と笑顔で返された。

(多分、わたしが「好き」なんて言つてしまつたから……)

あのキスは單なる『当たられただけ』のキスだつたのだ。大人の女性なら軽く笑つて流してしまつようなキス。それなのに、愛実から真剣な表情で想いを告げられ、藤臣は困つているのだろう。

今度会つたら「好き」を取り消そう。何でもない顔で「キスくらい平気」と言つたら、またホテルで過ぐしたような時間を持てるかも知れない。

その感情が、すでに「好き以上」であることに気付き、涙が込み上げてくる愛実だった。

今、愛実がいるのはホテルの美容室だ。パーティ直前にヘアメイクをしてもらっていた。

愛実より遙かに年上の美容師たちは、当然主役である彼女に気を使い、完全にお姫様扱いである。その反面、これまで藤臣が噂になつた女性たちとまるで違つので、色々気になるのは確からしい。

「今朝の新聞を読ませて頂きました。まあ、本当にお幸せそつで…
…お似合いですわ」

美容師は数人いて、皆が同じように頷いている。全員が綺麗に眉を描き、鮮やかな口紅を塗り……当たり前だが、仕事をしている大人の女性ばかりだ。愛実には気後れすることこの上ない。

それだけでなく、愛実自身が彼とは歳が離れていて、不釣合いだと感じているのに。お世辞と判る分だけ胸が切なかつた。

「ありがとうございます。でも、十一年も離れていますから。わたしはこいつた席に出るのも初めてで、何も判らないんです」

「あら、年齢なんて関係ありませんわ。こちらのパーティドレスも美馬様がお選びになられたとか。わたくしども、お嬢様のご希望に添つて最善の仕事をするように、と美馬様から申し付かつておりますし……。こんなに愛されておいで、羨ましい限りですわ」

愛実は髪を梳く美容師の言葉に驚いた。まさか、藤臣がそんな気遣いを示してくれたなんて。

「それは、藤臣さんから直接ですか？」

パツと明るくなる愛実の声とは逆に、美容師のトーンは下がった。「あ、いえ……直接ではなかつたような。秘書の男性からお電話い

ただいて。あ、でも、美馬様の「」命令と仰っておられたので、

それは、おそらく瀬崎であろう。彼なら、命じられなくても愛実の気持ちを考え、手を回してくれるはずだ。

「」しばらぐ、瀬崎と話す機会が多くなっている。

理由は簡単だ。藤臣が仕事と言つて断わるたび、瀬崎が申し訳無さそうに愛実の相手をしてくれる。彼女が聞かなくても、「結婚式や新婚旅行の予定を空ける為に、懸命に仕事を片付けておいででして……」そんな風に説明してくれるので。

困っていることはないか、欲しいものはないか、と心配してくれるのも瀬崎だった。そして、藤臣の命令だと言つて様々なフォローしてくれるが……きっと瀬崎の配慮に違いないと愛実は思つている。そしてこのパーティードレス。

花嫁衣裳を思わせる純白のドレスだった。丈が膝より少し下で、スカート部分のシフォンが柔らかいピンクでなければ、ウエディングドレスと間違いそうである。ピンクのショールにローヒールのパンプス。長い髪はピンクのリボンと一緒にふんわりと編み込み、生花で留めた。

美容師は「」の髪型も藤臣の指示だといつが……。

「子供っぽく見えませんか？ 藤臣さんは、余計に不釣合いに思えて」「

言つた後で、愛実は美容師たちの気分を害したのではないかと気になり始める。彼女らの仕事ぶりに文句を言つつもりなど更々ない。愛実が閉口していると、

「まあ、とんでもありませんわ！ 髮型もドレスも、よくお似合いでしてよ。お若くて可愛らしいお嬢様の長所が引き出されていて……自然が一番ですわ。美馬様に合わせたファッショնは、あと十年してからで充分じゃないかしら」

優しい笑顔で言われ、愛実の顔も綻んだ。

～*～*～*～*～

『現役の女子高生が社長夫人へ』『東部デパート美馬社長の十八歳の花嫁』

マンションのリビングに数枚のスポーツ紙が散乱していた。どの見出しにも、藤臣の記事にはそういうた謳い文句が書かれている。

『旧伯爵家の「令嬢』の文字も多い。

しかも、婚約者の愛実はおどおどした笑顔をカメラに向け、まるで垢抜けない田舎娘のようだ。そんな小娘の薬指に光っているのは三カラットのダイヤモンドリング。ティファニーの商品で軽くハ桁はする品だと本文に書いてあつた。

(散々遊んだ挙げ句、こんな捨て方……許せない。絶対に許さないわ!)

久美子は缶ビールを片手に部屋の中をうろついた。

そのついでとばかり、床に広げた新聞の愛実の写真を踏みつける。とくに指輪の辺り このエンゲージリングを貰うのは自分だつたのに、という思いが強い。

(結婚? それも女子高生ですって? 「冗談じゃないわ。一生結婚はしないなんて、あたしには言いながら……ぶち壊してやる)

藤臣が久美子を捨てたという噂は瞬く間に広がった。

すると、手の平を返したように多くの人間が久美子の近くから去

つて行つたのだ。女優デビューの話も「なかつたことに」なんて、あんまりではないか。所属事務所の社長にすら、東部デパートの契約が切れる来春以降、事務所との更新もなしと言われた。藤臣のバツクアップがなくなつた途端、久美子には用無しと言わんばかりだ。そして、彼女を切つたのは事務所だけではなかつた。

「久美子さん、さあ……東部の社長さんと別れたんだ」

藤臣が訪ねて来た夜、会つていた男は歌舞伎町のホストだつた。その男が、久美子の顔を見るなり言つたのだ。

「だったらさ、うちの店にはもう来れないよね。俺たちも別れようか」

金なら心配はいらない。藤臣には充分なものを貰つているから、久美子はそう言つたが、男は軽く笑いながら彼女の手を振り解きいなくなつた。携帯番号も変えられ、店にも要注意客とされて入れなくなつたのだ。

(幸せになんかさせるものですか。十八歳の花嫁ですつて。こんな、何の苦労も知らない小娘が社長夫人だなんて。こんな子供に負けるなんて、絶対に許さないんだから)

久美子は双眸に憎しみの炎を灯し、写真の愛実を睨んだ。スポーツ紙を拾い上げ、ビリビリに破り捨てる。そして、肩で息をしながら……ニヤリと笑つたのだ。

彼女が時間稼ぎのように逃げ回つていたのには、もちろん理由があつてのこと。

(美馬藤臣はあたしのものよ。必ず妻になつてみせるわ!)

久美子は不敵な笑みを浮かべながら……そつと下腹部に手を添え

た。

藤臣のエスコートで、愛実は会場に足を踏み入れた。

とくにライトが当たられるわけではないが、やはり、周囲の視線は一気に集中する。誰もが女子高生の婚約者に興味津々といった様子だ。

頭の中は真っ白になり、愛実の目には赤い幾何学模様の絨毯と多くの足しか映らなくなつた。彼女が俯いているせいなのだが、今度は数え切れない足の本数に圧倒されてしまう。会場の熱気が愛実の耳に流れ込み、ひそひそ話や笑い声が全て自分のことのように感じてくる。降り注ぐシャンデリアの光さえ、愛実の幼さを責めているようである。彼女は居た堪れなかつた。

「大丈夫。何も心配は要らない。私が傍に居る」

藤臣の左腕に絡めた愛実の指先に、彼の右手が重なつた。小刻みに震える愛実の手をギュッと握り、耳元で「大丈夫だ」と繰り返す。今日の彼はジョルジオ・アルマーニ・ハンドメイド・トウ・メジヤーのタキシードを着用していた。体にピッタリフィットして、洗練された藤臣のイメージをさらにクールに魅せている。綺麗にセットされた前髪と仮面のような笑顔が彼を遠くに感じ、愛実はその前髪をくしゃくしゃにしたい衝動に駆られていた。

（もつ……わたしつたら、なに馬鹿なこと考えてるの）

愛実は深呼吸して、声を出さずに藤臣の腕を握り返した。

パーティでは久しぶりに母方の親戚に顔を合わせた。

愛実の父が生前、親戚中に借金をしつけたせいである。母は厚顔にも借金を重ねようとしたが、愛実にすれば顔を合わせるのも辛かつた。疎遠になっていたが、今回のパーティに合わせて藤臣が全て返済して親戚一同を招いてくれたのだ。

彼らは口々に「綺麗になつたねえ、愛実ちゃん」「これでお父さんもホッとしているよ」「本当におめでとう」と祝ってくれる。

父があれほど迷惑を掛けたのに、こうして東京まで来てくれた親戚たちの心遣いが、愛実は嬉しかった。

今回は表向き、東部デパート創業七十周年記念パーティである。婚約発表はついでのような扱いだが、内実、弥生が次期役員会で藤臣を社長に推薦する、という発表を兼ねていた。

現会長である弥生は、娘の夫である信一を一旦社長に据え、孫息子の信一郎か和威に後を継がせるつもりだ、と言っていた。藤臣がいくら優秀でも所詮は養子。事情を知る者の中では、愛人の息子を後継者にはしないだろう、といつた噂も流れていたのだ。

そんな中、結婚を条件に弥生が藤臣を後継者と認めた、と経済界に広まり……。その真相を確かめるべく、多くの関係者が招待に応じた。かつてないほど盛大な規模になつたのは、そういう事情もあつたのである。

愛実は藤臣に説明されたことを思い出しながら、少しづつ落ち着きを取り戻していた。

こうして眺めると、男性客は年配の人が多いように感じる。ちらつと見掛けた和威が一番若いくらいで、二十代らしき人々はほとんどない。藤臣は常に年上の人たちに囲まれ、それでいて気後れする様子もなく対等に談笑していた。

そんな藤臣を見ていると、愛実は落ち込む一方だ。冷静になればなるほど、差が歴然としてくる。

彼女にとつては何もかもが初めて世界だった。美馬邸の親族を集めたパーティとは客層も違う。煌びやかな衣装にも、豪華なホテルの内装や様々な思惑を含んだ空気など、あまりに場違いだ。

たまに秘書の奥村がやつて来て、藤臣の近くで耳打ちして去つて行く。今日の彼女は、かつちりした印象はそのままだが、エレガントな黒のスーツを身に着けていた。動作も自然で、おどおどしている愛実とは比べ物にならない。マナーは全て付け焼刃で、相手が誰かも判らず、愛実には気の利いた受け答えも出来なかつた。

「まあ、可愛らしいお嬢さんね。美馬さんが『結婚なさらなかつたのは、こんなお嬢さんを隠しておられたからなのね。悪い方』愛実はあちこちで『可愛い』『お若い』と言われた。お世辞と嫌味の両方なのだろう。

不安に押し潰されそうになる愛実を、藤臣はその都度庇つてくれた。

「さなぎが蝶になるのを待つていたんです。今はまだ、羽が柔らかくて羽ばたけませんが……あと数年で素晴らしい蝶に育つはずだ。最高の花嫁ですよ」

人前だから、と判つていても藤臣の言葉は嬉しい。

中には西園寺家の窮状を知つていて、

「西園寺愛実さんとおつしやつたかな？ お父上が事業に失敗して大変だつたそうですね。随分な借金を残されたとか……」

「そうそう……愛実さんはうちの系列のレストランで、遅くまで働かれていたとか。美馬社長とのご結婚が決まって一安心ですね」「お血筋のよろしい方は、お金には無頓着でいらっしゃるから。でも、可愛らしいお嬢様ですもの……お父様も草葉の陰でホツとして

おられますわ

愛実がアルバイト三昧だったことを揶揄して、さも財産目当ての結婚であると言わんばかりだ。必ずしも違うとは言い切れず、愛実は笑みを絶やさずにいるだけで精一杯だった。

そこに、酷く辛辣な言葉遣いで藤臣が口を挟んだ。

「どうでしょか？ 施設育ちの私生児に、娘を嫁にやりたくないがつた、と ご存命なら反対されるかも知れませんね」

「藤臣を薄い笑みは、剃刀の刃のように彼らに襲い掛かる。

「仮に 昨今の不況で会社が傾いても、彼女なら赤貧にも耐えてくれるでしょう。私も後顧の憂いなく仕事に心血が注げますよ」

「優秀だが先代の操り人形？」と言われていた藤臣の思いもよらぬ

反撃に、多くの人間はタジタジになり逃げ出した。

「藤臣さんたら……メチャクチャだわ。あれじゃ、文句があるなら会社を傾けても勝負するぞ、って言つてゐるようなものですよ

周囲に誰もいなくなり、愛実は話しかけた。

すると、藤臣は忌々しげに彼らの背中を見送りつつ、

「言つてるんだ。私にしても、美馬の家に引き取られるまでは、鉛筆一本にも不自由する生活だった。一度地獄を見た人間と、天国しか知らない連中とじや、勝負になるわけがない」

そう答えたのだった。

藤臣はウェイターを呼び止め、トレーからペリエのグラスを一つ取つた。「ノンアルコールの炭酸水だ」そう言って一つを愛実に渡す。

「ありがとうございます」

愛実は家族がいるから救われている。でも、藤臣には誰もいない

のだ。それがどれほど切なく寂しいことか。

(……彼の家族になりたい……)

ふいに湧き上がった想いが愛実の心を席巻した。

息苦しさを振り払つように、彼女は藤臣を顔を見上げたのだ。せめて、見つめるくらい許されるのではないか、そんな想いを込めて視線を注いだその時 同じタイミングで、藤臣が見下ろしたのである。

藤臣は一瞬で後悔した。

愛実の想いの籠もつた眼差しに、全身が絡み取られ硬直する。ある意味、メデューサの瞳に囚われたも同然であつた。しかし、その視線は藤臣を石ではなく人間に変えていく。負の感情に固まつた彼の外壁が、音を立て剥がれて行くのだ。あちこちから眞実ほんとうの心が見え、生身の彼が姿を現す。

美馬という死神に魅入られ、地獄を目指していた男にとつて……それは天使の誘惑だつた。

今日の愛実は本格的にドレスアップしている。美馬邸で行われたパーティの時より、マイクも髪型もプロの手が入つていて、最初に会つた時からは比べ物にならないほど魅力的だ。

黒目の大きな瞳、決して高くはないが小ぶりで形のよい鼻、輪郭のはつきりした唇に朱色の鮮やかなルージュが艶めき、藤臣は舌先でなぞりたい衝動に駆られた。あの日、この唇に自分の唇を重ねて、口紅の色が移るくらい押し付けあつた。白い肌が上気して見る見るうちにピンク色に染まるのを、彼は目の中で見たのだ。

愛実の肩は儘く、腰も細いが胸は見た目よりボリュームがある。信一郎に襲われた時、不可抗力にも目にした乳房を思い出し……ついつい視線を下に向けてしまつた。

オフショルダーでパフスリーブの袖が愛実の愛らしさを際立せている。だが、美馬邸のドレスより胸元の開き具合が大きかつた。おまけにコルセットで締めている効果なのか、バストがグッと押し上げられているようだ。淡いピンクのショールの隙間から、クツキリ覗く谷間に藤臣は慌てた。

(し、しまつた！　試着に立ち会つべきだった)

花嫁を思わせる白と袖の可愛さに惹かれ選んだが、着た所を確認しなかつたのは彼のミスである。途端に、彼は他の男の視線が気になり始めた。

しかし、それは藤臣の杞憂なのだ。なぜなら、愛実の真横に立ち、上から見下ろさなければ谷間など見えるはずがない。頭に血の昇つた藤臣は、自分が特別席にいることすら気付いてはいなかつた。

「……藤田さん……」

それは首筋を羽毛でくすぐられるような、ふわふわした声だ。

愛実に名前を呼ばれ、彼は視線を上げた。今日は髪にも生花を飾つていて、淡いピンクの薔薇にかすみ草を散らし、編み込んだ長い髪は片方に纏めて垂らしてあつた。うなじに流れる一~三本の後れ毛が、初々しい色香を漂わせていて……。

ここはホテルだ。当たり前のようだ。この上には数え切れないほどのベッドが用意されている。そのまま愛実の手を取り、その一つに駆け込みたい。藤臣の中で欲望が嵐のように荒れ狂い始めた。

その時、唐突に愛実が彼の腕に触れ、顔を近づけて来たのだ。

(これは……キス、してもいいんだろうか?)

愛実も彼と同じ想いでいるのかも知れない。

藤臣が不埒なことを考えた瞬間

「藤田さん……藤田さんたらー、スピーチの時間だと皆様が来られてるんですけど……。どうかなさつたんですか？」

藤臣はハツと我に返つた。

周囲には東部デパートの重役と、瀬崎や奥村をはじめ秘書たちも揃つてゐる。

(俺は……何をやつてるんだ)

「あ、ああ、判つた。愛実、君も一緒に来てくれ。壇上で、隣に立つてくれただけでいいから」

そう言つて愛実をエスコートしながら、なるべくゆっくりと歩く。とにかく、頭の中からとんでもない妄想を追い払わなくては話にならない。心と身体を落ち着かせるのに、さすがの藤臣も数分を要したのだった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

「……より一層の努力と研究を重ね、デパート業界のリーダーシップを取るべく、社員一丸となつて戦つていく所存です。尚、私事ではありますが、このたび縁あつて婚約が整い、来月早々にも結婚の運びとなりました。婚約者の西園寺愛実さんです」

会場から拍手とお祝いの声が上がる。

愛実は、その数センチ高い壇上から見下ろす光景に気後れし、一旦下げた頭が中々上げられない。

「……ありがとうございます。ここにおいで頂きました皆様を手本とし、経営者としてだけでなく、良き家庭人となれますよう、努力

していきたいと思つております。どうか、よろしく「指導」鞭撻のほど、お願ひ申し上げます。『静聴ありがとうございました。
最後までどうぞ、『ゆっくりお楽しみ下せ』』

これで二人の婚約は公になつたのだ。はたして、この婚約は本当に偽りなのだろうか？ そんな想いを抱え、愛実は不思議な気持ちで藤臣を見つめていた。

これだけの規模になると、開始直後に挨拶をしても来られていな客も多いという。かといって最後では、多忙な客は引き上げてしまつた後である。そのため、大よそピークと思われた時間を見計らい、スピーチを入れるのだ、と壇上まで歩く間に藤臣に教わつた。

さつきの彼の瞳は、美馬邸の一階でキスした時と同じ色をしていた。こんな大勢の人がいる中で、藤臣は何をする気だらう、と愛実はドキドキだつた。

そして今は、打つて変わつて企業家としての言葉を紡ぎ出す彼に、憧憬の念を抱いている。

ひたすら彼を見つめていたが……藤臣の挨拶が終了すると同時に、愛実も慌てて深々とお辞儀をしたのだった。

壇上から降りる時、先に降りた彼が待つてくれた。当たり前のようないきなり動作で愛実に手を差し伸べる。パンプスを履いた彼女に対する愛実が、愛実はとても嬉しかつた。

大きな手が愛実の指先を包み込む。どうすれば、彼にこの想いを伝えられるのだろう。「好き」と言つだけで迷惑がられてしまったのに……。

(藤臣さんの家族になりたいなんて言つたら、余計に嫌われるわ)

好きじゃないけど抱いて欲しい。セックスを経験してみたい。そんな奔放なフリをしたら、彼の好みの女性になれるのだろうか。

(でもそれって、わたしは彼に抱かれたいだけなの?)

好きな想いと性的関係にはならないという約束が、お金の問題も絡んで二人の間に巨大な壁となり立ちはだかっている。愛実は自分が何を求めているのか、しだいに混乱し始めた。

このままだと、愛実は形だけの妻となり、夫に片想いしたままで抱かれることなく離婚するのだ。その後、彼は他の女性と愛し合い、結婚するのだろうか。それを想像した時、彼女は嫌でも気付かされた。藤臣に抱かれたい訳ではなく、自分は愛されたいのだ、と。なんと身の程知らずで大それた夢を抱いてしまったのか……切なさに彼女は眩暈を覚える。

直後、藤臣の隣に秘書の瀬崎がスッと近寄った。

その瀬崎の顔色が心なしか蒼白に見え、愛実は驚く。つい先ほどまで、彼はいつもと変わらぬ笑顔だった。ところが、瀬崎の報告を聞くなり、藤臣の眉間に皺が寄つたのだ。奥歯をギリッと噛み締める音まで聞こえ、愛実は何事が起こったのか不安になる。

藤臣は一~二度頷くと愛実に近づき、「面白くないだろうがすぐに追い払う。少しだけ、我慢してくれ」そう、耳元で囁いた。

「あの……一体、何が」

愛実の小さな問いかけは、周囲のざわめきに搔き消されてしまう。そして、正面の人垣が見事に割れ、その向こうに独りの女性が姿を現した。どこかで見た顔だと思えば、受付にも貼つてあった東部デパートの宣伝ポスターだ。

デパートのイメージモデルであり、藤臣の愛人
長瀬久美子であつた。

第50話 爆弾

「とうとう知つたみたいよ。あのオンナ」

「……は？」

それは藤臣の秘書、奥村由佳の言葉だった。

昨日、ここで最終打ち合わせをした時に愛実は彼女から言われたのだ。

由佳は受付の位置に貼られた等身大のポスターを指差し、「コレよコレ。私はそれなりのスキルを持つてるし、今のポジションを失うわけにはいかないから、専務を怒らせる気は全然ないわ」かなり碎けた口調で言った。以前、ホテルの一室で顔を合わせた時とはだいぶ違う。ちなみに、由佳は藤臣の本社専務としての秘書なので彼を「専務」と呼ぶ。瀬崎もそうなのだが、彼は東部デパートにも出入りしているので「社長」と呼んでいるらしい。

「でも……このオンナは違うわよ。マスコミがチヤホヤするから完全に勘違いしてるもん。？自分は特別？って本気で思つてるわ。一番、利用されるのも知らないで……専務にとつて女は単なる道具に過ぎないのよ。あ……あなたは別よ、何と言つても大奥様のお声掛かりですもの」

唖然とする愛実に、由佳は歯に衣着せぬ物言いだった。

由佳はどうやら、元々さっぱりした性格の女性みたいだ。向上心があり、男性並の出世欲もある。藤臣と関係したおかげで、秘書室でも優位な立場でいられた。生活も随分潤つたし、愛実との結婚で藤臣が社長……それも総帥となるのであれば、自分は完全な勝ち組

だ。由佳は愛実に対してそこまで言つてのけたのである。

とても学校と自宅、精々バイト先くらいしか世間を知らない愛実には、敵いそうにない女性だった。

「それに、適当に女をあしらつていた専務が、婚約を機に操を立てるなんて信じられないわ。あなたは専務にとつて本当に？特別？なんでしょうね。気付いてないのは……コレだけよ」

由佳はそう言つヒポスターを手の甲でパンパンと叩いた。

藤臣との結婚には取り決めがある。由佳が知っているのは週刊誌に書かれていたことだけで、弥生が自分の財産を愛実に相続させるつもりだとは知らない。その契約書に書かれた全ての条項を、愛実が熟知している訳でもなかつたが……。

愛実には、由佳が無理をして藤臣を忘れようとしているのではないか、と思えてしまい申し訳なくなる。

「あの……どうも、すみません」「やめてよ。逆でしょ？」

由佳は笑いながら言つ。婚約者だと聞きながら、ホテルで張り合いうような真似をしたことを言つているのだろう。確かに、言われてみればそうかも知れない。

「それに、専務のセックスって自分本位じゃない？ 最中でも醒めた目でこっちを見下ろしてて、ゾッとすることもあつたわ。あなたには悪いけど、幸せを感じたことは一度も無いわね。あの人と結婚して、一生あの目で見られるのかと思つたら……悪いけどバス。あなたはよく平氣ね？」

?セックス?の言葉に愛実は頬を赤らめた。

平氣も何も、抱かれたことがないのだから何とも言い様がない。それに、藤臣が愛実を見つめる瞳は、常に燃え盛る炎のようだ。醒めた目で見られたことなど一度もない。初めて逢つた時から、ずっと

と……。

「平氣と言つたか……あの、キスとか……どうでした？」

愛実は思い切つて尋ねてみる。どうしても、あの美馬邸でのキスの意味が知りたかった。

「どうつて言われても……」

由佳は言い難いと言つより、何と答えたらいののか判らない、といった様子で口を開く。

「キスなんて……いくら頼んでも、一度もしてくれなかつたわね。ホテルで会つて一回したらお終い。結構淡白なんぢやないかしら?」

～*～*～*～*～

モデルだけあつて身長は見上げるほど高い。多分、藤臣の愛人だと言つたメイドの千里より高いだらう。ハイヒールを履いているので尚更そう感じる。スレンダーで顔の小さい綺麗な女性だった。

関係のある女性とは結婚までに全て手を切る。

藤臣はそう言つた。それには、この久美子も入つてゐるはずだ。「どうなつてるの?」と聞いたことは一度もないが、約束を破るような人じやないと愛実は信じている。

彼女は肩より少し長い髪を明るい茶色に染め、緩く内巻きにして垂らしていた。ドレスは体の線がくつきりと浮き出るマーメイドライン。シンプルなデザインがスタイルの良さを際立たせている。しかし……そのドレスに周囲の招待客は口をあんぐりと開けたままだ。

それもそのはず、彼女はなんと純白のドレスを身に纏っていたのである。

まるでウェディングドレスのよつだ、と愛実は……いや、誰もが思つたことだわい。

「お待たせして『めんなさいね、藤臣さん。あなたが教えて下さるのが遅いから、ドレスを用意するのに時間が掛かつてしまつたの』久美子は髪を手で払いながら、藤臣に向かつて話しかけた。

「……ああ、あなたはもういいわよ。下がつて頂戴。身代わり『苦労様』

藤臣の左側に立つ愛実には一瞥もくれず、追い払つよう手をひらひらさせた。久美子は彼の右肘辺りに腕を絡ませ、そのまま身体をピッタリと寄せる。

「さあ、行きましょうか」

彼女は藤臣に向かつて艶然と微笑み、促したのであった。

愛実は言葉もなく驚いていた。

チラッと由佳に視線を向けると、こいつはオソナよ、と言わんばかりに彼女は目で合図した。愛実は何とも言えない顔を由佳に返す。

(わたしはどうすればいいの?)

そう思つた瞬間、藤臣は久美子の指に自分の手を重ね。

「失礼、長瀬くん。これまで、東部デパートのイメージモデルである君にパーティでの同伴をお願いして來たが……」

一気にその指を引き剥がすと、彼は愛実に手を差し伸べた。

「私の婚約者で西園寺愛実さんだ。これからは彼女が傍にいてくれるんですね。もう妻の代わりは必要なくなつた。君は下がつてくれて構わない。パーティを楽しんでくれ」

間違いようもない言葉で久美子は拒絶され、瞬時に青褪める。

周囲も事情は判っているのだろう。捨てられた愛人の姿から目を背けながら、失笑が広がった。

愛実はどうにも居た堪れない。とはいって、愛実から声を掛けられるのは久美子にとつて更なる侮辱だろう。藤臣に手を引かれるまま、その場から立ち去ろうとした。

「何を言うの、藤臣さん！　あなたはあたしと結婚するのよ。世間の人もそう思つているわ。それに、あたしを捨てるわけにはいかないんだからっ！」

背後で久美子が叫ぶ。同時に、藤臣の口元から舌打ちが聞こえた。彼は目で瀬崎を呼びつけ、「長瀬くんは私に話があるようだ。別室に案内してくれ」短く小さい声で命じた。

瀬崎も心得たとばかりに頷き、部下たちに指示して久美子を取り囲んだ。そのまま、会場の外に連れ出そうとする。

だがその時。

「触らないで！　乱暴にしてお腹の子供に何かあつたらどうするの？　あたしは美馬社長の子供を妊娠してるんだからっ！」

久美子の甲高い声に、辺りは一瞬でざわめいた。

藤臣は冷静な表情を繕いながら振り返った。

久美子は利口な女ではない。だからこそ、楽に利用してこれたのだ。だが、これほどまでに馬鹿な女だとも思わなかつた。

ここで藤臣の顔を潰せば、モデルとしての仕事を失うどころではない。高額の違約金や慰謝料を請求される可能性があることに、なぜ気付かないのだろう。

この時、藤臣は久美子の妊娠発言を全く信用していなかつた。久美子はピルを飲んでいるはずだ。そうでなくとも、彼自身が避妊を忘れたことなど一度もない。

だが、問題はこの場所だつた。婚約披露を兼ねたパーティの席上で、周囲には招待客が大勢いる。そして、婚約者の愛実も傍らにいるのだ。ここで藤臣が激昂して、愛人関係を肯定するような発言でもしようものなら……まさに修羅場だろつ。

一刻も早く、久美子をこの場所から排除しなくてはならない。ところが、その内容が内容なだけに、瀬崎たちは久美子の腕を取ることすら躊躇していた。

「この間、あたしの部屋に来てくれた時の子供じゃないわ。ほら、この子は先月……そう、香港に行く前に授かったのよ。ピルも完璧じゃないのね。あなただって心当たりがあるでしょう？　あの時、とっても無防備に愛してくれたわ。あたしにはあなたの子供がいるのよ！」

藤臣が反論できず、瀬崎たちも動けないのをいいことに、久美子は言いたい放題であつた。

「 もちろん判つてゐるわ。会社の事情で婚約を押し付けられたんだじよつ? でも事情が変わつたのよ。政略結婚をやめて愛する女性を選んだつて言えば、世論は喝采するわ。ね、藤臣さん、あたしと子供を捨てないで……」

まさに一世一代の名演技と言つべきか。藤臣は怒りを通り越し、感心していた。寧ろ、頭にくるのは久美子ではなく部下や会場スタッフのほうだらう。

（何のための秘書なんだ! どうして誰もこの女を引つ張り出せない!）

ポカーンと口を開けて見ている警備員にも怒鳴りつけたいところだが、それでは余計人目を引いてしまつ。何より、動搖する姿など一切見せるわけには行かない。

だが、藤臣にもようやくこの女の狙いが判つた。

目的は愛実なのだ。愛実を傷つけるために、こんな派手なシチュエーションを選んだと見える。そしてそれは、藤臣に対しても想以上の攻撃力を示していた。

妊娠を盾に脅されるなど、今に始まつたことではない。藤臣自身は久美子の言葉など、完全に笑い飛ばせるが……愛実はどうだらうか?

なんと彼は、愛実の反応が恐ろしくて隣が見れずについた。

強気に出たい。だがそれで愛実を傷つけたら……。もし彼女が泣き出して、この場を立ち去るようなことになれば、全てお終いである。

破談になるだけならいい。どうせ藤臣のよつた男が妻に望める少女ではない。所詮、下種な女が似合いのろくでなしだ。愛実が困らぬよう、当座の金は藤臣が慰謝料として渡せばいい。

問題はあの契約書だ。愛実は他の三人の誰かと結婚する義務が生じる。

(なんてことだ！ クソ婆のほくそ笑む顔が目に浮かびやがる)

さすがの美馬も、弥生に太刀打ちするほどの金は無傷では動かせない。それに、愛実が断わるだろう。馬鹿をやつた信一郎や宏志も論外……結局、愛実は和威を選び、弥生の一人勝ちだ。

そこまで考え、久美子の裏に弥生の命令を受けた曉がいるのでは？ という瀬崎の言葉が思い浮かぶ。

一方、久美子は勝ち誇ったよつた笑みを浮かべ、藤臣を見上げていた。

久美子にとつても相打ち覚悟の作戦になるはずだ。これだけ大勢の前で公表したということは、父親はともかく妊娠は事実なのかも知れない。

このままで明日のスポーツ紙の朝刊は美馬家の醜聞で埋まるだろう。

藤臣と久美子は真正面から睨み合い、一言も発しない。

瀬崎は力尽くで久美子を排除していいのかどうか迷い、社長の次の指示を待つた。

そして、周囲の客は固唾を呑んで茶番を見守るしかなく……。この三疎みの状態に終止符を打つたのは、予想外にも愛実であった。

「あの……わたしにはよく判りませんが……。こちらの方は藤臣さんにお話があるのでね？ 藤臣さんがご一緒に行かれたほうがいいと思います。わたしは会場におりますので」

藤臣はその落ち着いた声に驚いて隣を見る。

愛実の表情は泣くでも怒るでもなく、少し困ったように、だが微笑んでいた。

(な、なんで、愛実はこんなに冷静なんだ？ この数日ですっかり気が変わって、俺のことなんかどうでもよくなつたのか！？)

真摯な想いを寄せられることに困り果て、逃げ回っていた自分の行状は棚上げだった。嫉妬で泣き喚いてくれない愛実の様子に、藤臣は理不尽にも怒りすら覚える。

だが、声を荒げたのは彼ではなく、久美子だった。

「あたしはここで話しても構わないわ！ 一人つきりより、大勢の方に聞いて頂きたいくらいよ。あなたには申し訳ないけど……。公の席ではつきりして頂かないと、お腹の子供が可哀想でしょう？」

愛実の態度に驚いたのは藤臣だけではなかつたようだ。

久美子は愛実を甘く見ていたに違いない。十八歳の小娘など、婚約者が愛人を妊娠させたと知るだけで、簡単に追い出せると思つていたのだ。それが逆に、あつさり会場から追い払われそうなのは久美子のほうだつた。

「お腹にお子さんがいらっしゃるなら尚のことです。失礼ですが……藤臣さんは不実な方ではありません。静かな場所で、ちゃんと話し合つて下さい」

藤臣は愛実の姿に見惚れていた。

彼女の瞳は、藤臣を？どうでもいい？のではなく？信じている？と言つてゐる。何の根拠もないはずだった。キスしながら不誠実な態度を取り続け、「好き」の言葉に逃げ回つてゐる男を……それでも「不実ではない」と言いきる。

この瞬間、藤臣の心は百八十度舵を切つた。

「ああ、せうだな。君の言つ通り、長瀬くんとは話しあうが必要らしい。しばらく独りこするが、誤解を解いてすぐに戻る。……申し訳ない」

藤田は愛実の手を握り、ジッと田を見つめて言った。

すると、彼女はさつきよりも確かに笑みを返し、小ちやく「ほー」と答える。

「ああ、長瀬くん　　」つちだ

久美子の悔しそうな顔を冷酷な視線で一睨みすると、藤田は愛実に背を向け歩き出した。

(……これから、どうなるの……？)

笑顔で送り出したものの、愛実は内心パニッシュだった。

政略結婚をやめて愛する女性を選んだ……

久美子の言葉は衝撃的ではあるが、当然のような気もする。愛実が同じ立場であつたなら、やはり自分を選んで欲しいと思うだろう。ただ、藤臣の体面を潰すような、こんなやり方は……。

久美子を非難する感情が自分の中に芽生え、愛実の胸はチクリと痛んだ。

(あの女にも事情があつたのよ。わたしは幸運なことに、藤臣さんに助けられてぬくぬくしてるだけじゃない)

彼女を悪く思つるのは失礼だ。妬みそうになる気持ちを愛実は必死で抑える。

藤臣は辛い思いをして育つた分だけ、我が子を大事にするだろう。少なくとも、このままにはしないはずだ。弥生は藤臣のことを亡き夫の後継者として発表した。今更、私生活を理由に取り消したりしないのではないだろうか？

でも、弥生がこのまま愛実に遺産を譲ると言い張つたら……？

それに、これほどまで盛大に発表してしまつた後だ。？旧伯爵家の「ご令嬢？」という肩書きを持つ愛実と婚約解消するほうが、藤臣のイメージダウンになるかも知れない。

その時は愛実と形ばかりの結婚をして、予定通り一~二年で離婚。ほとぼりが冷めた頃、久美子と再婚するのがベストだらう。

(でも……わたしはどうやって結婚生活に耐えたらいいの？　夢も見られないなんて）

今この時も、藤臣が久美子の肩を抱き慰めている姿を想像すると……。愛実は鼻の奥がツンとして、涙が込み上げるのをグッと堪えた。

はたと気付けば、周囲のほとんどの人間がヒソヒソさやきながら愛実を見ている。ハンカチで覆つた口元は、おそらく失笑で歪んでいることだろう。

もしここで愛実が涙をこぼしたら、非難は藤臣に行く。万一、彼が失脚して信一郎が後継者になれば、愛実は家族のため、自分を襲つた男に嫁ぐ羽目になるかも知れない。

藤臣を守りたいのは愛しているからだ。

でも、愛実は家族を守る義務も放り出せずにいた。行動は同じであつても、動機となる思いがまるで違う。ただ純粋に愛せないことに、愛実は挫けてしまいそうだった。

「判らない子ね。天然も度が過ぎると、ただの馬鹿よ」

身動きの取れない愛実の傍に近づき、由佳が小声で話しかけた。

その声は明らかに怒っている。

「どういう意味ですか？」

「私があなたなら、愛人の分際で身を弁える、と一喝して会場から叩き出してたわ。そうすれば専務も、普段通り冷酷に振る舞えたのに」

由佳の言葉に愛実は涙が引つ込んだ。

藤臣は由佳の言つような冷酷な男性ではない。もしそうなら、愛実を助けてくれたりはしないはずだ。愛実は由佳にそう告げるが……

…。

「は？ 何言つてゐるの？ 私は入社して五年になるのよ。だつたら教えてあげるけど、専務には私の前にも秘書室に愛人が居てね……」
ある時、彼女は呼ばれてもいないので、藤臣を驚かせようとホテルの部屋を訪ねたという。するとそこには別の女性が……。二人は顔見知りで、嫉妬心より虚榮心から女同士の喧嘩はエスカレート。後日、社内でつかみ合いの大喧嘩に発展したことを知り、藤臣は即座に両方と別れた。

「一人とも地方の子会社に飛ばされてお終い。専務が私を口説いたのはその翌日、『野心は持たず、余計なこともするな。君には妻の座と子供以外は欲しい物をやる』ってね そういう男よ」

愛実は呆れるより藤臣が可哀想だと思つた。

彼を愛していれば、相手の女性ではなく藤臣自身に怒つただろう。彼の近くには、そんな言葉を受け入れる女性ばかりだったのだ。この由佳との関係を愛実に告白した時、

誠実でない女性しか知らないんだ

当惑したような顔で藤臣は言った。

あの言葉は彼の本音だったのだ。ならば、あの久美子はどうなんだろう。お金や見栄や体裁ではなく、心の底から藤臣を愛してくれているのだろうか？

愛実は一寸唇を噛み締め、ゆっくりと口を開いた。

「藤臣さんは、優しくて誠実で思いやりがあつて……人の心の痛みが判る人です。わたしは、わたしの目に映る彼を信じます」

「じゃあ、愛人に子供を産ませて、あなたに育てろつて連れて來たら？」 どうするのかしら、奥様は

由佳は少し意地悪そうに笑つた。

その嫌味を、愛実は真正面から受け止める。

「彼が望むなら。子供に罪はありませんし……。でも、子供のためには彼女と結婚するべきです。大奥様にはわたしからもお願ひするつもりです」

「若いわねえ……あの男をおどぎ話の王子様だとでも思つてゐるの？」

由佳の表情は少し柔らかくなり、物分りの悪い生徒を^{たしな}むける女教師のよくな顔になつた。

子供だと、何も知らないと言われたらその通りだろう。それでも愛実は引くつもりなどない。

「奥村さん……わたしは十八ですが人生の厳しさはよく知つています。だからこそ、理想は捨てたくありません。一度や一度、思い通りに行かなかつたからと諦めるなんて、残りの六十年ずっと諦めて過ごすことになると思いませんか？ わたしは人生を諦めないために、藤臣さんとの結婚を選びました。例え結婚できなくても、結婚して離婚することになつても、好きになつたことは絶対に後悔しません！」

～*～*～*～*～

(「Jリガインペリアルフロアのスイートなんだわ）

久美子は特別なフロアに降り立つたことを確認し、優越感に浸つた。

妊娠のチャンスはずつと狙つていた。何度か風呂場で迫り、その都度追い払われたのだ。でも、香港に行く前の彼は違つた。何処か

浮き足立つており、切羽詰まつた彼をさらに煽つて……。

「」ひちらです。どうぞ」「

第一秘書の瀬崎が鍵を開け、藤臣と久美子に入室を促した。

「待つて！ ロイヤルスイートじゃないの？」

「あちらは？『ご婚約者様』の控え室となつております」

瀬崎の口調は慇懃無礼で、久美子を軽蔑しているのは明白だった。

「そんなつ。あたしは……」

「ガタガタ言うなら叩き出すぞ。さつさと入れ」

一泊で五十万円とも百万円とも言われるスイートに通されるものだとばかり思つていた。久美子はがっかりしながらも、藤臣に急かされ中に入る。中は一般の部屋より少しグレードアップした程度の広さだつた。スイート仕様だが、インペリアルフロアと言つてもピンからキリまであるらしい。

入るなり、藤臣は無造作にタイを緩め、カマーバンドを外した。疲れた素振りでソファに体を沈める。

大きなため息と共にテープルの上に置かれた煙草ケースから一本抜き取り、大理石のガスライターで火を点けた。

「妊娠は事実か？」

唐突に核心をついた質問をされ、久美子は飛びつくように答える。

「もちろんよ！ 嘘なんて吐くはずないわ！」

「診断書か妊娠証明書を出せ」

「まさか、診断書を取り上げるつもりなの？」

「……そんなことに何の意味があるんだ。さつさと見せろ」

久美子はバッグから診断書を取り出しあずおずと差し出した。

「まだ七週目だから妊娠証明書はもらえなかつたの。ねえ、これも見て。エコー写真よ。ちゃんと心臓も動いてるのよ」

藤臣は診断書を手に取り、ざつと目を通した後、産婦人科に確認を取るよう瀬崎に命じた。

(いくらでも調べるといいわ。本当のことなんだもの)

久美子は胸の内で笑いながら、煙草の煙りに顔をしかめ手で払つた。

すると、藤臣が煙草の火を消したのだ。これまでの藤臣からは考えられない行動だつた。久美子がある人から聞いた通りである。この男は女には冷たいが、子供に対しては異常なほどの責任感を見せる。そう、十年前も……。

「あたし、本当は子供が欲しかつたの。こうなつて驚いたけど、でも大切に育てるわ。お願ひ……産んでいいって言つて」

久美子はありつたけの母性を総動員して、藤臣に泣きつく。
彼は深く息を吐きながら一言、「……仕方ないな」そう答えたの
だつた。

「子供は君の好きにするといい」

藤臣はいささか投げやりに言った。

その瞬間、久美子の表情がパッと変わる。すぐに繕つが、生来の狡猾さなど簡単に隠せるものじゃない。

「嬉しいわ！ 産んでいいのね。じゃあ、もちろん結婚してくれるのよね」

「勘違いするな。私が妻にするのは愛実だ」

久美子は皿を剥き怒鳴り始めた。

「あたしのお腹には子供がいるのよ。あなたの子供が！ 忘れたの？ 香港に行く前の夜、確かにあなたは避妊しなかったじゃない！ あの時の子供よ。ゼッタイ間違いないんだからっ！」

藤臣は苦虫を噛み潰したような顔で久美子から皿を逸らした。

愛実と出会つて間もなくの頃だ。弥生の邪魔が入り思い通りに事が進まず、また、愛実に妙な欲望を感じて持て余していた。いつもなら、付け込まれる隙など作らないはずが……ほんのわずか油断した。

久美子が妊娠のチャンスを狙つていたのは知っていた。わざわざ病院を指定してまで処方させていたビルだが、実際のところ飲んでいなかつたに違いない。

だが、それも何秒かで我に返つた。すぐに彼女から離れ、中にも射精してはいけない。確率は限りなく低いはずだ。

とはいって、性的関係があつた以上、女が言い張れば泥沼になるのは目に見えている。

(クソツ！ 忌々しい！)

藤臣は戻つて来た瀬崎に合図して調査書類を出させる。瀬崎は何か言いたげな顔つきで、茶封筒をブリーフケースから取り出し手渡した。

こういう時に備えていた書類だ。出来れば使わずに済むことを願つていた。

「久美子……シユンと言つ名前の二十一歳のホストは知つてゐるな」まるで無関係なことを言い出され、彼女の目は一瞬泳いだ。

「な、何？ 誰よソレ……。話を逸らさないで！ 今、あたしたちが話してるのは」

「覚えてないのはおかしいな。私が初めてマンションを訪ねた夜、直前まで会つていた男じゃないか。週のうち五日は、あの部屋に泊まって行く。君は毎週歌舞伎町のホストクラブに通い、彼を指名している。渡した金の半分は、奴に消えているんじゃないのか？」

「そんなこと……違うわ。違うのよ……」

久美子の顔色が青くなってきた。視線は彷徨つたまま中々固定しない。

藤臣の眼差しはそんな久美子と書類の間を往復しつつ、「そんな関係が昨年夏から、もう十ヶ月か」バサッとテーブルの上に封筒ごと書類が投げられた。

勢いで封筒に入つた数枚の写真がテーブルの上に散らばる。

そこには久美子が若い男と腕を組んでラブホテルに入って行く所や、マンションのベランダでキスをしたり、ホストクラブで騒いでいる写真もあった。

「待つて……ねえ、待つてよ。気晴らしよ。だって、あたしのことなんてほつたらかしだったじゃない。あなたにも他の女性がいたで

しょ？ でも、この子は」

「君がわざわざホストの血液型を確認した理由は何だ？ 私と同じO型の男を選んだ訳は？ 髪もストレートで長身の男と指名したそうじやないか。香港に発つ前夜、君はホテルに泊まらずマンションに戻り、この男を呼び出して無防備なセックスをした」

藤臣の失敗に付け入り、久美子は是が非でも妊娠したいと計画した。独身主義で有名な藤臣である。まさか翌月に婚約するなど想像もしなかつたはずだ。

妊娠をマスコミに流せば、社長である彼を追い込める。子供をダシに使えば、藤臣なら嫌々でも結婚するだろう。血液型さえ一緒に怪しまれない 久美子はホストにそう話して協力を頼んだ。

藤臣はこれまで、久美子の男関係に興味のある素振りなどしたことがなかつた。彼女にすれば、上手く騙していると思い込んでいたに違いない。

だが、女には散々痛い目に遭わされてきた藤臣である。例のホストは久美子に対して特別な感情など全く抱いてはいなかつた。藤臣の情報源がそのホスト自身だとは、久美子は夢にも思つまい。

「こちらの条件を言おう。今すぐ、君の妊娠と私は無関係だという書類にサインするんだ。なら、君のことは訴えない。だが、あくまで私の子供だと言い張るなら裁判になる。もちろん中絶は強制しない。鑑定の結果、私の子だと証明されたら子供は認知して引き取る。君には相応の慰謝料を支払おう。だがもし私の子でなかつた場合君には名誉毀損の慰謝料と、多大な損害賠償を請求する」

藤臣の表情は非情なまでの冷酷さを映していた。ついさっき、愛実の前で見せた穏やかな笑顔とは百八十度違つてゐる。同一人物とは思えないほどだつた。

「生まれて……あなたの子だつたら……あたしが育てるわ。その時は結婚して一緒に……」

語るに落ちるとほのいじとだ。久美子は藤臣の子供でない可能性を口にした。

だが 「ふざけるなっ！」

彼は身を乗り出し、テーブルを思い切り叩いた。その威嚇めいた行為に久美子は震え上がる。

「金の為に子供を産むような女に、俺の子供を渡して堪るか！ どんなことをしても取り上げてみせる！」

愛もなく、妻にもなれないと承知で、藤臣の母は彼を産んだ。それが金以外の何の為だろう。

叶うなら三十年前に戻り、生まれ落ちたばかりの自分の首をこの手で絞めたいくらいだ。何も知らず、何の罪も犯さぬうちに殺して欲しかつたと何度も願つたことか！

子供など欲しくない。美馬の血が流れた子供など、悪魔を増やすようなものである。

「いいか？ マスクの田を引く広告塔だと思つからいや、好きにさせたやつたんだ。だが、結婚の邪魔だけはさせん！ 俺の子供だと自信があるなら産めばいい。違つた時は……貴様の人生は終わりだ」

藤臣は冷酷だが短気でも粗野でもない。そんな男が感情を剥き出にして怒り狂う姿に、久美子は完全に気圧されていた。

「わ、わかったわ……悪かったわ。ごめんなさい……子供は堕ろす

から。あなたの結婚の邪魔はしない。だから、「レまで通り……」

「認めたな。告訴は勘弁してやる。イメージモデルは本日付で解約。

マンションは今月中に出て行け。以上だ」

「待つて！ 契約は来年の三月まであつたはずじゃ……」

「婚約披露パーティーをぶち壊し、満座の席で私に恥を搔かせて何が契約だ。貴様にもう広告塔に価値はない。自分のやつたことの愚かさを知るといい。シンデレラの時間は終わりだ」

藤臣は吐き捨てるように言うと席を立つた。

愛実に言われるままパーティー会場から離れたが……。今頃彼女は婚約者の不品行を理由に、謂れのない非難の的になっているかも知れない。

() 傍にいると約束したのに

考え始めれば愛実のことばかり気に掛かつた。

出て行く藤臣の背に縋り、久美子は懸命に甘えた声を出す。

「あたしの体は？ 良かったでしょう？ あんなに気に入ってくれたじやない。充分に楽しんだはずだわ」

土壇場で口に出来るのはセックス以外にはないらしい。

藤臣は鼻で笑うと、

「汚い手で触らないでくれ。君の体で楽しんだことは一度もない。誰でも良かつた。その程度だ」

一瞥もくれず、久美子を振り払った。

「このクソ野郎！ あんたみたいな男、死ねばいいんだ！ 地獄に墮ちやがれっ！」

背後で喚く久美子の声がしだいに聞こえなくなる。

「瀬崎……」

「マスクは押さえました。会場の方は健気にも愛実様が独りで応対しておられます。大奥様がすでに引き上げられていて幸運でした。それと、彼女が子供をどうするか……見届けます」「すまん」

さすがの彼も、これ以外の言葉は出ない。

「珍しいですね。ですが、謝る相手が違います」

瀬崎は二口ともせずに答えた。

「美馬社長に限つて、ねえ」

ホホホ……中年女性の甲高い耳障りな笑い声が周囲に広がる。

「こんなに可愛い婚約者がいらっしゃるんですもの」

「きっと何かの間違いに違いありませんわ」

彼女らはそんな言葉で表向き愛実を励ますフリをしている。

だが、由佳には仮面の裏の興味本位が見て取れ、小さくため息を吐いた。

藤臣と久美子の関係は周知の事実だ。マスコミにあれだけ騒がれ、藤臣も何処吹く風で出張先のホテルでは久美子と同衾していた。

この女性オバサマたちは、その辺りの話を愛実に聞かせてやりたいなくて、うずうずしている様子だ。

「あなた……本気で好きなの？ 専務のこと」

由佳はついたつきの愛実の台詞を聞き、びっくりしたのである。

全てが全て？ 今時の女子高生？、その一言で集約されると思つほど由佳は単純ではない。清楚や純真、潔癖、そんな呼び方が似合うような女子高生も存在する。中身はそうであつても、この年代の少女は背伸びするのだ。それがやがて身に付いてしまい、気付けば戻れない場所まで来てしまつている。

由佳もそうであった。十代の頃は「愛のないセックスなど論外」そう思つていたのに。いつの間に、仕事のために上司と寝るようになったのだろう。

「好き、だつたらいけませんか？」

愛実はそう答え、一瞬、泣きそうに頬が歪む。

もしここで、婚約者である愛実が泣き崩れてしまつたら……事態は收拾不可能になる。由佳はすぐさま彼女を連れて、パーティ会場から出ようと考へた。

しかし、愛実はグッと口元を引き締め、近寄つて来たS銀行の頭取夫人に笑顔を見せたのだ。

(こんな子を騙すなんて……専務は何処まで冷酷なの?)

由佳には藤臣が「優しくて誠実で思いやりがあつて……人の心の痛みが判る人」だとは、どうしても思えなかつた。

だが、藤臣が愛実に向ける視線は男のソレだ。

久美子のような女は、どれほど手厳しく捨てられても自業自得だろう。所詮、キツネとタヌキの化かし合い。久美子ほど性質は悪くないにせよ、由佳にしても同じ穴のムジナである。愛実には「悪いけどバス」なんて軽口を叩いたが、藤臣の妻の座に憧れなかつたと言えば嘘だつた。

藤臣は愛実の心を弄び、ベッドに連れ込もうとしている。「後悔しません!」　愛実は十年後、さつきの言葉を後悔しないだろうか?

由佳は、愛実に対する嫉妬が消え、まるで保護者とも言つようなく思議な感情を持ち始めていた。

／＊＼＊＼＊＼＊＼

周囲の悪意が疎ましい。

女性たち的好奇の眼差しと上辺だけの慰めもつるさいが、男性た

ちの視線は悪質だった。それも時間が経つごとに厳しくなる。

「愛人の独りもコントロール出来ないとは……」

そんな言葉も愛実の耳に届いた。

藤臣の属する社会は、愛人を持つことに対する寛容である　由佳に教えてもらつたことだ。しかし、管理できずにスキヤンダルが表沙汰になると、仕事での評価も落ちる。？無能？だと言われるらしい。

今回は愛実が会場に留まつたことで、藤臣の評判は最悪なことにならず済んだ。噂話は広い会場の一部でストップし、やがて、新たな噂が流れ始める。

例のモデル、貢いでたホストに捨てられて少しおかしいらしいわ。最近、奇行が目立つんですって。妊娠もでたらめですってよ。

糺明ではなく、噂話として流布させた瀬崎の作戦であつた。

愛実がその噂を耳にした頃、

「ご歓談中恐れ入ります。愛実様、美馬専務がお戻りになられました。こちらに」

由佳が大きな声で周囲の女性たちを追い払ってくれた。愛実はホツとして相好を崩し、由佳に「判りました。ありがとうございます」と伝える。

由佳の背後に藤臣の姿が見えた。真っ直ぐ、愛実に向かつて歩いてくる。

「悪かつたね、席を外してしまつて。話し合いは終わつた。誤解が解けて、彼女にはお帰り頂いたよ」

藤臣は落ち着いた様子で淡々と愛実に報告した。

どんな形かは判らないが、決着がついたといつゝことなのだろう。

(わたしはどうなるの？　このまま……婚約者でいいの？)

それを確認したいが、ここではとても尋ねられない。
愛実が何も言えずにいると、藤臣は幾分冷ややかな視線を由佳に向けた。

「奥村くん、君が愛実に付いててくれたのか？」

「はい。他の方は専務の命令で会場を出られましたので」
由佳を見る藤臣の目に、なぜか険しい光がよぎった。

直後、愛実はハッとする。

藤臣はひょっとして、由佳と愛実の関係がホテルで顔を合わせた時のことだと誤解しているのでは？ 彼女は慌てて口を開いた。

「奥村さんはずっと傍にいて下さったんです。打ち合わせの時も、とても親切にして頂いて……」

愛実の言葉に藤臣だけでなく、庇われた由佳本人も目を丸くしている。

「そうか……。君は優秀な秘書だ。婚礼までひと月もないでの準備を手伝つてやつてくれ。それと、公式な席での役割を、愛実に教えてくれたらありがたい」

由佳は唖然とした後すぐに表情を引き締め、

「専務にご信頼いただき光榮です。愛実様がご不自由な思いをなさ

いませんよう、心を尽くさせて頂きます。ただ……」

藤臣に微笑を作り、それをそのまま愛実に向ける。

「愛実様がご不快でなければ、ですが」

確かに、藤臣の愛人だった女性だ。愛実のほうが「嫌だ」と言い出してもおかしくないのかも知れない。

でも由佳は藤臣との関係をひけらかし、愛実を馬鹿にするような言い方はしない。婚約を機に藤臣とは仕事だけの関係に戻ったといい、それは嘘ではないと思う。

「不快なんて」とはありません。しかし、ようじくお願いします」

す

「シコツと答える愛実だった。

「藤臣さん、一体どうしたことかしらー? 女が乗り込んで来たんですね! 娘は正式な婚約者ですから、こんな席で恥を搔かされるなんて!」

随分離れた場所に居たのだろう。愛実の母が、背後に叔父夫婦らを引き連れてやって来た。

「結婚を前提だというから、旅行も許可しましたけど……。旧伯爵家の娘を、それも十八歳の女子高生を疵物にして捨てるのはもうやらないでしきうね!」

母は血相を変えて藤臣に噛み付いた。母にすれば、やつと取り戻した上流階級の暮らしである。何が何でも手放すまいと必死なのだ。

「お母さん、やめて! 余計なことは言わないで」

よつやく藤臣が戻つて来てくれたのに。美馬邸のパーティ以降、愛実を避け続けていた彼が、やつと笑顔を見せてくれるようになつたのだ。もし怒らせて、今度は結婚式まで会えないことこのもなれば……。

だが藤臣は、そんな愛実の母に平然と笑顔で返した。

「それは誤解です。『J 覧の通り、何処にも女性などおりません。勘違いした女性が騒いだようですが、すでに解決済みです。今も来月の挙式について話していたところですよ』

母は周囲をきょりきょり見回し、「本当なの、愛実」と聞いてくる。

愛実が頷くと、

「まあ、ごめんなさいね、藤田さん。わたくし驚いてしまって。気分を害されませんかしら？」

「いいえ。それも全て私の不徳の致すところです。結婚後は誠実な夫になると約束しますので、お義母さんもどうぞ安心下さい」

藤田を取り巻く空気がこれまでと違っていることに気が付き、悲しい予感に囚われる愛実だった。

「申し訳なかつた」

ロイヤルスイートに足を踏み入れるなり、藤臣は愛実に頭を下げた。

パーティが終わり、最後まで残つた招待客を見送つてすでに二時間が経過している。愛実のドレスは独りでは脱げず、美容室の女性に手伝つてもらい私服に着替えた。複雑な編み込みだつた為、髪も美容師に解いてもらう。リボンと生花を取り外せば、愛実の髪はクルクルと波打つていた。

愛実の着替えが終わつたと聞き、やつて来た藤臣の第一声がそれであつた。

「本当に……何と言えばいいのか……済まない」

愛実が何も言わないので、藤臣はただ謝罪を繰り返す。

(どうして謝るの？ やつぱり、わたしどもう……)

その殊勝な態度が、ますます愛実を瀬戸際に追い詰めた。

「あの……お聞きしたいんですけど」

「判つてる。何でも答えよう。だが一つだけ約束してくれ、私との結婚を取り止めにしない、と」

「そのために、お聞きしたいんですけど……」

「いや、駄目だ。まず約束が先だ。来月の結婚式は中止にはしない。それでいいね？」

愛実は一瞬、胸が浮き立つ。

だが、そんなはずがないのだ。藤臣が愛実のような少女を選ぶわ

けがない。ところは……。

(そんなに弥生様の遺産と総帥の椅子が大事なの? 奥村さんが言うような、冷酷な人だなんて思いたくないのに)

それくらいなら、まだ正直に話してくれたほうがマシだ。
子供が生まれるから会社を犠牲にしても愛する女性を妻にしたい。
そう言われた時は、愛実は懸命に笑つて「おめでとうございます」
と答えるつもりだった。好きな人の幸福を願うのに年齢は関係ない。
わざ思っていたのに……。藤臣は愛実との結婚を変更しないとい
う。

愛実は藤臣を見てゆっくりと口を開いた。

「絶対に、嘘は吐かないで下さいますか?」

「判つた。お互いに約束だ」

～*～*～*～*

全ての計画は変更だ。愛実を表面上ではなく、事実上の妻にする。
どんな手段を使っても、彼女を自分の許に留めておきたい。必要な
ら、?愛?という言葉を利用しても。
自分の中に?愛?などという崇高な感情は残つていらない。十代の
始めからセックスを覚え、情欲に塗れて生きてきた。男としての自
分は骨の髓まで腐り切つてゐる。だが人として……わずかに残つた
分別が、自分から愛実を遠ざけようと努力してきた、はずだった。

(駄目だ……もう駄目だ。愛実が欲しい。たとえ傷つけることにな
つたとしても……)

藤臣は必死に考える。

何も初めから傷つける必要はない。女性の機嫌を取つたり、顔色を窺つたりしたことはないが、愛実をすんなり手に入れる為なら、それも仕方がない。

二人きりになつたら責められるのは確実だ。まずは機先を制して謝ろう。藤臣は謝罪の言葉だけを何度も頭の中で繰り返し、ロイヤルスイートまで歩いて来たのだった。

「赤ちゃん……本当にいらっしゃるんですか？」

愛実の声は震えている。

一方、藤臣は可能な限りの冷静さを装い答えた。

「彼女が妊娠しているか、ということなら、事実だ。診断書とH.I写真を持っていたし、彼女が受診した産科医の確認も取れた」

「それは……藤臣さんの？」

咄嗟に、違う！ と叫びたかった。

だが 藤臣さんは不実な方ではありません。

彼女はそう言い切ってくれたのだ。久美子との交際が明らかである以上、ここで否定すれば純粹な愛実の目に？不実？だと映りかない。彼は慎重に言葉を選ぶ。

「正直に言おう。可能性はある

瞬く間に愛実の瞳が翳つた。それを見せまいと彼女は俯き唇を噛み締める。

藤臣は内心舌打ちしながら、慌てて言い募つた。

「待つてくれ。だが、極めて低い可能性なんだ。第一彼女には、私

以外にかなり親しい関係の男性がいる」

そう言つと、さつき久美子に見せた写真を大理石のテーブルに置いた。それも久美子の時は打つて変わって、一枚ずつ丁寧に並べる。卑猥に見えるショットは全て抜いてあつた。

「歌舞伎町のホストクラブの男だ。週に五田はこの男を部屋に泊めていることが判つた」

愛実は困惑した様子で写真を見つめている。

「で、も……藤臣さんの子供だつて言つたのに。それは彼女の嘘なんですか？ それとも……何かの検査をして……」

「君に、あまり聞かせたい話じゃないんだが。私は似たようなケースで一度ほど痛い目に遭つてゐる。一度田は不可抗力、一度田は子供に執着したせいだ。そのせいで、こういったことは慎重にしてきた」

愛実に何処まで話せばいいのだらう。

やれピルだコンドームだと話しても、面食らうに決まつてゐる。しかも、誘惑されてコンドームなしで挿入してしまつた。だが、彼女の体内で射精はしていないので妊娠の可能性は低い、と。

(……そんなこと、言えるはずがない……)

「交際相手の女性にも充分注意してもらつて、もちろん、私も自身も注意は怠らない。ただ、一度だけ不注意に関係した記憶がある。気付いてすぐに止めたが……」

「あ、あの……？」

直接的な言い回しを避け、藤臣はセックスを想像しづらい言葉を選んだ。そのため、注意だ不注意だと言われても、愛実にすれば禅問答に聞こえるだらう。

「ああ、その……どう言つたらいいのか。要するに、子供の父親は生まれてから正式に鑑定しなければ、おそらく彼女にも判らない、と言つことなんだ」

愛実には信じられない世界なのだろう。開いた口が塞がらないと
いった様子だ。

「そんな……結婚した後で、生まれた子供があなたの子供じゃない
となつたら……その子供はどうなるんですか？」

「ちょうどいい例がある。和威がそうだ。彼のように、父親の戸籍
から抹消され、私生児となるんだ」

愛実はこの時、和威の出生の真実を初めて知ることになった。
そんな彼女の様子に藤臣は少し後悔する。これで、愛実は和威に
必要以上の同情を見せるかも知れない。そんなものは目にしたくな
かつた。愛実には藤臣の方だけ見ていて欲しい。

「あの……じゃ、これからどうするんですか？」

「え？」

和威に対する嫉妬が心の大半を占め、藤臣は今自分の置かれた立
場を失念する。

「長瀬さんの赤ちゃんです！　生まれたら……どうなるんですか？」

愛実の口調は思つたより激しい。何に怒つているのか……その時、
藤臣は気付いたのだ。愛実の辞書に中絶という文字がないことを。
それを伝えなければならないことに、彼は躊躇した。

だが、嘘は言わない約束だ。藤臣は決断を久美子に委ねたことを、
そしてその答えはおそらく中絶に行き着くであろうことを、正直に
話した。

「そんな……もし、藤臣さんの子供だったらどうするんですか！？」

取り返しのつかないことになるんですよ！」

「君の言い分は判る。私の子供だったらしい。だが、違つたらどう
するんだ？　相手の男は二十二歳と若く、彼女とはもう別れたと言

つていて。養育費どころか認知すらしないだろ。結婚など論外だ。しかもその可能性が極めて高い。そんなリスクを彼女に背負えと言えるのか？」

卑怯な言い方だと判っていた。本当に誠実な男であれば、わずかな確率でも責任を取るというだろ。いや、そもそも誠実な男がこんな事態に陥るわけがない。

（その上、無垢な少女をこの手で穢すんだ……久美子に言われた通り、間違いなく地獄に墮ちるなり）

隣に座るだけで花の残り香に心を奪われ、緩くカールした髪にすら欲情を覚える。藤臣は自分で自分で持て余し……。

藤臣が心の内が判らず、愛実は混乱の只中にいた。

今までの彼とは態度が違う。どこか頼りなげで、一つ一つ言葉を選ぶようにしている。愛実は写真を見下ろし、久美子の裏切りが藤臣にここまで動搖を与えているのだと思い、切なくなつた。

「……済まない。感情的になつた。自分の責任は判つてゐるんだ。逃げるつもりなどない。私の子供であるなら、出来る限りのことはしてやりたいと思つ。金で済ませるんじゃなく、手元に置いて育てたい、と。君には申し訳ないが……」

「それは……それは私に」

生まれて藤臣の子供だと判つたら、出て行つてくれといふことだらうか。愛実にそこまで尋ねる勇氣はない。

ところが、藤臣は予想外のことを言い始めたのだ。

「愛人に産ませた子供を引き取つて、十八歳の君に母親代わりをしてくれというのは酷い話だと思つ。もちろん君が嫌だと言つなら、無理強いはしない。本邸には住ませないし、育児には乳母を付けるだから……」

「待つて！ ちょっと待つて下さい。わたしと別れて、彼女を妻として迎えるんじゃないんですか？」

驚きのあまり、つい口にしてしまつた。

(本当はそうしたいけど……そんな風に言われたらどうしよう)

藤臣と久美子は愛し合つていたはずだ。久美子はそう言つたし、それに……藤臣は間違いなく彼女と会つてゐる。信一郎に傷つけられた愛実をホテルに匿つていた時も、結婚を口にしながら久美子と

……。

「だつて、藤臣さんは長瀬さんを愛していらっしゃるんでしょう？
あの人から、ジバンシーの？オルガンザ？が香りました。藤臣さ
んのスーツからも何度も何度か……」

それは数年前、母が好んでつけていた香りだつた。そうでなければ愛実に香水など判るはずがない。

藤臣はこんな写真を撮らせるほど久美子に執着している。興信所に頼んだのは、彼女を愛しているから。そうでなければ浮気など怪しむこともないだろう。

愛実はこの時、自分の中に芽生えた感情を持て余していた。

藤臣が他の女性を妊娠させたかも知れない。その事実より、冷蔵な彼を振り回す久美子に対しても、愛実は強い嫉妬を感じた。それでも藤臣は、愛実との結婚を強行するという。そんな彼に不信と嫌悪を覚えながら……心のどこかで、自分を選んでくれたのだという優越感も生まれる。

理想と恋情の間を心が往復し、愛実には何が正義なのか判らなくなってしまう。

そしてその想いは藤臣にも伝わったようだ。
彼は久美子との関係に愛情はなく、ビジネスだったと説明を始めた。

「私は父親としてならどんな責任も取る。だが、長瀬は私を愛しているから取り戻したかったんじゃない。妊娠を利用して社長夫人の地位を掴もうとしただけだ」

その証拠に、実子であれば裁判にしてでも引き取ると宣言すれば、久美子は途端に墮胎を口にしたという。結婚も出来ない、養育費も取れないとなれば、子供は不用だと言わんばかりだ。「そういう女

性もいる」と説明されても、愛実には久美子の気持ちがどうしても判らない。

すると藤臣は殊勝な表情で口を開いた。

「君の言つ通り、誠実でない女性を選び続けた私の責任もある。だが、どうあっても長瀬とは結婚できないんだ」

「相続のため、ですか？でも、もし長瀬さんが出産を選んだら？あなたの子供だったら、気が変わるとは思いませんか？わたしは……子供の面倒を見るのは嫌じやないです。慎也の世話はわたしがしてきましたから。でも、子供から実の母親を奪うなんて」

「実の親に育てられないのは不幸かい？だが、私もそうだがおそらく和威も、実の母から愛された記憶なんてないよ。君はどうなんだ？申し訳ないが、君たちの母親が君たちに愛情を注いで子育てしているとは、とても思えない」

藤臣の言葉は愛実の胸に響いた。

母に悪意はないと信じたい。だが、いつまでも自分が一番の女性だ。今度のことも、『娘を犠牲にした』などという気持ちは欠片もないだろう。母にすれば、財産も肩書きもある男性と結婚して豊かな生活が送れる。そんな愛実は幸運だと思っているに違いない。

久美子の一件もそうだ。パーティ会場では怒っていたが、仮に事実だとしても愛実との結婚に変更はないと聞けば、母は文句は言わないだろう。

そんな母の姿を思い出し、愛実は閉口するしかなかつた。

「反省してる。本当に、今度ばかりは自分の生き方を改めるつもりだ。不実な女性が好きなわけじゃない。金で一定期間の誠実は買えると本気で思っていたんだ。それが誤りだったと認める。一度と繰り返さないことを誓つ

「……」

藤臣はこの先の久美子との交渉を瀬崎と弁護士に任せること。「感情的にならないように、そして一度と過ちを犯さないように、金輪際久美子と一人きりで会うことはしない。愛実に向かって必死で言い訳をする。

特別な関係であった女性が、女性本人ですら父親が特定できない子供を妊娠した場合、彼の言う以上の責任は取れないだろう。

久美子はどうして、藤臣を裏切ったのか……。

ひょっとしたら、もう一人の男性が彼女にとつて本命だったのか知らない。となると、今度はその男性を裏切り藤臣と愛人関係を続けた意味が判らない。もし、愛実であれば……決して藤臣を裏切つたりしなかつた。それに、不可抗力で父親の判らない子供が出来たとしても、中絶など考えられない。

愛実は考え込み、広いスイートに息詰まる無言の時間が流れた。

「……愛実？ その、君が怒るのも無理はない。だが、移り香はあつたかも知れないが、その全部で関係があつたわけじゃ」

藤臣が更に言い訳を重ねようとしたとき、愛実が口を開いた。

「わたしには出来ません。もしあの時……信一郎さんの子供を妊娠するようなことになつても、中絶なんて……絶対に嫌です。このさき何があつても、それだけは。母は理想の母親じゃないかも知れなけれど、わたしが生きているのは母のおかげです。たとえ子供に恨まれたとしても……わたしなら、きっと産みます！」

言葉にしているうちに、愛実は胸が熱くなり……しだいに声が大きくなつた。

しかし、よく考えてみると、家族で暮らすことも儘ならない状態なのだ。もし、それが現実になつたら、子供を育てるどころか産む

「ことすら厳しいだつ。

冷静になればなるほど萎えそうになる心を、愛実は叱咤した。

（違う！ わたしなら絶対、好きな人以外とはしたくない！ あんなにお金に困つてた時だつて……藤臣さん以外の人にはついて行けなかつた。この人だから……）

最初に逢つた時に恋に落ちたのだ。愛実はあらためて彼を見上げた。

すると、彼女と同じくらい熱い眼差しで、藤臣もジッと愛実を見ている。

「あの信一郎の子供でも……産めるのか？」

押し殺したような声だ。愛実は一瞬迷つたが、「……はい」と答える。

そして次に藤臣が投げかけた質問は

「私の子供でも、産んでくれるか？」

第57話 錯覚

それを口にした瞬間、藤臣は後悔していた。

勢い余って、とんでもないことを言ってしまった。しかも、体はすでに愛実の方を向き、ソファに隣り合って座つた一人の距離は限りなくゼロに近い。胸が高鳴り、愛実の体に触れたくてどうしようもなくなる。

「それは……」

しかし、予想に反して愛実は答えを躊躇したのだ。

信一郎の子供ですら産むと即答した彼女が、藤臣の子供は迷っている。彼の心を満たしていく温かい感情が急速に冷え、寒々とした空間に取つて代わった。

「なぜだ……なぜ嫌なんだ!? レイプされた子供でも産むと言いながら、どうして俺の子が産めない! 俺を好きだと言つたのは嘘か? 本当は俺が憎いのかつ!?!」

やはり、自分のような人間は誰にも望まれない。生きる意味も価値もないのだ。

(「いつそ……この場で愛実を奪つてしまおうか?')

危険な考えが彼の胸をよぎる。レイプも含めて女性に暴力を振るつたことは一度もない。だが……。

「だつて……藤臣さんは、裁判にしてでも子供は引き取るつて言いました。実の母親じゃなくてもいい。離婚の時は置いて出て行けつて言われたら……わたしは絶対に嫌です!」

「ちよ、ちよっと待て……待ってくれ。産みたくないとか、欲しくないとかじやなくて？」

瞬く間に、愛実の瞳から真珠のような涙がこぼれ落ちる。その雲がありに美しく、藤臣はただ見惚れるだけだった。すると、なんと愛実から藤臣に抱きついたのだ！

「悔しい……藤臣さんの赤ちゃんかも知れないのに。わたしだつたら、産んであげるのに……。どうして？ どうしてあの人なんですか？ わたしにはキスだって一度しか……好きって言ったのが迷惑なんですよね。でも……わたしじや駄目なら、そんなこと聞かないでっ！」

闇に沈みかけた心に、光の束が降り注ぐ。

やはり愛実を傷つけることなど出来ない。偽りだとしても、彼女の期待に応えられたら……。愛という言葉に保証書は不要だらう。藤臣はそつと愛実の背中に手を回した。

「今日だって、可愛いって言われるだけで……でも、何年か経つたら、藤臣さんが付き合つてるような大人の女性になれるかも知れない。その時は……もし子供がいたら、連れて行つてもいいって言って下さい……お願」

愛実の言葉を終わりまで聞く前に、藤臣は一気に唇を奪った。

強く抱き締め、唇を押し付け合つついには体の芯に火が点いた。小さな炎は次第に燃え盛り、彼の控え目な理性を燃やし尽くしてしまつ。

藤臣は愛実の頬や瞼にも唇を這わせ、涙の跡を拭つて行く。そして再び唇を探り当てる……今度は舌を押し込んだ。最初の時と同じように、愛実の体は硬直する。彼女の緊張が解れるように優しく

背中を撫で、ソフトなキスに戻した。

ふと気づけば、愛実を膝の上に横抱きにして今にも押し倒しそうだ。

藤臣の体は熱くなり、そのエネルギーはすでに下半身に集まりつあった。

「子供を連れて出るのは許さない」

キスの途中でやう吸いた。すると、愛実は怯えたような眼差しを藤臣に向ける。

「その時は別れない。愛実……私たちは夫婦になるんだ。子供が産まれたら、別れる理由はなくなる。そうは思わないか?」

藤臣は愛実の返事を待たず、更に唇を重ねた。

彼の言葉とキスに、愛実も我に返つたらしい。そして自分の太腿に当たる物体に気付き、彼女は真っ赤になつた。藤臣の腕を掴む指先にも緊張が加わる。

「どうした?」

唇を離し、藤臣はわざとらしく尋ねてみる。愛実は彼の胸に顔を埋めて、

「あの……当たつてるんですけど」

「ああ、トイレの個室でもこうなつてたよ。気付かなかつた?」

愛実はふるふると首を左右に振る。

「君が欲しい……抱きたくて堪らない」

「そんな……駄目、です」

ストレートにぶつけたが、愛実は青褪めて藤臣の胸を押し退けた。しかし、駄目と言われて今さら引ける状況ではない。

「例の契約のことをしてるのか? あれは弥生様との件だけだ。」

私との結婚にも婚前契約書を作るつもりだったが、無しにすればいい。普通の結婚にしよう」

「いえ、だから……ちゃんと結婚してからでないと……本当に赤ちゃん出来たら」「

「妊娠が不安なら充分に気をつける。それに万一の時でも、後ひと月もないんだ。別に大したことではない」

「そんな、簡単に言わないで！ 藤田さんのことは好きだけ……怖いんです。長瀬さんみたいに捨てられたら、って。もし、相続の件がなかつたことになつたら、わたしは要らないでしょう？ その時、子供がいたら……どうやって生きて行けばいいのか判らない」

特に無神経な台詞を吐いたつもりはなかつた。だが、愛実はボロボロと泣き始める。

「私が君を捨てるはずがない。どうしてそんななんだ？ 信じてないのか？」

「何もしないって誓つてくれた藤田さんを信じてました。でも……」

彼はこの時、肝心な言葉を忘れていた。愛実が何を悲しんでいるのか、何に怯えているのか、気付かぬまま見当違いの言葉で彼女を試してしまう。

「ひと月も待てない。他の女のところへ行く……と言つたうぢつする？」「

ヤキモチを妬いて欲しかつた。好きな子をいじめる、小学生のやり方である。

「……判りました。それは嫌だから、藤田さんの好きなところへ

「え？ あ、いや」

愛実は俯き、震える指で彼の袖を握り締めたまま言つ。

「でも、これだけは忘れないで。藤田さんにとつて誰でもよくても、

わたしは違いますから。それと、一度でいいから…好き…って言って下さい」

その言葉に慌てたのが藤臣だ。

「悪い！ 他の女っていづのは嘘だ。本当に済まない。 判つた。君の希望通り結婚式まで待とう。もちろん他の女は抱かない。約束する」「…………愛実…………」

愛実の瞳に一瞬で愛の光が甦る。

「この田を見るたび、藤臣の胸にスイッチが入るのだ。守ってやりたい、と思う。彼女を傷つける全ての物から庇い、両腕で包み込み、幸福にしてやりたい。その想いが、懸命に彼自身から愛実を遠ざけてきた。

だがもう、堪えきれないことを覚悟したのだ。

わずかな良心に警笛ランプが灯る。藤臣はその赤い点滅から田を逸らせた。

「愛実、私は誰にでもキスする訳じゃない。君が気づいたよ……こんな風に興奮したりもしない。叶つなら、このままチャペルに飛び込みたいくらいだ。私は……君を愛してる」

「そんな……信じられない」

「こんな大事なことで嘘は言わない。愛実……私のことを愛してくれ。子供を産んで、一生離離ないと約束するんだ」

生まれて初めて口にした愛の言葉 それは藤臣に強い酒を一気に呷った時のような、激しい動悸と高揚感をもたらした。

「嬉しい……ずっと藤臣さんのことが好きでした。あなたを愛します。あなたの子供を産んで、一生傍にいます」

「…………愛実…………」

吸い込まれるよつに藤臣は彼女に口づけた。

強い保護本能と、それを上回る性的欲望。この二つに負けて、藤臣は愛という言葉で十八歳の少女を騙している。だが、たとえこの欲望が消えても、愛実を無碍に捨てないことだけは神に誓う。彼女が望めば一生夫婦として過ぎ、子供に対する責任も全うする。

そのコントロール不可能な想いを？愛？と呼ぶことに、彼はまだ気づいてはいなかった。

第57話 錯覚（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

第五章はこの回で終わるとなつます。

次回から第六章…自覚があるのかないのか、いささかお馬鹿な藤田ですが、しばらく楽しい婚約期間を過いで下さりまことに。

そう…しばりくは、ね（笑）

引き続き、よろしくお願ひ致します。――

「私は……君を愛してる」

藤臣から夢のような告白をされて、ちょうど一週間。彼は西園寺邸を訪れていた。

「でも……そんな、泊まって頂くなんて」

愛実の母が、ほんの数日間だが家を空けることになったのだ。付き合いが復活した親戚の結婚式に呼ばれたのだという。母が居なくとも特に困ることはない。愛実も弟たちも気軽に了承した。

ところが母は「留守の間が色々心配ですの。結婚までの大事な時期ですもの」そう言つて藤臣を呼び出したのだ。母に別の思惑があることを愛実は知っていた。

「あなた……藤臣さんとまだ、ですって？ 一緒に旅行まで行きながら、一体何をしてるのー？」

正式な婚約披露から、母は嫁ぐ娘にセックスの話題を振りはじめた。どうすれば夫が他の女に走らないか、男と女にはどんな駆け引きが必要か、等々。母は自分が妊娠しやすい体质だったことを挙げ、愛実もそうに違いない、という。結婚が決まっているのだから、多少前後しても構わない、早く子供を作りなさい、とまで言い始め……。

「結婚まではそんなつもりはないの。藤臣さんもわたしの気持ちを理解してくれたわ」

そう言い訳した愛実に、男性に無用な我慢を強いたらしくないことにならない、と母は異論を唱えた。そして藤臣を自宅に招いたのである。

心配だから泊まつてやつて欲しいなど、口実もいとこりがだ。

「よろしくじや ありませんの。」そこからお仕事に行かれたら、ねえ
そんな母の思惑を知つてか知らずか、彼は気をくに頷き「もちろん、構いませんよ」そう答えたのだった。

婚約披露パーティーの夜、二人はそのままロイヤルスイートに泊まつた。

藤臣は愛実を放そつとせず、彼女はいつの間にか眠りについてしまつ。そして目を覚ました時には、愛実はベッドの中にいて、傍らに彼が眠つていたのだ。

この人は本当に自分を愛してくれている。これほどまでに大切にしてくれるのは、彼の想いが眞実だからに違ひない。愛を確信した愛実は、結婚式で永遠を誓おうと心に決めた。

その藤臣が、Tシャツに短パンという極めてラフな格好で西園寺邸のリビングで寛いでいる。

彼はソファに腰掛け、左には尚樹が右には真美が座つていた。それぞれが教科書を手に宿題を教えてもらつてているのだ。末っ子の慎也はテーブルを挟んで藤臣の前に座り込み、色々口を挟んでは尚樹たちに怒られていた。

「すみません。お仕事で疲れていらっしゃるのに……母がどんでもないことをお願ひしてしまつたから。本当にごめんなさい」

愛実はコーヒーを出しながら、ついつい謝罪ばかりが口につく。

「いや、和威が高校を出るまでは、よく勉強をみてやつたものだ。君も後でみようか？」

「い、いえ、わたしは……」

愛実が慌てて断わる「とする」と、『美馬さん』て何でも知つてゐるの

よ。お姉ちゃんも教えてもらつたほうがいいって」真美が屈託ない笑顔で言つ。

でもそれは、後で一人きりになるという意味に違いない。

藤臣のことだから、母の真意も知つてゐるのだろう。彼は弟たちにもこんなに優しく接してくれる。そんな婚約者に、これ以上待つて欲しいと言うのは……母の言つ通り、愛実が間違つてゐるのかも知れない。

愛実は密かに覚悟を決めると、「じゃあ……後で」曖昧に微笑んだのだった。

／＊＼＊＼＊＼＊＼

仕事を終えて戻つて来たら「お帰りなさい」という声が聞こえた。可愛いハート柄のエプロンをつけ、笑顔の愛実が玄関まで走ってきたのだ。その瞬間、美馬邸には一度と戻りたくない、藤臣は強く思つた。

「本当に申し訳ありませんわ。あの子はこうこつたことに疎くて……まあ、まだ十八ですものね。あなたが上手くリードして下さらないと」

愛実の母親は誰もいない時を見計らい、コッソリと耳打ちした。どうやら、愛実が藤臣との関係を話したようだ。それ自体とくに問題はないが……。まさか、花嫁の母から婚前交渉を勧められるとは思つてもみなかつた。どうやら彼女は、美馬家との繋がりを確実なものにしておきたいらしい。結婚までひと月もない状況ではあるが、弥生から契約を反故にされることが怖いのだろう。

愛実は以前、

「独身時代は両親に、結婚後は夫に、母は甘やかされて来たんですね。だから、わたし以上に世間の厳しさを知らない。自分がどんなとんでもないことをしているか、気付けないんです。父が亡くなつて何度も説明したんだけど、判つて貰えなかつた」

母に理解してもらうのは諦めている。そう言って悲しそうな笑みを見せた。

確かに、美馬家の女性たちとは別の意味で、我が道を行くタイプの女性のようだ。

（この女は……『いつもこうしたことに疎い』娘が、体を賣りつとまでしたことに気付かないのか？）

それだけではない。借金の形に愛実が闇金業者に連れて行かれたらどうなるか……そんな想像力すらないとすれば異常だ。

「判つっていたはずよ。でも、考えたくないことは考えようとしない人だから……」

藤臣が苛立ちを露わにした時、愛実は、それが母に性格なのだ、と語った。

藤臣は全てをぶちまけようかと思つた。

自分の都合に合わせて愛実を利用し、しかも上手く立ち回り、彼女の為だなんて……人間の肩がやることだ！

しかし次の瞬間、彼は自分の行為を振り返りゾッとした。

真つ先に愛実を利用しようとしたのは藤臣自身であつた。巻き込んだのは弥生かも知れない。だが、羽化したばかりの蝶を、蜘蛛の巣から逃がしてやることも出来たはずだ。藤臣はそれをしなかつた。あまつさえ自分の手元に囮い込み、とうとう愛の言葉で彼女の未来をも縛ろうとしている。

藤臣に愛実の母を責める資格はなかつた。

「すみません。近所付き合いも親戚付き合いもなくなつて、わたしも最近はあの子たちを構つてやれなかつたから……」

弟妹が部屋に戻り、リビングに一人きりになつた途端、愛実は再び謝り始めた。

転校や引越しが続き、愛実たちには友人もいなかつた。彼らに好意的な来客が珍しかつたのだろう。藤臣にしても子供に甘えられるなど、随分久しぶりの経験だ。

「その親戚だが、何か嫌な思いはしていないか？」

「いいえ。この間はわざわざ遠くから来て頂いて、結婚式にも出て下さるそうです。……どうかなさつたんですか？　うちの親戚がか失礼なことでも」

「ああ、いや、違うんだ。君が何もなければいいんだ……」

藤臣は言葉を濁した。

リビングで数学の教科書を開きながら、尚樹は藤臣に尋ねた。
「姉さんがお金のために結婚するなんて思つてません。でも、もし
そうなら……僕らのためなんだ。美馬さんはどうなんですか？　ど
うして、姉さんと結婚するんですか？」

その深刻そうな表情に驚きながら事情を聞き出すと、

愛実のおかげでラッキーだつたな。母親に似て、男を説し込むのが上手い娘だ。

パーティの後、久しぶりに顔を合わせた親戚は、酔つた勢いで尚

樹にそんな言葉を浴びせ掛けたという。

「愛してるよ、心から。私に金があったのは偶然だ。だがそれを負

坦に思つなら、君は一生懸命勉強して、将来、何かの形で返していく
れたらいい

尚樹は藤臣の返事に安堵した様子だった。

「あの……『飯もお口に含ひませんでしたよね？　でも、高級料理
なんて……わたしには作れなくて』」

黙り込む藤臣の様子をどう思ったのか、愛実は妙に心配そうだ。
「オムライスは嫌いじゃないよ。亡くなつた母が機嫌の良い時に作
つてくれた記憶がある。ああ、そう言えれば、施設でも日曜の昼食に
よく出てたな。十歳の頃に戻つて、君と人生をやり直せたらいいの
に……」

その言葉に深い意味はなく、藤臣は本音を漏らしただけだが
……。

第58話 思惑（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

第6章をスタートします。

どこまで行く気だ、と思つていらっしゃることどうしよう（苦笑）

次の7章で完結予定です（^ ^ -）

ちなみにオムライス！

一昨日からツイッターを騒がせているネタですが…

（知らない！と言われる方…気になる！と思われましたら「オムライス 女子力」でググつて見て下さい（^ ^ -）

ついつい愛実に作つて貰いました（笑）

藤臣は意外にお子様なので、ハンバーグもカレーも大好きです。

ではでは、よろしければ、もうしばらくお付き合いで下さいませw（

ー）m

「『めんなさい。わたし、何も知らなくて……嫌なことを思い出せてしまつて。本当にすみません』

愛実の謝罪に藤臣は驚いた。

「こや、君が謝ることじやない。施設でのことは、それほど嫌な思い出と言つわけじやないわ」

あの女性職員との経験はともかく、母や妹の死を乗り越え、それなりに未来に夢を描いていた時期だ。藤臣にとって最悪なのは、その後だらう。

藤臣は愛実を手招きし、自分の膝近くに呼び寄せた。少し恥ずかしそうに、彼女は藤臣の前に立つ。思わず、調子に乗つて膝の上に抱き上げてしまった。

「きや！」

「弟くんたちは寝たんだろ？」「…

「それは……あの藤臣さん」

「ん？ 何だい？」

愛実の髪の匂いが好きだ。ただのシャンプーだと聞いても、これまで嗅いだどんな香りより扇情的で彼の心を高ぶらせる。目を開じ、愛実の髪に顔を埋めていると、そのまま離れられなくなるのだ。

「あの……無理に、我慢してもらつてるんでしようか？ ここで暮らせるのは藤臣さんのおかげなのに。わたしが我がまま言つてますか？」

藤臣はその言葉に顔を上げ、まじまじと愛実を見つめた。

（どうこいつ意味なんだ？ まさか ）

「わたし……愛してゐつて言われて、嬉しくて。あなたに甘えてし

まつてゐるのかも知れない。わたし、藤臣さんに嫌われたくないんです。だから……あの」

次の言葉を藤臣は指先で制した。人差し指と中指で唇を閉じさせ、黙らせる。

おそらく彼女の母親だろう。藤臣を呼びつけ、彼を焚き付けただけでなく、純粹な愛実の心につけ込んだのだ。彼女が罪悪感を持つような言い方をしたに違いない。

「愛実 実は、君に話があるんだ」

藤臣は気持ちを引き締めた。愛実から構わないと言われたら、すぐにもベッドの飛び込みたいのは山々だ。だが、あの母親の思つままに操られるのは面白くない。

だが、急に冷静さを取り戻した藤臣に、愛実の顔色が変わる。「わたしが、何かしたんでしょう？」

怒られると思ったのか、声が少し震えていた。

藤臣は、そんな愛実の指先を握ると、そつと引き寄せ口づける。「こんなことを伝えるのは心苦しいんだが……長瀬くんは中絶手術を受けたそうだ」

その言葉に愛実は眉根を寄せ瞳を曇らせた。不実な対応を責められる と思つた藤臣は早口に言い訳を始める。

「君の言いたいことは判る。でも、これが彼女の決定なんだ。例の……ホストにも結婚を迫つたらしく、結局断わられて。どうしようもなかつたんだろうな」

ふいに愛実の手が彼の頬に触れた。

柔らかい指先が皮膚の上をゆっくりとなぞる。

「大丈夫、ですか？ でも、藤臣さんも悪いんですよ。絶対なんてないんだから……誰とでもなんて、一度としないで下さい」

黒い瞳が心配そうに覗き込んだ。

藤臣には、久美子の子供が自分の子とは到底思えない。彼女自身も同じに違いない。だからこそ、出産を選ばなかつたのだろう。実際のところ、もし久美子が子供を産み、それが藤臣の子供だと証明された場合、彼が親権を得るにはかなりの金と時間を要したはずだ。結婚していれば容易だが、そうでない場合、法律というのは甚だ未婚の父親には不利になつてゐる。

だが、愛実の目を見ていると、これ以上の釈明は出来なかつた。

「……判つてる。約束した通り、一度と君以外の女性には触れない。けど、君が気を遣う必要はないんだ。私のこれまでの行いを見れば、簡単に体を許す気になれなくて当然だろ？ 君には手を出さないと、いう、自分で言い出した契約も反故にしてしまつたし……」

殊勝に言い始めた藤臣に愛実は無言で身を寄せた。

「長瀬さんはあなたを裏切りながら、どうしてパーティの席で自信満々に言えたんでしょうか？ 子供の父親なんて、調べられたらすぐバレてしまつ」と joystick? 「」

愛実には不思議な話だらう。だが、藤臣にすれば簡単なことだった。

藤臣は結婚しないと言い続けてきた。しかし、後継者を得る為の結婚なら、彼は受け入れると思われていたのだ。藤臣は過去の経緯から、妊娠には過剰なほど警戒している。と、同時に、彼が子供を捨てないことは知れ渡つていた。可能性があれば藤臣は首を縊に振る。そして、結婚後すぐに第二子を作れば、簡単には別れられなくなる。久美子はそう判断したのだらう。予想外は、愛実の存在だった。

もし、愛実との婚約話がなく、久美子が公式の場で妊娠・結婚を匂わせれば、藤臣は体面を優先して結婚したかも知れない。……だが、その考えは愛実には伝えなかつた。

代わりに彼が口にしたことは、

「私が二十歳の頃だ。二つ年上の女性と……交際してて、彼女に子供が出来たんだ。血の繋がつた家族が欲しかつた私はすぐに結婚を申し込み」

ようやく美馬の家に慣れた頃のこと。

東恭子あずまきよこは同じ大学に通う眞面目な優等生だつた。地味なタイプの女性で藤臣の趣味ではなかつたが、失恋してヤケ酒を飲む彼女と遭遇し、その勢いでホテルに行つたことがきつかけだつた。

翌朝、藤臣と関係したことを知り、恭子は真っ青になる。しかし彼氏を忘れる為だらうか、藤臣が誘うと数回ホテルに付いてきた。この関係を？交際している？と呼ぶには些か無理があるのは承知だ。彼女に対する感情に、愛も欲望もなかつた。だが、藤臣が関係した女性の中で、恭子は唯一誠実と呼べる部類の女性に違ひなく……。妊娠を告白された時、彼の中で本能が目覚めたのだ。

守ることの出来なかつた妹の存在が彼の胸に甦る。家族は取り戻すことは出来ない、だが、新たに作ることは可能なのだ。藤臣は生きる目標を見つけたかのように、恭子に結婚を申し込み、その想いは一気に炎上した。

「養父母をはじめ、先代や弥生様も大反対でね。けど、押し切つて結婚することになつた。そして挙式当日……彼女は来なかつたんだ」「どうしてですか？ そんな……子供もいるのに。あ、まさか」
愛実はアクシデントを想像したようだ。あの時の藤臣も一緒にあ

つた。

「事故とかじゃない。彼女は自分の意思で来なかつた。はつきり言え巴……他の男と逃げたんだ」

祭壇の前で待ちぼうけを食わされ、藤臣は大恥を搔かされたのだ。直後、恭子の両親が慌ててやって来て、書き置きを残して娘は出て行つたしまつた、と告げた。

恭子が一緒に逃げたのは、別れた恋人だと判明する。藤臣は一人を探して見つけ出した。

「男と逃げるならそれでもいい、だが、私の子供を渡すわけには行かない！」

そう言つた藤臣に恭子は「あなたの子供じゃない」と答えたのである。

病院の検査で、妊娠の時期は藤臣と関係する前、と判明したといふ。しかし、すでに藤臣が結婚の準備を進めていて、誤解だつたと言ひ出せる状況ではなかつたのだ、と。

「彼女は困り果てて、別れた男に相談したらしい。男は美馬の名前に怖気づいたものの、一緒に逃げようと言つたそうだ」

そもそも、失恋に付けこんだのは藤臣のほうである。ましてや、金ではなく愛情を選んだ女性を、藤臣に責めることは出来なかつた。「思えばあれで怖くなつたんだな、誠実つてヤツが。とことん女に虚偽にされる運命なんだと思つたら……」

「わたしは逃げたりしません！　あなたを置いて逃げたりしないわ」

愛実の腕が首に巻きつき、ふわふわした唇が藤臣の唇に押し当たられた。拙く、そして甘美な誘惑は、無意識で藤臣のスイッチをオンにしてしまった……。

他人の思惑に乗せられるのは「免だ。

そんな根拠のないプライドなど、愛実のキスは見事に粉砕してくれた。柔らかな唇が欲しくて堪らなくなり、藤臣はそのまま愛実の腰を抱き締めた。

そつと重ねるだけのつもりだったのだろう。その唇を激しく吸い上げられ、愛実は慌て始める。

「ふ、藤臣さん……あの」

「黙るんだ」

藤臣はそれ以上の隙間を『えなかつた。

一気に愛実を抱き上げ、階段を上がり彼女の部屋に向かう。愛実の部屋はリサー・チ済みだ。弟妹の部屋からは少し離れ、真下は母親の部屋だった。ノブを回した後、ドアを背中で押し開ける。常夜灯の下、室内には年代物の学習机やシングルベッドがぼんやりと浮かび上がった。それは、小学生の頃から変わっていないのではないか、と藤臣に思わせた。

そのまま、勢いに任せて愛実をベッドに押し倒す。

(愛実が悪いんだ。無意識で誘惑する彼女が……。ただでさえ我慢しているのに、キスなんかされたら)

次の瞬間、ベッドの頭もとに置かれた写真立てが目に入った。

祖母や父親も一緒に家族写真と、どこから手に入れたのか藤臣が一人で写っている写真が並べてある。トクン、と藤臣の心臓が高鳴る。愛実は特に嫌がる様子ではないが、きつく目を閉じ、指先が微

かに震えていた。

不意に、下半身の猛りに冷水を浴びせられた気分になり、藤臣はベッドサイドに座り込む。

「ここまでだな。今夜は……」の辺で止めておいた

「それで、構わないんですか？」

「もちろんだ。はじめから、そのつもりだったんだから……」

心にもない言葉を口にして、いやとか恥ずかしい。だがまさか、ヤル気満々だつたが家族写真の前に臆したとは言えないだろう。

「この写真は？ いつの間に私の写真を？」

話を逸らす目的で藤臣は質問をしてみる。すると、戻つて来たのは予想外の答えだった。

「香港に行かれたときの写真です。あの……信一郎さんから頂いて。長瀬さんと一緒に写つてるのはちょっと……でも、藤臣さんだけの写真があつたので、つい

その答えに、藤臣は開いた口が塞がらない。

愛実も腹が据わつていると呟つべきか、それとも天真爛漫さの勝利だろうか。もし藤臣なら、信一郎に関わるものなど処分しだろう。ましてや長瀬の存在を思わせる写真であるなら……。

藤臣がそのことを口にすると、

「でも、藤臣さんが助けに来てくれたから……嫌な思い出だけじゃないです」

はにかみながら、愛実は答える。

彼女は少しきシャクシャになつた髪を手ぐしで整えながら、ベッドの上にちょこんと座つている。頬を薄つすらとピンク色に染め、その姿を見ているだけで再び戦闘態勢に入るのは、悲しい男の性がである。

今すぐ立ち上がり部屋から出るべきかどうか、藤臣は真剣に悩んでいたのである。

～*～*～*～*～

やはり、藤臣が冷酷だなんて信じられない。

彼が苦しそうに口にした十年前の話に、愛実は深い慈しみの気持ちを抱いていた。家族のいない藤臣にとって、子供の存在はどうぞの喜びだつただろう。誠実な愛情に負けた傷は深かつたに違いない。女性に誠実さを、求められなくなつてしまつほどに。

（わたしが家族にならつ。この人の子供を産んで……本当の家族になりたい！）

愛実に芽生えた強烈な感情が、キスを誘発した。

藤臣から「愛してる」と言われたことも、後押しになつてている。自分は藤臣の愛を得て、本当の妻になるのだ。それは彼を独占してもいいということ……藤臣が他の女性のもとでネクタイを外したりしたら、愛実に怒る資格があるということだった。

ふわふわした気持ちで藤臣のキスを受け止めていたら、あつという間に愛実は自室に連れ込まれ、ベッドに転がされていた。

藤臣が望むなら、このまま特別な関係になつても構わない。仮に子供が出来たとしても、藤臣は喜んで大切にしてくれるだろう。大事なのは二人の関係で、周囲にどう思われるかじやない。

だが、彼を突き動かした情熱は瞬く間に消え去り、愛実の心だけ高ぶった場所に取り残されてしまった。

（やっぱり、体が藤臣さんの好みじゃないんだわ……）

胸は巨乳には遠いが、貧弱と言われるほどではないだらう。とはいえ、セクシーと言われるほど色氣があるとは思えない。単純にカップのサイズだけなら由佳や久美子にも似らない。それでも、彼女たちのほうが数十倍セクシーであつた。

愛実に田にもそう見えるのだ。藤臣はもつと感じているだらう。

「すみません……わたしが何も判らなくて、藤臣さんもその気にならないんですね……」

シングルベッドの上に座りこんだまま、愛実はポツリと呟いた。藤臣は息を呑むように固まっている。愛実はそんな彼の様子を感じ取り、余計なことを言つてしまつた、と後悔した。

「君は……まつたく、少しは男心も判つてくれ」

前髪をかき上げ、藤臣はため息と共に愛実の耳元で囁いたのだ。仕方なさそうな声とは裏腹に、表情は糸が切れたように緩んでいる。彼は愛実の頬に軽くキスすると、細くしなやかな彼女の指を握り……情熱の場所へと導いたのだ。「きやつ！」ほんの一瞬で愛実は手を引つ込める。

それは、短パンの中に隠した凶器のようだつた。体に押し付けられたことはあるものの、手で触れるのは訳が違う。セックスというものを身近に感じ、愛実はあらためて？結婚？の意味を実感した。

「怒つたかな？」

「い、いえ……」

「その気になつてない訳がないだらう。だが、これまでのように簡単に考えたくないんだ。本気で反省して、態度を改める。その決意を証明したいから、待つと言つてる」「ひー

愛実の指先を握つたまま藤臣は切々と訴えた。

「あの……ヤキモチ妬いてもいいですか?」「は?」

「浮氣しないで、とか。他の人と噂になるのも嫌……とか」
藤臣の手に、もう一方の自分の手を重ね、愛実は懸命に言葉にした。

「ああ、いいよ。もちろんだ。君は妻になるんだから」「他の人とはキスもしないでね」

「してないよ。この十年、君以外の女性とはキスしない」

その台詞と同時に、愛実の唇にキスが降り注いだ。

藤臣のキスは唇だけに留まらず、愛実の首筋や胸元、肩や腕にまで、服を脱がさずになぞれる場所は全て口づける。それは例えようもなく優しい愛撫で、愛実は安心感に包まれ彼に身を委ねた。

「藤臣さん……お願いがあるの」

「何でも聞こい。こんな穏やかな気持ちになれたのは生まれて初めてだ。君の願いなら、何でも叶えてやる」「朝まで、こうして抱き締めていてくれますか?」「……」

「結婚とか、本当は凄く不安だったから……。でも藤臣さんとならわたし、あなたに出逢えて幸せです。本当に、夢みたいに幸せ出来ないほどの幸福があると知った夜だった。

愛実はそつと藤臣の背中に手を回し、ギュッと抱きつぐ。それは、抱き合つて一緒にいられるだけで、愛を感じられるだけで、言葉に出来ないほどの幸福があると知った夜だった。

の妻になつた後のこと

。

第61話 発情

随分久しぶりに、愛実が美馬邸を訪れた。

藤臣の養父母が彼女を食事会に招いたのだ。学校帰りの愛実は制服のままである。髪を縛る黒いゴム、白いハイソックス、そして学生力バンを手にした婚約者の姿に、藤臣は息を飲んだ。

（駄目だ……俺は一体どうなったんだ？　どうして白いソックスに欲情するんだ！）

瀬崎運転の社用車から降り立つ愛実の姿を見た瞬間、全身の血が燃え盛った。禁欲生活の影響か、ここ数日の睡眠不足が祟っているのか。

愛実は毎夜、彼の腕の中で幸せそうに眠っている。そんな彼女を無下に突き放すことも出来ず、大人の余裕を見せている藤臣だったが……すでに限界だ。

「藤臣さん！　あの、お招きありがとうございます。それに、弟たちのためにわざわざ家政婦の方を回してくださいさつて」

「えっ？　あ、ああ……それは瀬崎に命じたんだ。君にはこの屋敷に泊まつて貰う予定だからね」

スーツの袖に飛び付いてくる愛実を可愛らしく思いながら、逃げ出したい衝動に駆られる。だが、それをやってしまえば、愛実は再び藤臣の気持ちを疑い始めるだろう。ここは彼にとって正念場であった。

そんな藤臣の姿を見て苦笑しているであろう瀬崎に視線を向けるが……。

彼は藤臣の様子に気付くこともなく、真剣な眼差しで愛実を見ていた。その瞬間、藤臣は制服姿の婚約者を強引に腕の中に囲い込む。

「あ、あの……」

愛実は面食らつたように藤臣を見上げる。

「さあ、食事まで私の部屋で休むといい。案内するよ」

藤臣は彼女の肩を抱き寄せるそのまま歩き始めた。途中でピタリと足を止め、振り返る。

「瀬崎、じき苦労だつたな。この後の予定はなかつただひつ? 直帰してくれて構わない」

彼は気付かれたことを悟つたのだろう、「はい。それでは失礼致します」今度は田を逸らしたまま、深く頭を下げたのだった。

この時、藤臣は確信した。瀬崎は愛実を諦めていない。彼は藤臣が言った『彼女が望めば……俺が断わる理由などないだろ?』それを実行するつもりでいることに気付いたのだ。

(いい歳をして、まさか本気で惚れたのか?)

藤臣は瀬崎と一緒に変わらなことを棚に上げ、心の中で文句を言つ。

その時だ。

「あの、車の中で瀬崎さんに聞きました」

愛実の沈んだ表情と声に藤臣の心拍数は跳ね上がった。

(何を……言つたんだ)

密告されて困る悪事は、過去を掘り起しこせば際限なく広がる。

藤臣は上手くごまかすことも出来ず、ただ唾を飲み込んだ。

「長瀬さんがモデルを辞めて田舎に帰られた、と。最後に小さな雑

誌に色々掲載されるかも知れないけど、『タラメばかりだから気になさらないよ』、と慰めて下さいました』

久美子の話だったことに藤臣はホッと息を吐く。

結局、久美子は所属事務所の契約も切られたようだ。愛人バトロンである藤臣の金の力に胡坐をかき、自分を磨く努力を怠っていた彼女に新しい道は『えられなかつた。彼女は仕返しとばかり、三流誌のインタビューリーに応じたと聞いています』

「ああ、そらしきな。捏造記事を載せて、ペンは剣よりも強し、と叫びたがる小さな出版社もあるんだ。一々相手にするのも馬鹿らしくてね。君に実害があるようなら、きちんと対処するが」「い、いえ。そうじゃないんですけど……」

「どうした？」

「長瀬さんは、あんなに美人でスタイルも良くて、立派なお仕事をされていたのに……こんなことになってしまって。それって複数の男性と……そうなつてしまつたからですよね？一度経験してしまつたらああいうことつて、誰とでも出来るようになるんでしょうか？」

？」

愛実は俯き悲しそうに話した。

彼女の言わんとすることは判る。久美子の場合、無闇に体を提供せずとも、充分に男を惹き付ける姿をしている。仕事もしていく金銭的に困っている様子もないのに、ということだろう。だが、藤臣には理屈で判つても感情で理解しがたいものだった。

所詮、？たかがセックス？だ。誰とも肌を合わせたことがなく、それを売ることに、清水の舞台から飛び降りるような覚悟を決めていた愛実には判らないのかも知れない。その点、久美子は藤臣と同じ穴の貉だった。自分の欲望に正直で、金と男だけじゃなくモデルとしての成功や将来の確約まで手に入れたかったのだろう。

一方、愛実が望むのは愛情だ。藤臣とも、？愛し合いたい？のであつて？セックスしたい？わけじゃない、と言つだらう。それが單なる愛という言葉にデコレーションされたセックスとも氣付かず。近い将来、藤臣は彼女に眞実を教える。その時は、愛実も久美子のようになつてしまふかも知れない。

（朱に交われば……か。それなら別れが楽になるな）

胸の内で毒づきながら、なぜか気持ちはざわめくばかりだ。本心は、愛実だけは愛情を求め続けるのではないか、そんな期待が心を掠めた。

しかし、何も答えず眉を顰める藤臣の様子に、愛実は誤解したらしい。

「『めんなさい！ 変なことを言つてしまつて……忘れて下さい』あからさまではないにしてもセックスに関する話題を口にしたことに、藤臣の機嫌を損ねたと思つたようだ。

「いや、そうじやないんだ。君には？誰とでも？とは思つて欲しくなくて……。私だけでいいと言つてくれないか？」

「当たり前ですっ！ そんな、藤臣さんと結婚するのに……本当の結婚だつて仰つたでしょ？ あなた以外の人とは一生しません！」

……あ

またもや力強く肯定したこと気に付き、愛実は見る間に真つ赤になつた。

「それは……嬉しいな」

藤臣は自分の声に驚いた。まるで発情期のオス猫さながらの声色だ。湧き出す欲望を隠すことも出来ず、赤く染まつた愛実の頬に触れた。

藤臣の部屋は三階、ここはまだ一階にも上がつていない。せめて

自分の部屋に入つてから……。 そう思つものの、 部屋に入つたらどこまで進むか見当もつかない。

「ふ、 ふじおみ、 さん」

上ずつた愛実の声を聞いた瞬間、 彼女の吐息すら奪いたくなつた。 問答無用で壁に押し付け、 可憐に震える唇に口づける。 愛実の手から学生カバンが滑り落ち、 中一階の踊り場に転がる音がした。 使用人なら、 通りかかっても知らん顔をしてヒターンするだろう。 彼女の家に泊まる時はエスカレートしないように最近ではキスも我慢しているのだ。 愛実を手に入れるため、 この我慢大会はあと二週間続く予定だつた。

「藤臣…… さん…… ここ、 階段です」

「知つてるよ。 ここならキス以上には進めない」
「で、 でも、 キスだつてこんな場所じゃ」

「もちろん、 その気になればキス以上も可能だが…… それは結婚してからだ」

藤臣の口づける場所が、 唇から頬を伝い首筋に移る。 化粧品の匂いのしない肌がこれほどまでに魅力的だと思ったこともなかつた。 愛実には出来る限りこのままでいて欲しい。 他の女のようにしないためには、 どうすればいいのか……。

そんなことを考えながら、 無意識のうちに手が半袖ブラウスの胸もとに移動し、 えんじ色のリボンに触れた瞬間 中一階から咳払いが聞こえた。

第6-1話 発情（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

長らく更新が滞ってしまい、申し訳ありませんでした。
事情は活動報告に書かせていただいた通りです。
もう大丈夫ですので安心下さいませ（^ ^）／

「～愛人」と揃えようと一文字のサブタイにしたのですが…
こんなに長くなるとは思いもせず…無謀でした。
サイトに移すときは何か別の方法を考えます（苦笑）
もしダブってましたら、ひとつそり教えてやって下さる事（—）m

藤臣はハツとしてキスをやめ、中二階の踊り場に視線を向ける。冷ややかな眼差しで二人を見上げていたのは、美馬和威であった。

「邪魔するつもりはないんだが、こっちも仕事帰りなんだ。ここを通らなきゃ自分の部屋に行けないもんね」

紺のスーツに同系色のネクタイ、ビジネスバッグを抱えた「く普通の会社員スタイルだ。ただ、上着のボタンを外し、ネクタイを弛めた姿はどこかだらしなく感じ、これまでの和威とは随分印象が違う。

由佳との情事の現場に和威が愛実を連れて現れたあの日、藤臣は彼を本社に呼びつけた。

信一郎が愛実を襲つたこと。藤臣が彼女を救い出し、結果、二人でホテルに宿泊するようになつた事情などを説明する。簡単には納得出来ないまでも、愛実が藤臣を信じると言つ以上、和威に出番はない。彼は黙つて引き下がつたはずだった。

だが思えば、和威は身内に向けた婚約披露には欠席。T国ホテルのパーティは顔を出したようだが、一度も話はしなかつた。この間、藤臣は自己のことには必死で、和威のことまで考へる余裕はなく……。そう言えばつい先日、『和威の帰宅が遅くなつた。女でも出来たのではないか』そんな話題をどこかで耳にした気がする。

藤臣は軽く頭を振ると氣を取り直し、

「やあ、済まないな。婚約中なんだ。大目に見て貰えたらありがたい」

和威は何も答えず、愛実から離れようとしない藤臣の背後をすれ

違った。その時だ。

「待て、和威。お前……」んな時間から飲んでるのか？」

「……大した量じゃない」

「まだ六時にもなってないんだぞ。それに、一般社員が帰宅するには早過ぎる時間じゃないか？」

遅くなる分には和威も男だ、気付かない振りをするのが礼儀だろう。だが、何の肩書きも持たない和威が、普通に仕事を終えて帰宅するのは七時を回るはずだつた。さらにどこかで飲んでくるとしたら、もつと遅くなる。

「……体調が悪くて早退したんだ」

「一杯飲んだら良くなる病氣か？ 病名を知りたいか？」

言われるまでもなく本人も判つたのだろう。和威はカツと頬を染め、藤臣に向き直り怒鳴りつけた。

「あんたには関係ない！ 僕のことは放つておいてくれ！ 邪魔なら叩き出せばいいだろ？ あんたにはその資格があるんだからな」

「

藤臣は和威の口調に驚いた。

どれほど怒りを露わにしても、藤臣にこんな言葉をぶつけたことはなかつた。飲酒の影響といつても、泥酔や酩酊には程遠い。

それは飼い犬に手を噛まれた気分だつた。藤臣もいさか頭にきて言い返す。

「そんなに出て行きたいなら今すぐでも叩き出してやるぞ。だがその前に、シャワーでも浴びて頭を冷やせ。和威、お前だけは信一郎さんや宏志くんとは違うと思っていた。私や弥生様の期待に背くな。わざわざ自分から居場所を失くすような、馬鹿な真似はしないでくれ。……いいな」

声も出せず、腕の中で震えている愛実の肩を抱き、藤臣は階段を上がりうとした。

「立派な言い草だね、藤臣さん。さすが、おじい様が期待した一人息子だ」

「……！」

「聞いたよ。死後認知? だつて? おじい様が遺言で認知して、藤臣さんにほとんどの財産を残したそうじゃないか。おばあ様はこの屋敷だけでも実の孫に残そうとしたけど……それもあつさり藤臣さんに持つて行かれたって言つてたよ」

和威は愛実を横目で見て、意地の悪い笑みを浮かべた。

屋敷の中では一味方だと信じてきた藤臣が、実は血の繋がつた叔父であることを知り……彼は相当ショックだつたらしい。藤臣は何か言おうと思つたが、おそらく今の和威は何も受け付けないだろう。

(参つたな……もう少し後だと思つてたんだが。それに……)

真横で愛実が息を飲み、藤臣を見上げている。

その視線をひしひしと感じ、愛実に対する言い訳を考えてなかつたことに気が付いた。

「愛実さん、君には幻滅したな。藤臣さんのセックスが素晴らしいのは、多くの女たちから聞いてるわ。だが、まさか君が、その一人になるとは思わなかつた」

「和威、文句があるのは私に対してもうう? 愛実を巻き込むな!」

「同じことだ。婚約披露の席を外して、二階のトイレでセックスしてたんだつて? 今だつて僕が通りからなれば、どこまでヤル氣だつたんだ? 一ヶ月前の君とは別人だな」

和威は愛実を鼻で笑つた。その態度は藤臣にはとても看過できず
力で和威を黙らせるべく、愛実から離れようとした。
だが、そんな藤臣の手を愛実はギュッと掴む。

「和威さん……あなたが仰るとおり、わたしは藤臣さんに出逢つて
変わりました。彼を愛されてると知つて、とっても欲張りになつた
と思います。でも和威さん、あなたも一ヶ月前とは別人です。初め
てお会いした時、宏志さんの言葉遣いが我慢ならないと仰つてたじ
やありませんか!? 今のおなたは、あの時の宏志さんと同じです」

それは藤臣のどんな説教より、和威の胸に堪えたようだ。和威は
愛実から視線を逸らせると、一言もなく一階の廊下に走り去る。

「済まない、愛実。和威はビックやら私が思つ以上に、君に本気だつ
たらしい。でも冷静になれば……」

「和威さんのことより……。先代の社長さんは、藤臣さんの本当の
お父様だったんですね？」

即答できず、黙り込む藤臣だった。

～*～*～*～*～

そこは広くて寂しい印象の部屋だった。

愛実は初めて藤臣の私室に通され、そんな感想を抱いた。豪華な
調度品が揃い、重厚なデスクもある。一間続きで奥は寝室、専用の
バスルームにトイレもあり、ホテルのスイートルームのようだ。

「あの……」ここで生活されてるんですよね?」

「生活？　ああ、まあ、寝る為に戻るだけだが、これも生活だらうな」

部屋は綺麗に整頓され、余分なものは何一つない。出しつ放しの本であつたり、ソファの背に掛けられた室内着であつたり、そんな藤臣の残り香のような物が一切ないのだ。

「なんだか、家つて言うより……ホテルの部屋みたいですね」

愛実は思った通りの感想を口にした。

言つた後に、藤臣が気を悪くしたのではないか、と察したが……彼は気にしてはいないようだ。

「家族と暮らす場所が？　家？　なら、私に？　家？　はない。美馬一志は生物学上の父親ではあるが、私の家族じゃなかつた」

和威の変化に愛実も驚いていた。あれほど言葉を選んで、丁寧に愛実に接してくれた人が、どうしてあんな風になってしまったのか。だがそれには、美馬邸での婚約披露の一件も関係していたのだ。

宏志と結託したメイドの千里に追い詰められ、助けてくれたのは藤臣だつた。あの時は浮かれていて何も考えなかつたが……。

親戚一同を前にして、藤臣は愛実とトイレの中で？親密な関係を持つた？と告白したも同然であった。せめて和威にくらい事情を説明したい。だが、あんなキスシーンを見られてしまつては、容易には信じてくれないだろう。

驚きはそれだけじゃない。

和威が藤臣に言つた、『おじい様が期待した一人息子』その一言は愛実に衝撃を与えたのだった。

第63話 地雷（前書き）

軽い性的な描写があります。R15でお願いします。

「どうして……本当のことを話してくれなかつたんですか？」

美馬家に漂う、藤臣を取り巻く微妙な空気。それに愛実も気付かなかつた訳ではない。

でもまさか、弥生の夫が妻以外の女性に産ませた子供だったなんて。だからこそ、弥生は藤臣を選んで欲しくなかつたのだ。自分の血の繋がつた孫と結婚して、この屋敷を継いでもらうために愛実を相続人に指名した。

「どうして？ これがそんなに重要なことだったのかな？」

「重要です！ そんな……わたし、何も知らなくて」

愛実はただ、弥生に申し訳ないことをした、その思いだけだった。しかし、そんな愛実の言葉に藤臣の形相が変わつたのだ。

「知つてたらどうだと言つんだ！？ 弥生様のために私から和威に乗り換えるのか？ 私を好きだと言つたのは嘘かつ？」

「それは……そりじゃなくて」

藤臣との出会いは偶然ではない。弥生が愛実の名前を出したからだと聞いている。それがなければ、あの夜、愛実は金融業者の男たちに連れて行かれていたはずだ。

弥生の思惑はともかく、西園寺の祖父を思い出し、愛実の名前を挙げてくれたことが全ての切っ掛けだつた。確かに、弥生の眼差しから優しさや思いやりを感じ取つたことはない。愛実のことを誰かが？ 旧伯爵令嬢？ と呼ぶたび、表情の端々に不快感を滲ませるほどだ。

だが、自分に娘しかおらず、いきなり孫と同じ年頃の息子を家に連れて来て後を継がせると言われたら……。

藤臣に非はないが、弥生の悔しさも容易に想像できる。

「じゃあ、どうして黙つておられたんですか？ 藤臣さんのご両親の話が出た時に、実の父は亡くなられたおじい様だと、教えて下さつても良かったじゃないですか！ 重要なことじゃないんでしょう！？」

口にした後、愛実はハッとした。

藤臣だけを責めるのは間違つていい、と。なぜなら弥生も、藤臣の養父母である弘明・佐和子夫婦も、誰も愛実に伝えてはくれなかつた。それに藤臣の母親は三十代で亡くなつたはずだ。今年亡くなつた美馬一志は八十を過ぎていた。ざつと計算しても、藤臣の母親は親子ほども歳の離れた男性の子供を産んだことになる。

（もし、わたしなら……。自分の口から言つるのは辛いかも知れない）

「あ、あの……『めんなさ』」

謝りうと口を開いた時、彼の手が愛実を引っ張り、ソファの上に押し倒した。

「じゃあ、こう言えよかつたのか？ 入り婿の一志は女房の親の目を盗み、京都で女遊びを繰り返した。母もその一人だ。息子が欲しいなんて奴の言葉を真に受け、俺を産んだ途端……弥生の耳に入り捨てられた。だが、弥生はそれだけじゃ足りず……京都の置屋に手を回して、母が芸妓として働けないようにしたんだ！」

藤臣の目が燃えるようだ。これほどまで苦しそうな顔は初めて見る。愛実は瞬きも忘れ、食い入るように彼を見つめた。

「母は酔うと俺を殴つた。それも泣きながら……。だが奴と違つて、俺を捨てて行くようなことはしなかつたさ。普通の男と一緒にれば、きっとごく普通の優しい母親になつたんだろう。母が死んだ時、俺は八歳だった。施設に入る時も、奴は俺を無視したんだ。 三

十で父親に認知されたことを、喜ばないといけないのか？ 弥生を
気遣う義務が、俺にあるのかつ！？」

愛実は藤臣の傷に触れてしまつたことを後悔した。

藤臣は泣いてはいない。それが悲しくて、愛実のこめかみに涙が
伝づ。言葉にならず、ジッと彼の目を見つめる。すると、彼は愛実
の両手首を掴んだまま、覆い被さるようにキスして來たのだ。

熱い吐息が愛実の唇から首筋に下りた。片方の手が自由になり、
同時に制服のリボンが解かれた。ボタンが一つ、二つと外され、白
いブラジャーが露わになる。熱い唇は肩紐を外しながら膨らみを辿
り、その先端を目指していた。

(藤臣さんは、ここでわたしを抱くの？)

お互に愛を伝え合い、夫婦となることが決まつてゐるのだ。切
つ掛けが何であれ、誰かの思惑があるにせよ、それでも愛し合つて
いる。弥生を傷つけるとしても、愛実には藤臣以外の男性は選べな
い。可能なら、相続人から外して欲しいくらいだ。

以前なら、そうなれば藤臣から見捨てられると思ったが今は違つ。
？藤臣に愛されてゐる？その想いが愛実を強くした。

ギコシと目を閉じ、愛実は彼にされるがまだ。

ボタンの三つ田も外され、ブラジャーから白い乳房が弾け出た。
そこを藤臣の唇に囚われ、愛実の全身に電流が走つた。

「あつ……やあ……つ」

二人の息遣いだけが広がる部屋に、その声は予想外に響いて……。
次の瞬間、藤臣は飛び退くよつに愛実から離れたのだ。

「す、まない。少し、頭を冷やしてくる」

口元を押さえ、喘ぐよつと彼は部屋から出て行つてしまつ。

愛実の体から藤臣の熱が消え、彼女は身震いした。無防備にはだけた胸元がやけに冷たい。心細さと切なさに、涙が止まらない愛実だった。

／＊＼＊＼＊＼＊＼

「お料理は好きなんですか……あ、でも凝ったものは出来なくて。カレーとかハンバーグなんですけど」

愛実がいつも家族にご飯を作っていることを話すと、弘明と佐和子はここにこと聞いてくれた。

久しぶりに顔を合わせた大川暁も同様で、「それは羨ましい」などと語りて藤臣をからかっている。

問題は……。

「まさか、うちでそんな物を作る気ではないでしょうね？ 我が家にはちやんとゴツクがいるのよ。あなたは社長夫人になるんですからね。自分でキッチンに立つよつな、そんなみつともない真似は許しませんよ！」

そう叫んだのは佐和子の姉、加奈子であった。信一郎・宏志の母親だ。この日は珍しく、夫の信一も同席していた。

「まあまあ、それはゆっくり覚えていくことだらう。あまり煩く言うものじゃないよ」

信一は一見すると温厚な紳士だ。年齢相応に下腹も出ており、どっしきと落ち着いた印象である。だが、ふとした瞬間に見せる愛実の全身を舐めるような眼差し……。それを感じるたび、背筋がゾクツとする。爬虫類を思わせる視線に、どれほど頑張っても彼女の笑顔は引き攣った。

「そんな甘い」と呟つてゐるから、繫ざ社長なんて情けないことになるんですよ！」

株主総会で藤臣の次期本社社長就任が議決されたことを受け、加奈子は現社長の夫に不満をぶつけた。

しかも副社長の信一郎は、肩書きはそのままでオーストラリアの支社長として飛ばされることになつたのだ。例の事件以降、屋敷に寄り付かなくなり、仕事もおざなりだという。もちろん、今夜の夕食会にも兄弟揃つて欠席だつた。

弥生も食事は自室で取ると言い、和威も具合が悪いから、と部屋に籠もつたままである。屋敷は一気に三女夫婦の天下となり、加奈子の焦りや苛立ちは、愛実の田にもよく判つた。

「全く、お母様も何を考えてこんな娘を……」

尚も愚痴を吐き続ける加奈子に向かつて、これまで黙つていた藤臣が口を開いたのだ。

「『不満なら、この屋敷を出て行かれはどうですか？ 加奈子さん……いや、お姉さんとお呼びしましょうか？』

それはまるで挑戦状を叩き付けるよつた、藤臣の爆弾発言だった。

微妙にそれぞれの気配が変わり、愛実は食堂内の気温が一度上がるのを感じ取った。テーブルに置かれたデザートのシャーベットも、室内の熱気で形が崩れ始める。

皆が息を呑み、普段なら軽口を叩く暁ですら沈黙を守っている。

藤臣は愛実を抱こうとして止め、しばらく間、部屋に戻つて来なかつた。次に顔を見せたのは、夕食会の用意が出来たと言い、食堂までエスコートしてくれた時……。

食事が始まつても、隣に座る愛実に視線すら向けてくれない。

(まだ……嫌われたと決まつた訳じやないもの)

愛実は可能な限り明るく振舞つた。

結婚したら藤臣に尽くす妻になる。彼のためならどんなことでもする。その想いを、誰より藤臣に伝えたい。彼の怒りが鎮まる」とだけを祈りながら。

だが、藤臣が加奈子に牙を剥ぐのを見た時、気付いたのだ。

愛実は迂闊にも過去の傷に触れてしまった。しかもまだ、癒えていない傷口に。藤臣は怒っているのではなく、傷つき 振り上げた拳を何処かに呑きつけずにはいられないのだ、と。

「そ、そんな」と……公言なさつてよろしいのかしら？ お母様が

聞かれたら

加奈子の声は上ずつていった。

しかし、その表情からこの場に居る誰もが……食堂の隅に控える執事の糸井まで、藤臣の立場を承知していたと判る。

「聞かれたら、何です？」

藤臣の声は変わりなく冷静だ。無表情のまま、デザートスプーンで洋梨のシャーベットを掬つて口に運んでいる。

「お母様は絶対に公言しないことを条件に、認められたはずですよ！　それを……こんな風に」

「……だから？」

藤臣はスプーンを置くと水のグラスに手をやつた。

「結局、弥生様も判つておられるんだ。あなた方に彼女の唯一の財産　この美馬邸を残しても、現金欲しさに売り払われるつてことを、ね」

「そ、そんなことはしませんわ！」

加奈子は血相を変えて怒鳴るが、

「では……相続税はどうやって納めるつもりですか？　祖父　いや、父の相続税を支払うために、金を融通したのはこの私ですよ。弥生様もそうお若くはない」

攻撃的な言葉を残し、コーヒーを断わつて藤臣は席を立つた。

一志は株券や債権・預貯金などすぐに換金可能な財産はほとんど藤臣に残した。不動産や貴金属・絵画などを妻や三人の娘に残したのだ。この不況下に、高額な美術品に金を出す投資家やコレクターはそうそう見つからない。

それだけでなく、娘たちは高齢の両親の遺産を見込んで、多額の借金を抱えていた。藤臣以外の誰に継がせても、この美馬邸は売却され金に換えられることは間違いない。

仮に、愛実が和威を選んだ場合、本社の新社長となる藤臣の協力なしでは、屋敷の維持も難しかつたはずだ。

最後に、愛実と食堂に残つた暁はそんなことを話してくれた。

「弥生様が生きてる間は、加奈子さん一家もここに住めるけどね。亡くなつたら……君たちしだいだらうな」

「わたしは……わたしは」

誰も追い出す気はないと言いかけ、愛実は躊躇した。今はいなが、ここに信一郎が戻つてくると考えたらゾッとする。それに、宏志も和威も住んでいるのだ。藤臣はこの屋敷を手に入れたがつている。結婚後にここに住むのは必定だらう。

黙り込む愛実に暁はさらに言葉を続けた。

「それと、弥生様は執念深い人だよ。本気で藤臣に譲るかどうか……まだ油断しないほうがいい」

「油断つて……和威さん、とか？」

久しぶりに顔を合わせ、様相の変わった彼に驚いたばかりだ。

「和威は可愛いもんさ。この僕だって、金欲しさに君を罠に嵌めるかもしれない」

暁に正面から見つめられ、愛実はドキンとした。

その瞬間、トイレでの出来事が脳裏をよぎつたのだ。

「あのつ！ 余計なお世話かも知れませんが……ふつ、不倫は良くないと思います！」

「…………え？」

「朋美さんです！ 愛し合つていらつしやるなら、ちゃんとなぞつたほうが……」

暁と朋美の経緯を聞いたのはつい最近だ。

朋美の母・加奈子や、暁の父・弘明までもが知つていて目を瞑っている理由が判り、愛実は同情した。美馬一志という男性はなんて罪作りな真似をしたのだろう。藤臣のことだけでなく、暁にしても氣の毒でならない。

朋美には夫や子供がいる。それをどうするかは他人が口を挟むことではないが……。

「今ままは……誰にとつても良くないんじゃないかと」

すると、暁はフッと醒めたような笑顔で答えた。

「そうだね。でも、歳を取ると面倒になるんだ。今さら……軌道を修正したって」

「今さらって、人生はまだ半分以上あるんですよー。」

愛実が美馬家の人たちに会つて思つたことはそれだつた。皆、何かしら諦めている。これも全て一志の影響なのだとしたら……。
愛実はすっくと立ち上がり、

「わたし、藤臣さんの傍にいます。この先、何があつても一生傍に居るつて約束したんです。だから……弥生様が何を考えているとしても、わたしが藤臣さんの傍を離れなければいいことでしょう？」

大丈夫です！」
力強く宣言した。

この時の愛実は、？愛し合つ一人に乗り越えられないものなどない？そう信じていたのだった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

食堂に愛実を独り残してしまった。

藤臣がそのことに気付いたのは部屋に戻つた後である。

愛実に責められ、我を忘れた。ここまでコントロール出来ない事態に直面したのは、初めての経験だ。藤臣は激情的な自分に驚いていた。

(カエルの子はカエルって奴か?)

自嘲氣味に笑つてみる。

藤臣にとつて、仕事でもプライベートでも、一志に似ていると言
われるほど屈辱的なことはない。その度に彼は自分を追い込み、心
の内で復讐心を燃やすのだ。

少し頭が冷え、藤臣は部屋から出ようとした。

夕食会に出なかつたとはいえ、和威はともかく、あの宏志が屋敷
内にいる。愛実が独りでいたら、どんな悪さを企むか知れない。ふ
いに、信一郎に殴られた時の愛実の姿が浮かび、藤臣は怒りを新た
にした。この次、わずかでも愛実を傷つけたら、オーストラリアど
ころではない。

(地獄に飛ばしてやる!)

部屋から出ようとしたその時、扉が外から開いた。

「あ……藤臣さん。あの、わたし、この部屋に戻つてきて良かつた
んでしょうか?」

今の愛実は制服姿ではなかつた。

夕食会の前に、少し大人びたモノトーンのワンピースに着替えて
いる。藤臣が用意したものだ。

「ああ、もちろんだ。済まない……おとな氣ない真似をしてしまつ
て。君も気まずかつただろう。本当に悪かつた」
不意打ちで愛実の顔を見たせいたづら、「ごく自然に謝罪の言葉
が口をつく。

すると、愛実はホッとしたような笑顔を見せた。

「……良かった。もう一度と、藤臣さんが口をきいてくれないのか
もって不安だったの。『めんなさい。話すか話さないかなんて自分で
決めることなのに……。藤臣さんのお父さんが誰かなんて、どう
でもいいことだから。誰でも変わらず、わたしはあなたが好きで
す』

藤臣の両腕に手を添え、彼が最も欲しかった言葉を口にした。

不覚にもじよぼれそうになる涙を堪え、藤臣は愛実を抱き締めたのである。

愛実は藤臣の腕の中で目を閉じた。何を求められても、彼を信じて従おう。

そう心に決めながら……。

「愛実……実は、行きたい場所があるんだが」

そんな決意とは裏腹に、彼は愛実を自分の体から引き離す。そして、少し照れたような笑みを浮かべたのだった。

母屋から直線距離で五十メートルほど離れているだろうか。藤臣が連れて行ってくれたのは改装半ばの洋館であった。ちょうど木立の中央に建ち、母屋からは木が目隠しになつてている。豪奢な造りの母屋に比べ、やけに地味な印象だ。

「全面的に改装してるから、あと一ヶ月は掛かるそうだ。でも、夏休みに入れば一ヶ月はハネムーンに出るだろ？ 戻ってきた頃に完成していて、ここで新婚生活を始められる」

戦後すぐに建てられた年代物である。土台がしつかりしている為、内装のみ大幅に変更した。元々は、弥生の妹夫婦が暮らす為に建てられたものだという。しかし完成したときには妹夫婦の状況が変わり、別々の相手と生活を送ることになつてしまい、新築の洋館は無用の長物と成り果てた。

その数十年後、藤臣や和威の避難場所、或いは暁と朋美の逢引現場として活躍したのである。

「加奈子さんや佐和子さん」夫婦がお住まいになつても良かつたん

じゃないかしら?」

今でこそ築六十年を過ぎているが、加奈子が婿を取った三十四年前ならそのまま住める状態だったのではないだろうか。

愛実の感想に藤臣は困ったように笑いながら教えてくれた。

「確かに。だが、弥生様の考え方なんだ。男といつのは目を離したら何をするか判らない。婿養子に迎えた以上、羽目を外さないように親が目を光せていないと。そう言って、家人は母屋に住むことを命じた。だが私の場合は、この離れにでも住まわせたいみたいだつたけどね」

「藤臣にしてもそのほうが気楽だつたに違いない。

だが、弥生は彼にも母屋に部屋を与え、食事も一緒に取ることを強制したのだ。それは家族として迎えたというより、素行不良の彼を見張る為だつと藤臣は笑つた。

「一般教養が無さ過ぎて、会話には一切加われなかつたな。義務教育は終えてたけど、まともに勉強はしちゃいなかつたからね。中学を出たら車の整備工でも大工でも、とにかく住み込みで手に職をつける仕事を探すつもりだつたんだ」

彼は軽く言つが、愛実には身につまされる言葉だ。

それだけではない。藤臣にとつて、弥生をはじめ全員が敵のようなものである。その敵地に、十代の少年がたつた一人で挑んだのだ。どれほどふんだんに食べ物が並んでいても、パンの一個、肉の一片だつて、彼にとつては石を飲み込むようなものだつたりう。

「エントランスは増築したんだ。ちよつと待つて、補助の電気が点くはずだ」

藤臣は床に這つ外部電源のコンセントを差し込んだ。夜でも作業できるくらい、周囲がパツと明るくなる。

「まあ……なんて素敵……」

彼が増築したという一階のエントランスホールは一階まで吹き抜けになっていた。天井はドーム状で採光を重視した設計のようだ。二階へ上がる螺旋階段はエントランスに張り出したバルコニーに繋がっている。まだ出来上がってはいないが、白を基調にしたシンプルなデザインは新婚家庭のイメージにピッタリで、愛実は思わず声を上げてしまう。

彼に促されるまま、靴を脱がず、螺旋階段の向こうに見える廊下を進んだ。

正面はリビングであつた。左手には大きな窓枠が見える。右手にはまだ天板の張られていらないカウンターがあり、ダイニングとの仕切りになっていた。

「足元気をつけて。この向こうはキッチンだ。以前は厨房として独立してたんだが……」

藤臣に手を引かれ連れて行かれた先には、最新式のシステムキッチンが入っていた。

気に入らなければ愛実が使いやすい物に変更可能だという。

「凄い……でも、わたしがキッチンに立つてもいいんですか？」
社長夫人がキッチンに立つようなみつともない真似はするな、と
加奈子に叱られたばかりである。

「伯母の言葉は気にしなくていい。こっちに住むことは、弥生様には了解済みだ。新妻の手料理を期待してもいいかな？」

藤臣に両肩を掴まれ、耳元で囁かれた。
愛実はドキドキしながら答える。

「はい、もちろん！ お弁当だって作れますよ」

「それは楽しみだ」

キッチンまでは外付けの明かりがきていた。ダイニングとの境にドアがないので光は射し込むが、どこか薄暗く……その気がなくともムードを盛り上げる。

二人はどうやらからともなく指を絡めるように繋ぎ、寄り添つたままリビングに戻った。

エントランスから繋がる廊下はリビングの中を突き抜けるようになっている。リビングの向こうに見えたのは裏庭ではなく中庭。中庭の中央にサンルームのような廊下があり、突き当たりに重厚なオーラク材を使った両開きの扉が見えた。

「あの……」「こは？」

「夫婦の寝室だ」

愛実の鼓動は速まった。

扉は昔のままだという。あまりに立派で、現在の基準でも安全性に問題がないのでそのまま使つたらしい。他にもそのまま利用したものがあり……。

扉を押し開け中に入ると、藤臣は内側の壁に付けられたスイッチを押した。こちらは別電源で、先に仕上げた為すでに電気が通っているという。

煌々とした灯りの下、二十畳くらいの寝室にクイーンサイズの天蓋つきベッドが横たわっていた。部屋の真ん中辺り、ヘッド部分が壁にピタリと付けられている。マットやレースのカーテンは新品だが、天蓋部分を含む本体がイタリアから直輸入したアンティークで、六十年前に弥生の父が取り寄せた物だった。

「あの……大きな、ベッドですね」

「我ながらなんて陳腐な感想だろう。

「まあね、この方が遠慮せずに愛し合えるだろう?」

ベッドを田にするだけで、愛実の額には薄つすらと汗が浮かんだ。そんな愛実を楽しむように、藤臣は夫婦生活を想像させる言葉を口にする。

(一体、こいつからこんな準備を? 本当の結婚にじょひつて仰ったのは、婚約披露の時なのに)

言葉にはしなかつたが、藤臣はそんな愛実の気持ちに気付いたようだ。

「驚いたかい? 母屋の空氣にはウンザリしていたからね。この屋敷を出ることは出来ないが、結婚を機に別棟を建てようと考えた。その時ここを思い出したんだ。寝室の絨毯と壁紙は真っ先に替えさせたんだが、ベッドはギリギリまで悩んだ」

あの婚約披露パーティの後に、ベッドはそのままいい、と業者に伝えた。藤臣はそのことを嬉しそうに話す。

「それと、君とちゃんと家庭を築くつもりだという証だ」

彼が案内してくれたのは、寝室の奥に作られた続きの間だった。木の香りのする真新しい扉を開くと、そこは十五畳くらいの洋室だった。

もとは書斎だつたらしに。寝室と同じく重厚な扉がついていて、それをもつと開閉しやすい軽いものに替え、全体を明るく優しいイメージにしつらえたと説明する。

「(?)は?」

「転んでも大丈夫なように……柱もドアも天然木で角は取つてある。床もコルク材だよ。未来の子供部屋だ。……気が早すぎるかな?」

愛実は言葉もなかつた。無言で彼の横顔を見つめ続ける。

「愛実……ベッドカバー やシーツはまだだが、新しいマットは入つてるんだ」

藤臣の声は掠れていた。

「だから？」

「いや、だからって、その」

愛実は藤臣のワイシャツの袖を抓むと、少しだけ引っ張った。

「藤臣さん。あの……お願いがあるの」

彼女の耳に、藤臣がゴクリと唾を飲み込む音が聞こえ……。

第66話 艶事（前書き）

軽い性的な描写があります。R15でお願いします。

「わたし……一寸でも早く、あなたの赤ちゃんが欲しい。そうしたら、本当の家族になれるでしょう?」

見上げる愛実の目に、灯りが反射して煌いている。薄つすらと浮かべた涙はダイヤモンドの雫のようだ……藤臣の胸にも光を仄めた。

「愛実、式の前にフライングをしても怒らないのか?」

「こんなことを言つわたしは、嫌いですか?」

「いや、好きだよ」

脳裏をよぎる様々な言い訳は心の隅に押しやつた。

愛実の細い腰を抱き寄せ、そのまま唇を重ねる。制服姿の彼女も愛らしかつたが、少し大人びたシックな洋服も愛実の瑞々しさを損ねることはなかつた。……藤臣^{オトコ}の体に火を点けるほどに。

藤臣は床と同じくコルク仕様の壁に、彼女の背中を押し付けた。愛実が逆らわないのをいいことに、熱いキスを繰り返す。手は次第にスカートの裾に入り込み、彼女の太腿を撫で始めた。ほんの一瞬、愛実は怯えたように体を強張らせる。

「嫌なら早めに言つてくれ。あと少し進んだら……止まれなくなる

そう言いながらも、指先が愛実の太腿から離れない。きつく閉じた脚を割り込み、指の腹で内腿を擦つた。その柔らかい感触に藤臣の呼吸は乱れ、意識も飛びそうになる。ここで「やつぱり怖い」と言われて、本当に止められるかどうか……微妙であった。

「イヤ、じゃないです」

文字通り？蚊の鳴くよつた声？だ。

愛実の言葉に、藤臣の自制心は脆くも弾け飛んだ。彼女を抱き上げ、寝室に戻り、メイキングされていないベッドに押し倒す。

新品のマットは安ホテルのような軋んだ音は出さず、一人分の体重を容易く受け止め、逆にゆりかごのような優しい余韻を残した。覗き込んだ愛実の瞳は、不安を孕みながらも期待と愛情の色に染まっている。

藤臣は心臓がバクバクと音を立てるのを感じた。初体験の時ですら、これほどの期待と緊張を覚えた記憶はない。それが……いい歳をした男が手に汗を握り、指先が震えているのだ。

必要以上に我慢をしていたせいだろうか。それとも、愛実の体にとんでもなく期待しているのか。

(落ち着け！ これじゃ挿入まで持たないだろうがっ！)

男の本能 顕著な反応を見せる下半身を鎖でグルグル巻きにして、押さえ込みたい心境だ。

愛実はそんな藤臣をどう思つたのか。

「あの……電気……消さないんですか？」

尋ねたいわけではなく、消して欲しいのだろう、と叫びないとすぐに戦つた。

他の女であれば、「うるさい」「関係ない」とひそかに口を進めていただろう。だが、愛実にそんな冷たい態度は取れない。嫌われるのも、泣かせるのも嫌だった。

「あ、ああ……電気か。判つた、すぐに消してくれる」

滑稽なほど浮かれた声だと自分でも思つた。

あたふたとベッドから這い下り、扉近くのスイッチを消す。すると、一瞬で室内は真っ暗だ。ベッドの両サイドには、ベッドと同じくイタリア製アンティークのフロアランプが置かれていたが、コンセントは差し込まれていらないらしい。

かるうじて、隣の子供部屋の灯りがドアの隙間から射し込んでいた。藤臣はそれを頼りにベッドに戻る。我ながら、何をしているのだろうと笑いが込み上げてきた。

「あの、藤臣さん？ 怒ったの？」

「どうして？ 笑ってるんだ。こんな経験は初めてだ。君と同じ、高校生に戻った気分だよ」

愛実は体を起こしたようだ。しかし、隣部屋から漏れる程度の灯りじや、彼女の表情は見えなかつた。

「高校生の藤臣さんに……わたしも会つてみたかった」

艶麗さをかもし出す愛実の声を頼りに、闇の中、藤臣はマットの上に指を這わせた。すると、すぐに柔らかな指先を見つける。なめらな肌を伝い、藤臣の指先は腕から肩へ、首筋、顎と触れながら少し湿つた唇まで辿り着く。

「今のおれでも、充分に君を満足させられると思つよ」

「ふ、藤臣さん……そういう意味じゃ……」

見つけ出した唇に、吸い寄せられるように口づけた。

愛実もだいぶ、キスに慣れてきたらしい。微かに開き、藤臣の舌を待ち受ける。求められるまま、スルリと中に滑り込み、遠慮がちに差し出された彼女の舌に絡めた。

激しいキスに、首回りを締め付けるネクタイが邪魔だった。彼はネクタイを緩め、スーツの上着を脱ぎ捨てる。

(つたく。家族の夕食会でネクタイ着用なんて……面倒な)

心のうじで悪態をつきつつ。放り投げた上着は、からつじてベッドの端に引っ掛けている。

「あ、あの……藤臣さん？ スーツは掛けおかないと、シワにならぬ？」

愛実は無垢な少女かと思えば、妙なことに『気が回る娘だ。

「そんなものは忘れてくれ。今は……俺のことだけ考えるんだ」キスだけで、藤臣の心も体も一瞬で押し上げられ、気が狂いそうになる。ズボンの前が窮屈になり、暴れ馬を押し込めているようだ。出来れば、スカートをたくし上げ、ショーツを引き摺り下ろし、前戯なしでさっさと繋がりたい。だがそんな真似をすれば、朝の光がこの部屋を満たした時、愛実の頬に涙の跡を見る事になるだろう。自己嫌惡の穴に埋まるのは、愛実のファーストキスをトイレで奪った時だけで充分だ。

ゆつくりと愛実を押し倒し、布地の上から彼女の胸に触れた。

「あつ……んん」

愛実の声を聞いた瞬間、藤臣は我慢にも限界があることを悟った。彼女を横向きにして背中のファスナーを下ろす。ワンピースの上半身を脱がせ……闇に慣れた藤臣の目にて、下着姿の愛実が映る。

「愛実……愛してるよ」

こういつ時はそう言つべきだ。

そんな打算で口にしたはずの「愛してる」は、彼の心に正体不明の波紋を描いた。甘やかな波はどんどん広がり、彼の心を覆いつぶしてしまいそうだ。

愛してる。愛してる。愛してる。愛してる。

「そのままいつて、『愛してる』の波に飲み込まれてもいいかも知れない。」

藤臣の指がブラジャーの中に滑り込み……。

直後、携帯電話のホール音が寝室の静寂を突き破った。藤臣が脱ぎ捨てた上着から聞こえる。仄かに点滅する光も見え、艶かしい空気が消えていく。

「あ、あの、電話が……」
「無視しよう。大したことじゃない」
「でも……」「……」

確かに、ホール十回を超えても切れる気配がない。電話の音は？
出るまで鳴るぞ！？と聞こえる。

(チツ！ 部下ならクビにしてやるー)

舌打ちして藤臣は愛実から離れた。
上着の内ポケットから取り出した携帯画面に映つてるのは？瀬崎？の文字。

(「マイシ、どこかで見てるんじゃないだろ？！？」)

『俺だ。こんな時間になんだ！』
『……こんなと言われましても。まだ十時にもなっていませんが』
『言われてみればその通りであった。』
『そ、それはともかく。お前、直帰したんじゃなかつたのか？』
思わず立ち上がり、はみ出たワイヤーシャツをズボンの中に押し込み

ながら、藤臣はカーテンのない窓から外を窺つた。

『……』

『今、どこから掛けてるんだ？　まさか、屋敷の中からじゃないだろ？』

『うう』

『社長、結婚までは控えると仰っていたのでは？』

『……お前に関係ない。プライベートに口を出すなど、何度言わせる』

『では、はつきりと聞かせて下さい。愛凜さんを愛している、と。弥生様が亡くなつても離婚しない。そう社長の口から聞けば、私は』

『』

瀬崎の口調はいつも少し違つた。どこか疲れたよつな、藤臣に対する苛立ちも伝わつてくる。

『どうした、瀬崎。何があつた？』

藤臣の声も、瞬く間に緊張を含んだものに変わり……。

第67話 伏兵

『美馬帝国、新社長に愛人とご落胤！？ 社長就任のために決めた十八歳の花嫁は单なるお飾り？』

そんな煽り文句が書かれた女性週刊誌が愛実の手の中にあった。

愛実はあの夜、新婚夫婦の寝室で朝を迎える構わない、そんな覚悟で藤臣のキスを受け止めた。だが、瀬崎の電話で婀娜めいた空気は一掃され、なんと、愛実は藤臣に実家まで送り届けられたのである。

「問題が発生してね。今夜は屋敷に戻れないと思つ。私のいない屋敷に、君ひとり置いてはいけない」

藤臣の表情は強張っていた。

そして、翌々日に問題の週刊誌が発売されたのだ。

そこには藤臣の愛人の存在が書かれていた。それは愛実が思いもよらぬ名前で……。

しかも心ない記者が学校の正門に待ち構え、生徒らにインタビューを始めた。そのせいで愛実はしばらく登校出来なくなってしまった。もちろん彼女には何の責任もない。表向きは？ 処分？ ではなく、？ 自主的な判断？ であつた。

「あの子が東絵美、今年十歳よ。その隣が博之四歳。あの二人が専務のご落胤って言われてるけど……ああ、ほら、今出て来たのが東恭子。十年前、専務に待ちぼうけを食らわせた女」

そこは、愛実が信一郎に襲われた時、藤臣と一緒に過ごしたホテルだった。

二人が泊まったのと同じ部屋、というのにショックを受けながら……。愛実は由佳に頼み込み、ここを連れて来て貰つたのである。ホテル内にあるキャラクターショップに恭子は子供連れで入り、それぞれに何か買い与えて店から出て来た所だった。

確かに、藤臣の一歳年上だと言っていた。眞面目で地味な優等生タイプと評していた気がする。そんなことを愛実がポツリと呟くと……。

「そうね。デパート内の勤務評定もそれなりに優秀よ。子供の病気で急に休むことがあって、昇進からは外されてるみたいだけど」

「そうなのだ。恭子はなんと東部デパートの婦人服売り場に勤めていた。入社したのは三年前で、その前年に恭子は前夫と離婚している。しかも、恭子の採用は藤臣が独断で決め、人事部に口を利いていた。

そのことが週刊誌に書かれ、一人はただの愛人関係ではなく、いわゆる？内縁の妻？ではないか、と。偽装の意味もあり、恭子に仕事を与えている。十歳の長女は言わずもがなで、離婚後半年で生まれた四歳の長男も、藤臣の子供である可能性が高い。

「でも、どうして？ 四年前に離婚したなら、藤臣さんの子供だつたらすぐに再婚したら良かつたんじゃ……」

「先代がお元気だったもの。十年前のことはよく判らないけど。先代も大奥様も大反対だったと聞くわ。週刊誌にもそう書かれてたでしょう？」

「……はい」

藤臣は、子供の父親が元恋人だと判った恭子が、その男性と相談

して結婚式当日に逃げたのだ、と話してくれた。でも週刊誌には……。

恭子が知人に語った話として、『何のとりえもない女と結婚するなら、藤臣が美馬グループに入る必要はない』先代社長がそんな言葉で彼女を脅した。彼女は『色々なことが怖くなつて逃げた』とい最近知人に告白した、と書かれてあった。

まあ、この手の告白は完全に信用するわけにはいかないけれど。問題は、その相手をわざわざ『パート』に雇つたことね。しかも本名の? 東恭子? ジやなく、別れた亭主の苗字? 石川? を使つてることかしら?』

「じゃ、四歳の男の子も藤臣さんの?」

愛実の問いに由佳は軽く首を振つた。

「それは判らないわ。戸籍上で言うなら、一人とも前夫の子、になつてるけど」

モデルの長瀬久美子やこの奥村由佳に比べ、恭子はかなり地味な女性だ。自宅もアパート住まいだといふ。もし藤臣の愛人と子供なら、彼がアパート暮らしをさせているとは思えない。

「まあ、あなたの目に映る専務はそのなのかも知れないけど……」

『? 美馬藤臣は愛人と子供をホテルに匿つている? 愛実のもとに届けられた匿名の手紙。藤臣にはとても聞けず、瀬崎に話すチャンスもなかつた。そんな時、結婚式の打ち合わせに訪れた由佳に、愛実は頼んだのだ。すると、由佳は翌日にはこのホテルを探し出してくれた。

「こんな場所で匿つてるなんて、どう考へても怪しいわ。美馬グループの実権と、美馬家の個人的資産。専務はその両方を手に入れようとしてるんじやないかしら。大奥様もご高齢だし……もつて四年。馬鹿をみたくないれば、今のうちに自分の取り分はしつかり確保しておくのね。お金の掛かる家族がいるんでしょ?』

おそらく入院中の祖母やお金にルーズな母のことだらけ。
愛実は俯きながら胸の中で繰り返した。

(「愛してゐつて言つてくれたもの。藤田さんを信じる。絶対に
……

／＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

愛実を自宅まで送り届けた後、藤臣は本社に向かった。
途中、瀬崎とのやり取りを思い出す

『社長 東恭子さんを覚えておられますか?』

『なんだ、いきなり!』

『では、石川恭子さんなら、どうですか?』

携帯から思わず人物の名前を聞き、藤臣は動搖した。なぜなら、
瀬崎に? 石川恭子? の存在は話していなかつたからだ。

(一体何なんだ!? 結婚まで後一週間だつてこいつのにー)

本社の専務室に瀬崎がいた。他の秘書や社員はおらず、彼ひとり
だ。

そして見せられたのが、女性週刊誌の記事だつた。

「明後日に発売されます。止めるのは無理でした。申し訳ありません

「謝る必要はない。馬鹿馬鹿しい
ん

瀬崎が入手した「ゲラ刷り」の原稿を、彼はテーブルに放り投げた。

「何が内縁の妻だ。十年前に結婚する予定だったんだぞ。俺の子供じゃない、と逃げたのは向こうだ。昔話を持ち出すにも程がある……」

「どうせ、この？知人？とやらが情報を売ったのだろう。久美子が知り得たはずはないので、裏で糸を引いているのは弥生か信一か、または暁という可能性もある。」

問題は恭子だ。彼女がこんなすぐにバレる嘘をつくとは思い難い。それに藤臣との復縁を狙うなら、ここまでに何度もチャンスはあつたはずだ。彼女は親子三人の静かな暮らしを望んでいた……。

「瀬崎、この一件で彼女らはどうなる？ 假名になっているが、まさか、インタビューに行くような記者はいないだろ？ な？」

藤臣は不安になり、瀬崎に尋ねた。

しかし、返つて来た予想外の厳しい声に、藤臣は驚く。

「東……いえ、石川恭子さんとお呼びすべきでしきうね。社長が真っ先に『心配されるのは彼女たちなんですね』

「なんだ？ 何が言いたい？」

「この記事を目にして、『婚約者である愛実様がどれほど傷つかれるか、お考えにならないのですか！？』

藤臣はフッと笑つた。

「なんだ、愛実のこととか。十年前の経緯はすでに告白済みだ。お前が心配するようなことじやない」

愛実は彼を抱き締め、自分なら絶対に逃げたりしない、と言つてくれた。藤臣が事実無根だと話せば、彼女が傷つく可能性など皆無である。

「社長、今一度、聞かせて下さい。愛実様は社長から愛を告白された、と喜んでおられました。この結婚は本物になったのだ、と。過去を捨てて、愛実様と新しい人生を始めたい、と……社長に口から

聞かせて頂けませんか？ お願ひします

瀬崎は思い詰めた表情で一息に言つて、両手を体の脇につけ、頭を下げる。

「愛実には……出来る限りのことをする。彼女が望むよつて。俺の傍に居たいと言つながら、一生居てやるつもりだ。子供も、彼女が望めば産ませてやる。 それだけだ」

あれでいふと信じさせ、一生騙し続ける。彼女の笑顔を守るために。

藤田の答えを聞き、かなり長い間、瀬崎は目を閉じていた。
しばらくして彼は口を開き、「東恭子さんが社長に話があると言つております。」長女の絵美さんについて、極めて重要な「そう言つたのだった。

「……さん。藤臣さん、お口に合いませんか？」

飛び込んできた愛実の声に、藤臣はハツとして顔を上げた。
彼女は心配そうに藤臣の顔を覗き込んでいる。

「いや、済まない。美味しいよ。カレーサンドなんて初めてだ」

例の週刊誌のせいで愛実が学校を休んでいると聞き、藤臣は彼女を昼食に誘つた。謝罪のつもりだつたが、彼女はバスケットにサンドイツ持参でやつて來たのだ。

『一杯作つたらカレーが余つてしまつて。サンドイッチにすると、また気分が変わつて美味しく食べられるから』

結局、コーヒーを入れて東部デパートの社長室でランチを取つている。

愛実は藤臣の『美味しい』の言葉に「一二一」笑いながら、
「カレーうどんも美味しいですよ。今、色々な料理の作り方を尚樹
や真美に教えているんです。わたしがいなくなつても大丈夫なよう
に……」

「料理は家政婦がやつてくれるだろ？ それとも、ひからから回
した家政婦に何か問題でも？」

西園寺家には充分な生活費を渡している。まさか母親ひとりで使
い切つていることはあるまいが。藤臣は、いまだに愛実の弟妹が困
つているのかと心配になつた。

すると、愛実は慌てた様子で、

「い、いえ、問題なんて。婚約が決まって、美馬の家から充分なお
金を頂きました。でも、母に任せるのは不安なので……。なるべく
尚樹に、と思つてゐるんです。それに、人生なんていつぞうなるか

判らないから。自分のことは自分で出来るように、食事くらいは作れないと」

その言葉に、少なからず藤臣は傷ついていた。

藤臣は頼りにならない、あてに出来ない、と言われたようだ。いつもなら、ムツとして言い返すのだが……。今は、後ろめたさが先に立ち、強気に出ることが出来ない。

つぶづぶ、弱さを隠すために吼えていた自分を思い知る。

「その……愛実、週刊誌の記事なんだが、……」

サンドイッチを「一ヒーで飲み込み、藤臣は口を開いた。「前に、話して下さった方、ですよね？」

「そうだ。実は、東部デパートの本店で働いて貰っている。離婚した時に就職の相談を受けてね。離婚後に妊娠が判つて、妊娠と面接する受けさせて貰えないって。何とかして子供を生みたい、という彼女の気持ちを酌んで、就職を世話をしたんだ。誓つて言うが、それだけだ」

出来るだけ平静に、だが一息に言つて藤臣は肩の力を抜く。

「あ、はい。判つてます」

「……え？」

「だつて、もし自分のお子さんだつたら、藤臣さんが放つておくはずないでしょ？ それに……結婚しようつて言うくらい好きだつた人が困つてたら、助けたいって思いますよ。小さなお子さんがいたらトクに。だつて、藤臣さんて優しいから……」

愛実はいつもの様子で屈託なく笑つている。

今の藤臣に、その笑顔は直視出来ないほど眩しかった。

「学校には私が話をしよう。君が休まなければならぬ理由はないんだ」

「いえ、結婚式の準備もありますし……。進学しないので大丈夫です」

藤臣が何度も勧めても、愛実は大学には行かないといつ。国立に入るほどの勉強はして来なかつたし、お金で入学出来る大学には行きたくないのだ、と。

「君には、迷惑を掛けばかりいる。本当に……済まない」

口をつぐのは謝罪ばかりであった。

愛実もそう思つたらしく、

「それ以上謝らないで。その代わり、お願ひを聞いてくれますか?」

「何かな?」

「? 愛してる? つて言つて下さ!」

「いじで?」

らしくもなく、藤臣は上ずつた声で聞き直した。

愛実はジッと彼を見上げ、無言で頷く。その瞳の奥で、心細さに震える少女の影がよぎつた。

「 愛してる。愛してるよ、愛実」

数日前、心を満たした熱い言葉は、今は刃となり胸に突き刺さる。藤臣は恭子の言葉を思い出していた。

～*～*～*～*～

「『無沙汰しております』にして対面でお話をせつ頂くのは、採用して頂いた時以来で……」

東恭子は四年前と変わらぬ質素な服装をしていた。何の変哲もない白いシャツに、通販で買ったようなベージュのスース、くたびれ

たローヒールのパンプスが目に映る。化粧もファンデーションと口紅だけのようだ。度のきつい眼鏡をかけ、緊張した面持ちでホテルの一室にいた。

「挨拶はいい。週刊誌が昔話を掘り返したようだ。そのことで君たち一家に迷惑を掛けているなら、相応の対処をしよう。動き辛いようなら、別の職場を用意することも……」

「そうじゃありません！」

思い掛けない恭子の叫び声に、藤臣は驚いた。

部屋の隅に立つ瀬崎に視線を向けるが、彼は正面を向いたままで思惑は覚れない。

「判った。用件を聞く。だが私はそれほど暇じゃない。さっそく済ませてくれ」

こいつにも増して冷ややかな声で言ひついで、田に見えて恭子は竦みあがつた。

彼女は二～三度深呼吸をして、手にしたハンカチをギュッと掴み、漸^よ漸^よう話し始める。

「ずっと、黙つているつもりでした。でも、夫に出て行かれで……。私、あなたが怖かつたんです。何を考えているか判らなかつたし、石川のこと愛していく、彼と結婚したくて……」

さつぱり要領を得ない話に藤臣は懸命に苛々を抑えていた。

「でも、離婚して困つている私に手を差し伸べて下さつて……。私はひょっとしたら、とんでもない間違いをしたのかも知れないと思つ始めたんです。どうしようか迷つていて、そうしたら、あなたが結婚すると聞いて……」

次の瞬間、藤臣はため息と共に腰を浮かせた。

「東くん、済まないが要点を言ってくれないか？ まだ時間が掛かるようなら、話したいことが決まってから」

「絵美はあなたの娘なんですよ！」

室内の空気が一瞬固まる。藤臣の動きも同様だ。

「なんの『冗談だ？ 十年前に君は、違うと書いて俺を捨てたんだぞ！ 忘れたのかつ！？』

「の人と……石川と結婚したかったの。だから……同じ血液型だから……。ずっと黙つておくつもりだったんですね！ でも……色々あって」

「自分が……何を言つてゐるのか判つてゐるのか？ 一人の男を手玉に取つた挙げ句、子供まで利用した最低の母親だと告白してゐるんだぞ！」

冷静さをかなぐり捨て、藤臣は掴みかからんばかりに恭子に詰め寄る。

「社長 落ち着かれて下さい」

逆に、妙に冷ややかな瀬崎の声に、藤臣の怒りは矛先を変えた。

「落ち着け、だと？ お前は話の内容を知つていたようだな。なぜ

言わなかつた？」

「……」

黙り込む瀬崎の胸倉を掴み、藤臣は怒鳴った。

「お前たちはグルか？ 瀬崎、誰に頼まれたつ！？」

それを見ていた恭子は、弾かれたように立ち上がり頭を下げる。

「す、すみません。私が瀬崎さんに相談したんです！ そうしたら瀬崎さんが……」

「……」

四年前、恭子は藤臣に邪険に追い返されることを覚悟していた。ところが、予想に反して出産まではパートタイムの、そして出産後は正社員の職を恭子に与えてくれたのだ。

その後、長女の小学校入学に合わせてランドセルと祝い金が届いた。差出人は不明であつたが、恭子の心当たりは藤臣だけだつた。娘の絵美は家を出た父親が後悔して、自分の為に贈つてくれたのだと無邪気に喜んでいたが……。石川は若い女と暮らしており、子供たちの養育費すら支払いを拒んでいた。

藤臣は傲岸不遜でどうしようもない男性だと思っていたのに。それがもし、間違いであつたら?

そして恭子から相談を受けた瀬崎も、すぐに彼女を信用したわけではなく……。

「DNA鑑定を受けるように言われて、それで受けたのか? 瀬崎、俺の了解も取らず、そんな真似をしたのかつ?」

藤臣は俄かに信じられなかつた。藤臣を蔑ろにして、そこまで勝手な判断で動く男だとは思つていなかつたからだ。

「申し訳ありません」

余計な言い訳は一切せず、瀬崎はただ謝罪を口にした。

藤臣のデータは一志と鑑定した時のものが保管してある。同じ会社に頼めば、検査は容易なはずだ。

「それで……結果は出たのか?」

「はい。社長と東絵美さんとは、九十九パーセント以上の確率で親子関係にある、と」

それは藤臣にとって、死刑宣告にも等しい言葉であつた。

第68話 宣告（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

とんでもないトコで終わつてますが、ここで第6章ラストです。
次回から最終章に入ります。

さあ、どうなりますか…

花婿チエンジでもタイトル（十八歳の花嫁）に偽りなしつてことで
(こいつー)

いや、ハッピーエンドですから。

良かつたら、最後までお付き合いくまセ (^ ^) /

「何で、今、なんだ！　どうして今になつて」

恭子が引き上げ、瀬崎の前で藤臣は何度も同じ言葉を繰り返した。

「瀬崎　　彼女が美馬の婆さんと繋がっている可能性は？」

「ない、とは言い切れません。ですが、事実は事実です」

瀬崎は淡々と答える。

なるべくマスコミに知られまいと、普段利用しない高級ビジネスホテルのスープエリアルームを使っていた。部屋はそう広くはなく、調度品もごくシンプルなものばかりだ。藤臣は立ち上がりと白い小型冷蔵庫の扉を開き、缶ビールを取り出して一息に呷る。

まるで水を飲んでいるようだ。何の味もせず、おやじく何本飲んでも酔えないだろう。

「社長、このことが外部に漏れたら……」

「判つている」

藤臣は今年の八月に三十歳になる。

恐ろしく若い年齢で社長に就任することが決まっていた。彼の年齢がネックとなり、傘下企業や取引先銀行、株主、本社の重役まで反対者は多い。藤臣が本社の大株主であること、先代社長の一人息子であること、そして現会長である弥生の後見^{バックアップ}。それらの条件が整い、やっと漕ぎ付けたものだった。

それがもし、彼に責任はないにせよ、隠し子？の存在が発覚したら……。

元々敵が多い藤臣のこと、ターゲットは絵美だけでは済まないだろ。博之も藤臣の子供ではないかと騒がれ、否応なしに恭子親子

を巻き込む羽目になる。反対勢力はこことばかり、藤臣の様々な過去まで引っ張り出し、再び後継者問題が勃発するのは目に見えていた。

「愛実様のことは……どうなさいますか？」

瀬崎がポツリと呟く。

愛実なら、絵美の存在を聞いても藤臣を責めるようなことはしないだろう。だが、今回の一件に足元を掬われ、藤臣の力が弱まった時が問題だ。

「弥生様はその機を逃さず、社長を失脚に追い込むでしょうね。その為なら、系列の一～三社くらい倒産させることも厭わないでしょう」

「ああ、やるだらうな、婆さんなり」

「あの時……愛実様が信一郎様に襲われたあの時なら、間に合つたはずです。弥生様が拘る美馬邸を和威様に譲ることで、愛実様を自由にすることが出来たはずです。あの時なら……」

瀬崎の言つ通りであった。

愛実の母が馬鹿な契約書にサインをする前なら、藤臣が美馬家の全てに拘つたりしなければ、ここまで追い込まれる事態には陥つていなかつたはずである。

せめて婚約発表前、或いは結婚後であつてもよかつたのだ。愛実を美馬家の相続問題に巻き込みず、窮地から救うだけの金を用意してやることも出来た。社長として正式に就任した後なら、絵美の存在を公表しても、反対勢力を黙らせるだけの力があつたのに。

考えれば考えるほど、恭子の言動に奸計があるような気がしてならない。

まさに、今の藤臣は四面楚歌の状態だった。

重苦しい沈黙の後、瀬崎が口を開いた。

「最良の手段は……東恭子さんの主張を完全に無視することです。十年前、彼女から婚約を破棄したことは明白ですから、理由をつけて解雇通告をし、関係を切つて下さい。参考までに……」長男の博士くんとの親子関係は認められませんでした

「なつ！？」

藤臣は息を詰まらせながら、用意周到な秘書を怒鳴りつけた。

「瀬崎！　お前、彼女の長男が俺の子供だと疑つてたのかつ！？」

「社長が私を通さず、極秘扱いで恭子さんを雇用されていましたから。しかも、苗字まで変えて。充分に疑わしい行動だと思いますが」

藤臣は頭に血が昇り、そのせいで頬が赤く染まった。

「お前に隠したんじゃない！　美馬の爺さんがいたからだ！　東部デパートの重役になつたばかりで、俺の周囲にはヤツの息が掛かつ連中がうじやうじやいたんだ。仕方ないだろうが！」

「では、逆にお聞きします。どうして、そこまでして彼女を助けたんですか？」

「……」

子供を抱えた恭子の姿は、母の姿に重なつた。それに恭子は、藤臣の出会つた女性たちの中で唯一、お金より愛情を選んだ。その愛情は彼に向けられたものではなかつたが……。

「親子鑑定の報告書は全て破棄すれば済みます。どちらにしても、絵美さんは石川氏の実子となつております、これは法律が変わらない限り動きません。遺伝子上の親子関係が証明されたところで、社長は何の義務も権利も発生しないのですから」

恭子が養育費を請求できるのは前夫・石川だけだ。絵美には戸籍

上の実父が存在する。恭子は藤臣に認知請求もできなければ、それを証明するDNA鑑定を要求することもできない。

知らぬ存ぜぬをつき通せば済むことだと瀬崎は言つた。

だがそれは……。

「俺に 子供を捨てろって言つのか？ あのクソ爺のよつこ！ 勝手に死ねと放り出せ、と！？」

藤臣は田の前にあるビールの缶を横に薙ぎ払つた。中身の残つた缶は壁にぶつかり形を変え、液体を撒き散らしながら床に転がる。そんな藤臣を、瀬崎は微動だにせず見下ろしていた。

「では、美馬邸の権利を諦め、愛実様との婚約を解消なさつて下さい。恭子さんと結婚して、絵美さんと特別養子縁組をすれば、実父に近い権利を有することが出来ます。弥生様と上手く交渉すれば、美馬邸から出ることになつても、グループの実権はそのまま引き継ぐことが出来ます」

美馬邸から離れることは、事実上、一族から離れるも同様であつた。グループの実権だけ引き継いでも、結局、美馬の資産を増やすだけになりかねない。

それだけではない、弥生と取り引きをするところなどは……。

「その交渉材料に愛実を使つてことか。今度は色仕掛けで、愛実に俺の為に和威と結婚してくれ、と頼めつてことだな」

藤臣は背もたれに体を預け、両手で顔を覆つた。

「ここまでくれば、最早、笑うしかない。

自分を地獄に叩き落とした美馬家を掌中に納め、握り潰してやりたい一念で、憎い連中に頭を下げてきた。そして、こんな愚かな男を本気で愛してくれた愛実に、ただ応えてやりたいと願つた。

だが、恭子はともかく、絵美には何の責任もない。

藤臣が認めた？愛を選んだ女？は、十年前、我が子の幸福よりも自身の愛を選んだ。しかし今回、恭子が藤臣に突きつけた要求は、決して彼女自身の欲望を満たすことではなかつた。

『マスコミのカメラマンに写真を撮られたり、親から聞いた子供たちに色々言われて……絵美は自分たちのことだと氣付いたような。あの子は父親が出て行つたことを自分のせいだと思つてゐる。弟が父親の顔を知らないのも自分のせいだつて。もの凄く不安定になつていて……お金も何も要らない。悪いのは私だと黙つてくれたらいい。ただ父親として、絵美の存在を認めてやつて欲しいの。お願ひします』

世間には一切公表しなくていいから、と恭子は膝に額がつくほど頭を下げた。

「瀬崎、何かないのか？ 何か……俺に取れる手段は残つてないのかつ！？」

「ありません。選んでください、社長。後手に回つて追い込まれてからでは遅いんです。本社の実権さえ残れば、将来別の形で家屋敷を奪い取る機会もあるでしょう。但し、その時は……」

復讐を手放せない藤臣が、全てを奪い取る相手は和威。

そして彼の妻になつてゐるであらう愛実を、破滅に追い込むことであつた。

レンタルでいい、と言ひ愛実にウエディングドレスを作るよひに迫つたのは藤臣だった。

出来上がつたは何と挙式三日前。レースのフレンチ袖がついた、可愛らしいAラインのドレスだ。胸元とスカートの裾部分にビーズが縫い付けられてあるものの、基本シンプルなデザインで藤臣が選んだ中から愛実が決めた。レースの刺繡が施されたトレーンも取り外し可能で、チャペルでは着用し、披露宴会場では取り外す予定であつた。

「姉さん、メチャクチャ綺麗だ……」

「ホントに？」

尚樹の称賛に、愛実はドレスを着たままクルリと回り、にっこり笑う。

「羨ましい！ 私も着たい！」

「真美は自分がお嫁に行くときには着られるでしょう？」

T国ホテルの衣装ルームでの一幕だ。

ちょうど休日ということもあり、愛実は弟妹を連れて来ていた。本来なら一番気になるはずの花嫁の母は不在である。母は娘より自分が着飾ることに夢中なのだ。

(お母さんがいないほうが気が楽なんて……お互い様かも知れない)

そんなことを考え、愛実は胸の内で苦笑する。それに、ドレス姿を一番見て欲しいのは藤臣だった。
もちろん彼も来ていたが、

『歐米では新郎が結婚式の前に新婦のドレス姿を見るのは不吉』
い』

やう言つて、ひとり一階のラウンジで待つてゐる。

「あの……他の新郎の方も、ドレスは一緒に選んだりしないものですか？」

愛実は不安になり衣装ルームの担当者に尋ねてみた。

「いえ。日本では気になさる方は少ないかも知れません。ご一緒に選ばれたりなさいますよ。あ、でも、美馬様はドレスのデザインを」存知ですし、すでに新郎様のお衣装も決まつておられますから

ドレスを選ぶ必要もなく、そのドレスに合つたタキシードを決める訳でもないから同席しないのだ。担当の女性は愛実の心中を察し、色々な理由を口にする。

そう言われたら、もう決まつているのだから田中のお楽しみにしてもいいかも知れない。愛実もそんな風に思い始めた。

結局、ウエストを少し詰めて貰うだけで、それ以上の手直しは不要となつた。愛実たちは一時間程度で衣装ルームを後にする。

その時、スタッフ五名が整列して見送つてくれた。

「僕たちにここまでしなくていいのに……」

尚樹が小さな声で呟く。愛実も同じ気持ちだが、「あちらはあちらでお仕事なのだから」そんな風に声を掛けたのだった。

一階ロビーに下りると、一段下になるラウンジを見回した。

焦げ茶色のソファに、藤臣は長い脚を持て余し氣味に組み、ゆつたりと座つてゐる。

今日は深い藍色のスーツであった。滅多に見かけない色合いなの

で、おそらくオーダーメードなのだろう。眉根を寄せ、煙草を燻らせる指先に愛実は胸をときめかせる。

煙草そのものは、本人にも周囲にも健康に害を与えるものだ。愛実が妊娠したら禁煙する約束を取り付けている。だが、その仕草に大人の男性を感じ、高ぶる気持ちを押さえ込むことは難しかった。

一步一歩と藤臣のもとに近づく。

もう、気付いてもいいくらいまで近寄っているのに、藤臣は一向に顔を上げる気配もない。視線を下げたまま、目に映らない何かを彼はジッと睨んでいた。

「……」数日、愛実と一緒にいても藤臣の心はどこか遠くにある」とがほとんどだった。

愛実を見る瞳は変わらずに優しい。別れ際には必ず『愛してるよ』と囁き、キスしてくれる。以前のような深く官能的なものではなかつたが……。

『あと数日の辛抱だ。結婚式を終えるまで待ったほうがいい』まるで自分自身に言い訳するように、愛実と距離を取っている。

(こんな時、大人の女性ならどう対応するのかしら?)

藤臣がおかしくなったのは、例の記事が週刊誌に掲載されてからだった。

由佳は怪しこと言っていたが、藤臣はキッパリと否定してくれた。だが今の彼の態度を見れば、由佳が正解なのかも知れない、と思わざるを得ない。

藤臣は恭子を愛しているのだろうか?
もしそんなら。。。

藤臣は愛実と結婚する。弥生に万ーの時は愛実があの美馬邸を相続し、すぐに彼は全てを自分の物にするだろう。そして愛実を追い出し、恭子を妻に迎えるのだ。

その時、愛実にも子供が出来ていたら、彼はどうするだろ？

(もし、子供を置いて出て行けって言われたら……)

「美馬さん！ どうしたんですか？」

「あ、ああ。お帰り。お姉さんのドレス姿はどうだった？」

藤臣の数歩手前で考え込む愛実と違い、尚樹たちは飛びつくように、彼に声を掛ける。「綺麗だった」「お姉ちゃん、すっごく似合つてたよ」などと口々に話していた。

「それは三日後が楽しみだな」

そんな風に答えつつ、藤臣は煙草を消しながら席を立った。

「じゃ、禁煙席のほうに移り。アフタヌーンティーを用意させてるんだ」

「あ……慎也は紅茶はまだ」

愛実は慌てて言つたが、

「心配は要らない。子供たちでも大丈夫なように、ジュースも頼めるよう言つてあるから、安心しなさい」

藤臣の笑顔にホッと息を吐く愛実だった。

～*～*～*～*～

「恭子は俺との結婚を望んでる訳じゃない。十年も隠し通したんだ。寧ろ、よほど俺が嫌いなんだろう」

「藤臣はそう思いたかった。」

「最近の和威は、今ひとつ仕事に熱心とは言い難い。あんな状態の男に愛実は託せない。瀬崎、あと一ヶ月半だ。九月一日付けで俺の

社長就任が決定する。そこまで、何としてもマスクミを黙らせ、婆さんを押さえ込むんだ！」

恭子に弥生がコントクトを取ればお終いだ、という瀬崎を説得し、時間稼ぎの策を取らせている。

だが、瀬崎の様子がこれまでとは微妙に違う。もし、彼に見放されたのだとしたら……。その時は、最後の味方も失つたことになる。藤臣にはそれが恐ろしかった。

そして昨晩、弥生は夕食の席で愚痴とも嫌味とも取れる言葉を咳き始めた。

「週刊誌に何やら騒がれていた女は、藤臣さんが十年前に結婚したと言つた女でしょう？ なんて迷惑な方かしら。美馬家にあれほど恥を搔かせながら……今さら」

食卓を囲んでいた加奈子も、久しぶりに母親に迎合する。

「あら、責任は藤臣さんにあるんじゃないかしら？ あの女を『デパートの人事部に雇うよう、口を利かれたのは藤臣さん』本人とか……」

…

「まあまあ、彼はまだ独身なんだ。どんな女性と付き合おうとも、彼の自由だよ。ただ、結婚するなら決着はつけないとね」
加奈子の隣にいた夫の信一までもが口を挟んだ。

「この信一が東部デパート内の情報に精通しているのには理由があった。つい先日、東部デパートの社長秘書、浅野めぐみが信一の愛人だと判明したのだ。

彼女を社長秘書に登用する前、徹底的に調べたはずであった。しかし、登用後の関係までは予測出来ない。浅野には結婚間近の恋人がいて、既婚者になることを見越しての昇進であつた。それが相手の借金と浮気で破談になり……信一との関係は金銭的な問題も大き

いよつだ。

しかし、道理で筒抜けになるはずである。秋の移動で秘書を変えねばならない。藤田はそう考えていた。

「どうせここでも、そつそと系列会社から追い払いなさい。子供の父親が誰だらうと関係ないでしょ。馬鹿な女に関わってこれ以上美馬の名前に傷をつけるよつなら、わたくしにも考えがありますよ」

弥生の言葉に答えることなく、深く思いに沈む藤田であった。

第71話 忠言

夕食が終わり、和威は二階の藤臣の部屋を訪ねた。

彼の不貞は明らかなのに、愛という言葉だけで簡単に許してしまった愛実が判らない。条件は同じはずなのに。いや、自分のほうが愛実と年齢も近く、誠実に彼女に尽くす自信がある。自分と結婚するほうが、絶対に幸せになれるはずだ。

和威の中で口を追うごとにその想いが強くなつた。

そして知つたのが、祖父一志の遺言と藤臣の本当の立場である。

彼は血の繋がらない従兄ではなく、本当の叔父だった。生きている間は妻に頭の上がらなかつた祖父が、死んだ後に一矢を報いた形だろうか。祖父は自分名義の資産ほとんどを藤臣に残していた。そんな中、この美馬邸だけは弥生に残された唯一の財産だつたらしい。道理で、弥生がどんなことをしても、せめて家屋敷だけでも和威に残そうとするはずだ。血が繋がらないどころか、夫が愛人に生まれた息子である。自分が生まれ育つた家まで渡すのは確かに辛いだらう。

藤臣のためにも、そして愛実のためにも、和威が何も知らないのは不公平だと言い、眞実を教えてくれたのは瀬崎であつた。

最初はそれを素直に受け入れられず、弥生の元に駆け込み問い合わせしたのだ。弥生はあつさり認め、逆に、見込み違いだつたと和威に冷たい視線を向けた。

そして和威が自滅の道に踏み出した時、叱り飛ばしてくれたのも瀬崎だ。

『いい加減、田を覚ますべきでしょう。従弟であれ甥であれ、社長が美馬家の中で一番買つているのはあなたです。仮に敵対するにしても、このままでは戦う前に負けを認めるようなものですよ』

だが、瀬崎はなぜ、藤臣が隠そつとしている一志との関係を自分に教えたのだろうか。

和威は疑問を感じ尋ねた。

『社長は和威さんに期待しているものの、まだまだ半人前だと思つております。でも、そうではない、と示して欲しいのです。私もそうですが、社長は自身も、まだまだ人生を達観する年齢ではありませんから……』

瀬崎は寂しそうに笑っていた。

「どうしたんだ。今日は酔つてないのか？」

先日、自分をコントロール出来なくなり、酒の勢いで藤臣や愛実にハッ当たりしたことを思い出す。

「あの時は……すみませんでした。愛実さんにも、失礼なことを言つてしまつて。あの日、彼女がこの家に泊まらなかつたのは、僕が原因ですか？」

愛実と一緒に謝りつゝと思っていたのだが、思わず口にしてしまつ。

藤臣は苦笑しながら首を振つた。

「いや、お前のせいじゃないよ。朝食や夕食に同席するようになつて良かつた。そのまま、信一郎さんや宏志くんのよう、この家から離れて行くんじゃないかと心配していたんだ」

「宏志はこの家に居ますよ。ヤツに出て行く勇気なんてあるもんか」

「彼は？居るだけ？ だろう。滅多に顔も見ないし、食事も部屋で取

つてる。家族とは言えないさ」

特にどーかがおかしいと一言訳ではない。

だが、どうなく藤田の印象がこれまでと変わつてきていった。

「藤臣さん、何かあつたんですか？」

「どうしてだ？」

「さつきのおばあ様の様子といい、信一さんたちの口調といい、また何か起こってるんじゃないかと思つて。僕だっていつまでも半人前じやない。ちゃんと聞かせて欲しいんだ」

上手くは言えないが、何かが違う。いや、戻ったと言うべきか。次第に力を付け始め、加奈子や信一らの口を押さえつづいた藤臣が、一志が生きていた頃に戻つたかのようだ。苦悩に満ちた表情、とても、数日後に結婚を控えた花婿の顔ではなかつた。

次第に力を付け始め、加奈子や信一らの口を押さえ、「一志が生きていた頃に戻つたかのようだ。苦惱にしても、数日後に結婚を控えた花婿の顔ではなかつた」次の瞬間、藤臣はクツと意地悪そうな笑みを作り、

「相変わらずだな、和威。何が起こっているのか、自分も知りたいと思うなら、確かにルートを作つて調べ上げろ。尋ねて教えて貰える事実が、眞実とは限らないんだ。それに、せつかく手にした力ードを……驚かせるだけで効果的とは言えない使い方をするな」

結局、軽くかわされただけだった。

何の収穫もないまま和威は部屋に戻った。すると、ドアの前に執事の糸井が立ち……「大奥様がお呼びでござります」そう口にしたのである。

卷之三

藤臣や弟妹とアフタヌーンティを楽しんだ翌日のこと。

結婚式を一日後に控え、愛実は何となく落ち着かずについた。ドレスも決まり、何もかも順調に行っているはずなのに。出会いの気まずさが、いつまでも引っ掛かるのだろうか？ それとも、弥生の好意で相続人にして貰いながら、彼女が最も疎ましく思つてゐるはずの藤臣を夫に選んだことか……。

藤臣はほとんどの財産を相続したと聞く。ならば、弥生が家屋敷だけは血の繋がつた孫に残したいという願いを聞き届けてはくれないだろうか。今まで維持できるのは彼だけ、という話だ。しかし、藤臣の援助があれば、どうにかなるのではないか。

美馬を跡形もなく潰したい、という藤臣の復讐心など、愛実が知るはずもなく……。

弟妹が学校に行つた後、愛実は家のことを家政婦に任せ、自分は荷物の整理をしていた。母は最近夜が遅く、昼頃まで寝ている。今日は午後から、一人で祖母の見舞いに行く予定だ。

会うたびに『はじめまして』を繰り返す。それでも彼女の名前を聞くと、嬉しそうに微笑んでくれる。

『まあ、愛実さんと仰るのね。旦那様と約束しているのですよ。娘が生まれたら？ 愛実？ にしましょ、と。彼女の人生に美しい愛の花が咲き、実り多いものでありますように……』

それは、娘に恵まれなかつた祖父母が、愛実の名前に籠めた願いであつた。

古いアルバムから祖父母が並んだ写真を見つけ、愛実はしばらく見つめ続ける。祖父は弥生のことを覚えていただろ？か。覚えていたとしても、弥生のように考えたかどうかは判らない。

その時、家政婦が来客を告げた。

「当然、お邪魔してしまって。忙しいとは思つたんですが……」
そう言つて、以前と同じソファに腰掛けているのは和威であつた。
「いえ、古い写真を整理していたんですが、思い出ばかり浮かんでき……なかなか進みません」

愛実は笑顔で答えた。

最初、和威の来訪と聞き少し怖かつた。

もし彼が信一郎や宏志と同じような真似をしたら……。とりあえず家政婦に近くに居て貰うこととした。いざとなれば母も家の中に居る。最初は、美馬家の四人のうちなら誰でも、と言つていた母だが、この期に及んで藤臣との縁談を壊す気はないだろう。

しかし予想に反して、和威は以前の落ち着きを取り戻していた。

「結婚式は明後日ですね……今さら、と思われるかも知れない。でも、結婚式の前に君が知つておくべきだと思つて」

「どうか、なさったんですか？」

和威が感情的になつている様子はない。その分、愛実の胸は得体の知れない不安で一杯になつた。

「例の週刊誌だけど……。十歳になる娘さんの父親は 藤臣さんで間違ひなかつたんだ。DNA鑑定の結果が出たらしい。聞いて……ないよね？」

一瞬、胸が詰まり言葉が出て来ない。

そして、やっぽり、と思つた直後、藤田の言葉を信じよつ、と思ひ直す。

彼女は田を開け、軽く首を振つた。

「藤田さんは違うと仰いました。だから、彼を信じます」

「東さんにもう少し待つて欲しいと言つてる。無事に結婚して、社長に就任したら……子供の父親になる、と。それがどういづ意味か、君も本当は判つてるんじゃないのか?」

和威の言葉に、愛実は耳を塞いだ。

第72話 恋心

『「J覧なさい、和威さん。藤臣さんがとんでもない真似をしてくれました』

そう言つて弥生が差し出したのはDNA鑑定の報告書、それのコピーだ。外国の検査専門会社を使ったのか、全文が英語であった。弥生曰く、弁護士の長倉に命じて東恭子とロンタクトを取らせ、証拠を手に入れたといつ。

ざつと田を通じて、和威は真っ青になる。

『あなた方がどう思つているかは判りませんが、わたくしは亘さんのお孫さんを救いたかつただけなのですよ。あの時代は身分が煩くて……随分、辛い思いを致しました。だからこそ、愛実さんの気持ちを汲んで、本来なら許したくはない藤臣さんとの結婚を認めたのです』

そう言われたら、確かに弥生の立場で藤臣を認めるのは苦しかつたに違いない。

藤臣から、？自分で調べる？教えて貰つたものは真実とは限らない？そう言わればかりだったが……。素直なのは彼の長所であり、欠点ともいえよう。

『でもねえ……和威さん、いつこうした事実が出てきて、愛実さんはお幸せになれるのかしら？』

和威は弥生に、結婚式まで四日しかない、と答えるが……。

『まだ四日もあるんですよ。和威さん、あなたには後悔しないで欲しいの』

弥生は笑みを湛えて和威を見つめていたのだった。

和威は西園寺邸から追い出されるように出て来た。
何を言つても、愛実は藤臣を感じるの一点張りである。

これでも、丸一日悩んだのだ。あらゆる情報に通じている暁に相談しようか、とも考えた。しかし、暁が知らなかつた時が問題だ。和威は意識せずに、藤臣を追い込む側に回つてしまつ。

この場合、瀬崎に尋ねるのが一番だと思うが……。それこそ、自分ではどうすることも出来ない、半人前です、と降参するようなものである。

ならば、愛実に直接尋ねよう、と考えたのだ。

愛実が藤臣から全てを聞いていて、それでも彼を選ぶと言つなら、自分も二人の味方をしよう。弥生が藤臣の後見を辞めぬように頼んでもいい。和威が愛実と結婚したくない、家も継ぎたくないと言えば、さすがの弥生も藤臣に託さずにはいられないだろう。

藤臣は過去の心的外傷を乗り越えるため、病的なほど女性に冷たく当たり、セックスだけの関係を築いてきた。

逆に、和威は女性と距離を取ることで、心の安定を築いたのだ。そんな和威の一番近くに来た女性、それが愛実だった。弥生の思惑は明らかだ。だがそのせいで、和威は恋愛の対象として愛実を見つめ、性的関心も芽生えた。

和威にとつてそれは、初めての恋だった。

～*～*～*～*～

(「デパートまで来て、わたしは何を聞くつもりなんだの?……）

愛実は和威の言葉に動かされ、藤臣に会いに来てしまった。
電話を掛けようか、とも考えたが、大事なことなので顔を見て話
したい。でも、藤臣は怒るかも知れない。どうして信じないんだ、
と。信じたいから来たのだ、とそんな愛実の想いを受け止めてくれ
るだろうか？

愛実の顔を見るなり、受付の女性が立ち上がって頭を下してくれ
た。

「いらっしゃいませ、西園寺様。社長とお約束でござりますか？
すぐに連絡を……」

「あ、いえ、すみません。あの……急に来て驚かせてみたくなつて。
来客中でなかつたら、このまま通して頂きたいのですが……」

こんな子供っぽい言い訳が通用するのか、と思ったが、意外にも
受付の女性は笑顔で通してくれた。

愛実も会釈して専用のエレベーターに乗る。

社長室の階で降りるときはドキドキだった。エレベーターの扉が
開いた瞬間、藤臣と顔を合わせたらどうしよう。或いは、社長室に
彼がいなかつたら？ いつまで待つつもりか、愛実は何も考えてい
なかつた。

金色のプレートに？社長室？と書かれたドアの前に立ち、愛実は
深呼吸する。ノックをして数秒待つが返事がなく、愛実はもう一度
ノックした。

「……失礼します」

小さく声を掛けながら愛実はドアを開け、中に入った。いつも彼

が座っている社長の席は空だ。トイレだらうか、と思つた時、さらに奥の小部屋から人の話し声が聞こえた。

その小部屋には、手前には社長室用の備品や消耗品が、奥には重要書類を保管する金庫が置かれてあるという。中に入るつもりはなかつたが、愛実はそろそろと小部屋に近寄つた。すると、声の主は藤臣 どうやら携帯電話で話しているようだ。

（どうして、こんな中で電話なんか……）

愛実の胸に疑問と不安が浮かぶ。

「判つた、長倉が動いてるんだな。いや、駄目だ。否定は出来ない。後で認めても、俺が娘を否定した事実が残る。それだけはしたくないんだ。だから、判つてると言つてる。婆さんとは今夜、話をつける。いや、愛実には言つた。彼女は何も知らなくていい」

藤臣が携帯電話を切り社長室に戻つた時、そこには誰もいなかつた。

／＊＼＊／＊＼＊＼

東部デパートを後にした愛実が向かつたのは田園調布の美馬邸である。

たつた一人、呼ばれてもいのに美馬邸の門をくぐつたのは初めての経験だ。そしておそらく最後になる、と愛実は心に思つていた。

藤臣の『愛している』を信じたかった。いや、嘘ではなかつたと、今も信じている。

でも、ここ数日の彼を見ていれば判る。あれほどまでに藤臣を苦しめているのは愛実なのだ。愛実との様々な条件が課せられた結婚は、藤臣に多大な負担を掛けている。

一度全てをリセットしたい。財産も義務も、何もないところから始めて、それでも藤臣が愛実を選んでくれたなら……。彼の過去に何があつても、例え子供が居たとしても、自分も藤臣の愛に応えよう。

愛実はそう心に決め、弥生のもとを訪れた。

「成城の家は出ます。精算して頂いた両親の負債も、将来、姉弟で働いて必ず返します。ですから、わたしを相続人から外して下さい。元々、このお屋敷は藤臣さんのものになる確率が高かつたと聞きました。でも、そうなつて欲しくないという、おばあ様のお気持ちも……」

ガチャンと大きな音がしてティーカップが割れた。

弥生が持ち上げたカップを大理石のテーブルに落とした為である。
？アラビアンナイト？が描かれたマイセンのカップは、見事に二つに割れていた。

「あら、失礼。わたくしは構いませんよ。でも、契約不履行となれば……これまでお渡しした分の倍返しとなるのだけれどよろしいかしら？」

その金額は愛実の予想を遥かに上回り、途方もない金額だつた。しかも西園寺の親戚だけでなく、母方の親戚たちも保証人として

名を連ねているという。彼らは美馬と通じることで多大な恩恵を蒙ることになった。しかしそれは、かなりのリスクを伴つもので……。しかも、愛実の心一つに掛かっていたのだ。

愛実たち一家だけでなく、親戚一同を路頭に迷わせかねない事態に、彼女の決断は鈍る。

「ねえ、愛実さん。全てを手に入れようなんて、むしが良すぎるといつものではなくて？」

藤田が我が子を守りたいといつなら、この家を諦め、愛実との結婚も白紙に戻すはずだ。それをせず、明後日の挙式披露宴も変更しないと言つながら……。

「随分、薄情な方ですこと。美馬と古くからお付き合いのある会社のオーナーさんには、昔氣質かたぎの方もいらっしゃいますからね。まあ、どう思われるかしら？ 世論も馬鹿に出来ませんものね。株価が落ちれば、株主さんも黙つてしまはせんでしょう。でも、決めるのは藤田さんですよ」

メイドが割れたカップを拾い、手早く辺りを掃除して部屋から出て行く。どこか懐かしく感じるマイセンのカップを、愛実は切ない思いで見送り……。

「でも、あなたがそれほどまでに仰るなら、方法もないわけでは……」

弥生の言葉に愛実は飛びつくよつと声を上げた。

「どんな方法ですか？ わたしに出来ることなら」

「ええ、あなたしか出来ませんよ」

弥生は別のメイドが持ってきた新しいティーカップを手に、蛇が獲物を狙つよつ、冷ややかな笑みを愛実に向けた。

弥生は何を、誰を愛しているのだろうか？

愛実の胸に疑問がよぎる。とても祖父・亘を慕い続けてきたとは思えない表情だ。かといって、亡くなつた夫を愛していたと言うなら、どうして今になつて亘の孫である愛実を呼び寄せたりしたのだろう。

彼女自身の孫である和威に接する時でやけ、弥生の中に彼を思う愛情が見えない気がする。

愛実に判ることは一つだけ、弥生は藤臣を憎んでいた、といひこと。ただ、それだけだった。

何も言えず、無言で座る愛実に弥生は言葉を続けた。

「藤臣さんが決断できず苦しんでいる、といつなら……あなたが決めればよろしいではない。簡単なことですよ。明後日の結婚式、花婿を和威さんにしたと言えば良いのです。」

弥生は微笑みを浮かべ愛実に告げる。

「わたくしはね、愛実さん。あなたに財産を譲りたい、と言つているのです。その後のことまで、何も命令していませんし、そんなこと出来ませんでしょ？　わたくしも^{よわい}八十……お迎えもそう遠いことではありませんよ。生きている間に和威さんのお嫁さんを見たかつただけですもの」

その後……弥生が亡くなつた後、愛実が藤臣に屋敷を譲りたいなら好きにすればいい、といった内容の言葉に、愛実は切なくなる。

確かに、大きな屋敷を維持していくことがどれほど大変か、愛実は経験から知っていた。西園寺邸ですらそうなのだから、この美馬邸となれば大変どころではないだろう。

和威は東部鉄道の一社員だ。いずれ出世するにしても、それまでの間に掛かる相続税や固定資産税、修繕費や人件費などとても賄えるものではない。そういうことも含めて、藤臣でなければ維持できないと弥生も判っているのだ。

「藤臣さんがね、わたくしや夫を恨んでいることは承知していますよ。だからこそ、この屋敷も全て、ご自分のものになさりたいのです。それに、あなたのこと可哀想に思っているから……」

「可哀想なんて……違います、そうじゃなくて」

「あなたは藤臣さんを愛してらつしゃるでしょう？　でも、藤臣さんが候補から降りてしまわれたら、どうなるとお思い？」

愛実はこの時初めて、母がサインした書類の重さに気付いたのだ。自分たちだけならいい、どれだけ苦労しても時間が掛かっても、借りた物を返すのは当然のことである。だが、親戚一同を巻き込まないためには、愛実は他の三人から結婚相手を選ばなければならぬ。い。

愛する人の選択を待つ自由など、愛実にはなかつたのだ。

人生は簡単に途中でリセットすることは出来ない。どれほど誠実に生きているつもりでも、正しくあらうと努力しても、ふいの嵐に巻き込まれて思わぬ迷路に迷い込んでしまったとしても……。

愛実は自分の運命が、この美馬邸から逃れられないものであることを悟った。

私は……君を愛してる

君の願いなら、何でも叶えてやる
君とひやんと家庭を築くつもりだとこの証に

長く、甘い夢を見ていた気がする。

夜はもう遅かった。愛実は美馬家の車で送つてもらい、家に着いたのは夜の十一時を回っていた。受験生の尚樹はともかく、中一の真美は寝るように叱り、逆にぐっすり眠つた末の弟・慎也の部屋も見て回る。母は今夜も帰らないと連絡があつたらしい。

母がどこで何をしているのか知らない。だが、今の愛実にはどうでもいいことに思える。

(駄目よ……こんな気持ちになつたら駄目。わたしが諦めたら、本当にお終いなのだから……)

自らを励ますものの、どうにも愛実の中に力が湧いて来ない。真っ暗な中、リビングのソファに、ただボンヤリと座り込んだ。

無為な時間が過ぎ、突然、玄関の呼び鈴が鳴り響いた。

愛実がハツとして時計を見ると、すでに日付けは回っている。こんな遅くに人が訪ねて来るなど、かつて借金取りに追われていた日々以来であった。

誰か判らないまでも、応対しないわけにはいかない。来訪者はまさに借金取りよろしく、忙しなく呼び鈴を鳴らし続けていた。

「どなたですか？　お引取り頂けないなら、警察に連絡します！」

玄関の扉越しに愛実は毅然と答える。

「開けてくれないか？ 婚約者の来訪だ。いや……元婚約者と言つべきかな？」

それは藤臣の声であった。

愛実は自分の意思で和威を選んだ。

それは決して、弥生の言葉を信じたからではない。愛だけを理由に、藤臣を選んで欲しかった。唯一つの問題は、愛実が藤臣を待てる立場になかったことだろう。

藤臣が悪いわけでも、弥生が強制したからでもなく、西園寺家の抱えた借金のせい。そして、それを背負うと決めた、愛実自身の責任だった。

「弥生様から聞いた。結婚式は……もつ明日なんだぞ。正氣か？」
「あの週刊誌に書かれていた十歳の女の子……本当は、藤臣さんの子供なんですよね？」

リビングまで藤臣を通したものの、一人は立つたままだった。愛実はソファを挟んで、真っ直ぐに藤臣を見る。
すると、これまでスッと視線を逸らしていた藤臣も、今回ばかりは小揺るぎもせずに見つめ返した。

「……ああ、そうだ」

その言葉に愛実の肩からフツと力が抜け、泣き笑いのよつや顔になつた。

藤臣はそんな彼女をどう思つたのか、急き込んで話し始めた。

「説明させて欲しい。決して君を騙していたわけじゃない。私も知らなかつたんだ。本當だ！あの記事が出た時、マスコミが昔のことを掘り返しだけだと思つていた。それが……どうしてこんな」「お子さんのこと、ちゃんと考えてあげて下さー。わたしには君は許してくれると言つたはずだ！過去は許す、と。約束してから一度も裏切つてはいなし、裏切るつもりもない！」

「じゃあ……どうするんですか？このままじや」「落ち着いた後で金を払う　他に手はないんだ。でも今は認めるわけにはいかない。今、グループ本社の実権を失えば君を守ることが出来なくなるんだ！」

やはり、藤臣を苦しめているのは自分の存在なのだ。
愛実は唇を噛み締め、顔を上げる。

「藤臣さんは本当のことを見つめながら、わたしには何も話して下さらなかつた。そうでしょ？」

「それは……君に心配を掛けたくなかつた。それだけだよ」「違うわ。今は認められない、でも、否定もしない。そう仰つたでしょう？　わたし、今日、社長室に伺いました」

「知つてる。受付の社員に聞いた。だから何だ？」

「藤臣さんはあなたの実のお父さんとは違う。絶対に自分の子供を見捨てるような人じゃない。それに、相手の方は一度は結婚しようとなさった方じゃないですか。愛していらしたはずです。わたしのことは、守つて下さらなくて平氣です。わたしは……和威さんと結婚します」

愛実は涙腺をきつく締め、藤臣に向かつて笑顔を作る。
ところが、彼女の目に映つたのは、信じられないほど頼りなげな藤臣であった。

「……君も、土壇場で俺を捨てるんだな……」

あまりにも悲しげな瞳に、そつじやない、と叫びやうになる。
その時だ。車の排気音がして、西園寺邸の前で停まった。直後、
再び玄関の呼び鈴が鳴る。それは先ほど、藤臣が鳴らしたより激しく……愛実は慌てて玄関に向かった。

「私です！瀬崎です！」

その切羽詰つた声に愛実だけじゃなく、彼女の後ろから駆けつけた藤臣も驚きを隠せない。

愛実が鍵を開けるなり、瀬崎は飛び込んできた。

「瀬崎、何時だと思っていー！ ここまで追いかけて来なくとも、私は逃げも隠れも」

「夜分遅く申し訳ありません。 社長、恭子さんが自殺を図りました」

第74話 切願

深夜の病院ほど心細さの募る場所はない、と愛実は思う。彼女は東恭子が運ばれたという病院までついて来ていた。

「瀬崎、恭子は無事なんだろうな?」

「何も判りません。子供が昼間からベッドで眠ったままの母親を案じ、ホテルのフロントに連絡したよ!」

愛実は由佳に教えてもらい、恭子たち親子を見に行つたときのことと思い出していた。

おそらく、あのホテルにずっと隠れるようにしていったのだ。子供たちは何日も学校を休んでいるのかも知れない。それを思うと胸が痛んだ。

瀬崎の手配で、美馬グループの影響力が大きい病院に恭子は運ばれていた。

病院に着くと、睡眠薬を適量より少し多めに、それもアルコールと一緒に飲んだせいで医者は説明する。恭子もすでに意識が戻つており、医者の質問にも『量を間違えただけ』と答えたといつ。

それを聞きながら、横で安堵の息を吐く藤臣に、愛実は切ないものを感じていた。

処置室の前の廊下にベンチが並んでいた。そこには母を心配する十歳の少女と四歳の少年の姿が。その姿は父が亡くなった時、病院の廊下で震えていた愛実たち兄弟に重なった。

一年前の五月、愛実たちの父が自宅で倒れ、病院に運ばれた。父

の事業の資金繰りを心配していた祖母は、驚いた様子で家中をただウロウロ歩き回り、母は父の傍に座り込み泣くだけだった。愛実が救急車を呼び、父の名を呼びながら家族を励ました。病院の廊下はひどく無機質で、冷たく感じたのを覚えている。

結局、父は一度も意識を取り戻すことなく、翌日には帰らぬ人となつた。愛実は詳しい病名まで聞かされてはいないが、ストレスが原因の心臓発作だったといつ。

祖母と母が呼ばれ医者の話を聞く間、愛実たちは廊下のベンチに座り……ただ、震えていた。中一の尚樹は小学生の真美の手を握り、愛実は眠つてしまつた四歳の慎也を抱えて。あの時ほど、人の温もりが欲しいと願つたことはなかつた。

「もつと小さな病院だつたな……母が運ばれたのは……俺は、生後半年の妹を抱き締めていた」

愛実の隣に立つ藤臣が、彼女と同じように一人の子供たちを見つめ、ぽつりぽつりと話し始める。

藤臣が八歳で母親を亡くしていたのは聞いていたが、その原因は義理の父親であった。彼の母親に風俗で働かせ、稼いだお金を取り上げていたという。どれほど具合が悪くても、無理やり働かれ……倒れて病院に到着したときには、死亡が確認されたのだった。

「母が亡くなつて、わずかな保険が下りた。奴はそれが欲しくて俺たちを施設に送らず、面倒を見ると言つたんだ。だが、半年も経たず金は底をつけ……奴は俺たちをアパートの置き去りにして女と逃げた。俺は必死で妹の面倒をみたけど……すぐに食い物がなくなつて」

藤臣たちが住んでいたアパートは、およそ近所付き合いがあるよ

うな地区ではなかった。彼はそれまで一度も学校に行かせてもらえたなかつたといふ。

誰にも頼れず、日に日に弱つていいく妹のために、藤臣は店先から牛乳を盗んだ。それが店主に捕まり、警察に通報され、ようやく藤臣と妹の忍は保護されたのだった。

しかし……。

「忍はもう息をしてなかつたよ。……冷たく、硬くなつた小さな指を、俺は一生忘れない。あの男は逮捕されて刑務所に入った。だが、たつた五年で出て来たんだ！ 我が子を殺してもそんなものぞ！」

藤臣の心の傷は、自分が父親に捨てられたことだけではなかつたのだ。

以前、加奈子が言つていた『父親と言えば、あの刑務所に入った男……』の意味がようやく判つた。どうして、誰もが藤臣を傷つけようとするのだろう。

愛実は、隣に立つ藤臣の瞳が常夜灯に煌いた瞬間を目にした。彼が少年に思え、抱き締めたい衝動に駆られた。

（あなたを愛してる、と。いつまでも、あなたがわたしを選んでくれる日を待つてると言えたら……）

だが、それは言えなかつた。

弥生は、藤臣が明後日の愛実との結婚を強行するなら、会社にも影響が出る、と言つていた。そのうえで、愛実に決断を急いたのだ。その答えは愛実にも判つた。弥生は何が何でも花婿を和威に替えようと考えている。愛実に時間を与えないのは、西園寺の家族を貶めたいわけではなく、これが藤臣から美馬邸を取り戻す最後のチャンスだから……。

愛実はここまで、多少腑に落ちないことはあっても、弥生には感謝の気持ちを忘れずにいた。

だが今は、これほどまで過去に苦しめられている藤臣は、どうして手を差し伸べないのか、と口惜しくてならない。

(藤臣さんを本当に救つことができるのは……)

～*～*～*～*～

愛実が幼い姉弟に我が身を映したように、藤臣もまた、自分の姿をそこに見ていた。

『愛実さんが和威さんとの結婚を承知してくれましたよ。ああ、ご安心なさい。あなたを次期社長として変わらず推挙しましょう。そのためには……誠実な印象を残しておくことが大事でしょうねえ。お子さんのために、新しい美馬邸を建てて移られるといいわ。会社のことはよろしくお願ひしますよ。お元気でね、藤臣さん』

ほんの数時間前、弥生が勝ち誇った顔で藤臣に言つた台詞である。藤臣は一言も言ひ返すことができず、無言で美馬邸を飛び出し、愛実のもとに駆けつけたのだ。

不満があるなら真っ先に、藤臣に話してくれると思つていた。まさか、弥生を頼るとは思つてもみなかつた。そして愛実であれば、藤臣のどんな過去も罪も許してくれると信じていたのに。

愛実との結婚を白紙に戻したいと思つたことは一度もない。今となつては会社の実権も、愛実を守るために維持したいだけであった。だが、弥生の姿を見るたび、あの美馬家のの人間と話すたび、藤臣の

中に憎しみが甦るのだ。三十年間、積もり積もつた恨みが錘のよう
に、藤臣を美馬という地獄に引き摺り込む。

『会社のことはよろしくお願ひしますよ』

弥生の声がいつまでも耳の奥でこだましていた。

(しかし……恭子は何でこんな真似を？)

睡眠薬の服用が藤臣のせいであれば申し訳ないと思つ。
だが、幼い子供たちを残して、万一のときはどうするつもりだつ
たのか。二人の姿を見ていると、腹立たしさすら覚える。
そのとき、愛実が何を思ったのか子供たちの傍に歩み寄つた。

「大丈夫よ。お母さんは間違えて薬を飲んじゃつただけだから……
すぐに良くなるつて」

ベンチに座つた二人の前に屈み込み、愛実は笑顔で話しかけた。
見知らぬ女性の言葉に、姉の絵美は弟の博之を抱き締め、きつい
眼差しを向ける。

「……知らない人とは話さないように言われますから」

「そう、お母さんに？」

「はい。それとも……病院の人ですか？」

愛実は小さく首を振り、数メートル後ろに立つ藤臣に視線をやつ
た。

「あの男の人が、お母さんのお友達よ。同じ会社で働いているし、
お母さんが大学生の頃からのお友達なの。だから、きっとあなたた
ちの力になってくれるわ」

その言葉に、藤臣は鼓動が止まつた錯覚に陥る。愛実が突然そんなことを言い出した理由も、自分がどう動けばいいのかも判らない。だが、絵美は勢いよく立ち上ると、呆然と佇む藤臣の前までやつて來た。

「美馬社長さんですか？　あなたが、あたしの本当のお父さんなんですか？」

「……」そのストレートな質問に藤臣は即答できぬ。

「お母さんがお酒や睡眠薬を飲むようになったのは最近なんです。お母さんは、お父さんがいなくなつてすごく苦労して……。お父さんがいなくなつたのは、あたしが本当の子供じゃなかつたから。

お母さん、昨日、言つてました。社長さんに、こんなに迷惑かけるつもりじゃなかつたのに、って。あたしたちにも……学校に行けなくなつてごめんねつて。でも……学校に行けなくてもいいから、本当のお父さんのことは一度と聞かないから……もとのお母さんに戻つて欲しい」

氣丈に藤臣を睨んでいた絵美の瞳に大粒の涙が浮かぶ。そして、元どおりに二人で暮らしたい、そう言つたとき、彼女はポロポロ泣き始めた。

田の前の少女を選べば、一度と愛実のもとには戻れない。それは、弥生に負けを認め、膝を屈するも同然となる。藤臣は数秒目を閉じ、覚悟を決めて口を開いた。

「そうだ。私が君の父親なんだ。君のお母さんや、君たち姉弟が幸福になれるよう、私にも力を尽くさせて欲しい」

藤臣は少女の前に跪き、その肩を抱き締めた。

それは二十年前、母を失ったときに彼が願つた？優しい手？で
あつた。

車は藤臣のポルシェではなく、瀬崎の国産車であった。慣れないはずの右ハンドルだが、元々運転が好きなせいだろうか、難なくこなしている。

愛実は運転する藤臣の横顔を見るのが好きだった。窓の縁に肘を置く仕草も、シフトレバーを操作する指先も、助手席に座つて見ているだけで愛実の心は浮き立つた。

最悪の形で出会いながら、愛実にとって彼は最初から特別な人だと感じていた。時には厳しい言葉をぶつけられることはあっても、最後には必ず優しい言葉をくれる。何度も助けられ、不器用で判りにくい思いやりと傷つきやすい心を知った。一人ぼっちで生きてきた藤臣の家族になりたいと本気で思っていた。

『そうだ。私が君の父親なんだ』

藤臣の告白は愛実が促したも同然である。

彼は父親だと認めただけで、恭子を愛していると言つたわけでも、愛実への愛を訂正したわけでもない。だが絵美のために、藤臣は娘の存在をじまかすことはしないだろう。

あの弥生が藤臣の弱点を見つけて見逃すはずがない。もし、愛実が逆らえればきっと……。

「愛実、夜中に……付き合わせて悪かった」

随分長い時間無言であったが、ようやく藤臣から口火を切つた。

「……いえ。大したことがないくて、本当によかったです」

子供たちは母親と同じ病室で一晩過ごすという。明日には恭子も

退院できるそつだ。事後処理に瀬崎が病院に残り、藤臣が愛実を自宅まで送り届けることになった。

「和威との結婚だが……無理にする必要はない」

「でも、契約書が」

「あれは何とでもなる。俺が弥生と話して決着をつける。元々、美馬家の問題だつたんだ。それに君を巻き込んでしまった。……後悔してる。済まない」

それは今まで聞いたことがないほど、頼りなげな藤臣の声であった。

「そんな、そんな風に言わないでください。はじめから間違いだった、みたいに……」

「間違いだつたんだ、はじめから。弥生の策略を知つて、誰よりも先に君を見つけ……俺のモノにするつもりだつた。だがその前に、弥生に手を打たれて……。後は知つてのとおりだ。美馬の屋敷が欲しかつた、そして、君を抱きたかつた。手段が違つただけで、俺も信一郎の同類だ」

藤臣の言葉とともに、車は西園寺邸の前に停まった。

「美馬の人間はこんな連中^{クズ}ばかりなんだ。契約書は俺が必ず無効にする。だから……」

「一つだけ教えてください。“愛してる”って言葉は本当でしたか？」

愛実の質問に一呼吸置いて、藤臣は答えた。

「俺に相談もなく、花婿を替えたのは君だ」

「わたしは……藤臣さんを愛してました。でもお子さんの存在を放置して、わたしと結婚することは立場的に問題になる、と。それに、弥生さまとの確執を知つた今、これ以上、藤臣さんひとりに迷惑は掛けられません」

藤臣と結婚するのだから、何も問題は起こらない。母が交わした契約書の内容を知つても、愛実はそれほど大変なことだとは思わなかつた。

弥生にしても、まさかこんな直前で藤臣に隠し子問題が持ち上がるとは、想像できなかつただろう。

責任は取らなければならない。たとえ十八歳でも、自分自身で決めたことなのだから。

「美馬家の方がどんな方たちであつても、わたしはわたしです。藤臣さんのことが好きだから、これ以上傷ついて欲しくないんです。和威さんはそれでもいい、と言つてくださいました。どうか、わたしを守る為に、苦しい決断なんてしないでください」

愛実はバッグから淡いブルーグリーンのリングケースを取り出した。中に収まっているのは、婚約指輪としてもらつた三カラットのオーバルダイヤモンドリングである。

「これをお返しします」

「返されても困る。叩き売つても一千万は下らない。何かのときの為に持つておいたほうが無難だ」

そう言つと、藤臣は最初に会つたときのように冷たく笑つた。

愛実はふるふると首を振り、そつとコンソールボックスの上にケースを置いた。

「最後のお願い、きいて貰えますか？」

「何だ」

「最後に、もう一度だけ……キス……して欲しくて

そんなことを言つつもりはなかつたのだ。

でも、気が付けば、愛実は藤臣にキスをねだつていた。最後の思い出にたつた一度だけ……。

しかし、藤臣の答えは。

「断わる。やつきの答えた“愛してる”の言葉は全部嘘だよ。君を抱きたくて言つただけだ。判つたかい、お嬢ちゃん」

彼はハンドルを抱きかかるようにして、こちらを見て意地悪く笑つた。

「藤臣さん……」

愛実はぐるっと背を向ける。車のドアを開け、外に飛び出した。そしてドアを閉める間際、車内を覗き込み、

「 ありがとうございました」

愛実は精一杯の笑顔を見せる。

そして彼女は身を翻し、門に向かつて歩き始めた。

本当に抱きたいだけなら、いつだって何度だってチャンスはあつた。今だつてそうだ。“愛してる”と言われたら、明日のことも考えず愛実は彼に身を投げ出すだらう。

眞実の藤臣は、家族思いで誠実で温かい人なのだ。そして今の愛実には、彼に何一つ与えてあげることが出来ない。愛実がどれほど母に困つても、勝手にしろとは言えないよつに……。彼は絵美を見捨てては幸福になれない。

彼女が門に手を掛けたとき、背後に足音が聞こえた。

愛実が振り向く寸前、力一杯抱き締められ その香りは間違いなく藤臣だった。

「 藤、臣……さん？」

「愛実……どうか、幸せに

それは、ほんの一瞬のこと。

愛実は微動だにできぬまま、風が過ぎ去るよつて藤臣は立ち去り、車のエンジン音が聞こえた。愛実は崩れ落ちるように座り込み、古い木製の門に体を預け、泣き続けたのだった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

娘を自分と同じような目にだけは遭わせたくない。

恭子が何を藤臣に望んでいるのか、あらためて話し合う必要があるだろう。

そして愛実は……。

彼女の人生にもう一度選択肢を与えてやりたい、と思つた。強引に巻き込んでしまつたせめてもの罪滅ぼしに。たとえ、美馬の屋敷や社長の椅子を諦めることになつても。彼はこのとき、初めて十五年間積み上げた復讐心を手放した。

だが、もう遅かったのだ。

藤臣は通り掛った橋の上に車を停め、外に出た。どの辺りを走っているのか、自分で見当がつかない。ただ、二車線の道路に車は数えるほどしか走つておらず、欄干沿いの歩道に一定の間隔で灯る街灯が物悲しさを醸し出していた。

泥沼と化した藤臣の人生に、これ以上愛実を引き摺り込むことは出来ない。そして愛実が和威との結婚を望むなら、和威が美馬家の主となれるようサポートするだけだ。

決して忘れることが出来ないと思つた憎しみは、手放した瞬間形を失い霧消した。

藤臣は愛実から返されたリングケースを開ける。
そしてダイヤの光に目を細めた直後、川に投げ捨てた。

『“愛してる”の言葉は全部嘘だよ』

そう言葉にしたとき、やつと彼は気づいたのだ。愛実に言い続けた“愛してる”が心からの言葉であったことに、
かけがえのないものを失つた。

指が白くなるほど、藤臣は強く欄干を握り締める。車のベッドrif
イーに映し出された背中は、いつまでも、小刻みに震えていた。

結婚式前日

花婿が美馬藤臣から美馬和威に替わったと発表された。会社をはじめ、式場も大騒ぎとなる。そんな中、和威は自分の気持ちに戸惑つていた。

愛実を愛している。

彼女の心がどうにあっても、藤臣と一緒になるより、自分のほうに幸福に出来るはず、だった。

『和威さんは好きです。でも、急にこんなことになつて……。夫として愛せるようになるまで、色々なことは待つていただきたいのですが。……ダメ、ですか？』

彼女がセックスのことを言つてゐるのだ、とすぐに判つた。愛実に頼まれ、『ノー』と答えられる和威ではない。ましてや女性に無理強いるなど、和威が最も厭う行為だ。

『待つよ。君が僕を愛してくれるまで。君のために精一杯頑張つてみせる。君がいてくれたら、頑張れるような気がするんだ』

そう答えた和威に、愛実は歯を食い縛つて微笑んだ。

藤臣が弥生に怒鳴り込んだことは聞いている。だが、まだ和威のもとにはいなかつた。すぐに和威を責めにやつて来ると思つていたのが、肩すかしで……匕首にも気持ちが落ち着かない。

(僕は藤臣さんが怖いのか？ それとも……)

朝一番で発表され、和威はその準備に追われた。親族用のタキシードからフロックコートに衣装を変える。そして愛実も、『違うウエディングドレスを着たい』と言い出し、周囲を困らせた。だが、和威はそれを認めたのだ。

決まつていたドレスは『デザインから藤臣が指示したものだ』といつ。愛実がそれを着たくない気持ちは痛いほど判る。

既成のドレスの中でサイズが合つものとなれば限られていたが……。愛実の『ありがとう』といつ言葉は和威の胸に刺さつた。

自室で考え込む和威の耳に糸井の慌てる声が届いた。美馬家の執事が声を荒げるなど滅多にないことだ。

「どうしたんだ。いつたい……」

和威が廊下に顔を出すと、糸井が必死で止めようとしているのは藤臣だった。従兄……いや、叔父の姿を見て、和威は「クリと睡を飲み込む。

「糸井、いい加減にしないか。私が何をすると言つんだ」

「いえ、しかし」

「和威に話があつて来ただけだ。和威、中に入れてくれるか？」

藤臣が騒動を起こすと思つてゐるのか、廊下の向こうには興味本位で見ている宏志の姿もあつた。

和威は深呼吸してドアを大きく開け、

「どうぞ、藤臣さん。来られると思つていました」

可能な限り余裕の笑みを作り、藤臣を招き入れたのだった。

ソファに座るように勧めるが、藤臣はそれを断わる。「やつぱり話じやない」彼はそんなふうに言つた。

「僕のことを怒つてますよね？ おばあ様の言いなりで、尻馬に乗つて女性を手に入れるなんて……卑怯だと言いたいんでしよう？」

判つてます、でも

「落ち着け、和威。私はお前を責めにきたわけじゃない」

藤田は妙に落ち着いた様子で和威の肩に手を置いた。

「まずはお前に謝りたい。長い間、騙していく悪かった。ただ……先代は生前、私を息子とは認めようとしなかつたんだ。亡くなつていきなり父親だと認められても、困惑しただけだつた

和威には訳が判らない。なぜ、出生の話になるのだらう。やはつ、愛実のことはこの家を相続する為だけの道具に過ぎなかつたのか。やう思つと、理不尽にも怒りがわき上がる。

「話はそんなことなんですか？ 愛実さんのことね……」

その時だ、スッと藤田は体を引くと、頭を下げた。

「愛実を頼む。美馬家の騒動に巻き込み、結果的に彼女の一生を美馬家に縛り付けることになつた。どうか、幸せにしてやつてほしい。私は一連の騒動の責任を取つて、本社取締役を辞任した。東部デパートの社長も、副社長に任せゐるつもりだ。騒ぎが収まるまで、私が東京にいないうがいいだらう。この家も出る。和威、次の社長はお前だ」

これまで見たことのない藤田がそこにいた。

まるで憑き物が落ちたかのよつた悟り澄ました表情に、和威は何と答えたらいいのか判らない。

「ま、待つてくれ。僕は、愛実さんと結婚してこの屋敷を相続することにした。でも、藤田さんを会社から追い出すつもりなんてない！」

「判つてる。お前がトップとしてやつていけるよつたるまで、サ

パートするつもりだ」

「いや、そうじゃなくて！」

「悪い、和威。私にとつて？美馬？にはもう何の興味もないんだ。働く意味も目的もない。気が狂うほど欲しかったモノは、憎しみの作り出した幻だった。和威、私のような生き方だけはするな。どんな力にでもなる。だから、愛実のことを頼む」

自分のほうが愛実を幸せに出来る。

その思いを藤臣本人に肯定されたとき、和威の心は迷宮の真ん中に放り出されていた。

～*～*～*～*～

「大事に至らなくて良かつたです」

瀬崎は一旦子供たちをホテルに引き上げさせ、恭子の退院手続きのため、再度病院を訪れていた。

彼が恭子から相談を受けたのは五月のこと。

瀬崎は最初、恭子は金目当てに違いない、と考えた。藤臣に知らせる必要もない。DNA鑑定を要求すればアッサリ引き下がるだろう、そう思ったのだ。しかし、恭子は鑑定をあっさり了承する。

そのとき初めて、藤臣が瀬崎にも内緒で恭子を『パート』に採用していたことを知った。

『四年前、夫に行かれて、仕事とお金に困って美馬社長に相談したんです。すると、助けてくださって……。私が十年前のことを後

悔しました。今さら、やり直したいなんて言えませんけど……。でも、絵美のことだけは話しておかなくては、と』

藤臣に知らせるのは鑑定結果が出た後でいい。瀬崎はそう判断し、藤臣と一志の親子鑑定を頼んだ外国の会社に依頼したのである。そこにはまだ藤臣のＤＮＡサンプルが保存してあった。

そして結果は……。

瀬崎にとって、愛実は本当に健気な少女であった。藤臣の言葉を全て信じ、頼りきっている。

一方、藤臣もこれまでとはまるで印象が違った。潰すために美馬の家屋敷と会社を手に入れる、そんな妄執から一刻も早く田を覚まして欲しいと、瀬崎は常に願っていた。

藤臣は一志とは違う。本来の彼は、愛する者のため必死になれる人間なのだ。

瀬崎の実家は農家をしている。決して裕福ではなく、しかも彼は兄弟が多い。数年前、瀬崎の母が心筋梗塞で倒れた。すぐに手術が必要だと言われたとき、その全ての手配をしてくれたのが藤臣だった。

彼にとつて藤臣は親友であり、信頼できる上司であり、手の掛かる弟でもあります。

怒りや憎しみは人が立ち上がる力になる。だが、そこからは何も生まれない。それを藤臣に知つて欲しかつた。

瀬崎は何度となく藤臣に尋ねた。愛実を本当に愛しているのだろう、と。

だが、

『俺は誰も愛せない。愛実のことは一生騙すつもりでいる
そんな言葉でじまかし続ける。

その答えに、瀬崎は藤臣を庇うことを止めたのだ。逆に彼を追い詰め、最後の最後で本当に欲しいものを選んでもらおうと考えた。愛する女性と我が子を天秤に掛けるのは辛いはずだ。それでも『辛い』と認めるところから、藤臣に気付いて欲しかった。

瀬崎は藤臣が小細工できないタイミングを見計らい、マスクコミを使つた。一部の記者が暴走したせいで子供を巻き込んでしまったのが計算外だ。

そして、結果的に藤臣が子供を選んだとき、愛実の被害を最小限に抑えるため和威に自覚を促した。彼女が藤臣の金銭的援助を受け取つてくれればいい。だが、潔癖な愛実が破談になつた相手の援助を受けるとは思えなかつたからだ。

「社長は娘さんが望めば……実の父親として認めてもらひえるよう、努力するとおっしゃつておられました。鑑定結果を提出し、法律の特例を適用してもらひよう働きかけたい、と」

DNA鑑定の精度が上がり、子供の父親が明らかに違つと判断された場合、特例として実父の名前が変わつたという判例がある。藤臣は本氣で子供を取り戻すつもりのようだ。

喜ぶかと思つた恭子は俯いたまま顔も上げず、

「あの……」結婚は……

「婚約は解消されました。一連の騒動の責任を取つて、全ての役職を辞されるそうです。しばらく東京を離れることになりそうですが……。『一家やお嬢さんのことはけやんと考へておられますので、安心ください』

瀬崎は「退院の手続きをしてきます」そつと病室を後にした。もう夕方と呼ぶに相応しい時間帯だ。普通ならこんな時間に手続きはできなものだが、多少の無理を頼むためにこの病院に運び込

んだのである。

エレベーターに乗り込むとしたとき、瀬崎は恭子の保険証を預かつていないうことに気がついた。

引き返し、病室のドアをノックして、ほぼ同時にスライドをせる。室内に目を向けた瞬間、恭子は窓枠に足を掛け、飛び降りようとしていたのだった。

結婚式当日 美馬邸は静かな朝を迎えていた。

花婿になるはずだった藤臣の部屋には誰もいない。モデルルームのような室内は、主を失ったかのようにシンとしている。彼が朝食の席に着くこともなかつた。藤臣は式への参列も強制されではおらず、弥生をはじめ誰も彼の名前を口にしなかつた。

その一方で……。和威は一睡もせず、窓の外が黒から水色に変わる間、自室のソファに座り中空を見つめ続けていた。

愛する女性を妻にする。

それは真実であるはずなのに、どこか虚しさが漂う。和威の心はほんの数日前の藤臣と同じく、虚空を掴むように、必死で腕を伸ばしていた。

欲しいものを手に入れる。手段など関係ない。本当に望んでいるものは力尽くで奪う。一日手に入れたら、誰を傷つけたとしても決して離してはいけない。それは、悪意の連鎖に囚われた美馬家で生きる為の、悲しい手段であつた。

美馬家の呪縛から逃れられない人間、その最たるもののが弥生である。

リムジンが玄関口に横付けされ、弥生は杖をつきながら後部座席に乗り込む。その後ろには和威の姿も見えた。

突如、猛スピードで美馬の正門を抜け、リムジンの後に急停止した車が一台。

その運転席から転げ落ちるように飛び出してきたのは、藤臣の秘书、瀬崎幸次郎であつた。

「美馬会長、お話をあつます」

瀬崎は肩で息をしている。走ってきたのは車だ。それは、いかに彼が興奮状態であるかを示していた。

「瀬崎としましたね。見て判らないのですか？ わたくしはこれから、和威さんの結婚式に出席するのですよ。話は後日聞きましたよう」

そう言ひつと弥生は手で払う仕草をした。

門脇の警備室から駆けつけた警備員が瀬崎の腕を掴もうとする。

「あなたばこ自分が何をしたか判つていらつしやるのですか！？なぜ、美馬の家とは一切関係のない東さん一家まで利用して……。愛実さんもそうだ！ 半世紀以上前に西園寺家の方が何をしたかは知りません。でも、愛実さんには何の関係もない！ 美馬社長もうです。生まれてきたのは彼のせいじゃない！ なのに……いつまで彼を傷つければ氣が済むんだ！」

それは、瀬崎が東恭子から聞いた話を、一晩掛けて探し出しきた真実であった。

／＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

「美馬さんを選んでいたら良かつたのかも知れない。でも、私は石川を愛していました

窓から身を乗り出す恭子を室内に引き摺り込む。

そして瀬崎は、信じられない告白を聞いたのだった。

恭子は生活に困窮して藤臣を頼ってしまった。そして彼の誠意を知るもの……。

人の心は思いどおりに動かせるものではない。どれほど酷い男であっても、不実で父親に相応しくない男であっても、恭子は夫に戻つて欲しいと願っていた。そんな別れた妻の本心を知る石川は、養育費を払うどころか金を無心してきたのだ。

そして先月、恭子は石川から『やり直したい』と言われた。一も二もなく受け入れる恭子に、石川はある条件を突きつける。

『でも借金がある。いや、お前に払ってくれとは言わない。返すアテはあるんだ。もちろん、お前にも協力してもらう必要があるんだけど……』

それは美馬を罠に嵌める協力だつた。

確かに十年前、恭子と逃げたことで石川は職を失い、彼の人生はホワイトカラーから派遣社員に落とされた。愛を選んだと言えば聞こえは良いが、貧しい生活を？愛？の一言で乗り越えられる期間は、そう長くはない。石川は藤臣だけでなく、恭子も、娘の絵美すら恨み始めたのだ。

恭子と別れても、彼の人生が浮上することはなかつた。『あいつのせいで』その思いが人生の錘おもりになつているとは、なかなか気付かないものである。そこに、甘い餌を投げ込まれたら……。

石川はそれに飛びつき、恭子や子供たちをも引っ張り込んだ。

まず、いきなり藤臣に訴えては駄目だ。同意のもとに鑑定などしては、すぐに真実が明らかになる。秘書の瀬崎を信用させ、彼が藤臣に内緒で鑑定に持ち込むようにする必要がある、と。瀬崎は案の定、同じ会社に鑑定を依頼した。

石川の言ったとおり、絵美が藤臣の実子と鑑定されて、恭子は恐ろしくなる。

だが石川は、

『俺たちのせいにはならないから心配するな。鑑定した会社のミスなんだよ。大騒ぎにならないうちに決着はつくからさ。借金を払つて、店でも開ける金を貯つて、家族で遠くに行つてやり直そつぜ』

確かにそうだ。恭子はDNA鑑定に判断を任せただけ、その会社を選んだのは瀬崎である。石川には、藤臣から金を取れ、とは言わっていない。金錢的なものは、石川にその話を持ち込んだ相手とり取りしているようであった。

だが、当初、恭子が仮名で週刊誌に載るだけのはずが、娘の写真まで目の部分を隠してだけで載せられてしまつ。恭子たちはアパートで暮らすことも出来なくなり……。そして絵美は自分の出生を疑い始めたのだ。

『もういいでしょ？ もうお金は受け取つたんでしょう？ 絵美には嘘をつきたくないの。美馬家の人に酷いことを言われたし、実家の親にも迷惑を掛け……私たち、家にも戻れなくなつたけど。でも、美馬社長の……藤臣さんのせいじゃないわ。四年前、あなたが残していつた借金、彼が払つてくれたのよ。お願ひ、彼には幸せになつて欲しいの』

『ああ……判つたよ』

恭子が石川と連絡が取れたのはそれが最後だつた。

娘の名前で石川の戸籍を確認すると、彼はすでに三年前、別の女性と入籍し子供まで生まれていた。そして、恭子が唯一知つていた石川の連絡先、携帯電話は即日解約されたのだった。

「十年前、私が石川と逃げて、私たちの実家は莫大な慰謝料を美馬家に請求されたんです。親には一度と顔を合わせられないほど、迷惑を掛けました。石川も少しでも美馬の息の掛かった会社には、就

職できず……。私、少しでも石川の役に立ちたかった。社長はあなたに成功しているんだから、少しきらい……そう思つて」

石川が姿を消し、恭子はやつと判つたのだ。

自分たち親子は利用されただけ、といつことに。しかも、偽りがあればたら全ての責任は恭子にくる。鑑定を請け負つた会社のミスだと言い切れる彼女ではなかつた。絵美からは本当の父親を教えて欲しい、と言われ。しかも絵美は、自分のせいで離婚したと思つている。

耐え切れず、恭子は藤臣をせついた。いつそ鑑定結果を公式に否定してくれたらいい。新しい生活を始められるお金さえ貰えたら、子供を連れてどこか遠くに逃げよう。そう思つたのだ。

「なのに、美馬さんはそんなことは出来ないとおっしゃつて」

恭子は睡眠薬を飲んでも眠れなくなり、昨夜は、ついつい過剰に飲みすぎてしまつた。

ところが田を覚ました彼女に絵美は言つたのだ。

『美馬社長さんていい人だよ。あたしがいって言つたら、ちゃんとお父さんになつてくれるつて。博之のことも一緒にいって言つてくれたよ。ねえお母さん、これからは幸せになれるね!』

屈託のない絵美の笑顔に、恭子は背筋が凍りついた。取り返しのつかない罪を犯してしまつた、と。

婚約者から藤臣を奪い、藤臣からは仕事を奪つた。真実を知れば、絵美は一度と母親を信じようとしているだけ。

「『めんなさい』『めんなさい』……もう誰とも、生きて会わせる顔はないんです!」

恭子の告白に青褪めたのは瀬崎である。

鑑定を依頼した会社は海外で、美馬家の誰にも知られてはいないはず……。

そのとき、瀬崎は一つの可能性に気が付いた。弁護士に提出した藤臣と一志の親子鑑定書類、社名は伏せたものの担当者のサインは入っていたはずだ。こういった仕事を請け負う会社は、世界にそう多くはない。原本を手にすることが出来る人間であれば、調査することとは金さえあれば容易い。

もしそうであれば、瀬崎はまんまと眼に散まり、藤臣を失脚される側に加担したも同然だ。

「一つだけ確認させてください。絵美さんは、社長の子供ではないんですね？」

感情を殺し、出来るだけ穏やかに問い合わせる。

「…………はー…………」

恭子の返事に、瀬崎は拳を握り締め、目を閉じた。

第78話 悪鬼

瀬崎の叫びは、美馬邸の瀟洒な佇まいを揺るがすほど悲痛に満ちていた。

見送りに出ていた執事の糸井をはじめ、使用人たちもなんとも言い難い表情だ。彼らもおそらく、同じ思いを抱きながら長年勤めて来たのだろう。

六月の生温かい風が、弥生の白くなつた髪を数本靡かせ……。彼女は少し、不快そうな顔をする。

「だからなんですか？」

「……美馬会長……」

小搖るぎもしない弥生の態度に、瀬崎は何も言えない。

「わたくしが何をしたと言つのです？ 他の男性と逃げて、美馬家の顔に泥を塗つたのですよ。慰謝料を請求されて当然ではありますか。愛実さんにとってもそうです。身売りされるほど困つていらしたのでしょうか？ 感謝されこそれ、恨まれる覚えなどありません。藤臣さんは……あんな汚らわしい子供が美馬を名乗るなんて…」

藤臣のことになり、弥生の表情は変わった。
杖を持つ手をわなわなと震わせ、目をぎょろりと剥き、顎をしゃくりながら言葉を続ける。

「あのような下賤な者は、生まれて来なければよかつたのです。愚かな母親と共に死んでくれたらよかつたのに……。藤臣のせいでこの三十年、わたくしは心休まる口がありませんでした。先に夫が死んで、やつとこの家から追い出せると思つた矢先に！ 家も会社も、全部あの女の息子に奪われそうになるとは」

それは瀬崎だけでなく、周囲にいた全員が声を失うほど驚いていた。

「おまけに、夫に似たのでしょうね。娘たちは下半身にだらしがなく。期待を掛けた佐和子は石女いしまずめで……。娘の亭主も孫も、藤臣ひとりに敵わないとは。ああ、情けないこと」

瀬崎は呼吸を整え、なるべく穏やかな声で伝えた。

「美馬会長 すべて、あなたのお子さんでお孫さんだということを、忘れないで頂きたい」

「……わたくしの？」

弥生は驚いたような顔をして、嗄しゃがれた声でフフッと笑った。

「そうそう、わたくしたちに娘が生まれたら？ 愛実？ と名付けよう。そう、あの方はおっしゃつたのですよ。それを 生涯独身でおられたならともかく、若い妻を娶り、孫娘に？ 愛実？ の名前をつけるなんて！ ええ、そうですとも？ 西園寺愛実？ はわたくしのモノ。瀬崎……不満ならお前が買い戻して『ごらんなさい』」

弥生は人生の終盤を迎えた人間だ。たつた三十そこそこの瀬崎が情に訴え、説き伏せられるはずがない。いや、おそらくどんな人間に也不可能だろう。

瀬崎は説得の相手を変えた。

弥生の後方に立ち、暴言を吐く祖母を唾然と見つめる和威に問い合わせる。

「和威様、申し訳ありませんでした。私が間違つておりました」

和威はハツとして瀬崎に顔を向ける。

「美馬社長……藤臣様はこの家を酷く憎んでおられた。でもあの方は、本当は家族のことを第一に考える、優しい方なのです」

恭子の娘が藤臣の実子と判明したとき、それを知った瀬崎は胸が高鳴った。

愛実との出会いは藤臣の凝り固まった憎しみに亀裂を入れたが、溶かすまでは至らなかつた。だが、実の娘であれば……。異父妹を

守れなかつた藤臣は、愛する誰かを守り抜くことを切望しているはずなのだ。

「私は和威様に協力するような真似をしました。知り得た事実に、理性を失つたからです」

唇を噛み締める瀬崎に、和威は尋ねた。

「いつたい、何があつたんですか？ おばあ様が、藤臣さんをよく思つていないので、今に始まつたことじやない。それをなんでこんな日に」

訝しがる和威の手をトントンと叩き、「さ、行きますよ」弥生は何もなかつたように車に乗り込む。

「東恭子さんの娘さんは、社長のお子さんではありませんでした。何者かが東さんの元夫に金を渡し、復縁を希望していた東さんに偽証させたのです」

鑑定を依頼した会社に連絡を取つたといふ、すでに担当者は辞めていた。

直ちに検査書類を確認させ、判明した事実は 。

鑑定結果が、一志と藤臣のものと丸々入れ替わっていたのである。数値が不正操作されているならともかく、丸々となると、故意ではなく過失と取られる可能性が高い。瀬崎の知る弁護士はそう言つた。それだけではない。瀬崎は秘書の立場を利用して、本人の承諾を得ずに入鑑定を依頼した。もちろん、藤臣の名前で、逆に、違法性を追求されるなら瀬崎のほうになる、と。

「一晩では担当者の居所を突き止める」とは出来ませんでした。ですが、必ず見つけ出します。そして、東さんの元夫に金を払つた人間の名前も」

そんな瀬崎に車の中から弥生が言つた。

「おやおや、威勢のよろしいこと。秘書の分際で、それ以上余計な

「…」とをすれば、『家族を泣かせることになりますよ』

弥生の言葉は脅迫にも等しい。瀬崎の実家である小規模農家など、

彼女にかかるべ一捻りであろう。

だが、瀬崎は弥生の言葉を無視し、和威に向かって訴え続けた。

「和威様、社長と連絡が取れないのです。社長は何度も愛実さんを愛していないとおっしゃった。でも、本当は違つたはずです」

『美馬を出る』

藤臣からそつ告げられたとき、瀬崎は驚いた。まさか、これほど劇的に復讐を諦めるとは思つてもいない。そのとき、彼の胸に動搖が走つたのだ。

藤臣から愛する女性を引き離して、本当に良かつたのか？

藤臣は散々女性を振り回し、何人も泣かせてきた。

愛実だけは傷つけないで欲しい。何度も頼む瀬崎に藤臣は、止められるものなら止めてみろ、と言わんばかりの挑発を口にした。瀬崎の本心は、藤臣を止めたかつただけかも知れない。

だが、実子であるなら、その子が不遇な立場にいるなら、父親として負うべき責任があるはずだ。

瀬崎は自分の行動を、その一言で正当化したのだ。

「私は自分が正しいと思うことをしました。でも、今は間違つていたと思います。その責任は取るつもりでいます。どうか和威様…今、愛実さんと結婚することが正しいのかどうか、もう一度考えてみてください！」 どうかっ

瀬崎は警備員により車から引き剥がされ、彼の鼻先でドアは閉まつた。走り去るリムジンの後姿を、やるせない思いで見送る瀬崎であつた。

～*～*～*～*～

一方、西園寺邸でも愛実が出発する直前、ひと波乱起きていた。原因は尚樹である。

「どうして今になつて花婿が替わるんだよ！ そんなの変だらう？ 姉さんは美馬さんが好きなんじゃなかつたのか？」

尚樹にはどうしても納得できないうらし。

淡々と準備を進める愛実の隣で、憤りを露わに姉を責めるのだ。

「いい加減にしなさい、尚樹。子供のあなたには判らないこともあらるのよ。同じ美馬の男性に嫁ぐのだから、大した問題ではないわ」

だが、そんな母の言葉に尚樹は激怒して言い返した。

「あんたは黙つてろよ！」

「まあ！ 母親に向かつてなんて口を聞くんです？」

「父ちゃんが死ぬまで、僕らの面倒をみてくれたのは、入院しておばあ様だ。そのあとは、ずっと姉さんに頼りつ放しだつた。あんたは姉さんに面倒を掛けるだけで、何にもしてないじゃないか！？」

「なんてことを言つの、尚樹さん！ 誰がお腹を痛めて産んであげたと思つてるの？ この私ですよ！」

「産んだだけで母親面はやめてくれ！ 慎也のときによつてたのを聞いたんだ。胸の形が崩れるから母乳は飲まないつて。有名私立のときには授業参観も来たくせに、公立に移つたらまるで無視じやないか？ 慎也の入学式だつて」

「だから公立など反対だったのです。まったく、庶民と同じ学校に通うようになつて、悪い言葉ばかり覚えてきて……」

「それもこれも、全部あなたの

」

「 もう、止めてっ 」

母と尚樹の喧嘩を大声で止めたのは愛実だった。

「尚樹もやめて……お願いだから……慎也が怖がってるじゃない」

愛実はサーモンピンクのワンピース姿だった。

迎えが来るまでの数時間、家族でゆっくり過ごすはずが……。尚樹が花婿交代を知ったせいで、大騒ぎになってしまった。なるべく式場まで気付かないでいてくれたら、そんなふうに願っていたのに。真美は何も言わないが、それでも気持ちちは尚樹と同じらしい。

彼らも、藤臣の隠し子騒動は耳にしており、それが原因でトラブルになったことは察しているようだ。だが、簡単には納得できないのだろう。それほどまでに、弟妹は三人とも藤臣に懐いていた。

「なんだよ、それ。姉さんも思つてるのか？ 同じ美馬の男と結婚するんだから、大して違はないって。和威さんがどんな人か知らないけど……そんな簡単に結婚相手を替えられるものなのか！？ どうして美馬さんじや駄目なんだよ！ あの人は心から姉さんを愛してるって言つてたのに……」

次の瞬間、愛実はソファを倒すような勢いで立ち上がつていた。

「じゃあ、お父さんが残した借金をどうにかしてくれのー？ 借金ばかり増やして、働こうとしないお母さんも。おばあさまの入院費やあなたたちの学費、生活費 どうしたらよかつたのか教えて！ こんな結婚なんて……わたしだつてしたくない。でも、藤臣さんを待ち続けたら……わたしまで迷惑は掛けられないのよー！」

弟たちにこんなことを言うつもりではなかつた。ずっと独りの胸に抱え、我慢し続けるつもりでいたのだ。だが、思いがけず尚樹に

責められ、愛実は張り詰めた心の糸が切れてしまつ。

「これ以上……姉さんにどうしろって言うの？ できるなら逃げ出したいけど、親戚の伯父さんや伯母さんまで巻き込めない……。何もできないくせに、文句ばっかり言わないで…」

溢れる涙で尚樹たちの顔が見えなくなつた。

そして尚樹も、拳を握り締め泣いていた。奥歯を噛み締め、必死で嗚咽を堪えている。真美は愛実に抱きつくり、「ごめんね……お姉ちゃん」涙声でそう呟いた。慎也も、事情が判らないまま、青褪めた顔で今にも泣き出しそうだ。

「僕が……僕と姉さんの歳が反対だつたり……」

尚樹はそう言つたまま、今度は唇を噛み締める。

「「ごめん……」「ごめんね。結婚式だからちょっとナーバスなつてるの。大きな声出しちゃつて」「ごめんね」

愛実はそう言つて尚樹の腕を引き寄せた。

何も出来ない、年端もいかない子供なのは、彼らのせいではないのだ。長女の愛実が頑張るのは当然のこと。ここに至るまで、様々な決断をしたのは彼女自身であった。

「和威さんも優しい人だから。きっと、皆も好きになれると思うわ」「でも、お姉ちゃんが好きなのは美馬さんでしょう？ 美馬さんはどうするの？」

「藤臣さんは娘さんを守らないといけないの。まだ、慎也と変わらない歳だし……お母さんと弟さんと三人でとても大変そだから」

それでも真美は不安そうな顔で、

「美馬さんは娘さんのお母さんと結婚するの？ お姉ちゃんのことはどうでもよくなつたつてこと？」

「違うわ。藤臣さんが誰と結婚するか判らないけど……姉さんがど

うでもよくなつたわけじゃない。親が子供を守るのは当然だもの。
子供のことを一番に考える彼が好きよ」「なつ！」

「だったら待つべきだ！」

そう叫んだのは尚樹だった。

「姉さん、僕らはここを出るよ。何度も言つけど、母さんのことは無視していいんだ。親戚連中だつて、金に目がくらん……自業自得じやないか！　いざとなつたら公的施設もある。僕だつて中学を出たら働いて」

「あなたはそれでいいかも知れない。じゃ、真美と慎也はどうなるの？　家族みんなバラバラになるのよ。それに、おばあさまも。お金が払えなくなつたら、病院は追い出されるわ

「そんなの母さんの責任じやないか！」

「責任がなければ、どうなつてもいいの？　違つでしょ？　大切に思うから守りたいの。手を差し伸べたいって思つのよ。人の心は義務や責任だけでは動かないわ」

愛実は深く息を吸う。

「心配を掛けて、振り回してごめんなさい。すべて姉さんが自分で決めたことだから。覚悟はとうに決まつていたはずなのに、藤臣さんが優しすぎて忘れていたのよ。でも、もう平氣」

弟妹をみつめて愛実は優しく微笑んだ。

「当たり前ですよ。今さらそんな……破談にでもなれば」

入り口に立ち、母はブツブツ言つてゐる。そんな母にも愛実はキッパリと宣言した。

「結婚したら十八歳でもわたしは成人と同等の資格を持ちます。西園寺家の資産はすべてわたしが管理して、お母さん名義ではどんな借金もできないようにしますから。文句があれば、独りでこの家から出て行つてください！」

「なつ！」

絶句する母を真正面から見据える愛実であった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

瀬崎はしばらくの間、玄関前に立ち尽くしていた。為す術を失い、途方に暮れている様子が傍目にもはつきりと判る。そんな彼に大川暁が近づいた。

「勝負あつた、かな？ 弥生ばあさんには誰も敵わないうつてどこか」「勝者のいない、馬鹿げた勝負です」
瀬崎は吐き捨てるように言つ。

その言葉の意味が暁も痛いほど判つた。
どこまで相手を痛めつけても、弥生が満たされることはないだろう。周囲の者を言いなりにさせ、結局、何一つ思いどおりにならなかつたと言い続けて死ぬのだ。一志がそうであつたよ!。

「それでいて、敗者はちゃんといるんだ。妙な話だな」「暁さんは、この件はご存知なかつたんですね」「俺がそれほど悪党に見えるかい？」
軽口を叩く暁に瀬崎は小さく首を振つた。
「結婚式には出席されないのでですか？」
「出席予定だけね。さて、どうなるか。瀬崎くんはどうするつもりなんだ？ 藤臣くんを探す気か？」
「もちろんです。心当たりを回つてみます」
瀬崎は暁に頭を下げ、自分の車に乗り込み走り去つた。

藤臣は昨夜から姿を消している。

(さて、どこに隠れたか……)

暁は初めて会った頃の藤臣を思い出す。傷だらけの少年は、近寄るすべての人間に怯え、威嚇して回っていた。

当時の暁は、父が何を考えて再婚したのかさっぱり判らなかつた。いや、父が再婚するかも知れない、ということは聞いていた。父には十年来の交際相手がいたからだ。今の暁と同じ年の頃に妻を亡くし、それ以降、ずっと付き合つていた女性。ひとり息子が成人したから再婚するのだろうと、暁は単純に考えていた。

ところが、蓋を開けてみたら結婚相手は全くの別人。それも出戻りとはいえ、美馬家の社長令嬢というのに驚きである。

父は家屋敷を売り払い、なんと美馬姓を名乗つて美馬の屋敷で生活を始めたのだ。暁は迷つたが、大学卒業まで世話になることに決める。自分たちとは違う上流階級の暮らしを垣間見たい、そんな浮かれた気分もあつた。

(思えば……馬鹿なことを考えたもんだ)

父がどんな気持ちで思い出の詰まつた家を売り払い、十年も付き合つた女性と別れたのか、彼は何も知らなかつた。そんな自分を思い出し、暁は苦笑いを浮かべながら敷地内の林を抜ける。

彼の目の前に、白い外壁に塗装が済んだばかりの洋館が姿を見せた。まだガラスの入つてない箇所もある。だが、内装工事はだいぶ進んでいた。

吹き抜けの玄関に立ち、暁はぐるりと見回した。

(随分、変わつたな)

この洋館は暁にとつても思い出の場所だ。

今でこそセックスを楽しむようになつた朋美も、大学卒業間近の暁に初めて抱かれたとき、まだ十七歳。暁が美馬邸を追い出されるまで、二人は古い洋館の一部屋で夢中になつて抱き合つた。
愛実のように、？愛し合う二人に乗り越えられないものなどない？そう信じていた時期が、暁や朋美にも確かにあつた。

廊下をまっすぐ進み、中庭を通り抜け、暁は両開きの扉を押し開ける。

「やつぱつ」いか。逃げ場所は相変わらずだな、藤臣

第80話 因果

藤臣は床に座り込んでいた。フランス窓に背中をもたれ掛け、ジツと中空を見つめている。

愛実を連れて来たときより、内装工事はだいぶ進んでいた。今日は結婚式で家人の多くが不在になるため、工事の業者に休みを取りたのだ。だが、明日には再び業者がやって来る。
愛実との思い出に浸るのは、そこが限界だった。

「やあ、暁さん、『きげんよ』。安酒しかありませんが、いかがですか？」

藤臣は国産のウイスキー・ボトルを抱え、暁に振って見せた。

「こんなところでヤケ酒かい？ 様は無いな」

いつもどおり愉快そうな口調だが、実際は藤臣を責めていくようだ。

「君の秘書は必死だつたよ。あの鬼婆と果敢に遣り合つてた。見かけより、肝の据わった男らしいな」

「瀬崎の身の振り方は考えてあるんだが……どうやら、本社に戻らず走り回っているようですね」

藤臣の近くには数本の空ボトルが転がっている。

それを適当に蹴散らしながら、暁は藤臣に近づいた。

「その顔を見ると、秘書くんが血相変えて走り回っている理由は知つている、つてここかな」

暁はニヤリと笑つた。

瀬崎が自分を嵌めるとは思えない。

だが、藤臣を蹴落としたい人間は嫌といつまじかる。そのため、

瀬崎に内緒で別の会社に再鑑定を依頼したのだ。しかし、現存のデータは信用できない。新たにDNAサンプルを採取する必要があり、それにはさすがに藤臣も手間取った。

その再鑑定結果を受け取ったのが昨夜。
勝敗はすでに決した後であった。

「弥生婆さんも、また随分とえげつないやり方をしたもんだ。まあ、鬼婆のすることだからな。どうせお前さんも、最初から信用してなかつたんだろう？」

暁の質問に藤臣は答えなかつた。

絵美が実子であるとは思えない。さりとて鑑定結果を“直感”で無視することはできず……。

弥生はそこも計算していたのだらう。藤臣がわずかでも可能性があれば、我が子を見捨てるのではない、と。

「丸一日あつたんだ。逆にマスク^{マスク}を使つて、鬼婆のやり口を暴露してやれば良かつたんじゃないのか？ 向こうも必死になつて潰しに来るだらうが、正面から遣り合えば、この屋敷から追い出すことだつて」

「もう止めよう、暁さん。美馬を潰す手駒に、これ以上俺を利用しないでくれ」

「人聞きの悪いことを……」

酔つているとは思えない藤臣の冷静な声に、暁は言葉を失う。

「ああ、判つている。俺が勝手にやつてきたことだ。復讐心を燃やして、美馬の全部を手に入れようとした。暁さんはそれぞれに手を貸し、味方だと思わせて、少しづつ奴らの力を削つたんだ。結果的に俺が美馬を潰すと知つていたからだらう。」

藤臣の養父母、佐和子と弘明の結婚は一志が強制したものだつた。弘明の前妻 晓の母は癌を患い、何度も手術と再発を繰り返し、若くして亡くなつた。そのしばらく後からである。弘明が一志の腹心となり、目覚しい働きをするようになつたのは。それは情け容赦ないもので、かつての弘明を知る者から『彼は妻と一緒に良心を埋葬した』といわれたほどだ。

藤臣はその評判を信じ、金と地位を得る為に佐和子と結婚した男と思い込んでいた。

「弘明さんは、関連会社の経理部にいた。そして妻の治療費を捻出するため、会社の金に手をつけたんだ」

藤臣がそう言つた瞬間、曉の顔色が変わつた。

これまでのような半分ふざけた口調が消え、曉は真っ青になり叫んだ。

「二十五年以上前のことだ！ 時効は過ぎてるし、全額完済している。なのに……あの男は、俺の将来を引き合いに出して、父さんを縛り付けたんだ！」

弘明は妻を亡くした後、上司に横領の事実を申し出た。金は何年掛かっても返済する、一人息子の為に自分が服役するわけにはいかない。どうか、警察に被害届を出すのは許して欲しい、と願い出る。一志はそんな弘明を拾い上げた。吸収合併とは名ばかりの会社乗つ取りや暴力団紛いの地上げ。バブルがはじけた後は、リストラ担当として容赦なくクビを切らせた。

『逆らうなら警察に被害届を出す。お前の息子は犯罪者の子供と呼ばれるんだ』

それは全額完済しても同じだった。公訴時効が過ぎた後も、服役は免れても罪は消えない、そう言って一志は弘明に人が嫌がる仕事

を押し付けた。

その最大のものが、佐和子との結婚だらう。

「ちょうどあの頃、父さんは覚悟を決めて、付き合っていた女性と結婚する気だつた。相手も三十代半ばになつていて、妊娠したって聞いてね」

暁には異母妹が一人いる。十四歳と十一歳の少女だ。

弘明は子供たちの母親・市橋みさきと別れることを条件に、一志の命令に応じたという。その点でも、藤臣は弘明を誤解していた。彼が好色な男だから、愛人としてみさきを確保しておきたいのだ、と。

そうでない、と知ったとき、藤臣はいかに自分が一志に毒されたいたかを思い知る。

この世の中には人を利用する悪党と、利用される愚か者の二種類しか存在しないと、本氣で思つていた。

「市橋さんでしたね。彼女は一人で子供を産んで育てると言い姿を消した。弘明さんは同じ苦労するなら、と手元に呼び戻したんだ。二人は愛し合つていたから、苦しくても寄り添つて生きる道を選んだ」

「それもこれもあるのクソ爺のせいだ！ 父さんの気持ちを知つて、俺だけじゃなく、みさきさんまで取り引き材料にしたんだぞ。それだけじゃない、俺が朋美と関係したときだつて」

一志は、暁と朋美の結婚を認めると言い、暁に条件を出した。

暁は承諾しアメリカに渡つたのだ。彼がすべてをクリアして意気揚々と帰国した時、朋美は別の男の妻となり、暁には違う花嫁が用意されていた。

そして、父・弘明を縛つた鎖で今度は暁を繋いだ。

「そもそもの原因は、父さんが罪を犯したせいでと言つんだろうな。だが、最長でも十年の懲役刑に、もう一十五年も服役してるんだぞ！ 美馬という檻に入れられたまま、今度はあの鬼婆だ！ もし信一郎が跡を継げば、きっと父も俺も終身刑になる。その前に藤臣、何としてもお前に継いで貰いたかった。この家を潰すために」

藤臣は暁の中に自分自身を見ていた。

だが、暁は藤臣とは違う。彼は若いうちに朋美と出逢い、二人は不器用ながらも愛し合つてきたのだ。それがたとえ、一志に対する腹いせだとしても。

「だったらもう止めましょ。美馬一志は死んだんだ。長く繋がっていたから、気づかないだけです。もつ、弘明さんや暁さんを繋ぐ鎖はどこにもない。弥生婆さんが欲しいのはこの屋敷だけだ。あの人も結局、憎しみに縛られ、この家で終身刑を送つただけの人間ですよ」

「そうしてすべてを和威に押し付けて、自分は綺麗に退場かい？」
暁は余裕を取り戻したのか、口元に笑みを浮かべた。

だが、一志に対する怒りはそう簡単には鎮まらないようだ。彼は藤臣からウイスキー ボトルを奪い取り、封を切ると直接口を付けて飲み始める。

「恭子のことは氷山の一角なんだ。俺は……悪事を働き過ぎた。どうせ一志と一緒に地獄に墮ちるんだから、ってね。俺も弥生婆さんと変わりない。自分で終身刑を選んだ愚か者だ」

藤臣はグラスにウイスキーを注ぎ込み、口に運んだ。

「和威なら……愛実がついていればきっと、この家を牢獄から家庭に変えてくれる。俺は、愛実に相応しくない。いつ、後ろから刺されるか判らないような男は……」

そこまで言つと藤臣は立ち上がつた。

いくら飲んでも頭の中は冴えたままだが、体はそうでもないらしい。ふらつく足でどうにか真っ直ぐ立ち、暁の胸倉を掴んだ。

暁が手にしたウイスキー ボトルが床に落ち、派手な音を立てて割れる。その芳醇な香りは皮膚に浸透し、飲むより早く酔いが回りそだつた。

「暁さんは、二十歳の頃から朋美に本気だつたんだろう！？　だつたら、グズグズしないで攫つて來い！」

「ならお前も行けよ！　酔つてくだを巻いてる暇があるんなら、式場から花嫁を搔つ攫つて來たらどうなんだ！？」

「もう遅い。……もつと早く愛実に逢つて、まともな生き方をしたかつた。俺の人生でただ一つの善行は、愛実を抱かなかつたことだ

いつそ抱いていたら、愛実のすべてを自分のものにしていたら未来は変わっていたかも知れない。

藤臣は少しだけ、たつた一つの善行を悔いた。

ふと気づけば、部屋の中に暁はいなかつた。裏庭は夜の闇に包まれ、美馬邸そのものが死んだように眠つて見える。

藤臣は頭を振りつつ起き上がつた。睡眠不足と酔いで、気を失うように眠つていたらしい。時計を見るとして十一時を回つてゐる。深夜といつてふさわしい時間であつた。

（式も披露宴も終わつた、か。一人は今いる……）

あられもない愛実の姿を想像して、藤臣は再びボトルに手を伸ばした。

しかし、周囲に洒らしきものは一切ない。どうやら、酔つて倒れこんだ彼を見かねて、暁が始末して行つたようだ。

「つたく、余計なことをしゃがつて！」

奥歯を噛み締め、藤臣はひとりじめた。

今日くらい、正体不明になるまで酔わなくてはやつてられない。何度も……何度も結婚式をぶち壊しに行こうかと考えた。だが、壊してどうなるのだろう？

戸惑いながらも藤臣は“我が子”を選んだ。実際のところ、血の繫がつた娘ではなかつた、というのは結果論である。全部は選べないと言われた時、藤臣は何をおいても愛実の手を取ることが出来なかつた。

そして愛実も……。

家族を放り出し、藤臣を信じて待つとは言つてはくれなかつたのだ。

(違つた……俺が都合のいいことしか言わず、綺麗な言葉だけで、愛実をごまかそうとしたからだ)

すべてを告げて待つて欲しいと言えば、愛実なら信じて許してくれるだろう。なのに、隠そうとした。絵美が実子である可能性を隠し、嘘の上に嘘を塗り、どんどん真実を見えなくしたのだ。愛実が混乱して自ら答えを出しても仕方ない。

拳句の果てに逃げ出した。

暁の言ったとおり、絵美が実子でないと知ったとき、戦う意思があれば打てる手はあつたのかも知れない。だが、パンドラの箱を開けてしまった藤臣の中に、残っていたのは“希望”ではなく“絶望”だった。

価値のないものを追い続け、意味のない人生を送つて來た。三十年間積み上げた恨みは汚泥となり、藤臣の中に蓄積している。それらすべてを洗い流し、人生をやり直そうという気力など、どこを探しても残つてはいなかつた。

それでも、明日には立ち上がらなければならない。

せめて表向きだけでも。愛実と和威に祝いの言葉を伝え、何も気にしていない素振りをしなければ。恭子一家の今後も考える責任が藤臣にある。弥生は情け容赦なく、十歳の少女をも巻き込んだ。絵美自身が大人になり、母親の嘘を理解できるようになるまで、藤臣は父親の役を降りるつもりはなかつた。

過去は消せなくとも、未来までも土足で汚しながら生きて行く必要はない。今は無理でも、せめていつか……。愛実が困つたときに、今度こそ支えられるような男になりたい。

(でも今夜は……今夜だけはカンベンしてくれ)

藤臣は立ち上ると寝室を出た。中庭の廊下を通り抜け、リビン

グに足を踏み入れる。

サイドボードに随分昔から置かれたままのアルコールが残つていたはずだ。この際、ブランデーでもワインでもいい。とりあえず酔っ払つて、自分の無様さ、不甲斐なさを忘れたかった。

カタン……。

物音が玄関のほうから聞こえた気がした。

この洋館は母屋から離れている。正門より裏門に近いが、警備システムから考えて、泥棒が入り込める場所ではなかつた。ましてや改装中の館に貴重品が置かれているはずがないだろう。

(糸井か？ それとも、暁さんが戻つて来たのか？)

藤臣はリビングから玄関に向かう廊下を進んだ。
螺旋階段の向こう、吹き抜けのエントランスホールに白い影が浮かぶ。彼は目を細めながらゆっくりと近づいた。
ドーム状のガラス屋根から月の光が射し込み、ホールの中央に立つ、たつたひとりに降り注ぐ。だが、白く見えたのは月光のせいだけではなかつた。彼女は純白のウェディングドレスを着て、佇んでいるのだ。

決してそこにいるはずのない女性。

藤臣はそれが幻でも構わないと思った。おそらく、自分で思つより酔つているのだろう。幻覚か……それとも夢の中か。

ほとんど工事の終わった螺旋階段にもたれ掛かり、彼は一言口にする。

「とても綺麗だ……愛実……愛してるよ」

藤臣自身が選び、彼のために着てくれるはずだったドレスに、愛

実は身を包んでいた。その例えようもなく楚々として愛らしげな姿に胸が沸き立つ。

何としても手に入れるため、もう少し頑張るべきだったのかも知れない。和威を蹴落とし、弥生と刺し違えてでも。だがもう……遅い。

明日の朝、立ち上がるだけで精一杯だ。弥生や他の誰かと戦う力が、今の藤臣にはどこを探しても見つからなかつた。愛実を守ることは、もう……。

「諦め、田を開いた瞬間、甘く優しい声が耳に響いた。

「わたしも……愛しています、藤臣さん」

／＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

時間は九時間近く巻き戻る。

結婚式は工国ホテルのチャペルで行われる予定だった。正午に挙式、十三時から披露宴の予定が、花婿の変更でドタバタになってしまい……。挙式の準備が整つたのが、十六時近くになつてしまつ。弥生が言つていたように、簡単に右から左に移せるものではないのだ、と愛実はため息をついた。

いや、正確に言えば弥生は命じるだけだ。彼女にとつては簡単なことに違ひない。

そんな中、前田に確認したはずのウエディングドレスに問題が起つたのである。

愛実が花嫁控え室に入り、身支度を整えようとした時、それは発覚した。用意されていたのは、藤臣が選んだドレスだったのだ。

ブライズ・サロン

(和威さんと結婚するのに、藤臣さんの選んだドレスなんて……)

担当者はほんの一時間前、ドレスを元に戻して欲しいと美馬家の
人間から連絡が入ったといつ。再度変更となれば、また一時間ほど
待つていただくことになる、と。

もうすでに何時間もお客様を待たせている。これ以上、時間を取
ることは出来なかつた。

式の参列者はだいぶ少なくなつたといつ。理由は判らないが、も
うどうでもいい、と思つ自分がいることに愛実は何とも思わなくな
つていた。

花嫁付添い人と言われる担当者が、愛実をチャペルの前まで案内
してくれた。普段なら笑顔で言えるはずの礼も口に出て来ない。そ
れは花嫁の緊張とは少し違うものであった。

和威はすでに扉の前で立つてゐる。だがその顔は、とても人生最
良の日を迎えた花婿のものとは思えず……。その時、柱の鏡に映る
花嫁の顔に愛実はゾッとしたのである。
彼女は和威と同じ顔色だつた。

(どうしてこのドレスなの？　どうして今、これを着なくちゃなら
ないの？)

愛実は浮かび上がる涙を必死で堪える。
自分で決めたことだ。他に手段はなかつたのだから。そう思つて
落ち着いたとした。ところが。

(本当に？　本当になかつたの？)

愛実の中に潜む何かが、心の不安を煽り立てる。

愛だけでは乗り越えられない。そのことを愛実は学んだはずなのだ。

(そうして六十年後も恨み続けるの？ 弥生さまのよつと)

弥生の姿が自分に重なり、愛実は全身が震えた。

この先の人生、辛いこと・苦しいこと・悲しいことがあるたびに、すべて弥生と美馬家のせいにし続けるのだろうか？ と。

愛実の目の前に、金色の装飾を施された豪華な扉があった。

藤臣との結婚式では弘明が愛実の父親代わりとなり、バージンロードを歩いてくれる予定だった。しかし、和威とは最初から一人で入場することになったのだ。二人で腕を組み、新しい人生を始める証に。

だが、いつまで経つても、和威は愛実と腕を組もうとしない。

式場の担当者が額に汗を浮かべつつ和威にソッと耳打ちするが……。彼は唇を噛み締め、扉を睨んだまま微動だにしないのだ。

辺りに、メンデルスゾーンの結婚行進曲が鳴り響いた。ゆっくりと扉が開く。

次の瞬間、和威の唇が切れ、白いフロックコートの襟に赤い血が滴り落ち……。

「和威さんっ！ 何をなさつてるんですか？」

血の色にハツとして愛実は声を上げた。
ハンカチを探すが、ウェディングドレス姿で持っているはずがない。花嫁付添い人の女性が慌ててハンカチを差し出した。
そのとき、和威の頬に涙が伝った。

「和威……さん？」

「……助けて……くれ。本当は判つているんだ。でも……逃げられない……」

ウェディングマーチが鳴り響く中、愛実と周囲の人間にだけ聞こえる声で和威は呟く。

「おばあ様のやつていることは、人の心を踏み躡る行為だと。不幸の連鎖だと判つていて……僕には断ち切る勇気がない」

和威は両手を組んでいた。まるで神に祈るよつて。その爪先は肌に食い込み、力を入れ過ぎて白くなっている。

そして彼の声は、水に溺れながら、懸命に助けを求める叫びに聞こえたのだ。

出入り口に程近い辺りから、ガヤガヤとざわめきが広がる。声は聞こえないまでも、和威の異変を察した数人の列席者が騒ぎ始めたようだ。

係員も相手が一般の客であれば、テキパキと判断して動いたのか知らない。だが、今回の挙式披露宴に関して美馬家に振り回され放しの彼らである。それでも状況を考え、花嫁には充分に気を使

つっていた。その分、花婿の挙動にまでは注意がいかなかつたとして
も仕方がないだろう。

全く歩き出す気配のない新郎新婦に、音楽の担当者も気づいたら
しい。ウェディングマーチがピタリと止まり、やわめきが一層大き
くなつた。

「和威さん！ あなたはいつたい何をしてこるのです。これ以上恥
を搔かすようなら、わたくしにも考えがありますよ…」

杖をつけ、バージンロードを逆に歩いてきたのは弥生である。
関係者は困ったような顔をしているが、彼女に意見する者など、
この場に居ようはずがない。

そんな弥生を恨めしそうに睨み、和威は精一杯の抵抗を見せた。

「おばあ様が藤臣さんを罷にはめたんだ。藤臣さんの子供じゃない
のを承知で、東さんまで騙して……。この隠し子騒動を仕組んだの
は、おばあ様なんだ！」

愛実の胸を様々な思いがよぎる。

もし、和威の言つことが真実なら、藤臣はどれほど落ち込んでい
るだろう。やつと無条件に愛情を注げる対象を見つけたというのに。
それが偽りだと知れば……。

手にした白バラとカサブランカのブーケを愛実は力一杯握り締め
る。

一方で、弥生は周囲の好奇に満ちた視線を跳ね返すかのように、
平然と口を開いた。

「それがどうしたと言うのです？ 種を撒いたのは藤臣さんではあ
りませんか。わたくしは何も強制しておりませんよ。逃げ出した藤

臣さんに代わり、和威さんとの結婚を提案いたしました。喜んで応じたのは愛実さんなのですから」

愛実は否定したかった。だが……弥生の言葉は足りないだけで間違つてはいないので。

和威も顔を背けただけで、一言も言い返せない。そんな彼を追い詰めるように、弥生は言葉を足した。

「嫌なら構いません。わたくしの孫は他にもおります。愛実さんは信一郎さんか宏志さんを選んで頂きましょう」「そ、そんなわたしは……」

愛実は上手く言葉が出ない。

「あらあら、ご親戚になると思って、色々業務提携が済んでおりますのに。でも、愛実さんがお嫌なら仕方ありませんね。貸し付けた資金の返済方法は、お身内の方と話し合つてくださいな」

弥生の背後で母方の親戚が青ざめるのが見える。愛実の母も同様だ。

「ああ、契約破棄の慰謝料は、和威さんが婚約を破棄した慰謝料と相殺でよろしいでしょ。わたくしも鬼ではありませんからね」

弥生は勝ち誇ったような笑みを浮かべ、愛実の横を通り過ぎようとする。弥生を支える加奈子も同様だ。一度は諦めたものの、我が家息子たちに勝機が出てきたことを知り、喜びに頬が緩んでいる。

「待つてください 判りました。このまま結婚式を続行してください。我が家を言って申し訳ありませんでした」

それは和威だった。

機械的な声で謝罪し、結婚式を続けたいといつ。それが本心でないのは誰の目にも明らかである。

和威は知っているのだ。藤臣か瀬崎が話したのだろう。信一郎が愛実にしようとしたことを。宏志の破廉恥な行為も聞いたのかも知れない。

だが『助けてくれ』と言つた和威の横顔が、愛実の瞳に焼きついで消えない。

そして……愛実は感じ続けた疑問を、弥生にぶつけたのである。

「弥生さま……わたしは藤臣さんに言いました。『おじい様たちの愛情をお金に替えて、踏み躡るような真似は出来ない。お金で心は売れない』と」

愛実がその思いを違えたことは一度もない。

藤臣が好きだから、結婚を承諾した。彼が望むなら、役に立ちたいと願つたのだ。お金で売り渡した心ではない。援助を受けたのは事実だが、それだけは決して違う。

婚約破棄を決めたのも、愛実と絵美の間で苦しむ藤臣を見たくなかつたからだ。藤臣は決して子供を見捨てない。もし、愛人であつた長瀬久美子が子供を産むことを選んでいたら……我が子でないと判つた後も、彼は子供のために久美子を助けただろう。そんな藤臣だから愛した。

そして、

「和威さんは……わたしが夫として愛せるようになるまで待つと言つて下さいました。そしてわたしの為に頑張る、そう仰つたんです」「和威の気持ちに応えたいと思った。

身を焦がすような激しい愛情だけでなく、世の中には、穏やかな想いで結ばれた夫婦もいる。今は無理でもいつかは。」

だがそれは、和威の本心ではなかつたのだ。

愛実を思う気持ちに偽りはないのだろう。だが、こんな形で愛実を手に入れ、美馬家と共に全てを背負つて立つなど、和威は考えてもいなかつた。

「弥生さまは、誰のために、何のために、わたしを相続人になされたのですか？ 祖父に対する想いが本物だつたと仰るのなら、わたくしやお孫さんたちを駒のように扱うのはやめて下さい。どんな業務提携を結び、借用証を交わしたのは知りませんが……わたしとは関係なく、正当な取引をして下さい」

愛実の毅然とした態度に弥生は歎を齧めた。

長い年月、彼女に真っ向から逆らう人間などいなかつたに違いない。

「人聞きの悪いことを言わないでちょうどいい。取引は正当なものですよ。弁護士に任せたのですからね。わたくしはあなた方一家を助けようとしただけです。感謝されこそすれ……」

「本当にそう思っていらっしゃいますか？」

「どういう意味です？」

弥生は田を細め愛実に聞き直す。

「だったらどうして、実の孫である和威さんの心を平氣で傷つけるんですか？ どうして、こんなに苦しそうな和威さんを見て、笑つていられるんです？ 本当に、少しでもおじい様のことを想つてくれたなら……これ以上、誰かの心を踏み躡らないで下さい！」

和威を助けたいと思つた。

愛実が初めて美馬邸を訪れたとき、緊張する彼女に朴訥でも誠実に話しかけ、笑わせようとしてくれた優しい人なのだ。愛実と藤臣の関係を誤解し、不実な藤臣を責めてくれたのも和威だつた。

だが、鋼の神経をした弥生に愛実の願いなど届くはずもなく……。

弥生は鼻で笑うと、

「お話になりませんね。親のいない和威さんや藤臣さんに充分な物を与え、教育を受けさせてやつたのはわたくしですよ。後継者にし

ようところのに、何が不満なのか。あなたもそうですよ、「
その目は冷たく、愛実の心臓を凍りつかせるように鈍く光る。

次の瞬間、愛実の母が飛び出してきて娘の頬を打つた。
派手な音がチャペルに響き、「も、申し訳ありません。娘には
私から」母は信じられないほど頭を下げ、愛実にも詫びるように言
う。

「嫌です！わたしは間違ったことは言ひません。愛情も幸せも、
お金や権力じゃ絶対に買えない！ そのことは、弥生さまが一番ご
存知じゃないですか！？」違うと仰るなり、弥生さまが祖父を愛し
ていたというのは嘘です。わたしたちを助けようとした、といふ言
葉も。誰かのためじやなく、それは

「お黙りなさい！！」

弥生は田を剥き、怒りに任せて杖を振り上げた！

愛実と弥生の間に割つて入つたのは和威だった。

「 もひ、やめて下せ。 おばあ様、両親に捨てられた僕を面倒みてくれてありがとうございました。僕も美馬を出ます。愛実さん、藤臣さんのところに行ひつけ！」

和威から手を差し伸べられ、愛実は迷つた。藤臣の手を放すと決めたのは彼女自身だ。いまさら……そんな思いが胸を塞ぐ。追い討ちをかけるように母は愛実の腕にしがみつき、泣き声を口にした。

「 愛実さん！ まさか、母さんたちを見捨てて行つたりしないわよね？ こうなつたのは全てあなたのせいなのよ。あなたが結婚するなんて言い出したから……」

「 いい加減にしろよ！ 誰でもいいから美馬の人間と結婚しろって言つたんじやないか！？ 姉さんは美馬さんが……藤臣さんが好きだつたんだ。それなのに」

弟の尚樹が母を抑え、悔しそうな声を上げた。

「 お姉ちゃん、あたしたちアパート暮らしでいいよ。中学卒業したら働きし、カツブラーーメンだつて慎也と半分こでいい。だから、嫌な人と結婚したりしないで！」

真美も必死になつて叫ぶ。

愛実はブーケを床に置くと、走りやすこよひにドレスの裾をたくし上げ、弟たちに答えた。

「 もひ一度、藤臣さんに頼んでくるわ。『わたしたちを助けて下さい』って」

違うホテルのチャペルで藤臣は言ってくれた。

助けてくれる人間は、私には一人もいなかつたからね。だか
ら、君を助けたい。

婚約発表のときも、

彼女なら赤貧にも耐えてくれるでしょう。私も後顧の憂いなく仕事に心血が注げますよ。

大勢の前で愛実を庇つてくれたのだ。

絵美が実子でなく
恭子とやう真似」ことを考えずに済むな!」……

いまさら、と藤臣に言われたとしても、愛実から放した手なら、自分から追いかけて行かなくては。その思いが愛実に勇気をくれた。

「無駄ですよ。最早あの男に、僅かな力も残っているものですか。和威さんも、愚か者の真似がしたいと言うのですね。情けないこと」振り上げた杖を和威に押さえられ、仕方なしに下ろしたものの……弥生の形相は鬼のように歪んでいる。弥生は憎しみを露わにし、愛実に侮蔑の眼差しを向けた。だが、強気な言葉とは裏腹に、皺だらけの手はぶるぶると震える。

「力があつてもなくとも、わたしは藤田さんが好きです。お母さん、ごめんなさい。尚樹、皆をお願いっ！」

愛実は勢いをつけて頭を下げる。駆け出した。

卷之三

せめてドレスを脱いでからと、いう愛実を、和威は引き止めた。

「色々うるさい連中に捕まつたら逃げ出せなくなる。とりあえず、

このホテルを出てから考えよう」

確かに、親戚たちに泣きつかれたら、それでも振り切れるかどうか判らない。愛実は頷き、和威に付いて行くことにした。

十分後、二人はまだホテルの中にいた。ホテルの入り口付近にマスコミが集中しており、出るに出られないのだ。こういう時に機転の利く側近や秘書など、和威にいるはずもなく。

「愛実さん、僕が彼らを引き付ける。その間にタクシーでここを離れるんだ。まず、瀬崎さんに連絡を取れば……きっとどうにかしてくれると思う」

和威はそんなことを言いながら、愛実に自分の財布と携帯電話を押し付けた。

「そんな……和威さんだけ残つたら、皆さんになんて言われるか」「藤臣さんは多分、今日明日にも東京から出て行く。ひょっとしたら、日本からもいなくなるかも……。子供のことも知っているのかどうか判らない。瀬崎さんも必死で探していたから」

和威はギュッと愛実の手を握る。

「嬉しかった。僕を庇つておばあ様に歯向かつてくれたのは、君だけだ。助けてくれて、ありがとう。だから、今度は僕が助けたい」

思えば、和威は一度も愛実を『愛してる』とは言わなかつた。

愛実はそんなことを考えながら、

「わたし、藤臣さんを置いて逃げたりしないって約束したんです。だから、彼が何もかも失つたなら、わたしは彼の傍に行かない……和威さん、ごめんなさい」

愛実の顔を知っている従業員が彼女をそつと裏から逃がしてくれ

た。

出たところにタクシーが待っている、と言われ外に出る。しかし、連絡が上手く取れていなか、タクシーはどこにもいない。焦る愛実の前に一台の車が停まった。

「早く乗つて」

軽四自動車を運転しているのは藤臣の秘書、奥村由佳であった。

「あの、どうして？」

「いいから、早く」

後部座席に乗り込み、ホテルから離れるまで愛実は身を隠していた。

由佳は花婿交代を聞いてすぐ、別の重役秘書を命じられたという。藤臣は自分に付いていた人間が降格や解雇されないよう、全て手配を済ませていた。おそらく事前に、自分の立場が危なくなつた時のことを見越して準備していたのだろう、と由佳は言つ。

「あの、どうしてここに？、どうして、わたしを助けて下さったんですか？」

「あんなに自信満々に？理想は捨てない？？後悔しない？って言ってた世間知らずのお姫様の顔を見てみたいと思つて。どんな顔をして、金の為に他の男と結婚するのかな？ つてね」

由佳は相変わらず隙のないスースイ姿である。

「専務のことだから、今更、新しい女のベッドに飛び込んでるかもよ。あのルックスならホストも出来そうよね。ま、性格的に無理だろうけど」

クスクス笑いながら由佳は愛実をからかつてゐるようだ。

愛実は不安を抱きながらも、

「もう一度と、そんないい加減なことはしないと約束してくれました！ だから、わたしは信じます」

ドレスを握り締め、自分に言い聞かせるよう語氣を強めたのだが

た。

「……も黙目ね」

まず着替えようと愛実の実家に戻つたのだが、結婚式の中止が知れ渡つたのか、マスクミに囲まれていた。車に乗つたまま、遠巻きに見ただけで一人はその場を離れる。意表をつく形で美馬邸に戻ろうとしたが、やはりそう甘くはないようだ。

時間はどんどん過ぎて行き、滞滯に巻き込まれ思いどおりに進まなくなる。

愛実を車に乗せたまま本社ビル近くの駐車場に停め、由佳は瀬崎を探しに行つたのだった。

まさか、一度近づき離れた美馬邸に藤臣がいるとは思はずもなく……。

薄暗い駐車場、ルームミラーに映る愛実の顔は疲れ果てて見えた。和威はどうなつただろうか。自分のせいで尚樹が親戚たちに責められてはいいのか。思いも掛けず由佳に助けられここまで来たが、この先、もし藤臣に会えなかつたら、どうすればいいのだろう。

和威に渡された携帯電話を握り締め、愛実は途方に暮れる。

そのとき、携帯が小さなメロディを奏でながら、小刻みに震えた。

第84話 無垢

『わたしも……愛しています、藤田さん』

その声はあまりにも現実的で、藤田は咄嗟に手を見開いた。酔いと疲労に震んだ手を一~三度瞬かせる。それでも消えない愛実の姿を凝視しながら、藤田は手を押し出した。

「い……つみ？ 愛実、なのか？」

「…………はー…………」

「どうしてここに？ いや、和威は……結婚式はどうしたんだ？ なんでそんな姿で」

藤田自身、何を尋ねたいのかよく判らない。だが、一つ思い当たることが浮かんだ。

「絵美のこと……聞いたんだな？」

愛実はゆっくりと頷く。

瀬崎がホテルにまで押しかけ愛実に話したのか、それとも、瀬崎から聞いた和威が……そんなふつに考え込む藤田に愛実から口を開いた。

「和威さんが、すべて弥生ちゃんの企みだつたと教えて下さいました」「それで？ 事実が判つても事態は変わらない。俺がろくでなしなのは、今に始まつたことじやないからな」

藤田は愛実に飛びつきやうになる気持ちを抑え、自嘲気味に言葉を繋ぐ。

「君の」ともそعدだ。」この屋敷を、弥生婆さんと揉める」となく手に入れようと近づいた。憎かつたんだ。憎くて悔しくて、全てをこの手に納め、叩き壊してやりたかった。そんなことに巻き込むために、『愛してる』なんて君を騙した悪党なんだよ、俺は

どちらかを諦めれば、美馬グループ内の力を失わずに済んだ。だが、藤臣を父と信じる絵美を、突き放すことができなかつた。同時に、愛実も諦めたくなかったのだ。ぎりぎりまで悩み、迷つた挙句、弥生に降参して和威に後を託すことで妥協せざるを得なかつた。

藤臣の迷いが愛実にも伝わり、結果的に辛い選択をさせてしまつたのである。

しかも“復讐心”を手放したことで、今の藤臣はスクラップ同然だ。

なのにそんな藤臣を、愛実はキラキラした瞳で見上げている。

「藤臣さん……あなたを待てなくて、『めんなさい！ 愛してるから、これ以上迷惑を掛けたらダメだつて思つて。その結果、和威さんまで苦しめることになつて……』

「和威を……苦しめる？」

愛実に言われて初めて、藤臣も気がついた。

藤臣が憎むことで美馬家に囚われていたように、和威もまた、弥生に従わなければならない、その思いに縛られていたのだ。愛実に対する芽生えたばかりの恋情に、和威は自分を殺して弥生に従おうとした。だが殺しきれず……土壇場で愛実に助けを求めたといつ。

「でも、どうしてこの場所が？」

「暁さんが電話で教えてくれました。周りをうろついていたマスク

「も、魔法を使ったみたいに追い払ってくれて……。」今まで送ってくれたのは秘書の奥村さんです」

暁が手を回したのは納得できたが、まさか由佳まで愛実に手を貸すとは思わなかつた。

その一方で、瀬崎は何処に行つたのだろう。由佳が本社で瀬崎の行く先を当たつたが、連絡が取れなかつたといつ。我慢や忍耐力は藤臣の倍もあるが、要領が悪すぎる。藤臣は頭を抱えた。

「あの……藤臣さん、もう一度わたしたちを助けて下さい……お願
いします」

それは、ほんの三日前と変わらぬ無垢な眼差しだつた。
藤臣はそんな愛実を見つめながら軽く首を振る。

「君は、正氣か？」
「あの……」「俺は、俺は、君が和威との結婚を望むから、奴に全てを譲つて手放したんだ！　もう何も残つてない。この上、どうやって君を助けろと言つんだつー？」

藤臣の怒声は洋館内の空気を震撼させた。

卑怯な言い方は百も承知だ。愛実にやうしてくれと頼まれたわけじゃない。誰も……いや、弥生以外は、藤臣が実権を手放すことを見んでなどいなかつた。それでも、憎しみと共に全てを放棄したかったのは彼自身だ。
だからこそ、藤臣にはもう、誰かを守つて立ち上がることなどできない。

「和威のところまで一緒に行つてやる。君は弟妹を守りたいんだろ

う？ それが出来るのは俺じゃない。俺は……」

「じゃ、藤臣さんはわたしに助けてます。わたしには弟たちがいるけど……でも、一生懸命頑張りますから」

「……君は、何を言つてるんだ？」

「暁さんが教えてくれたんです。藤臣さんが、わたしとおもつと早く逢いたかったつて。でも、わたしは今で良かったと思つています。だって、そんな小さい頃にお逢いしても、藤臣さんのお嫁さんにはなれないでしよう？」

愛実は首を傾げてふわりと微笑む。

「いや、そんなことじやなくて」

「わたし、藤臣さんのことを信じています。藤臣さんから離れなきやならない理由がなくなつたのに、離れるのはイヤです！」

「だから……俺には絵美だけじやない。心当たりだけなら山のようにならぬ」

に

余計なことまで口立て、藤臣は舌打ちした。愛実相手になじつも正直になります。

その時、愛実は藤臣の近くまで駆け寄つた。

そしてようやく、藤臣の目にも真実が映り始めた。純白で傷一つなかつたドレスは、間近で見るとかなり汚れ、しわくちゃになつてゐる。所々、ほつれや破れが見えて……それは愛実の表情と同じだつた。

遠目には変わらぬ笑みが、近寄ると見るからに憔悴の色を纏つている。薔薇色の頬が青白く痩け、眼の下の隈も痛々しい。それはとても十八歳の少女とも、結婚式を終えた花嫁のものとも思えなかつた。

「でも過去でしょ？ 今も、未来も、わたしだけですよね？」
「日も早く結婚して、藤臣さんの子供が欲しい。そうしたら……子供が可哀想だから、別れたくないって言えるもの」

疲れきった顔で……それでも愛実は胸を張り、藤臣を正面から見つめて笑い掛ける。

「大丈夫です！わたし、貧乏はへっちゃらですから。高校は辞めて働きます。入院費用が足りなくなったら、おばあさまは家に引き取つて、姉弟で面倒をみます！ 苦しくても、お互に助け合つたら、きっと幸せになれると思うんです」

愛実の声が震えだし、わずかに口元が歪んだ。

「藤臣さん もう一度、愛してるって言つて下さい。あの時……病院で絵美ちゃんに手を差し伸べたように。わたしにも、その手を下さい。そうしたら……藤臣さんのことはわたしが守ります」

愛実はそつと手を伸ばした。

微笑んだままの瞳から光が零れ落ちる。

ひと粒……ふた粒……光はポロポロ流れ落ち、闇に吸い込まれるように消えていく。

怖い 。

藤臣はそんな思いに囚われ、条件反射のように後退し、愛実に背を向けてしまう。

一度だつて、欲しいものを手に入れたことがなかつた。大切なものを守れたこともない。いつも何かに怯え、半分以上諦めて生きてきた。諦めることには慣れている。最初から求めなければいいのだ。愛実の手を取らなければいい。

あれほど激しく藤臣を突き動かした“憎悪”ですら消え果て 。

何がそれを消したのか、胸に浮かび掛けたそのとき、藤田の背中に愛実の手が触れた。一瞬で背筋を電流が走り抜け、全身が硬直する。

「わたしのせい……ごめんなさい。和威さんは……弥生さまから離れると仰つてました。それと、信一郎さんや宏志さんとは結婚できません。あんなに大切にして頂いたのに……藤田さんの望みどおりの愛し方ができなくてごめんなさい。迷惑ばかり掛けて……どんなに謝つても許して貰えないかも知れないけど……。幸せになつて下さい。わたしはずっと藤田さんのこと、信じています……」

「ら

背中で震える吐息が……愛を湛えた温もりが……

彼の人生から離れようとした瞬間、藤田は愛実の手を掴んだ！

第84話 無垢（後書き）

御堂です。

長々とご覧いただきありがとうございました。
残り2話となりました。

最後まで、よろしくお願ひいたします。

第85話 求婚

「君のせいだ。何もかも。正しいと思つてきた全てを……愛実、君が覆していく」

「『めんなさい』『めんなさい』、わたし

藤臣の手にあると思い続けた復讐といつぱの正義も、この世で“愛”と名前が付くものは全て有償だという真実も、愛実は粉々に打ち砕いてくれた。

今、彼の手の中にあるのは、折れそつなほど細い彼女の腕だけ……。

みづやく掴んだ“愛”を彼は壊れ物を扱つように抱き寄せた。

「藤臣さん？ あの」

「俺は君のせいで全てを失つた。三十年間積み上げてきた全てを投げ出したんだ。ごめんなさい、の言葉だけで済むと思つた」「ごめんな……さ」

藤臣は愛実の声を強引に奪う。

それは祭壇の前で交わすはずだった誓いの口づけにも等しい。焦げ付くような感情が少しづつ癒されていく。もうどうなつてもいい、と投げ出したはずの未来が、再び彼の前に広がり始める。

「駄目だ。許さない。何があつても君を自由になどしてやるものか

！」

愛実を抱きしめ、解けかけた髪に顔を埋めて呻いた。

我ながら支離滅裂だ。まるで脅迫するような口調である。これで

は愛実を怯えさせてしまつ。そんな思いが藤臣の頭を掠めた。

しかし、本当の愛など何と言つて伝えたらいいのだろう。言葉にした瞬間、全てが消えてしまいそうだ。

戸惑う藤臣より先に、愛実が口を開いた。

「それって、藤臣さんの傍にいていいんですよね？ よかつた……

嬉しい

「う、うれしい？ それでいいのか？ 僕が、怖くないのか？」
「どうして怖いんですか？ 藤臣さんはこんなに優しくて温かいのに。いつだって、わたしが苦しくないよう、それでいて強く抱きしめてくれたから」

藤臣は恐る恐る尋ねた。

「俺はずっと君を騙していたのに？」

胸の中で愛実は無言のまま小さく首を振る。

「愛していると嘘をついていたんだぞ」

「わたしのこと……愛してないんですか？」

「いや、いや、愛してる。今はそう思つ。でもあの時は……」

愛実の身体田当てだった。彼女の同意を得る為に、愛の言葉を利
用し、本物の結婚にしようとしたのだ。

「あの……何か違うんですか？ “愛してる”は“愛してる”でし
ょう？」

その言葉に、藤臣は氣づかされた。

懸命に抵抗していたのは自分だけだった、と。心は眞の世に白旗
を振つている。

「いや、違わない。ああ、判つたよ。もう降参だ。やつぱり、物分
りのいい大人にはなれそうにない。君を俺の人生に引きずり込むこ
とに決めた」

「藤臣さ……あやつ！」

酔いも疲労も一気に藤臣の体から抜けた。

新たな五感が呼び覚まれ、全身に力が漲り始める。その勢いを借りて、愛実を抱き上げたのだ。

「その代わり　俺が守つてやる。だから、俺のものになれ

愛実は彼にしがみ付いたまま頷く。

（善行なんぞクソ食らえだ！　十八歳だろうが、この場で抱いてやる…）

最初からそうしていればよかつたのだ。自分の女にしていれば、どんな邪魔が入ったとしても、手放そなんて考えることはなかつただろ？　たとえ愛実が身を引こうとしても、鎖に繋いででも引き止めたはずだつた。

捉えた花嫁をしっかりと腕に抱き、藤臣は廊下を引き返した。寝室のドアを体当たりするように開け、天蓋つきのベッドに押し倒す。

マットレスだけで、シーツも敷かれていない。内装工事中のせいか多少の埃は感じたが、今の藤臣を止める力にはならなかつた。

愛実にいたつてはそんなこと気にもならないようだ。

ただ真っ直ぐに、ひたすら藤臣を見つめている。

藤臣は深呼吸すると、クイーンサイズのベッドに座りなおした。軽く前髪をかき上げ、余裕を取り戻した笑みを見せながら口を開く。

「最後のチャンスをやひつ。逃げるなら今だ。　弥生婆さんに手を引かせ、普通の暮らしに戻してやる。本気になればまだそれくらいは……」

「いやっ！」

愛実ははじかれたよう起き上がり、藤臣に抱きついた。

「もう離れたくない！ 離さないで……わたしを」

激しい吐息が重なり、二人はもつれ合いつぶつベッドに倒れ込む。

「藤臣さん……わたし、三十年掛けて、あなたに償いたい。だから……お嫁さんにして下さい」

唇の隙間から、愛実のプロポーズが聞こえた。

藤臣は先を越されたことに苦笑しつつ、

「いや、駄目だ」

「どうして？ 十八歳だから？」

「三十年分を償うなら倍が必要だ。向こう六十年間、俺から離れる」とは許さない

ウエディングドレスの背中にひたしたファスナーを引き下ろし、唇で白い首筋をなぞりながら答える。

「……わたしは何とか……藤臣さんは六十年後も傍にいてくれますか？」

「……」

九十はさすがに厳しいかも知れない。

「ああ、背後霊になつて君に近づく男を呪い殺してやる」

彼なりに真剣だったが、愛実はクスクスと笑い始めた。

「いやだ、藤臣さん。どうせなら、守護霊になつて守つて下さい。でも……あなたが死んだら、わたしもなるべく早く傍に行きますね」「来なくていい。六十年が百年でも、俺は君から離れない。
戀

して。今夜、俺の花嫁になつてくれ」

純白のドレスがするつと愛実の足から外れた。白いブライダルラインナーが闇の中に浮かぶ。シルクのショーツとガーターストッキンに藤臣の目は釘付けになりそうだ。

背中にびつしつと留められたホックを一個一個外しながら、

「一日中、この格好だったのか？ 苦しかつただろ？」

ガーターベルトも一体型になつたスリーアンワンというタイプだ。男の目にはまるで拘束服のように見える。式の間だけでなく、こんな時間まで着ていたとなると、相当きつかったに違いない。

「いえ、最初のサイズより痩せたので、それほど気になりませんでした」

何でもないことのように愛実は呟く。だが、細い腰がいつそう華奢になつたようだ。

「一度と痩せるほど悲しませたりはしない」

「…………はー…………」

／＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

静かなときが流れ、新しい愛が一人を包み込む。

二人きりの世界が寝室に描かれ始め……

……直後、場違いとしか言えない軽快なメロディイイガ、洋館内に響き渡つた。その音は、ぎりぎりまで張り詰めた静寂を台無しにする。

「藤臣さん、あの……携帯電話が

「無視しよう」

「でも、和威さんに借りた電話だと思つんです。和威さんにはお財布も借りたままで。あの

藤臣は怒りに任せて愛実から体を引き離し、玄関ホールから寝室までの廊下で携帯電話を拾つた。

(何が何でも愛実を抱かせない、といつ呪いが掛かってるのか！？)

非科学的なことを考えながら、彼は手にした携帯に手をやる。液晶画面に浮かぶ文字は予想どおり『瀬崎』であった。

ピッと通話ボタンを押した瞬間

『和威様！ そのまま愛実様と一緒にホテルからは一步も出ないで下さい。東部の社長である藤臣様と連絡が取れ次第、今後のこと』
『連絡が取れないのはお前だ、瀬崎。結婚式がどうなったのかも知らないのか？』

藤臣とて正確には判らない。だが、少なくとも愛実は藤臣の手に戻ってきた。瀬崎はそんなことも知らず、何処をほつつき回っているのか。

『社長！？ いつたい何処にいらしたんですか？』

『それはこっちのセリフだ。私じゃなくとも本社に一本連絡を入れれば』

『では、ご存知なんですね。私もたつた今、聞きました。下手をすれば社長まで引っ張られ兼ねません。一刻も早く役員を招集して緊急会議を』

瀬崎の口ぶりから、ただならぬものを感じる。

『待て、瀬崎。和威と愛実の結婚が中止になつた件じゃないのか？』

『中止！？ では、和威さん……。いや、今はそれどころではありません。社長、現本社社長である信一様が逮捕されました！ 重役であつた信一郎様にも逮捕状が出ています！』

第86話（最終話） 愛実

あたふたと過ぎた十八歳の夏が間もなく終わりを告げる。

愛実は鏡の中で微笑む少女を見つめ、きゅっと唇を閉じた。すると、彼女も少し深刻ぶつた表情になる。だが、今日という日くらい、憂いのない笑顔を見せてもいいのではないだろうか？

そう思い直して、鏡に映る少女 愛実の頬がふわりと綻ぶ。彼女はこの日、人生で一度目の結婚式の朝を迎えたのだった。

瀬崎の、信一が逮捕されたという一報は嘘ではなかつた。

容疑は有価証券取引法違反 インサイダー取引だ。起訴は間違いないという。信一郎も父親の犯罪に加担しており、藤臣らの説得で帰国、警察に出頭した。これには先代社長である一志の関与も大きく、被疑者死亡で起訴されるという。

当初、創業者一族による計画的犯罪と言われ、藤臣も疑われたのだ。しかし、彼に関する犯罪の証拠は出て来ず、立件されなかつた。世間の目はそんな藤臣を、そつ簡単に無罪放免とはしてくれなかつたのである。

辞意を撤回し会社に残つた藤臣は、世間の非難を一身に浴びる破目になつた。

婚約破棄や隠し子問題、過去の女性関係、施設職員に対する性的暴行という偽りの事実まで書き立てられたのだ。まるで藤臣が犯罪を犯したような書かれ方である。愛実は憤慨したが、藤臣はそれに関しても一切の釈明をしなかつた。

『美馬グループは製造や流通ではなく、サービス業に比率が傾いて

いる。イメージダウンは必須だが最小限に抑える必要があるんだ』

それはつい先日まで会社を潰すことに全精力を傾けていた男の言葉とは思えない。

『いや崩壊するとなつた時“様を見る”とは思えなかつた。美馬の家と社員を守りたい』

彼はグループと社員の生活を考え、非難を自らに向けさせる工作をしたのだ。

七月、臨時の株主総会が開催され、創業者である美馬の人間は、全員が経営陣から撤退した。外部から社長を招き、グループは新生を図るという。それに伴い、矢面に立つた藤臣は役職を解かれ、十月から北海道に転勤が決まった。

「あら、同じドレスなのね。それとも今は新調する余裕もないのかしら？」

鏡の中で愛実の後ろに一人の女性が立つた。

シックなベージュのスースを着て、胸元には涼しげなコサージュが揺れている。藤臣の元秘書・由佳であった。彼女は相変わらずグループ本社の重役秘書として働いている。

「由佳さん、わざわざありがとうございます」

愛実は笑顔を作つて立ち上がつた。

「結婚式も自宅の離れなんて。まあ、ここなら周囲の目は気にならないわね」

「わたしがお願いしたんです。せつかく改装して頂いた離れの洋館を、思い出に残しておきたいからって」

今回の一件で、美馬家にはそれぞれに罰金や課徴金の負担が掛か

ることになった。いよいよ迫り込まれる前に、と藤臣は土地家屋など資産の売却を決めた。美馬邸も母屋の一角を残し、後は全て売却予定だ。

もちろん、藤臣が改装した洋館も例外ではなかつた。
八月の最終週、藤臣と愛実の結婚式のため、洋館は華やかに彩ら
れている。

「でも災難だつたわね。成城の西園寺邸まで売却なんて……」

西園寺邸は弥生が会社名義で買い取つていた。会社の資産として
計上され、今回売却対象となつた。

「仕方ありません。もともと一度は手放したものですから。思い出
のある古い家財は引き取らせていただけましたし。それに住む所も
幸い……」

今、なんと愛実の一家はこの美馬邸に住み込んでいた。

それには当然理由があり……一番の理由は、

「大奥様の具合ってどうなの？ 発表は脳卒中つてことだったけど
「えつと、比較的軽いもので、ただご高齢ですから」

長女の婿が逮捕され、亡き夫と孫にも逮捕状が出ていると知り、
弥生は倒れた。

幸い、発表ほど大きな病氣ではなかつたのだが、あれから僅か二
ヶ月で弥生は急激に老け込みつつある。杖をついて歩いていたのが、
今は車椅子なしで移動も出来ない。排泄や入浴にも介護が必要だ。

「あなたもお人好しよね。メイドは一人もいなくなつたんでしょう
？ 家のことをして、大奥様の面倒まで」

「弥生さまのお世話は佐和子さんも手伝つてくれてますし、執事の
糸井さんも残つて下さつて……」

加奈子は夫と息子が逮捕されたにも関わらず、次男の宏志を伴い
海外に出てしまつた。信一と信一郎は刑が確定するまで海外には出
れず、マスコミにも知られていらない場所に裁判まで隔離されるとい

う。

和威は今月に入り職場に復帰したものの、九月から系列子会社勤務の辞令が出た。なんと全く畠違いの営業に回され、福岡支社に転勤となる。否応なしに屋敷を出ることになり、『何もかも任せることになつてしまつて』と悔しそうだった。

そして、佐和子と弘明は。

「でも、驚いたわね。内部告発なんて。あの時、暁さんは存知だつたのかしら？」

信一たちの犯罪を告発した人物、それは美馬弘明であった。

弥生と藤臣が互いを牽制し合っている隙に、弘明は着々と準備を整えていたのだ。おそらく、暁が弥生の企みに乗ったふりをして、余計に引っ掛け回した。父親の計画を悟られないう。

藤臣はそんなふうに言つていた。

「判りません。でも、藤臣さんのこと嫌つておられなかつたと思います。もしあるいできたら、あの時のお礼を言いたいと思つています」

弘明は離婚届を残し、二家の家と会社を去つた。暁も退職したという。

「……相変わらず、おめでたい性格ね」

言ひ回しはきついが、由佳の口調は楽しそうであった。

「奥村さんにも本当にお世話になりました」

「そうね。今も専務のお世話をしているつて言つたら……どうする?」

「そつそな」と……ありません! 絶対に!」

「ふーん。夜はちゃんとお世話してますつてこと」

「いえ……それはまだ……」

実は“まだ”であった。

一つ屋根の下に暮らしているものの、藤臣と和威は忙しくてほとんど帰って来ない。時間的な問題とは別に、愛実の母が藤臣との結婚に『ノー』と言いはじめたせいでもあった。

十八歳の愛実は母の許可なしには入籍ができない。家や自由になるお金もごく僅かになり、母は親戚たちを巻き込んだ弥生との契約書の無効を条件に出してきた。その手続きに、ここまで時間が掛かつたのである。

愛実が諸々の事情を由佳に告げると、

「へえ、よく我慢したわね？」
まあ、それと「NEN」じゃなかつたのか
も知れないけど

含み笑いを感じ、必死に藤田をアオロードする。

と結婚するまで待とうって。なんだか……どうせ呪いが掛かってて無理だらうから……とか、仰つて

「呪い？ 何、それ？」

由佳の不思議そうな声に、愛実も首を捻る。

「優しくて誠実で思いやりがあつて……人の心の痛みが判る人」か

愛実は由佳に問い合わせ返した。

「あなたの言った言葉、少しだけ信じる気になつたわ。私も恋愛し

「はい！ あ……でも、藤田さんは誘惑しないで下さいね」

愛実の心配そうな声に由佳は声を立てて笑つた。

卷之三

吹き抜けのエントランスホールに色とりどりのフラワーシャワーが舞う。

尚樹や真美が手に花びらの入った籠を持ち、「おめでとう!」言いながら新郎新婦に掛けて回る。いよいよ身内だけの、参列者は十人にも満たない式であった。

シルバーのフロックコートを着た藤臣は、どこか恥ずかしそうな表情だ。

ドーム状のガラス屋根から降り注ぐ夏の陽射しに軽く目を細める。「藤臣さん……大変なときなのに、わたしのために結婚式を挙げて下さって、ありがとうございます」

愛実が気を回して声を掛けると、藤臣は困ったように笑った。

「君のためじゃない。私たちの結婚式だ。それに……絵美の件はこの先しばらく、君に辛い思いをさせるかも知れない」

恭子一家のことを見た途端、藤臣の瞳に翳りが見えた。

今回の騒ぎで恭子たちは関東近郊から離れることが決まった。絵美は藤臣を実の父と信じたまま、自分と八歳違いの女性を妻に迎える彼に不満を口にしたという。それを見た恭子が、自分も愛する男性は別れた夫だけだと娘を説得したのだつた。

“愛人と実子を捨て十八歳の花嫁を選んだ男”

もうしばらくはそんな記事が週刊誌を賑わすかも知れない。藤臣はそのことに酷く傷つき、愛実に対しても申し訳なさそうな顔をする。

「辛くなんてありません。大好きなあなたの妻になれるんですから

「一ヶ月後には遠くに行つてしまつても？」

「高校を卒業したら追いかけて行きます。弥生さまの面倒は佐和子さんが見て下さると言つて、春には尚樹も高校生だから」

寂しくないと言えれば嘘になる。

だが、住み慣れた場所を離れ、独りきりになるのは藤田のほうなのだ。そう考えた瞬間、愛実の胸に不安がよぎった。

「寂しさを紛らわすために、浮気なんて……しませんよね？」

藤田はぎこちない笑みを浮かべ、

「こんな可愛い奥さんがいるのに、どんな女に日が行くというんだ」愛実を抱き寄せながら頬に口づけた。

「愛実、今夜は携帯の電源はオフだ。ついでに電話のプラグも抜いておこう。何があつても途中で止めないと約束してくれ」

眞面目に言つて藤田が可笑しくて堪らない。

愛実は満面の笑みで「はい」と答えながら、よつやく手に入れた“愛”をしっかりと握り締めた。

第86話（最終話） 愛実（後書き）

御堂です。

やつと最終回を迎えることが出来ました。

丸8ヶ月、お付き合い頂いた皆様、本当にありがとうございました。

基本、ラストの流れは「～愛人」と同じです。

美馬家は没落の道を辿る運命、といつか（^ ^ ;）

うーん、最後まで藤臣は愛実とエッチが出来ませんでしたね～
可哀想かな？

藤臣救済のため、サイトに移したときには、初夜の番外編（R15）
をヒヤしたいと思します（苦笑）

しかし…ちょっと長くなるかも、と思つてましたが86話24万字
超えとは…

4月には終わる予定だつたんですけどねえ～
どうこいつ計算違いをしたのか（ 計算機が壊れてる? ）

基本的に他作品とコラボさせるのは「～愛人」のまつといふことど、
こちらは後日談を書く予定はありません。

最後に

拙作にお時間をいただきまして、心よりお礼申し上げます。
またお暇に脇まつましたら、よろしくお願ひ致します。

(前編)

「 よしー。」

携帯電話の電源をオフにして、藤臣はホッと息を吐いた。

今日は待望の新婚初夜である。ふたりは今、式を挙げた邸内の洋館にいた。愛実の希望で、今夜一晩だけここに過ごすことになったからだ。

残念ながら、この洋館は来週にも取り壊し、業者に引き渡さなければならぬ。

愛実との新生活を想像して手を加えた新居。この寝室も、そして思このじもつた子供部屋も、何より、愛実の寂しそうな顔がつらい。さらには、藤臣には明日も仕事があり、ろくにハネムーンにも連れて行つてやれないのだ。

今の時期、海外に出るなど逃亡扱いにされかねない。かといって、近場ではどこに行つてもマスクマスクの餌食になりそうだ。

(おまけに、たつたひと月で単身赴任だ。結局、思い出の家も取り戻してやれず、ばあさんの面倒だけ押し付けることになつてしまふ)

好きでどうしようもなかつた、とはいって三十男として分別をつけるべきだったんじやないか。そんな気持ちも藤臣は捨てきれずにいる。

そのとき、シャワールームから愛実の声が聞こえた。

「あの……藤臣さん」

「どうした、愛実？ なにか問題でも？」

「えつと……その」

実を言えば洋館は改装途中で止まつたままだつた。

窓ガラスの入つていらない部分すらある。寝室だけは藤臣が新婚初夜を過ごすにふさわしく整えたが、ひょっとしたら水回りに問題が起きたのかもしれない。

彼はそんなふうに思い、シャワールームのドアを少しだけ開け、顔を覗かせる愛実に近づいた。

「あ、待ってください。あの……」

「そんな顔をしないでくれ。君がバスタオルを卷いただけの姿でも、飛び掛つたりしないから」

愛実の慌てた様子に苦笑しつつ、

「何が起こったんだ？ シャワーが止まらないとか？」

藤臣はドアを押し開いた。

「えや！ あ、あの……」

胸元で手を組み、愛実は立っていた。

その姿は、なんと白いレースのベビードールに丁バックのショーツ！

生地は透け透けで、形のよいバストと……先端のピンクの頂までもが丸見えだ。濡れた髪が肩を覆い、その初々しいセクシーさに藤臣は眩暈すら覚えた。

「な……なんてモノを着てるんだ？ いつたい、どいでそんな……」

呻くよじに声を出し、そのまま藤臣は絶句した。

「由佳さん……結婚祝いって。あの……藤臣さんはいつものが趣味だからって」

頬を赤く染めてうつむき、必死になつて愛実は説明する。

(由佳めー、俺をおちゅくりやがつて)

愛人関係にあつた頃より、由佳は藤臣に対してフレンチドリーになつていた。

藤臣の地位が落ちたせいかもしけないが、どうやら、愛実と由佳の間には不思議な友情が芽生えているらしい。その影響で、由佳の藤臣を見る目が変わったというべきだろ？

今日の挙式も、愛実の希望で彼女を招いた。

その結婚祝いに持つてきたのがこの“セクシーランジングヒーリーセット”だといつ。

「「」、「めぐなさい。やつぱり、わたしには似合いませんよね？」
すぐ脱ぎます」

愛実は誤解したらしく、半泣きで藤臣に背中を向けた。

「違う！　違うんだ。そつじゃない……愛実、よく似合つてゐるよ。
セクシーで、とっても可愛らしい」

藤臣は慌てて愛実を背後から抱きしめ、囁いた。

「……いいんです。そんなムリして褒めてくださいながらなくとも……」
「ムリなんかじゃない。その証拠に」

藤臣はひと足先にシャワーを浴び、バスローブ姿だ。そして、愛実の挑発に一発で昇天しそうな下半身を押し付ける。
「わかるだろう？　ただでさえ魅力的なに、これ以上いじめない
でくれ」

「そんな……いじめてるつもりは」

「ただ、奥村が何を言つたかは知らないが、彼女と付き合つがあつた間、こんなものを着てくれなんて頼んだ覚えはない」

「由佳さんは楽しまなかつたってこと？　それとも、藤臣さんの趣味じやないとか……」

藤臣はなんと答えたらいののか迷つた。

趣味じやない、と言つてしまえば愛実のことだ。すぐに脱ぐと言

い出すだろつ。それはそれで、残念な気がしてならない。

(んつ……どうせなら、俺自身の手で……)

藤臣は咳払いをすると、

「 奥村とも誰ともそんな楽しみ方をしたことはない。でも……君とは楽しみたい」

「 た、楽しむって、どんなふうに? 」

「 そうだな……とりあえず、ベッドに行こう」

「 キヤツ! 」

愛実を横抱きにして、彼女の額にキスをした。

天蓋から下がったレースのカーテンを藤臣は後ろ手で引っ張つた。留め具がはずれ、ふわっとカーテンが下りてくる。ベッドの上は一瞬で外と切り離され、ふたりきりの世界になつた。実際に三ヶ月ぶりのセックスである。

いや、愛しい思いをこめて、相手をいたわりたいと思つて抱くのは初めての経験だ。それを考へると、藤臣の中に緊張が走つた。

「 愛実……俺を選んで、後悔してないか? 」

愛実の少し火照った頬を撫でながら尋ねた。

「 そんな、後悔なんてしてしませんし、一生しません」

「 愛してる」

柔らかな唇をなぞるように、そつとくづづける。

「 あ、あの……」

「 わかつてゐる。電氣だらつ? 」

藤臣はベッドのヘッド部分を手で探り、電灯のスイッチを押した。室内は一瞬で暗くなり、代わりにアンティークのフロアランプが

灯る。オレンジ色の優しい明かりがレースのカーテンに反射し、ふたりの世界をふんわりと包み込んだ。

「……キレイ……光の国みたい」

「ああ……君はお姫さまだ」

「じゃあ、藤臣さんは王子さまですね」

「歳の食つた不良王子だけじね」

「そんなことないわ！ 世界中でいちばんステキな、わたしだけの王子さまだもの」

愛実は身体を起こし、藤臣の首に手を回して抱きついた。

藤臣はバスローブの紐をほどき、脱ぎ捨てると愛実の腰に手を回す。

「可愛いことばかり言つて……俺を狂わすイケナイお姫さまだ」

ふたりは向かい合つたまま、唇を開いてキスを交わした。甘い唾液が愛実の顎に伝い、藤臣はペロッと舌先で舐める。

「やん……藤臣さんのヒツチ」

「これからもヒツチなことをするんだが……」

「ねえ藤臣さん……わたしのお腹に当たつてるんですけど……あの、触つてみてもいいですか？」

その言葉に藤臣はドキッとして

(前編) (後書き)

御堂です。

お待たせしました、初夜の番外編です。

前編はサイト・なるうとも同じ。
後編は明日更新の予定です。

小説家になろうではHシーンを控えめに。

サイトはバージョンHPでいかせていただきます（苦笑）

よかつたらサイトまでお越しくださいませ（><）／

(後編) (前書き)

軽い性的描写があります。R15でお願いします。

思えば、何度かきわどことここまで進み、そのたびに愛実に誇示してきた気がする。どうやら、男性の象徴の仕組みが気になってしまたがないらしい。

だが……大丈夫だらうか、と藤臣は思索した。いや、愛実が、ではなく、彼自身が、である。

「あ、ああ。いよいよもうひと。持ち主に似て纖細だからね。優しくじゅくじゅく」

愛実は恐る恐る手を伸ばし、指先でそつと触れた。そして、藤臣に言わされたとおり、指先で優しく撫でる。ほほ真上を向いているソレは、彼女のつたない愛撫に反応し、小刻みに痙攣し始めた。藤臣は奥歯を噛みしめ、懸命に堪える。

(こいつたい……なんの拷問なんだ)

甘く切ない拷問に、藤臣はギブアップ寸前だ。

「…………愛実…………そろそろ」

「あ、ごめんなさい！わたし、信一郎さんのことがあつて……本当に少し怖かつたんです。でも、藤臣さんは平気。だから、あの何をしたらいいですか？何でも、あなたのおりしゃるとおりにします」

愛実は少し潤んだ瞳で藤臣を見上げ。

「うわっ……ちょっと……クツー！」

「あや！」

白い液体が飛び散り、愛実のベビードールを汚した。

藤臣は愛実に抱きついたまま身動きが取れない。先端から滴り落ちる零は愛実の太ももを濡らしていく。

生まれて初めてのフライングに、彼はショックを受けていた。

「あの……藤臣、さん？」

「我慢できなかつた……悪い」

愛実はおそらく、何が起じたのかわかつていなければだ。

（なんてフォローすればいいんだ。……つたく、これくらいで、しつかりしてくれよー）

愛撫とはほど遠く、口に咥えられたわけでもない。ただ、触れただけで爆発するなんて、藤臣は信じられない思いだ。

愛実を抱いてシャワーに戻り、もう一度仕切りなおして……そんなことが頭に浮かぶがなかなか動けない。

そのとき、

「藤臣さん……大好き」

愛実はそのまま、藤臣の体をぎゅっと抱きしめた。

彼はすぐさま復活を遂げ

ふたりはより深い愛情で結ばれたのである。

～*～*～*～*～

「このベッドは部屋に運ぼう。フロアランプも……いいだろつ？」
愛実は初めての行為にぐつたりとして彼にもたれ掛かっていた。

藤臣はとつても優しかった。信じられない場所にまでキスされて、

恥ずかしさと気持ちよさに心臓が口から飛び出してしまったな経験をした。

一つになつてからも性急には動かず、ゆっくり、ゆっくり、愛実が高まるのを待ってくれた。

そして終わつてからも、ずっと愛実を抱きしめて髪を撫でてくれ……。『可愛いよ』『素晴らしい』なんて、何度も言われたか数えきれないくらいだ。

「大きいから、部屋に入るでしょうか？」

「大丈夫だよ。どのみち、母屋は無駄に広いんだから」

「でも……」このベッドで一緒に眠れるのも来月いつぱいなんですね……」

愛実は急に寂しくなり、涙がこみ上げてきて、声が震えてしまう。半年くらい平気だと本心からそう思っていたのだ。でも、このじて身体を重ねたあとは、切なくて身を切られそうである。この大きなベッドで半年もひとりだと思つと、それが永遠の長老に感じた。

「愛実？ 必ず時間を作つて、毎月戻つてくる。それに、冬休みは北海道まで来るといい。弟たちが心配なら一緒に。電話は毎日するよ……ほかに、私にできることならなんでも」

「ううん。『ごめんなさい』。藤臣さんの温かさを知つて、急にひとりが寂しくなつたの。でも、大丈夫だから……」

藤臣は心配そうに見ながら、

「すまない。本当に、初っ端から、苦労ばかりかけて」

「謝らないで。でも、一つだけ約束を守つてね。浮気だけはゼッタイにしないって」

すると、藤臣は照れくさそうに笑つた。

「もう、できないよ。性欲を処理するだけのセックスなんて、一度としない……いや、できない。『愛し合ひ』ってことを君に教わつ

たから」「

愛実の髪に口づけ、しだいに額、瞼とキスが下りてくる。

「それって……違うこと?」

「ああ、全然違う。こんなに素晴らしい経験は初めてだ。私は今まで何をしてきたんだ?」

「じゃあ、全部忘れてください。由佳さんのことも、他の女のことが、全部忘れて。わたしだけの藤臣さんになつて」

愛実は身を乗り出し、藤臣の胸に頬を当てた。

トクントクンと心臓の音が聞こえ、それは少しずつ早くなつていく。

「東京を離れるまで、毎晩、いつもして付き合つて欲しい。そうした

ら……きっと、ひと円で何もかも忘れられると思ひ」

藤臣は甘えるように言つと、愛実の髪に顔を埋め、ぎゅっと抱きしめた。

愛実もそんな藤臣をじっかりと受け止める。

「永遠に、わたしだけの王子さままでいてね」

「それは今日誓つた。この命が死きて、魂となつても、永遠に君のそばから離れない、と」

「もし、わたしが……とっても嫉妬深い奥さんになつても、嫌いにならないで……」

過去は気にしない、やう言つたはずなのに。

こぞ、自分自身が藤臣を知ると、同じ悦びを分け合つた女性の存在が悔しくてならない。

(藤臣さんの過去も未来も、すべてを独り占めしたいなんて……)

それは、愛実の心が少女から女になつた瞬間だった。

「俺は君のモノだ。だから……捨てたらゼッタイに許さない」

そう言つた藤臣は幼い子供のように震えて、愛実に抱きついた。

ふたりの間に隙間ができないよつて、愛実も彼の抱擁に力いっぱい応える。

「わたし、どんな藤田さんも好きだから。一生、離れません」

「……愛実、愛してる……」

藤田のキスが愛実の唇までたどり着き……

ふたりは朝まで、愛し合つ悦びを確かめあつたのだった。

（fin）

(後編) (後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

こちらでは少しソフトな描画させていただきました(^ ^ ;)
サイトでは、もう少し「より深い愛情で結ばれる」辺りが書かれて
ますのよかったです。.

どうもあつがとひざをしました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030p/>

十八歳の花嫁

2011年10月7日02時04分発行